
サクラリポート

石垣四郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクラリポート

【Nコード】

N2457L

【作者名】

石垣四郎

【あらすじ】

優等生の桜とイケメン夏樹の恋愛&エンターテイメント。愛と復讐のテーマで交互一人称で進み、前半は恋愛多め 後半アクション多めです。交互一人称にしたのは心理描写を書きたかったからです
が読みにくかったらすいません。

アクションのジャンルがなかったので恋愛にしています、夢枕獏さん等が好きだった方には合うかもしれません。

じれったいのが好きな方はむいていません。

犯罪が多いです、後半に向け危ない雰囲気になっていきますので苦

手な方は注意してください。

桜の舞う頃（前書き）

交互一人称 主に携帯小説として書きました。犯罪が多い為、苦手な方はご遠慮ください。スピード感が欲しくて説明不足があるかもしれないかもしれません。

桜の舞う頃

くプロローグく

桜の季節の終わり。

今日は高校入学初日。

都立多摩第3高校、多摩川が近いのどかな高校だ、普通科だけで学力レベルでいうと中の上くらい。

入学式が終わり、初めての教室へ移動した、1年C組。

初顔合わせのクラスメイトが順番に自己紹介している時、ざわざわとしてた音が少し静かになった。

入学式からやたら目立ってたイケメンの番になり女子が静かになったからだ。

「大沢夏樹です」

そいつの自己紹介は名前だけ。

にこりもしない。

ナツキって女みたいな名前。

顔も肌も綺麗、睫毛はさばさの切れ長の目、少し高めの鼻筋、薄い唇。

身長は180cm以上ありそう、痩せすぎでもないな。

顔は細くて頭も小さい。

よつするに、モデル体型でとびきりのイケメン。

髪は短めで黒いまま、オシャレする気がないイケメンなんていまどき珍しいくらい。

これでその気になるとどうなる？

恋なんてしないと決めてる私でも見ってしまう。

これだけ存在感が強いのは自信家なんだろうな。

女からみてやばそうな男。

そんな印象。

自己紹介が私の番になる。

「月見里桜やまなしです、月見の里と書いてやまなしです、よろしくお願
いします」

山梨の地名姓が変化して漢字だけ変わった姓らしい。

この漢字は気に入っている、月見の里の桜、覚えられやすい。

月見や花見を連想しておいしそうな名前だと言われたこともある。

こんな自己紹介をしたけれど、私はおいしくない。

味で例えるなら、からいとか苦いとか、そんなところ。

おもしろくもないし、中身は明るくもない。

嫌われるのも困るから明るそうなふりはしてる。

まず恋愛が苦手なの。

中学の頃は何度か告白もされたけど、誰も好きになれなかった。

夢中になってみたい、そういう願望もあつたけど実際はなれない
し。

いまは開き直ってあきらめた。

どうせ誰も好きになれない。

幼稚園や小学生低学年の淡い恋、それが恋愛感情の全てだ。

いつから不仲だったのかはわからないけど、私が小学生の高学年くらいから、両親はケンカを隠さなくなったわ。

ケンカの原因はお父さんの浮気癖がほとんどだと思っ。

お母さんは浮気をされても耐えるタイプだったけど、耐え切れなくなっってケンカをした。

そんなことなら1人がいい、私は浮気されたり大勢いるうちの1人にされるのは無理。

別れればいいのにと思っってた、お母さんはしだいにヒステリックになり暴力的になっっていったの。

そしてアルコール依存症で入院するまでになり、今は離婚して実家で暮らしてゐるわ。

そこまでお母さんを追い込んだお父さんとは生活しなくなっくて、やさしかっった叔母さん家で暮らしてゐる。

結果的には恵まれてゐるの。

恋愛が苦手な程度の代償で、うるさい親がない代わりに友達みたいな叔母さんがいるから。

お父さんは小さい頃から口うるさかっった、その癖自分は女癖が悪

いんだもん。

オープンで自由な叔母さん、彼女の恋愛話というか男の話はおもしろいけど私にも奨めてくるのが難点かな。

叔母さんは、バカなこといつてないで恋愛をしなさい、男を知らないで大人になるのは悲惨よ、いい年になって男を見る目もないと騙される、とまで言うの。

男を好きになることもできないのに。

だから一人で生きていくと反論する、そのために真面目に勉強してるのよ。

入学から1週間程過ぎた教室での休み時間。

どんなイケメン事情が見れるのかと思ってたのに、大沢はいつも1人でいる。

無口で無愛想。

笑ったところさえ見たことがない。

男女問わずほとんど喋らないの。

人間嫌いなのだろうか？

入学当初、話しかけたクラスの子はみんなあきらめたわ。

休み時間はほとんど本を読んでいる、そうやって壁を作ってるぽい。

このクラスであいつと会話した人のほうが少ないはずね。

私は一言も喋ったことがないわ。

友達がまったくいないって寂しくないんだろっか？

まるでいじめの対象でシカト状態だ。

一人で生きていくと決めてる私もああいう強さが必要になるのかな、暗くなりそう。

よ。
見てるだけで寂しさを感じてしまう、少なくとも友達は要るでし

残ったイケメン事情は、時々他のクラスの子や上級生の子が廊下から見に来るくらいなもの。

お昼時間が終わりに近いからほとんどのクラスメイトは教室にいるわ。

学食派の大沢もいる、もちろん1人でね。

変な男だなと思う、人間嫌いなんだろうか？

目が合った！

ドキッとするわ。

むう、こっち見るなよ。

こいつと目が合うのは心臓に悪いよ。

無駄にイケメン過ぎる。

目が合っすぎてすぐ逸らしてしまったけど、再度見ると、半分、ぼんやりとしてるように見える。

多分、退屈だから目線が泳いでるだけだ。

「さくらら、夢中だね」

「にゅ？ ごめん、涼ちゃん」

多分、なにか話しかけられて無視しちゃったんだろうけど、夢中はないなりよ。

「やめといたほうがいいと思うよ、あれは無理でしょ」

「うん、わかってる、見てただけだよ」

ボーイッシュでさっぱりしてる藤川涼子ちゃん、クラスで最初に来た友達、私も男みたいところあるし、似たもの同士かもしれないな

い。

「気持ちわかるよ、アレは観賞用だよね」

中学のときに同じクラスだったことのある、新富ゆずちゃん。大沢をアレ呼ばわりするには訳があるの。

かわいい顔して肉食系のゆずちゃんは、クラスでまっさきにあいつにアタックしたの。

大沢は返事すらしなかったらしい、無視された直後に文句を言うてたわ。

まあ、ゆずちゃんに限らずあれだけ無愛想な今のあいつの評価はそんなもの。

「2人ともメンクイだね」

あきれたような口調、涼ちゃんは最初からこうなの。多分お笑い系が好みね。

そんな大沢だったけど、体育の日は再度人気が上がったりするの。

まず動きが綺麗なの、体重を感じさせないというか、バレエを見慣れてる私でもすごく綺麗で目に付くのよ。

他の女子にはそういうのどう見えてるのかわからないけど、それなりに綺麗に見えるとは思うわ。

それに陸上競技とかだと目立つ体力バカでもあるわ、陸上部並の記録が出るみたいだけど、誘われてもどこの部にも入らないの。

でもどうやら球技はダメみたいで、バスケはまともにボールも運べない、かと思うとダンクしてきゃ〜きゃ〜言われたりもしてる。

体育だけじゃなくて授業中の教師とのやりとりを聞いてても全てにやる気がなさそう。

不良さん達と普通の生徒の間くらいな感じかな。

「ただいま〜」

久美子叔母さんの家のリビング、この時間は誰もいないけど、一応そついつて入る。

叔母さんはお父さんの妹なんだけど、兄妹仲はあまり良くないの。

叔母さんが言うには昔から女癖が悪くて叔母さんの友人と付き合い合ったこともあり迷惑したらしいわ。

叔母さん夫婦には子供がいない、それをいいことに叔母さん家で当たり前のように暮らしてる。

私の部屋もあるし、叔母さん夫婦が親みたいなものね。

叔母さんの家は小さなバレエ教室を兼ねてて、私も小学5年の頃

から叔母さんにバレエを習ってる、というか強制だったりするの。

私のバレエは趣味程度ね、はっきりいって才能がないのよ。

中階段を降りて2Fのバレエ教室のドアを開ける。

「久美子さん、ただいま」

口パクで挨拶だけしておく、フルネームだと沢中久美子さん、叔母さんと呼ぶと怒るから久美子さんなのだ。

「おかえり」

につこり笑う叔母さんは美人で見た目も若い、年は37歳なのに10以上若く見えるの。

見た目だけじゃない、なんでも相談できるお姉さんみたいな人ね。

夜の11時過ぎ。

窓際で日課のバーレッスンをしてる。

ここは駅も近い繁華街で、2階だから外からも見える、だから夜1人のときは電気を消して暗くしているの。

これが一番落ち着く時間。

ガシャン、そんな音がして外を見たら女の人が酔っ払いにからま

れてる。

閉まってる商店のシャッターにぶつかったみたい。

酷いことになるようだと言察に電話するべきね、そう思い浮んだとき、ジャージ姿の男が通りかかったわ。

ランニング中みたいなジャージ男は、一瞬立ち止まり酔っ払いのほうに向かう。

え、大沢？

間違いない、あれは大沢だ。モデル体型だからかな、なぜか一瞬見えただけでわかったの。

大沢は酔っ払いに近付き殴ったように見えた。

次の瞬間にさらに近付き、酔っ払いはアスファルトの上に転がっていたわ。

今度はなにが起きたかわからない、柔道の投げるとかそういうので転がしたの、ここまで時間にして1秒もかかってない。

一瞬からまれた女性を向いて、多分少し話してから大沢はまた走り出したわ。

速い、あっというまに姿が見えなくなった。

なんかすごいものを見てしまった、心臓が高鳴る、ドキドキしてる。

女性が去り、酔っ払いがのろのろと立ち去ってもしばらく反芻していたわ。

あの他人に興味がないような大沢が女性を助けてあっという間に消えた、もうウソみたいに静かで現実感がないけど。

映画とかドラマのああいふシーンや現実のケンカなんかとも違う。

人間とは思えないほど速い、見ていた私が理解する前に終わってる。

あれがほんとの大沢？

体育での身体能力の高さからすれば不思議ではないけど、あまりに暴力に慣れてる。

なにかの格闘技だろうか？

そもそもこんな時間にランニングしてるのも変わってるし。

TVでたまたま見る程度だからよくわからないけど、ボクシングかな？ 柔道かな？

学校の体育館。

なぜか理由もなく男2人に囲まれていた。

男達が迫ってきて、腕を掴まれた。

無性に怖くなり。

「やめて」

振りほどいて必死に走ったけど、すぐに捕まった。

「助けて！」

突然、隣に大沢が立っている。

大沢がいきなり暴れだし、あつというまに2人が消えていた。

そこでようやく夢だとわかった、立ち去るとか逃げるじゃなくて
忽然と2人の姿が消えたから。

それなのに大沢に抱きしめられて、キスされている私……。

……目が覚めた。

うわぁ……なんちゅう夢を。

どこの乙女よ。

ご都合主義にも限度があるし。

ラブシーンまで……。

恥ずかしい。

（ストーリーカー）

教室での大沢は相変わらず無口で大人しい、あの夜とはギャップが大きくて私の頭では想像すら追いつかない。

なんか気になってしょうがない。

2日後には好奇心に負けて決心していたの。

金曜日の今日は変装用にメガネ、帽子とロングのカーディガンを持ってきたわ。

メガネは以前に使っていたもの、中2からコンタクトにしたのよ。

探偵気分で学校帰りの大沢を追いかける、徒歩なのに速すぎるからチャリに乗ってゆっくり走る。

50メートル程距離を取って付いていく、振り返りもしないから気づかれることもない。

学校から徒歩10分くらいのマンションに入ってしまったわ。

うーん、オートロックだ、窓の仕切りを見ても多分全部がワンルームのマンションね。

1人暮らしなのかな？

高校生で1人暮らしってどういうのだろう？

親がない？ 両親だけ仕事で別居？

30分は過ぎた、どこにも出かけないかもしれないな。

退屈だ……。

ばかなことしてるな。探偵なら車で待つことが多いかもだけど、チャリじゃくつろげるわけもない、ふう。

1時間も待つっていると黒いジャージに着替えた大沢がスポーツバッグを持って出てきた。

黒地に赤の3本ラインのアディダスのジャージ、上下だからスポーツマンという感じね。

駅の方方向に歩いていく。

大沢は定期を使って電車に乗り、四鷹駅へと着いた。

自転車は先回りで停めたけど、定期もないから電車の尾行はちょっと難しかった。

繁華街に向かい、2Fと3Fに空手の道場のあるビルの中へ入っていった、4Fより上の階は会社ばかりだわ。

他の階目当ての可能性もゼロじゃないけど、多分空手でしょうね。

斜め向かいのマクドナルドの2階席から覗くことにしたの。

繁華街で道が太いから距離はあるけど、鞆を立てて隠しながらこっそりオペラグラスで見ると、なんとか練習風景が見えるわ。

なんかほんとに探偵ばいなんて自分で笑ってしまっ。

これは他のお客さんから見ると不審な女に見えちゃうな。不審で間違いないけど。

大勢が腕立てをしている、30人くらいいるわ。

予想通り大沢が入ってきた。

意外と空手着が似合う。モデル体型だと似合わない気がしたのに、ちゃんとさまになってるわ。

1人奥の隅っこで柔軟を始めたけど見えにくい、もっとこっちでやっつてよ。

しばらくすると大沢もみんなの稽古に加わったわ。

動きが1人だけ違って見える、腰が高い、それなのにバランスがいい。

どこにいても目立つ男ね。

回し蹴りってやつだ。速い、高い、頭の遙か上まで回るの。

あいつほんとにかっこいいわ！

夜の9時を過ぎると人が減ってきた、ん〜、黒い帯の人だけ残っているぽい？

2人づつが向き合って戦い始めたわ。

あれ、大沢は1人だけ帯の色が違うのね。

あいつだけ白帯なのか、強い人だけそうなのだろうか？

そんなわけないよね、黒帯のほうが強いに決まってるのに。

それなのに、まるで相手が弱いみたい。

強さが違う、誰とやってもすぐに倒しちゃうの

すごい、すごい。

KOの嵐に思わず興奮してしまったわ。

お金が取れそうなくらいすごいよ。

今日は火曜日、学校帰りから追いかけてマンションから出てくるのを待っていたの。

今日は出てくるの早いな、バックも持っていない。

黒のジャージ姿だけど今日は黄色いライン、軽く足の屈伸とかして。

うわ、走り出した！

いきなりの全力疾走？

ちょ、はえ〜よ〜。

ママチャリじゃ全く追いつけない！

なんてやつ…。

見失ってしまったわ……。

川のほうに行ったから、もしかしたらと思って適当に川の土手を走って探してみただけど見つからなかった。

今日で追っかけ10日目の学校からの帰り道。土日はしてないか

ら実質6日目、探偵ごっこにも結構慣れてきたわ。

空手の道場は月水金で、火木は自主トレで、土日はわからない。

近くから車の大きなクラクションが聞こえる。

横断歩道のところで大沢が立ち止まる。

帰り道と方向が違うのに横断歩道を歩き始めたわ。

ああ、車がお婆さんにクラクションを鳴らしてたのね。

大沢はお婆さんが渡りきるまでただ無言で同じ速度で近くを歩いていたの。

なんて大沢らしい不器用な親切なのよ。

胸がキュとなる。

え？ キュてなに？

このちょっと胸が苦しいというか、ドキドキもするし……。

なにこれ？

もしかして、これは恋？

私が恋？ まさかね。

そっぴいえばと……見失ってしまったわ。

大沢のマンションまで行ってみると窓もカーテンも開いている。

大沢がスポーツバッグを持って出かけたのをこっそり見送り、マンションを外から見る。

オートロックでマンション内には入れないけど。

3階の右端の部屋、カーテンが閉まり電気も点いていない、ほんとに1人暮らしだよな。

電車に乗り道場近くのマックに入ったわ。

見てるだけでも退屈しない、他の女子の知らない大沢くん。

道場ではたまに会話をしている、相手はおじさんが多いかも。

そういえば女子や子供とは稽古が別なんだなと気づき、それだけで少しほっとする。

あつ、やっぱりこれが恋？

さっきのおばあさんへのやさしさが効いてる、あんなの反則だよ。

学校にいるときと全然態度が違う、ときどき笑っているように見えるし。

……あいつの笑顔が欲しいな。

うわ、まただ、乙女回路とでもいうのか、いきなり思考が暴走しちゃったの。

……もうだめ、ほんとに好きみたい。

翌日の学校の朝、大沢クンをちらっと見た。

うわ、マジでやばいよ。

すっごくいい男に見えるの。

なんの表情もないのに、まるで少女漫画みたいにキラキラと輝いて見えるわ。

まずい、これは重症だわ、昨日の自覚より激しくなってるし。

恋をするとここまで脳内補充しちゃうものなのね……。

文学的な表現の恋の描写は事実だったのですね……理数系が得意な私には納得しかねたのよ。

うう、こんなの神経伝達物質の異常だわ。

……なるほど、恋は病か。あばたまえくぼってやつね。ん、ちよっと違う気もする。元が良くてさらに良く見える場合はどうなの？

自覚して止めようとしても変化がないわ。

目をパチパチしてもキラキラは変わらない、無駄な抵抗みたい。

うわ！

一瞬目が合うだけで胸が高鳴り、苦しくなる。

大沢の目は凶器よ。

静まれ、心臓。

バクバクするな。……いま心拍数いくつでしょう。

私、異常じゃないかな？

これは酷すぎるわ。

恋ってこんなに大変なものなの？

みんなこうなるのかな？

小さい頃あこがれた少女漫画の世界。

そんなかわいい女じゃない、つもりだったのに……。

よりによって、フェロモンの塊りみたいなイケメンを、……しかも誰にも興味なさそうな男を好きになるなんて。

……ぎんぎん。

「さ・く・ら〜」

「……ん？」

涼ちゃんが、ニヤニヤとしてる。顔が真っ赤だったかも、見られ
たかな……。

「……見てた？」

「うん、桜かわいい」

……うわ〜、恥ずかしいよ。

……涼ちゃんだけでよかった。せめてもの救いだわ。

「……涼ちゃん、相談乗ってくれる？」

「うんうん、聞きたい」

誰か信用できる人に話したかった、いきなり叔母さんじゃ恥ずか
しすぎるもん。

結局、叔母さんちでお泊り会になった、2人でお互いの恋話をし
て、たわいない話をして寝不足になるまで喋ったの。

気の合う友人との恋話、こういうの実はあこがれてたんだよね。

涼ちゃんの友人以上恋人未満な幼馴染の彼の話は意外だったわ。

日頃の会話からてつきりお笑い芸人みたいな男が好きなんだと思
ってたのに。

かわいらしい恋のお話、聞けてよかった。私が異常じゃないとも
言われて安心もしたしね。

それにしても、鉄壁な男を好きになったらどうしたらいいのでし
ようね？

涼ちゃんと違って実る可能性なんてほとんどない恋。

並んでも釣り合いが取れないのも良くわかってる、それ以前に会
話すらできないし、その可能性すらほとんどない恋。

ここ数日、いろんな妄想をしてしまう。

自分がこんな女だと思ってもいなかったわ。

ちょっと男っぽい女だと思ってたのに、まるで少女漫画の主人公
みたいな女になってるの。

追っかけがバレて怒られるとか……付き合えたり、キスしたり……
……とても言えないことまで、あらゆることを妄想しちゃうの。

妄想だけなんだからいいじゃん、1人突っ込みをしながら妄想だ

けがどんどん膨らむ虚しさ。

なにもいい考えなんか浮かばないまま追っかけだけ続ける日々。

だってやめたら見ることもできない。

恋愛感情を持ってしまつてこれはもうストーカーだ。

しかもいつからか考えると自信がなくなってくる。

入学式で初めて見た瞬間にもドキツとしたのよね。

それを一目惚れというなら最初からになる、……かなりインパクトあつたし。

てことは、はじめからストーカーじゃん……。

初恋の相手にストーカー。

目眩がしそう。

はぁ、最低……。

空手道場帰りの電車の中、静かに立っている大沢ケン。

今日はいつもより遅い時間になりちょっと混んでるわ。

大沢くんはいつもと同じ。

私はドア一個分の距離で見ているだけ。

きゃ！ という叫びが聞こえて振り向くと。

目の前に座ってる女の口を蹴っている酔っ払い中年サラリーマンがいる。

彼のいた位置とは距離があつたはずなのに、ほとんどすぐ移動している。

反応が速過ぎ！

つか、加速装置でも付いているんでしょうか？

見える位置にいたのにそれでもわかりにくい。

多分、殴つて、転がして、うつぶせに押さえて手を背中に回したわ。

一連の動作が流れるようで、脳に焼きついた映像を再生して何をしたのかわかるという感じ。

大沢くんが一声かけたけど、蹴られた女の子は泣いているままね。

その子は大沢くんの加速装置をもつてしても2回か3回は脛のあたりを蹴られてた。

隣にいた男性になにか言つて酔っ払いの手を押し付けて渡してた

わ。

たしかに隣で見てて何もしない男もアレだけど、そういうところは
は大沢クンは無責任と言ってもいい。

後始末が面倒なのかな？

わゝ、という誰かの歓声に釣られるように、乗客からの大きな歓
声と拍手が起きたわ。

あまりに手際が鮮やかだからしてしまうのよ、だって尾行中の私
まで釣られて拍手してしまったの。

でも大沢クンには意外なんだろうな。

一瞬驚き、顔を伏せるようにして、スポーツバッグを拾って隣の
車両まで移動してしまったわ。

目立つのが苦手なんだろうか？

もしかしたら、恥ずかしがり屋なんだろうか？

どんな表情なのか見たいから追いかけていたいなと思っただけど、顔を
伏せた様子にキュツとなり動けなかったわ。

ちょっと赤くなっていた気がするの。

それから2週間。

ゴールデンウィークも含め、時間の許す限りストーキングです。

開き直り気味だけど、難攻不落ほい男相手に他に何もできないの。

いつそ声をかけようかと何度も思ったけど、ストーカー行為中には無理だよな、偶然会ったふりとか私にはできないし、勇気もでないし。

細かいことはいくつもあったの。

子供同士のいじめを止めてたこと。

いじめてた子供2人は大沢クンに腕を掴まれると泣き出したの。

子供から見れば大沢クンは大きいなんてものじゃないから怖いよね。

いじめられてた子は何も言わずにさっさと逃げたわ。逃げた子が見えなくなっただけから手を離れたけどまだ泣いてるの。

止めたものの泣かれて困ってる彼はちょっとかわいくて笑えたわ。

スーパーではかなりまとめて買い物してた。そういえばコンビニにはほとんどいかないの。

店内で尾行するとバレそうだから外で待っていたけど、ちゃんと

エコバック持参なのよ、しかも2個ぱんぱんに膨れてたわ。

妙なところで真面目というかいキャラクターしてる。

ギャップ萌えくが初めてわかったわ、見てるだけでちょっと笑えるんだもん。

遠くから見てるだけなら言いたい放題なんだけどな、私ってしようもない。

料理してる大沢クンなんて想像もつかないけど、ちゃんと自炊しているんだと感心したわ。

空手の道場は週に3日、でも残りの4日も道場に行かないだけで自主トレしてるの。

つまり休みがなく空手一筋、ランニングも含めれば毎日5時間以上はトレーニングしてるし。

夜はあれから何度も走っているところを稽古場から見たから、多分いつも同じコースを似たような時間に走っているわ。

私自身も多少はドキドキに慣れた。ドキドキすることに慣れたのもあるし、見慣れてきたのかもしれないな。

それにしても女の影がない。

それは嬉しいのだけど、モテるのに女と会話すらないというのは

いや〜な想像をしてしまうの。

女に興味ないのかもしれない……。これがマジに考えても有りうるわ。

そして同性愛という可能性がマジにあるのよ。

私にはそういう趣味はない、やおい、B L、興味ないし知識もほとんどない。

現実的な同性愛のことも知らないけど、道場でおじさん達と話していたシーンが浮かぶ。

そういえば、おじさんをマッサージしてたことが多いの。

3週間以上見ててまともな会話なんて空手道場のおじさんとかしてないもの。

クラスでは男子とも会話しない、クラスの男子と会話もしないのは年上好きだから？

おじ専？　なんてあるのでしょうか？

ファザコンの女子は年上の男しか好きにならないというし、ホモでファザコンという可能性はあるよね……。

やばい、それはやばすぎる。

初恋の相手が男好き、おじさん好き、それはイヤ、イヤすぎるよ。

きゅー止まれ。

変な妄想が映像になって止まらない。

桜の舞う頃（後書き）

感想、誤字、脱字などお願いします。執筆用のソフトで書いてまして《》内が自動的にルビになりますが、ここではルビになりません、読みにくいかもしれません。

告白

はあ。

もやもやする。

大沢クンと話したい。

少しでもいいから話したい。

フラれるだろうけど、告白もしたい。

やさしくて強くて、無口で、テレ屋？ 女嫌いではないはず、助けてるのはほとんど女性なんだし、人間不信かもしれない。

最悪のことも考えた、大沢クンがホモでもいいから友達でいい、とにかく話だけでいいからしたいの。

話しかけたらどうなるかな？

最初は返事もない可能性と短い拒否反応、どっちかだとは思って
じ。

そこさえ突破すれば会話くらいはいける気がするの。

あれだけやさしい彼は、しつこく話しかければいつまでも無視と

か拒否できないのではないかな、そんな気がするの。

このままじゃただのストーカーだもん……。

いつまでもストーカーしてるわけにはいかないわ。

どう考えても他にどうしようもない。

今日こそは。

頑張るんだ、今日こそは……。

ほんとに今日こそは、と決心すること4日目だったりする。

多少慣れたとはいえ話かけるとなるとドキドキするの。

私は肉食系になる、もう猪突猛進でいい。乙女のテクニックなんてない、性格的にも無理だし。

いくら悩んでも私には当たって砕ける、みたいなことしかできそうもないのよ。

教室から出た直後に話しかけた。

「大沢くん、一緒に帰らない？」

よし、言えた。

大沢くんは意外そうな顔をして立ち止まった。

うう、初めて見るアップの大沢くん。

いけない、目を見ちゃだめ、微妙にズラすとかしなないと思考が停止してしまうよ。

「……オレ徒歩で近いんだけど」

うわゝ、いろっばい声。

思ってたよりかなり低い声、なんとなく高い声を想像してた。

お願い、静まれ心臓。

「……私も地元だよ、中学どこだったの？」

「高校から越してきたんだよ」

大沢くん歩き始めた、歩く速度容赦ない……。

「まって」

慌てて追いつく。

「はぁ……月見里さんは徒歩？」

うわ、ヤマナシサンだって。聞き慣れてるはずの自分の名字が違

うものに聞こえるよ。

「ううん、チャリです」

「よくオレなんか話しかける気になったな」

あ、雰囲気が変わったかも、悪いほうに。声のトーンが下がったもの。

「やっぱり確信犯だよ、うん、勇気出したよ」

「オレ、若いやつと話すの苦手なんだよ、無視して欲しいんだけど」

その台詞を無視したげる。

「……大沢クンで動きが綺麗なんだよね、ダンスとかしてた？」

「……全然、そんなこと初めて言われたよ」

空手だけであんな綺麗な動きになるのかな。

そんなふうがいいながらも途中で自転車置き場に寄ってくれて正門についた。

意外に喋るのにびっくりした。最悪の想像よりかなりいいよ。

「じゃあオレこっちだから」

「あの……大沢クンのこと知りたいの」

ここで逃げられるんじゃない意味ない、チャリを押し付けていく。

「女つてのはおもしろくてやさしそうな男が好きなものだと思ってた、あんたつて変人なのかな？」

あんた……か、わかってはいたけど相当迷惑そう。

「……自覚ないんだね、クラスの女子の何人かは大沢クンのこと気になってるよ」

入学当初よりかなり減ったけどね。

「まあ中身知らないからな」

「大沢クンは女嫌いななの？」

「嫌いじゃない、嫌われるんだ」

「じゃあどういふ女性が好みなの？ 私は好みに合う？ 合うなら彼女に立候補します」

ぐっじょぶ、私。

極限まで緊張すると勝負強いのかもしいわ。

「……はつきり言っとくよ、オレは格闘バカなの、顔だけで判断し

ないでくれ、中学の頃のクラスメイトは男も女も引いてたよ」

……ほとんどスルーね。

「……そうなんだ」

やっぱりこうくるよね。

「ガキの頃からやたらケンカ売られるタイプなんだよ」

いつもこうやって断ってたのかな。

「……もしかしたら明日からまたそうなるかもな、さっき廊下でクルスのヤンキーが睨んでたぞ、あのバカ、あんた目当か？」

「え？ ……誰だろ、……目が細かった？」

「目も顔も細い奴だったな」

うーん、武藤の蛇男かな、もう1年近くたつのに。

「ごめん……多分、武藤クン、去年告られたことあって断つてもしつこいの」

「武藤ね、弱そうなくせに睨みやがって、中学の頃のオレならあれだけで蹴ってたよ」

これは暴力度をアピールする断り攻撃なのでしょうが……。

私だって、あのやさしさを知らなければあきらめているかも。

「……うーん、「ごめんなさい」

不思議そうな、困ったような顔。これだけしつこい女は珍しいでしようね。

「売ってくりゃボコるからいいけど、ケンカとか平気なんか？」

……どこかで言うしかないもんね。

「……割と平気かな？ でも大沢クンのはすごいね、てか、ほとんど見えないんだよね」

大沢クンの足が止まっちゃったよ。

「びっくりした？」

「どっかで見てたのか」

「偶然見たのが1回、ストーカーして見たのが2回です、テヘツ、「ごめん」

「……」

大沢クン、なんともいえない表情になっちゃった。

びっくりするよね、でも他に思いつかないのよ。

ストーカーのことも言って謝りたかったし、それに話も続かないし。

「ごめんなさい、やっぱり引いちゃう？」

「引きはしないけど、ちっと驚いた、見てて平気つてのもすごいかもな……ああ、ケンカじゃないか」

「ごめんなさい」

「ちよつとそこの川にでもいこうか」

大沢クンに付いていき、多摩川沿いの公園まできた。

5月の河川敷、人の多いところは避けてるかんじ、さわやかな陽気だし、ちよつとしたデートみたいで嬉しいわ。

「どこまで見てんの？」

「駅のほうの繁華街にね、叔母さんちがあるの」

「……」

「2階の稽古場で練習してたら、たまたま見えたのね。」

女のひとが酔っ払いにからまれたと思ったら大沢クンがあつといふ間に助けて消えちゃったの」

「あれか」

「驚いちゃった、全部が速すぎて、後から何がおこったか理解できるの」

「ふん」

「大沢くんはいつも変な空気出してるし、後付けるくらいしかできなかつたの」

「それでも普通はしねーだろ」

ちよつと笑ったような？

「ごめんなさい……大沢くんは人助けが趣味なの？」

「……ちげーよ」

ぼそつとちげーよなんて、否定に聞こえないんですけど。

「すごかつたのは、女の子蹴った酔っ払い事件だな。」

乗客からすごい拍手されてたのに逃げるように他の車両に移動してたね」

「なんであの程度で拍手されんのかわからん、酔っ払いなんて誰でも対処できるだろ」

「誰でもは無理でしょ、それに人助けなんて誰もしないからかな」

「……ほんとな、腐ってる」

腐ってる、吐き捨てるようなその響き。

「あの拍手は鮮やか過ぎるから思わずしちゃうんだよ。」

だって尾行中の私でさえついしちゃうんだもん」

「……」

「最期はあの酔っ払い、駅員さんが連れてったよ。大沢くんはプロの格闘家になるの？」

「……はあ、オレ赤くなってるかな？」

「なっていないよ」

「自分ではなってる気がする、大げさに言われると恥ずかしいもんだな」

「テレ屋さんなんだね」

ほんとにテレ屋さんなんだな。

「……」応疑問に答えとくと、ああいつのはテストみたいなものだから、人助けじゃない」

「……」

「うそじゃない、酔うとほんとに痛みに強くなるんだとか、ただ

の暴力の実戦テスト。

たまには素人の相手しないと手加減がわからなくなるんだよ」

「……………」

いい人だと思われるのが嫌なのかな。

「あと、プロになんか興味ない、有名になるとケンカもできないだ
ろ」

うん。

「友達とか彼女とか作るうともしないのはなぜ？」

「友達も女も要らないんだ、いろいろ事情があつてな、悪いけどこ
れがさっきの返事」

「……………いろいろつてなに？」

……………わかつてはいたけど。

「いろいろは、いろいろだよ」

「うるさい車いたから、おばあさんと同じ速度で横断歩道歩いてた
よ」

「……………」

「子供のイジメ止めたりもしてたし」

「……はあ、あんた暇人だな、GWまでかよ、マジにストーカーしてたんだな」

睨まれた……。

「……ごめんなさい」

おじさん好きの妄想がほんとだったりするかな。

「とにかく、もしかして男が好きなの？」

あ、同時になっちゃった。

「はあ!？」

「おじさん達とは話すよね」

「道場の先輩達か、よく見てるな……どっから見えるんだ？」

「マックから見えるの、オペラグラスで……」

「……」

かなりあきれた顔されています……。

「おじさんにはマッサージもしてたし、男が好きだったりする？」

「アホか！ ガキの頃からの付き合いだぞ」

怒られちゃった……動揺もなさそうだし、やっぱり違うよね、よかった。

「理由教えて欲しいだけだよ、ふられる理由くらい知りたいの」「自分でもしつこいなとは思っただけど。」

「……誰だって言いたくないことくらいあるだろ」

「またも睨まれた。」

「そっだよね、ごめん」

「とにかくさ、明日から無視して」

「……それはイヤダ」

「めちゃくちゃ言ってる自覚はあるの。」

「……勝手にしろ」

「ごめん、でも」

嫌いとか、好みじゃないとか言われたならあきらめようと思っただろうけど、いろいろじゃなれないよ。

走り去ろうとする彼を見ながら、涙が溢れそうになる。

振り向かないだろうけど、それだけは耐えたわ。

土手の上まで登ったところで一瞬だけ振り返った彼、我慢しててよかった。

姿が見えなくなっただけ泣けてきたわ。

蛇男

少し時間をつぶしてから叔母さんちに帰り、一呼吸してリビングに入る。

今日は稽古が夜だけの日だから叔母さんはリビングにいる可能性が高いの。

「ただいま」

「おかえり……どうしたの？ イジメ？」

顔を見るなり言われた、ちょっと泣いただけでなんでバレるんでしょ？……。

「違う違う」

「ふうん、だいじょうぶ？」

「うん」

「聞かないほうがいい？」

「うん、そうじゃないけど、今度話すね」

「ふふん、男なのね」

「……なんでわかるの？」

むう、なぜこうまでバレるんでしょうか？

「そりゃわかるわよ、真面目にハーブ使い出すわ、毎日出かけてるわ、あんたの年で急に生活変わるなんてのは男しかないでしょ」

「……それもそうね」

放任してくれてるけど、チェックはされてるのか、嬉しくもあり
恥ずかしくもあるわ。

「ちゃんと避妊はしてるの？ 泣かされちゃってさ」

ちよ、避妊て！

「……久美子さん、告ってフラれたの」

「そうだと思ってたけどさ」

思ってたんかい！

ああ、にやにやされてる、カマかけられたわけね……。

「んふ、女磨きなさい」

ほっぺたを摘まれたよ。

「はい」

女を磨くというのは比喻じゃないの、叔母さん流の主にハーブを使う美容法。

使い方とか効能は以前から聞いてたから、2週間前から頑張ってるわ。

化粧水は叔母さんの手作りのまま使用してる。

ハーブでゴマージュして美白や美肌、ゴマージュは知らない人が多いかな？

私の場合は主にエリカでラベンダーが少々、それをミルで粉にして熱湯で溶き、顔にパックみたいに塗るの、それがゴマージュ。

汚れるからお風呂で使うのだけど、費用はめっちゃ安いのに効果はすごい。

高級パックは知らないけど、変わらないくらい効果があるらしいよ。

ティーも美容やバスタップ目的にブレンドを変えたの。

ハーブティーは特定の病気に効くものもあるけど、一種類だけではほとんどまずい。

いくつか混ぜて果汁も入れてとにかくおいしく飲むのが続けるコツね。

それからハーブバス、まあバスは以前からだけど、以前より時間

は長くなったわ。

バスタイムはゆっくりぬるめに入るのがポイント、それで大量に汗が出て新陳代謝もよくなるの。

当然ながらバスタイムは考え事が多くなる。

それにしても大沢クンのいろってなにかな。

普通にフラれるならまだいいのに、いろいろあるから誰とも付き合わない、これじゃ蛇の生殺しって感じじゃん。

蛇の生殺しか……蛇男の顔が一瞬浮かんでしまったよ。

うへっ、キモイ。

蛇男みたいにしっこく成りたくないけど、簡単にあきらめるつもりはないわ。

せめてあきらめたほうがいいと思える言葉を聞くまではやめない。

翌日の帰り道。

へこたれずに付いていき、話しかける。

「大沢クン、好きなタイプはある?」

「……」

「巨乳じゃないとダメとか」

「……」

「怒ってる?」

聞くまでもないくらいのおきれ顔なんだけどね。

「……」

「私ってしつこすぎ?」

「そうだな、あんたみたいのはじめてだ」

「けなげでしょ」

「……」

頑張ってるでしょ、たまにはこつやって返事もかえってくるし。
え、違うって?

帰り道、ちょっと友達に話しかけられて出遅れたけど大沢クンを
追いかける。

学校からほんの少し離れたところに、武藤の蛇男がいた、中学の頃の仲間を2人も連れて大沢クンにからんでるわ。

蛇男めく、タイミング的に私が原因なんだろうけど、なんであんなにしつこいのかわからないよ。

蛇男はとにかく粘着するタイプなの、だから蛇男って呼んでるんだけど。

大沢クンは平然と付いていく。

側に行ってもいいだろうか？ 迷う、どうしよう。いきなり行ってやめてというのも自信過剰な気がするし。

3人なんていくら大沢クンでも無茶な気がするわ。

どうしよう。

わからない、平然と着いていく大沢クンならなんでもありな気がするし。

最悪はすぐ警察を呼ぼう、携帯を出して準備だけしてついていくことにしたわ。

彼等は私がこの間ふられた場所、河川敷から近い橋の下までついた。

大沢クンが3人に囲まれたまま何か言っただけみたい。

何も動きがない、会話もなさそうなのに誰も動かない、大沢クンは腰をわずかに落として立っているだけだわ。

またなにか言ったと思ったたら急に大沢クンが動いた。

え？

ええ？

うそ？ 多分一発づつ殴ったり蹴ったりしたただけ、3人とも苦しそつに倒れちゃったよ。

信じられない、強いとかいうレベルじゃない。

時間にしてもほんのちよつと、せいぜい3秒くらい？

3人もいて彼に触れることさえできなかった、大沢クンは倒れたままの3人となにか話している。

次の瞬間顔を上げた大沢クンと目が合っちゃった。

こつちにくるの。

怖い！

やさしいこともよく知っているのに身体が震える程怖いのよ。

怒られるかとびくつと身構えてしまつ……そのまま側を通って行

っちゃったわ。

蛇男のことは多分私の所為だから謝らないといけないのに、信じられない強さに身体が強張ってしまったの。

まだ倒れてて苦しそうな3人。ここまで強いなんて、大人と子供以上の差よ。

3人は少し回復してきたみたい、座って回復を待っているのを見て帰ることにしたわ。

なにも言えなかったダメな私、中学のクラスメイトが男も女も引いてたという言葉の通りだわ。

圧倒的な暴力を近くで見るのはここまで怖いことだったのね、さっきの私にはいつもの彼に見えてなかった。

2Fからのガラス越しの軽い暴力、電車でみた逮捕みたいなこと、そういうのと全く違うの。

中学の時は教室でもあんなことがあったんだろうな、もっとすごいことだったのかも。

アクション映画の雑魚キャラがやられるシーンが実際に目の前で展開されたらそれは怖い。

怖がられることに慣れた大沢ケン。

……強さを求める気持ちって、よくわからない。女が美しさを求めるようなもの？

怖いとは思いつけど、気持ちが変わるわけでもないわ。

ナツく sideく

オレは大沢夏樹、身長183?体重81?、身長の割りに重いのは筋肉の所為だが、主に下半身が太いから服を着ていれば目立たない程度だ。

高校に入っただけで他人と関わることなく過ごすつもりだ、どうせたいした時間じゃない。

オレは自分の顔も女みたいな名前も嫌いだ、この顔や名前の所為で子供の頃から嫌なことばかりだった。

小さい頃は女の子に間違われたこともあった、今でもたまに綺麗な顔と言われることがある、その意味で少し目立つのはどうしようもない。

親のことはまったく記憶にない、オレが3歳の時に交通事故で亡くなったそうだ、個人差はあるだろうけど記憶力が悪いんだろう。

最初の記憶は4歳か5歳くらいのイジメだ、おとこおんなくとか言われて数人から叩かれたりしてた。

よくイジメられるオレは姉の友達に混じって遊んでたことが多か

った、暗くて情けないチビだった。

6歳の頃姉と帰り道を歩いていたら、いつものワルガキどもから石を投げられた。

「おとこおんな〜」「おかまちゃん」

そんなことを笑いながら言い、石を投げってくるガキども。

姉を先にいかそうとしたけど、姉は身体でかばってくれて「いたっ」と小さく聞こえた。

姉の腕から血が出てた、初めてキレたオレはそこからの記憶はほとんどない。

子供のケンカにしては酷い怪我を3人にさせたと、ずうずうしくも爺ちゃんの家に来た相手の親の話だ。

婆ちゃんは相手の親に謝り、爺ちゃんに何度か殴られながら謝れと命令され、泣きながらも謝らなかったことは覚えている。

その後すぐに婆ちゃんに話をして、空手を習い始めた。

すぐに強くなっていった、単純に他人より練習量が多かったからだ。

普通の子供がいやがるような稽古も苦にならない、イジメにあつてた子供はそういうものかもしれない、とにかく強くなるのが嬉しかった。

幼稚園では友達のできないオレだったけど、道場では近い年の友達ができて嬉しかった。

でもオレが強くなるにしたがい友達は減っていき、最期にはいなくなつた。一方的に子分みたいな態度をとつたり、離れてしまう。

女の友達しかいなかったオレは男の友達が欲しかったけど、求めていたのは対等な友人、いわゆる親友だ。

小学の低学年くらいまでは道場に行かない日は姉や女の子達と遊ぶくらいになつた。

やがて女の子も苦手になり、休日も自主稽古することが多くなつた。

小学の高学年にもなると、変に媚びる奴等が増えてきた。

最初は寂しさからそれでも相手にしてたけど、結局は1人になることを選んだ。

オレは人付き合いが苦手なまま育ち、中学の秋まで空手一筋だった。

道場帰りの電車の中、今日は黒帯会だったからいつもより帰りが遅い。

組み手が好きなのでできるのはいいけど、ちょっと電車が混むの

が難点だ。人が多いのは苦手なんだ。

「きや」

女の悲鳴に振り返る、酔った中年サラリーマンが小突くように目の前に座っている中学生くらいの女の子を蹴っている。

約10歩の距離、早歩きくらいで詰めよる。時間的に十分だったにも関わらず酔ったサラリーマンを止めるものは誰もいない。

そいつの両隣は2人とも若いサラリーマンだ、こいつらは怖いわけじゃない、腐っているだけだ。

「おら〜、おら〜」

わけのわからないことを喚わめいている男に横ろから近づき、男の頭部を左の掌底じゆうていで軽く撃つ、ようやく蹴りが止まる。

軽すぎたようだ、いまいち効いてない。

そのまま首の後ろ、スーツの襟を左手で下に引きながら、膝裏を順に軽く蹴る。

膝立ちになったところでベルトを右手で掴み、くるっと半周させながら、うつぶせにするように、ほぼ全身同時に床に落とした。

柔道技も少しはできるけど、スペースがないからこうしただけだ。

落し間際、首だけは少し支えた、多少は床に顔面も打っただろうがどうでもいい。

ほんととはこんなやつに手加減したくない、他人から見ても手加減してるように見えればいいだけだ。

左手を背中側に回し関節を極めておく、男はこの状態でも意味不明なことを喚いている。

泥酔だ、これは女の子を蹴り出したきっかけすらなかったかもしれない、目の前に座ったまま、まだ泣いている女の子と両隣の男を見る。

「終わったから」

一応女の子に声をかけたけど泣いてて聞こえてない。

「お兄さん、代わってくれ」

面倒なので隣で見ただけの男の手を引っぱり、その手に酔っ払い中年の極まってる手を押し付ける、体格のまちな右の男。

「えええ？」

「ええじゃないだろう、隣で見てただけなんだからそのくらいやれ、その子が訴えるなら一応傷害だぞ」

そこそこまちな体格してくせにボケっとしやがって。

ちよつと脅すようにいい、元いたところに戻ろうとした。

「わ〜！」

すごい歓声と拍手がする、アホか、そんなことするくらいなら誰か止めるよ。

拍手は止まりもしない、恥ずかしいし気持ち悪い。止めもしないお前等全てにむかついてるんだよ。

元々立っていた位置に戻ろうと思っていたけど、胴着を入れたスポーツバッグだけ拾い、車両を移動することにした。

むかつくからだ、一般人なんてさっぱりだ、酔った中年1人で拍手までするようなことじゃない。

腐ってる。

知っているだろうか？

都会では大人しい女の子が半ば公然とレイプされる、狙われるのは電車で痴漢され声も出せないようなタイプだ。

電車内だけだと我慢すると、そのまま駅のホームに連れ出されトイレでレイプされるんだ。

様子が変だと思うくらいでは都会人は誰も止めない、田舎の人には想像もつかないだろうけど、新宿駅で実際に起きたことだ。

ちょっと凶暴です

……… 退屈だ。

休み時間、何がそんなに楽しいのだろうか。

クラスメイトはうるさくてしょうがない。

授業中は一応聞いているからまだいい。

公認の1人暮らしの条件でもあるから高校には来るしかない、あまり祖父母を悲しませるのも嫌だし、割り切っているつもりだ。

それにしても中学の頃より暇だ。

高校では他人と関わらない、会話もしないと決めている所為だ。

男だろうが女だろうが、話掛けられても短い返事だけですまし、用件でもない時には返事さえしない。

そんな態度を入学当初から1ヶ月以上続けて、今では無視されるようになり気楽になってきた。

そんなところに突然の月見里桜の告白、最初は半端な対応になって

しまった。

しかもストーリーカー宣言、これにはちょっと笑ってしまいそうになった。

オス猫みたいにストレートでこっちまで素直になってしまいそうなだ。

「大沢、ここ訳してみなさい」

ぼくとしてたら古文の教師に呼ばれていた。

「わかりません」

一応立つてから答える、どこかわかっても無理だろうけど、この文章かもわかんね。

「しょうがないな、座ってよし。では川原、訳してみなさい」

武藤がまた睨んでる、公立に受かるくらいだから頭は悪くないはずなのに、ばっかっばい。

ヤンキーのまま、月見里に告白したんならほんとにバカだ。

まあ、そんなときは普通だったかもしれないけど、弱いくせに睨むとかよくできるもんだ。

身体を鍛えたことがないくらい一目でわかるぞ、格闘技までいわ

なくてもスポーツくらいしとけ。

最近の月見里は教室でもちらちらとこちらを見ている。

あなたはモテるんだから見るのはやめてくれと言いたいが、ほっとおくしかない。

見なくても武藤が睨んでいるだろうことはわかる、蛇のような目に嫉妬の炎まで見えそうな気がするぜ。

あほらしい、少し寝るとしよう。

どうせ家でも深くは寝れない、どこでも同じだ、どれほど疲れが溜まっていようとそうだ。

今日も月見里はついてくるんだろうか？

校門を出てそんなことを思いながら歩いていると、学校から少し離れたところに武藤が立っていた。

そういえばHRのときにはいなかったな、まめなアホだ。

蛇のような目で睨み、オレを待っている、いや、武藤達というベキか、知らない顔が2人いる。制服は同じ、別のクラスか上級生だろ。

どうして色恋沙汰の嫉^{ねた}みで他の奴まで連れてくるかな、気が知れない。

左の奴は武藤並だが、右の奴が少しはできる、背も3人の中では一番ある、185cmくらいか、体格だけ言えばオレと似たようなもんだ。

肉付きも悪くないが、足運びでいうと空手がキックボクシングあたりだろうか。

呼吸は素人並にわかりやすい、重心位置、バランス、微妙だ、わかりにくいからたいしたレベルじゃない、こういうのはかじった程度というんだ。

面倒臭いが、一言くらいは喋らせてやるかと、待ってみた。

「大沢、おめえのでかい態度が最初から気に食わなかったんだよ、ツラ貸して貰うぜ、付いてこい」

「いいよ」

最初からじゃないだろう、正直にもなれんのか。

この手の卑怯な男はオレの分類ではメスに近い。メスの蛇つてとこだ。

生意気にも3人で囲むように歩いている。

逃がさないという意味なのはわかるが、かわいいというか、笑ってしまいそうだけ。

黙って付いていくと河原にむかっている、やはり橋の下かな。

このあたりは河幅が広く橋が大きいので、そこで派手なケンカをしても問題ない、しかも派手にもならない。

左右の奴らは気楽なもんだ、へらへらと軽口を叩いている。

3人相手だとびびって謝るとでも思っているな。

ほう、かじったクン、綺麗な顔言ったな、お前だけ顔いったるうか？

そもそも綺麗な顔だとなぜ弱いと決めつけるんだらうか？

昔からそれがわからない、ごつい顔だと強いとでも言うのか？

ケンカの強さに女子供もヤクザも関係ない、どれだけ鍛えてるか、どれだけケンカに慣れてるか、それだけだ。

くだらないことを考えていると、やっと目的の橋の下についた。

ときどき人がいるここも今は無人だ、足場のいいコンクリート、一応、用心するか。

人の頭はコンクリートとケンカをすると簡単に脳挫傷するんだ。

強いやつ3人を相手にするなら立ち位置くらい考えるけど、素人だと囲まれたままでいい。

「おい」

おいじゃねーだろ。

「やろうぜ！ 3人同時でいい、かかってきな」

そもそもやることすら予想外だったろうが、3人とも足が動かないというのは信じられないってところだろ。

オレが故意に怒りを剥き出しにしたからだ。

これを漫画じゃないんだからという人は、単に経験がないだけだ。

そういう人には、いきなり野生の熊だの虎だのと対峙した場面でも想像して貰うしかない。

強者が怒るとき、気というのはまるで見えるといってもいいはずだ、怒気、殺気なんていうだろ。

もちろん、オレにしても推測だ、自分で自分が見えるわけじゃない。

これじゃ違うな、オレが強いと思う相手が怒ったのを見たことがない、これが正しい言い方か。

ちょっと怒ると弱い奴の反応がいつもこんな感じだからわかるだけで、オレの顔がびびる程怖いわけじゃないだろ。

長いな、固まるにしても長すぎるぞ、ヘタレどもめ、動いた順にローキックの予定だったのだが、3秒経過、来やしない。

「来ないならいくぞ」

ここまで付き合ったんだ、軽く地獄を見せてやる、こういう一人に複数でくるようなバカどもには薬がいるんだ。

武藤に、左の三ヶ月蹴り、前蹴りと回し蹴りの中間の軌道を描く蹴りだ。空手の経験者でもなければどこにくるかもわからない。

狙うのは鳩尾みぞおち、急所の一つで軽く撃つても呼吸が苦しくなる。

わからない人は自分の胃をポンと叩くと5？弱として、その数十倍程度痛いと思ってくれればいい。

踏み込み始動から、当たるまでおよそ0.2秒くらい。

「うっ」

全身の力をほぼ入れないから可能な速度だ、筋肉がガチガチでは速度は遅くなる。

速く動くのに必要な筋肉だけ使う、当たる瞬間、足先の力を抜き、少し引くようなイメージを頭に描く。

素人の腹にはこれで十二分に痛い、撃ち抜くと危ないと聞いていたので試したことはない、少なくとも30秒は動けないだろ。

次、わずかな踏み込みで左の男には左の前蹴り。

2人目なだけに、武藤と違い後ろに逃げるような反応があるので修正、後ろ足のバネを使い押すように、武藤と同じく鳩尾に当てる。

「ぐあ」

失敗、狙いより数？上、くそ、変な逃げ方すんな、頭からオチてはまずい。

胸元を軽く引つ張る。一瞬右手に痛みが走る、危ない、あやうく病院送りにするとこだ。

いや、あのまま後ろに倒れると死んでいた可能性もある、素人はこれだから疲れる、前のめりの姿勢まで戻してから手を離す。

最期のかじったクン、これだけ時間があって反応もしないのか、何をしに来たんだ。

こいつには斜めから回り込むように踏み込んで右の掌底をフック気味に見せフェイントにする、当てるつもりはない。

視線だけむけさせて左のローキック、70%くらいだ。

「ぐわっ」

よし、狂いなく膝上の痛い場所に入った。

全部で2秒くらい、手加減など考慮しなければ1秒もあれば終る、弱すぎて面倒な奴らだ。

鳩尾に当てた2人はしばらく呼吸が苦しくてまともな声も出せない。1分程度だが地獄の苦しみが味わえるはずだ。

それにしても、一瞬でも反応が遅れてたら人殺しになるところだった。

やはり状況が許す限りローキックがいい、ローキックなら頭から倒れることがない。

こういう素人との差を自分の中で認識するのも一応役には立つんだ。

何年も素人とやらずに、いきなりやって重傷にすることがないよ
うにだ。

武藤の側までいく。

「苦しいだろう、これでもかなり手加減したんだぜ、しばらくすり
や動ける程度だ」

「あ………」

「なにか言いたいののはわかるよ、しばらくはまともな声が出せね
なものな。」

反省しろ、お前が1人で来たらこんなことになってないんだよ」

もう1人の雑魚はと、これも問題はない、恩人に感謝して欲しいくらいだが、本人には何のことやらだろ。

かじったクンの側に行く。

「ひっ」

「お前、なんかやったことあるだろ、キックか？ 空手か？」

「……空手です」

「そっか、生意気だったからお前だけ他より加減が少ないんだ。

空手もな、マジにやるところなるんだよ、おもしろいぜ」

帰ろうとして振り向くと、土手の近くから、月見里が見ていた。

今日も来ていたのか、横を通り抜けて帰る。

怯えたような目をしてた、あれを全部見たら当然だな。

中学の頃、全く自分を抑えることができなかった時期、真面目なクラスメイトは男も女もそっという目で見ていた。

彼等にとっては触らぬ神に祟りなし、そっという存在だったろう。

これで月見里も来なくなる、そのほうがいい。

翌日、武藤は休んでいた。休む程強く蹴っていない、怖くて来れないだけだ。

自身の肉体で猛獣と理解した後に、平気で近くに座れるような神
経の持ち主はそうはいない。

大量殺人

桜（side）

帰り道、校門のすぐ近くで大沢クンに追いついた。

「昨日はごめんなさい」

「なにが？」

「んと、武藤のこととか……私がびびっちゃったこと」

「たまには雑魚の相手しとかなないと手加減がわからなくなるし、ちようどよかったよ」

「怒ってないんだ？」

「別に」

大沢クンの歩調、私の速度だ、いつからだろう。これだけのことがすごく嬉しい。

「あれで手加減なの？」

「当たり前だろ」

「当たり前なんだ？」

なんで当たり前なんだろうっか？

「なあ、怖いのになんで来るんだ？」

「一瞬びびっただけだよ、好きなものは好き」

「はあ……………」

「迷惑だよね、ごめん」

「……………困るんだ」

「なにが困るの？」

「……………もう付いてくるな」

また睨まれてる、この目に弱い、まともに見れないの。

ドキドキが激しくなる。

「ごめん、イヤダ」

「……………はあ」

いろいろだけじゃ諦めることもできない、嫌いだと言われれば諦めもつくのに。

少し狭い路地に入ると、突然大沢クンの手が伸びてきた。

ビクっとして私はまた固まっちゃったの。

大沢クンの大きな手に頭の後ろを抱えられ、引かれる。

大沢クンが近づいてくる！

ドキドキ！

ウソでしょ、何が起こってるの？

うわー、ほとんど大沢クンの胸の顔をうずめるような格好だよ。
これは何？

私は緊張のあまり硬直してしまいママチャリを持ったまま。

何をされるのかと期待と恐怖を味わったけど、違っていて。

「オレは大量殺人犯になるんだ、もう付いて来るな」

タイリョウサツジンハンニナル！？

耳元で小さく囁かれた内容は、その距離の所為で理解するのに時間がかかった。

私は彼が見えなくなるまで固まったままで。

言葉の意味が飲み込めない。

当然、この日はいろいろと考えて寝付きが悪かったわ。

大沢クンの背中が見えた、圧倒的な力でなにかを殴り続けている。
いる。

なにかは既に動かない。

それでも大沢クンは殴り続けていた。

「もうやめて！」

私の声らしい。

ゆっくりと振り返る大沢の顔も身体も返り血に染まっていた、同時に肉塊らしき物も見えた。

「やめて……」

涙が止まらない。

「やめて、大沢くん」

自分の声で目覚める。

いやな夢……。

じつとりと大量の寝汗……キモチワルイ。

時計を見るとまだ5時前、3時間も寝てないや。

早朝から熱いハーブバスに入り考える、やはり考えなんかまとまらない。

大量殺人犯。

なんのつもり？

なぜ私にそんなことを言ったの？

私がつざいからウソをいっただけ？

でも……でも事実なら人付き合いを避ける説明が付くかもしれない。いろいろあつて誰とも付き合えないと言っていた事情。

他人が側にいると邪魔になるの？

大量殺人なんてからかっただけで、抱き寄せてみたかっただけ……そんなわけないだろ、バカ。

だめ、わからない。

芽生えたばかりの乙女回路まで邪魔をしている、良い方に考えたがる。

恨みがあるとか……わからない、情報が少なすぎるのよ。

学校に着くと、朝からじろじろと睨まれている気がしたわ。

教室に入るとゆずちゃんが寄ってきたの。

クラスに慣れてくるとゆずちゃんは派手系のグループに行っ
てしまったから久しぶりだわ。

「ねえ、桜、大沢と付き合ってるの?」

「ううん、付き合ってるよ」

「ファンクラブで話題になってるよ」

はい?

「ファンクラブ? ……大沢クンの?」

「うん、ほとんど上級生だけだね。ほら、上だと写真集めにくい
から」

うひゃ。

「ゆずちゃんも入ってるの?」

「ん?」

観賞用とか言ってたのに。

「一緒に帰ってるんでしょ？」

「勝手に付いていってるだけという……」

「ほんとだったんだ、無視されないの？」

「ほとんど無視だよ、たまに返事くる程度で」

「ええ、むかつく」

うわっ、ゆずちゃんの目付きがマジに変わったよ。

「いや、あの……怒らないでよ」

ゆずちゃんは返事もしないで自分の席に戻っていつちゃったわ。

たまに返事が返ってくる程度で怒られても困るし、もしかすると大量殺人予定なんだよ。ただでさえ困ってるのに……。

異変は昼前くらいにはわかってきた、涼ちゃん以外の女子はまともな会話をしてくれないの、いわゆるシカト。

ゆずちゃんのグループだけだところはならないと思うし。

それに上級生の女子が大沢クンじゃなく私を見に来ているみたいで、時々目が合うの。

もう睨みにきてるといっつか、マジ怖い。睨んでいくのはヤンキー

ばい人とか派手なギャルだよ。

甘かった、ここまでとは思ってもいなかったの、下火だとばかり……。

「桜、大沢と何か進展あったの？」

「涼ちゃん、ごめん、私と喋らないほうがいいよ」

「もう聞いているし気にせんでいいよ。うちもされたことあるし」

「え？」

「中学の時部活でされたよ、ひいきされてるとか言われてさ、バカらしくて部活やめちったよん。」

高校生にもなってシカトするほうが幼稚なんだよ、気にすんな」

背中をばしばしされる、わざとなんだろうけど声が大きいよ、男前な涼ちゃん。

「ありがとう」

今日の追っ掛けは自粛して涼ちゃんと帰り、ストレス解消に2人でカラオケしたわ。

その後、私の部屋で話をするの。

「ところで大沢と何があつたのさ？」

「フラれたけどあきらめてないだけだよ」

「なんだ、ねね、大沢ってちゃんと喋るの？」

「少しはね、人間嫌いか人間不信か、そんな感じかな」

「へへ、なんでだろう？」

「ううん、家庭が複雑なのかも」

「あいつ、影あるよね、イジメあつてたんじゃない？」

「どうかな。内緒だけど、大沢くん空手やってて強いの」

「へへ」

「中学のときは回りがみんな引いてたつて言うの、だから友達もあまりいなかったは思うけど」

「強いということは見たんだよね、どこで見たの？」

好奇心むきだしな涼ちゃん。

「空手の道場と電車の中と橋の下だね」

「ええ？ そんなに」

「ふふふ、ストーカーだからいっぱい見てるんだよ」

「さくら〜w」

「道場では組み手でしょ、黒帯さんぽん倒すよ、電車では酔っ払いが暴れてるところを止めて、橋の下ではケンカ。」

武藤わかるでしょ、うちの中学出身の2人連れてきて、3人で大沢クんに絡んで3人ともすぐやられちゃったよ」

「……全然そんな風に見えないよ」

「うん見えないね、だって見ても信じられないんだよ」

「……なんかさ、脱いだらすごそう、スーパー細マッチョ？」

確かにすごそうなんだよね、妄想では何度も……。

あう、喉が鳴っちゃった、聞こえたかな？ 聞こえてるよね……。

「……」

涼ちゃんの視線が痛い、痛いよ。

「エロざくらー！」

「りよ、涼ちゃんのせいだよ、リアルに想像しちゃったじゃんか〜」

「桜は細マッチョが好きなんだ、今度からエロざくらと呼ぶことに」

する」

「やめてよ、エ涼ちゃん」

「うちはオープンエロだからいいよん、エロぢくらはむつつりスケベと、メモメモ」

おい、涼ちゃん、携帯をいじって何をしているのよ。

見せられた涼ちゃんの携帯、私の名前がむつつりエロ桜になっている！

「ひびく」

2人で大笑いになった。ありがとう、涼ちゃん。

ダークヒーロー

どうしても聞きたかった、大量殺人のコト。だから10時半から表で待っていたのだけど、もう11半時を過ぎちゃったわ。

今日はあきらめよう、大沢くんだって休む日もあるでしょうし。

ベッドに入っても眠れない、大量殺人が気になってしょうがない。

自分でもよくわからないの。

大沢くんが人殺しになる。

ほんとだとしても今は殺してないんだから関係ないし、元々相手にもされてないし、好きなんだからいい。

1人で悩んだおおまかな結論はこんなところ。

好きで好きでどうしようもないのだから今さら変えようがないわ。

どう考えても大沢くんは無差別殺人はないと思うし、そうになると恨み、憎しみ。

怖いと思うのは1人暮らしの事情からの想像だ、両親に虐待されてた恨みとか、救いのない考えが浮かぶ。

他には、親、兄弟が殺害された憎しみとか……。

想像だけだと大沢クンの人間不信みたいな様子が直結してしまうけど、ヒントもなしでわかるわけないわ。

衣替え初日の今日、ワイシャツ一枚の大沢クンにやたらと目がいってしまっ、涼ちゃんの所為だ、どうしても意識してしまうよ。

こないだまで男の身体なんてなんとも思わなかったのに、これじやむっつりエロ桜と言われても反論できないじゃん。

だって妄想を上回る色気なんだもん、ウエスト細いから逆三角はすごいし、背中が広い。

もう認める、むっつりは辞退してエロ桜でいいわ。

私だけかと気になって周りの女子を見てみたら、少なからず注目されてる大沢クン。みんなエロいのね。

昼休み、お弁当を食べ終わったら、ゆずちゃんに呼ばれたの。

「桜、話があるの。ちょっと付きあって」

「うん、いいよ」

「いつてらん、ケンカすんなよ」

しないよ、涼ちゃん。

ゆずちゃんとはきちんと話しをしたかったし、丁度いいわ。

ゆずちゃんは廊下に出て歩いていく。

「大沢が昨日の夜デートしてたって知ってる？」

デート？

「……知らない」

「桜も知らないのね、大人の女だってさ」

「そうなんだ……」

昨日走ってなかったのはデート……。

「ほら」

ゆずちゃんに開いたままの携帯を渡された、写メで回ってきたものみたい。

大沢くんはいつものジャージ姿、女性はスーツ姿で、やや後ろ姿だからよくわからないけど、長い髪の美人だろう。

いろいろあるから女は要らない、あれはウソだったのかな、大量殺人はなんなの？

私にウソをつく意味もないのに、訳がわからないよ。

いつのまにか階段の一番上、屋上の手前まで来ていた、ここって入れないんじゃない？

「ゆずちゃん、屋上は閉まってるでしょ」

「先輩が鍵持ってるから入れるよ」

ゆずちゃんは扉を開けて屋上に出て行く、人影が数人見えただわ。

もしや、これは呼び出しとかいう？

「早く入りなよ」

うわっ、いつのまにか後ろにいるパンダギヤルに言われた。

しかも2人もいる！

やばそう、気づくのが遅かったわ。

げげ、動かない私をパンダギヤルが屋上に押し出した。

後ろで扉が閉まる、前には怖そうな人がいっぱい私を睨んでいるよ。

マジ怖い。

女が9人、ちょっと奥に男も7人いる。

髪の色がカラフルだ、真面目な部類のこの高校にもこんなに悪そうな人達がいたのね。

ピンチかもしれない、フラれただけなのに暴力までするでしょうか？

「こっち来な」

3年だろうか？

一番えらそうなヤンキー女に呼ばれたのでしょうがないから行く。

……困まれるのは気分のいいものじゃない、どこからでも殴られそうな雰囲気です。

ゆずちゃん、にやにやしちゃって。ここまで性格悪い女だったのね、せめて不良っぽい格好しててよ、わかんないって。

「地味だね、あんた大沢さんに付きまとってるって？」

地味で悪いの？ てか年下にさん付けだ。

気にしてるのよ、メイクはまだ早いって叔母さんに禁止されてるの。日焼け止めとリップだけ……。

肌が痛むから、素肌で勝負できる間はしないほうがいいって言うんだもん。

「フラれてますけど追いかけてます」

もう開き直るしかないわ。

「フラれたんなら諦めろよ」

「こいつ生意気じゃね」

すげっ、一斉にうるさい。

「伯府の黒龍ってわかる？ あんたみたいな地味子が追いかける男じゃないのよ」

ハクフのコクリユウ？

大沢クンのことなんだろうな、伯府といえばちょっと南にいったあたりの地名だ。

「伯府の黒龍ってなんですか？」

「ここらの暴走族をいくつかつぶしてそう呼ばれてたんだよ。

20人くらいの暴走族なら1人でつぶす、徹底的に解散するまで何度でもさ。

誰かが調べたら伯府中に通ってる中坊でね、黒いバイクに黒い服、黒い棒一本で暴れるんだってさ。

ヤクザがバツクにいるって話もあるよ、そういう男なのさ。

わかった？ あんたみたいな地味子ちゃんには関係ないのよ」

……地味子ね。

暴走族つぶし……それにヤクザ。

めちゃくちゃだけど大沢くんなら不思議でもない。

だからって、なぜか無性にむかつく。

「……」

「もう追いかけるのもやめな、目障りなんだよ」

うんと言った方がよさげなことはわかってる。

でも言いたくない。

大沢クンの強さにしか知らない人に。

「完全にフラれるまではあきらめません」

パシン！

「痛っ」

言ったと同時にほっぺたにビンタがきた。

「やさしくすりゃこれだ、舐めた地味子だね」

ほっぺたがじんじんする。

「しめましょう」

「やっちゃんお」

うわっ、ほんとにリンチコースだ、恋愛なんて自由競争じゃんか。
。

「おい！」

横から低い声がした。

屋上だから当然フェンスがある、そのフェンスの向こう、下から大沢クンが現れた。

ちょっと、どこから登ってくるのよ！

ここ4階建ての屋上なんだよ、外から出てくる場所じゃないでしょ。

しかもまるで狙ってみたいにタイミング良過ぎだし。

軽々とフェンスを乗り越えて隣に来た大沢くん。

安堵感なのか、そのヒーローっぷりになのか、涙が出てきちゃった。

これは好意じゃないよね、やさしいから来てくれただけ。わかってはいても期待したくなる。

「アホ」

ちょ、いきなり私の顔見るなりなんなの？ 感激してたのに。

「……あ、アホって」

「こんなとこまでくる時点でアホ、やりすごしもしないし、かなりのアホだ。」

あそこの雑魚に輪姦まわされでもしたらどうすんだ、鍵かかってんだぞ

まわされる？ 鍵までかけてるんだ、考えてなかったけど、でも学校だよ、まさかね。……そんな可能性あったの？

「……」

「だいたい話は聞いてたんだけどな、暴力にならなきゃ出るつもりなかったんだ」

「ええ〜？」

聞いてたってどこにいたのよ？

もしかしてずっとぶら下がってたり？

こわ〜、それが一番怖いよ。

ちょこつと移動して下を見た、なんだ、フェンスの外に段差がある……でも、登ってきたんだよね、やっぱ有りえないよ。

「さっき殴ったの誰？」

「……」

シーンとして誰も口を開かない、私だって言いたくない、大沢クンの雰囲気怖すぎる。

「……あたしだよ、だって」

「キャ」

バシ！

ビンタ。ひゃ〜、これは痛い。私がされた何倍だよ、ヤンキー女とはいえ、同情するくらい痛そう。

これじゃヒーローじゃないよ。女にそこまでするんだ、さらにシ

ーんと静まる。

「そこまでしなくても……」

「何で？」

「何でって……」

なんかこういふ場面で口出しするべきじゃないぽい……。

「何こいつ？」

ちょっと離れたところから7人の男達が寄ってくる。

わらわらと寄ってきたカラフルな人達。

大沢クン、全く動じない。

ずっと前に出て、来た順番に、足を蹴って、掌で殴って、また足を蹴って。

先頭の3人があっさり一発づつで倒される。

武藤達のと看より早い。

こればかりは見慣れない、いつ見ても冗談みたいな強さなんだも
ん。

作り物の映像みたいで違和感があるの。

……暴走族を1人でつぶす、マジでできそう。

後ろの4人は止まってしまい、誰も動かなくなっただわ。

「もう終わりか、つまらん奴等だな」

「てめえ」

そう反射的に口に出した茶髪の男も後が続かない。

……これは気力の問題だわ。

理由は大沢クンから出てる、禍々しいオーラみたいなもの。

マジで見えるみたいな気がするの、ほんとに怖い。

何なのこれ、動けなくなるくらい怖い。

こんなの初めて見た、大沢クンが立っているだけで、20人近くいる人間が全員怯えて動けない、声も出さない。

ブラックオーラ。目の錯覚だと思うけど……。

有りえない。

と思っただら甘かった。

掌で頭を撃たれたヤンキーが立ち上がりナイフを出して構えたの。

「おい、舐めてんじゃ、 × 「

……大沢クンの強さというのは多分速さにある、見えた光景は躊躇なく前に進み、最期まで台詞すら言わせないで、股間を蹴った姿。

大沢クンには怖いと思う気持ちがないのかもしれない、刃物にすら慣れてるのかも。

「ボケ、そういうもん出すな」

腰だけ持ち上げ、土下座みたいな姿勢で這い蹲るナイフさん、声にならない悲鳴の後も、ううう唸っている。

痛そうとかいうレベルじゃない……。自業自得だけど、哀れだわ。

大沢クンはナイフさんをちゃんと蹴って転がし、側にしゃがみこんで股間を握った！

「ぎゃー」

「おめでとぅ、つぶれちゃいない。

でもな、これから玉が倍くらいに腫れるんだよ、ずっと痛くてまともに寝れないぞ、経験者は語るってとこだ」

ナイフを壊しながら嬉しそうに語る私のヒーローは悪魔のようです。

「……」

「おい、ここの鍵寄せ。お前らここ使用禁止、文句ある奴いるか？」

「「「「……」」」」

「いないなら早く寄せ。全員殴るぞ」

「……鍵を呼びますから……」

ヤンキー女が携帯をかける、唇の端に血が見える……。

『すぐ鍵持ってきて』

一分もしない間に、パンダギャルが異様な雰囲気キョロキョロ周りを見ながら鍵をヤンキー女に渡し、それを大沢クンに渡した。

「お前らに言っとく、1つ目、この学校じゃイジメは禁止な。」

2つ目、ここであったことは誰にも言つな、ここでのことが噂になつたらお前ら全員殴る。

このバカは男が運べ、しばらくはまともにも動けん。野球の球でも当たったことにしとけ、病院は役にたたないぞ。

わかつたら消える！」

走って出て行く人がほとんどだった、これだけの恐怖はほとんどの人が初めてだと思えます。

玉腫れナイフさんも運ばれていったよ。

内緒のお付き合い(前書き)

携帯用改行作業中です、1000文字超えてる場所あれば指摘お願いします。

内緒のお付き合い

2人だけになっちゃった。

「月見里、懲りたたる、もうオレに近寄るなよ」

「……ありがとう」

「オレの所為だろ、礼なんか言うな、早く行けよ」

「……う、はい」

つい歩き出したけど、このまま行ったらダメだよ。

「またも、びびってごめん」

「あれでお前もびびるのか、なるほど。……そんなこと気にするな、オレがびびるようにしただけだ」

あのブラックオーラは故意に出せるものなの？

マジで人間じゃないのかも。

今なら実は宇宙人とか言われても納得しちゃうよ。

「近寄るな、は聞かない」

「……なあ、さっきの話、ヤクザのとこ以外はほぼ事実だぞ」

「うん」

ヤクザは事実じゃないのね、それだけでもまじだよ。

「ああいうバカどもはな、数日はびびるけどどうせ噂になる、どうする？」

「どつという意味？」

「お前がオレの女として噂になるとするだろ、もしかしたらオレを恨んでるやつに狙われるかもしれないってこと」

オレの女。まっすぐ大沢クンの目を見てみたの。

いろいろありすぎてドキドキが麻痺してるのかもしれない。

久しぶりにまともに見た大沢クンの目が片思いじゃないと告げるような気がするの。

「……大沢クンの女になれるなら狙われてもいい」

なぜそう感じるのかよくわからないけど、さっきまでと全然違う大沢クンのやさしい雰囲気、チャンスだと私のカンが告げてる。

これは多分恋する乙女の本能だわ。

「話聞いてんのか？……オレが殺しやったらどうするんだよ、イジメに合うぞ」

抱きつきたい、私はほんとに肉食系みたい。何時からかわからない、まともに見れなかった大沢クンの目に吸い込まれそうになる。

「イジメにあってもいい」

抱きついた、がっしりした大きな身体。

「……オレは中身おっさんだぜ、面白みもないし退屈するぞ」

「しないよ」

「……何時いなくなるかもわからないんだ」

「それでもいい、好き」

抱きしめられた！

背中に回された大きな手が嬉しい、私のダークヒーロー。

「オレも好きだよ」

オレも好きだよ、好きだよ、頭の中で何度もリフレイン……。

こらえても涙が溢れてくる。

ギョツと抱きしめた、嬉しいとかそんなの超えてる、言葉にならない。

届いた思い、諦めなくてよかった、きっとこの感激は一生忘れられない。

感激に浸るのは早かったわ。

ぐいっと身体を離され、だってこの泣き顔を見られたくなくて、でも抗議する間もなくキスされちゃったの。

……びっくりする前にされたキス、大沢クン、キスまで速度重視なんですか？

私のファーストキスは不意打ちの先制のパンチ。

ケンカじゃないんだから心の準備する時間をください。

真昼の学校でファーストキス！

嬉しいし恥ずかしいし夢が崩れたし……もうぐちゃぐちゃ。

ちよつと唇が離れたから、今度こそ抗議しようとしたら。

「大き」

言わせて貰えない。

ん〜！

いきなり舌が入ってきたの。

んん〜、防戦もできない私の舌はダメダメ。

やさしく縦横無尽に動く舌、だんだん激しく、長すぎるよ〜……
ギブギブ。

「キーンコーン」

お昼が終る予告のチャイムが響くのに止めてくれないキス。

とんとんと背中を叩いたら、ようやく離れた。

なんだか身体に力が入らない、いきなりのキスのせいよ。

今まで私とキスしてた大沢クンの顔、ちょっと見ただけでいろいろぼい。

「……チャイム鳴ったよ、行く」

こんな時でも優等生発言が勝手に出てきちゃう、一緒にここに居たいくらいなのに。

「……うん、先にいって、学校じゃ一緒にいないようにしよう。放

課後、校門出てゆっくり歩いてるから「

」……内緒のお付き合いにするって意味？」

「そのほうがいいと思う」

困ってるような顔に反論もできなくて。

「わかった、あとでね」

「うん」

後ろ髪引かれる思いというのはこういう気持ちというのね、まだ現実感がないからもっと言葉を聞きたいのに。

それでも屋上を後にして教室に戻った。

復讐のために

ナツ（side）

今日で何日目だろう。

月見里桜、無防備な態度で今日も付いて来る。

頭の中では何度こいつを抱いたことか。

最近の妄想は普通のセックスだけじゃない、無性に乱暴にしたくなるんだ。

信用しきったような目で見るな。

こいつを見てると時々苛めたくなる。

きつい……好きな女に好きだと言われても、言葉を返せない、何もできない。

ここ数日は拷問みたいな気分だ、それでも突き放す気になれない。

一言、嫌いだと言えればいいんだ。

たったそれだけのことが言おうとしても言えない。

人目がなくなつた細い路地。

時おり悩んだような顔を見せる月見里桜、桜、そう呼びたくなる。

つい、手が伸びていた。

びっくりして硬直したような様子の桜、その頭を抱き、そのまま抱き寄せた。

やめろ！ 頭から警告がする。

何をしようとした？

ギリギリのところまで押し留め、耳元に口を寄せた。

「オレは大量殺人犯になるんだ、もう付いて来るな」

それだけを言って逃げた。

…これでいい、もう来ないだろう。

…誤魔化せたと思う。

…気が狂いそうだ。

…早く終わりにしたい。

… 奴等を殺して終わりに… したい。

… 姉を殺した奴等。

道場を休み、陽が落ちてからトレーニングに出かけた。

いつもの稽古、ここは姉の死体があった場所だ。

物的証拠はなく犯人が捕まることはもうない。

「正直なところ証拠がなくてありがたいんだ、オレも警察だの裁判だのに任せたくはない。」

普通に裁けば死刑にならない。調べてもせいぜい傷害致死で5年以下の刑、下手をすれば執行猶予がつくんだ。

復讐は虚しい、定番の台詞のように映画やドラマで聞くのはなぜだ。

実際に家族を奪われた人が言うならまだいい、そうじゃない奴まで言うのは不思議だ。

それは想像力の欠落した人間の言葉だ、少なくともオレには復讐を考えずに生きることのほうが苦痛だ。

どす黒い怒り、この感情は発作みたいに突然強くなる。その度に身体に傷が増える、拳は骨折し、額から肘から流血し、足にはヒビが入る。

家では家具だの壁も壊れる、爺さんに怒られ、すぐに居場所もなくなつた。

被害者の遺族が怒りという苦痛を抱えてなにもせず生きる、それは苦しい。

虚しいというなら、オレは復讐の後に虚しさを味わいたい、その虚しさは怒りをもてあます苦痛より遙かにましに思えるんだ。

オレがガキだったから、ガキだからこうなのか、大人でもそうなのか、気性が激しいだけなのか、そんなことはわからない。

最初は標的すらわからない、ただのどす黒い怒りだった。

半年以上道場を休み、暴れ狂つた。街に出てケンカ相手を探し暴れる日々。

姉の事件以前のオレは空手のことしか考えないガキだった。

世の中のシステムを何もわかっていないガキで、犯人は捕まらな
いまま時間だけが虚しく過ぎていったんだ。

徐々に明確に殺意が芽生えてくる。

警察なんかどうでもいい、オレが殺せばいい。

警察は邪魔にしなければならない。

警察のシステム、司法のことも少し調べた。

捜査の情報は警察に行っても教えてくれることじゃない。

自分で調べるしかない。

そう決意して中学2年の時にこの辺りの暴走族を苛めて使った。

中2でも実力は既に初段以上はあったし、なによりケンカに慣れていた。

複数相手、鉄パイプや刃物では怖いと思わなくなっていた。

怖いと思えば身体がいうことを聞かない、それが危ないだけだ。

ケンカに慣れるとそれがわかってくる、素人が使う武器は怖くない。

暴走族になんか一切遠慮はなかった、選んだのはたった6人の小さい暴走族。

小さいグループに決めたのは口封じの問題だ、彼等にとっては悪夢のような災厄の始まり。

自分達より遥かに若く、暴走族そのものを憎み、恐怖で支配する暴君。

6人の溜まり場はリーダーの家の離れのプレハブだった、家出中のオレに都合よく半年程部屋代わりにした。

リーダーの親は子供に何も言えないタイプだった、顔はみたけど口も聞いたことがない。

その暴走族のメンバーで今もここに住んでる奴はいない、6人とも実家がここだが都心や他の地方に住んでいる。

オレの近くに住みたくない、あのクズどもの気持ちもわかる、いかに荒れ狂っていたか、自分でもどうしようもなかった。

小さな暴走族には欠点があった、市内の大きな暴走族に吸収を狙われる立場ということ。

東京都下には周辺の県のような大型の暴走族はいない、大きくても30人程度だ、口で言ってもわかるわけがないからつぶすしかない。

棒術用の檜の棒は180?もあったから、持ち運びできるように60?短くして使った。

バイクは今も持つてるけど元は6人のリーダーのものだ、アホな改造を元に戻して使った、うるさいし遅いだけだったからだ。

黒いヘルメットを買い、バイクや棒は夜間の奇襲用に全部黒く塗装した。

鬱憤晴らしにもなった、知らないやつは暴走族を怖がるだろうけど、暴走族に戦闘力はないとっていい。

まず、武器がしょぼい、殺傷力の低い鉄パイプがメインだ。

素人が考えるようにバイクで人を轢くことはない、バイクは不安定な乗り物だ。

わかりにくいなら自転車で考えるといい。

自転車が歩行者を怪我を負わす速度で撥ねたとしたら、自転車も倒れるのはわかるだろ。

ゆっくりなら別だが、普通は自転車も倒れて両者が怪我をする。

これはバイクでもさほど変わらない、自転車より重量はあっても所詮は2輪だ。しかも人間が相手だと反動が読めない。

運転者はほぼ常時両手が塞がるから、バイクの後ろに乗る方が鉄パイプを振るくらいだ。

対処法はバイクが近くに來たら運転者を棒で突く、これだけでいい。

倒れたバイクが自分に来たら飛んで避けるだけ、慣れればまったく危険はない。

問題は4輪だけど、これはオレも経験がない、運転者に殺す覚悟がないとできないからだ。

来たら対処法も考えてはいたけど、実際はどうだったろうか？

結局2カ月程で近辺の暴走族を3つ解散させた、その間も情報は集めさせていた。

3ヶ月以上に渡り徹底的に調べさせた結果、ようやく犯人グループと被害者が1人わかった。

犯人グループがわかった後、もし相手にオレのことがバレたら6人も殺すぞと告げた。

元々6人も恐怖や弱みで逆らえないようにしていた、そこにそういう脅しを重ねた。

族はやめると言うのでバイクもそのまま貰ったのだ。どうせ元は盗難車だろう。

えらそうにほざいてるオレにも後悔がある。

被害者の女すら利用した、どうしても犯人だと確証が欲しかったからだ。

酷いことをした、少しでも早く忘れたかっただろうに、傷口に塩を塗りこむような行為だった。

姉を殺した輪姦族、メンバーは8人、事件後解散しているけど皆このあたりに平然と住んでいやがる。

警察で取り調べを受けたのは2人だけ、元リーダーの長谷川正宗、ずるがしこいタイプだ。

もう1人は小早川真治、女に刃物をちらつかせ殴るクズだ。

警察というのは小さな事件をゴミと呼び面倒臭いといわんばかりの態度を取る、逆に殺人や強の名がつく犯罪には厳しい。

点数制、警察への信頼が高い時期は多数の冤罪を生んだと本で読んだ。

それだけに殺人にはかなりの自白強要がある、ましてや暴走族には厳しかったはずだ。

それを乗り越えた2人、並の神経ではない、そこにはありがとうと言いたいくらいだ、お前等はオレの獲物だ。

他のメンバーは市川茂晴、田中浩二、中山元樹、高橋光一、斉藤健治、鈴木英輝。

このうち斉藤と田中はナンパ要員だろう、つまり女受けがいいタイプだ。

せめてもうちょっと少なければすぐに殺していた。

見かけても多くて4人まで、それではできない、全員殺すにはどれだけ焦れても待つしかない。

今は奴等の見張りを続けるのみだ、8人揃う機会さえくれればいつでも殺る。

7人でもいい、残り1人なら隠れてさえいなければ捕まる前に殺せる。

いつも隠し持っているメリケンサックを握り締める、拳の形をした凶器だ。

素人が使っても危険なものだ、オレが使つと頭蓋骨を砕き、脳に致命傷を与えるだろう、1人1撃で殺せるはずだ。

素手のままでも1人2人は簡単に殺せる程度には鍛えてる、空手の稽古は10年やってきた。

3年前からは異常な量の稽古だった、スポーツ理論を無視した運動量は誉められたもんじゃない、ただ必要だっただけだ。

彼女

道場からの帰り道、駅から出ると声をかけられた。

「夏樹くん？」

「……香織さん、久しぶり」

1年振りに会う彼女は、元ヤンキーに見えない落ち着きだ、化粧も髪も全然違う、すぐに彼女だとわかったのは呼び方だ。

「元気だった？」

「うん、香織さんも元気そうだね」

「時間あるなら御飯でもどう？ 何でもおごるよ」

「オレは飲まないよ」

彼女はこう見えてかなり酒に強い、時間も夜の10時、釘を刺しとかないと付き合い合われるかもしれない。

「当たり前だよ、夏樹くんは飲んじゃダメ」

喋り方すら違う。14歳のオレにさんざん飲ませようとしたのは誰だ。

並んで歩く彼女から近況を聞かれたり、聞かされたりした。

二十歳になりOL生活が板に付いてるようだ。

雰囲気も見た目も違つのに、過去の姿がダブって未だに痛々しく感じる。

男8人に暴力を含めて輪姦されるのはどういうことか、ガキには想像が難しかった。

「夏樹くんはまだ忘れられないの？」

「オレには無理だよ」

中華料理屋で聞き慣れた台詞を言われる、別れる時もそうだった。

酷いことをした、男性恐怖症？ セックス恐怖症？ というのか。

オレが突然話しかけただけで怯える彼女、そんな彼女に奴等の写真を見せて、こいつらかと聞いた。

さらに怯える彼女が証拠みたいなものだったけど確認しなかった、ちゃんと話が聞けるまで1週間かかった。

輪姦そのものより、暴力に恐怖が強いと感じたけどよくわからない。

彼女とは一緒に毎日寝るだけの関係だった。

半年以上一緒にいてセックスは別れる頃に何度かしたただけだ。

似たような傷を舐めあう関係、お互いに利用しあう関係だった。

罪滅ぼし、まともに寝る場所すらなかったオレの都合もある。

男に触れなかった彼女はリハビリだ。禁欲してた訳じゃない、セフレがいたから耐えられただけだ。

恋愛感情はなかった、情というんだろうか、一緒にいるとそういう気持ちは多分お互いにあった。

そんな関係は片方の傷が少し癒えれば終る、一緒にいれば癒えてきた傷がいつまでも治らないからだ。

「うちそうさま」

「私、恋人ができたよ」

「そう、良かった」

「……夏樹くんはいないの？」

「うん、オレは1人がいい」

「ダメだよ、好きな人もいないの？」

「いるよ……今日は会えてよかった、元気でな」

「うん、元気でね」

独りになる帰り道、こんなとき考えるのは月見里のことが多くな
った。

会いたい。

顔がみたい。

付き合えたら楽しいだろうな、そう思う。

……ある日突然彼氏が8人を殺し、逃亡しましたと聞かされる、
警察に話を聞かれたり見張られたりもするだろう、多分、陰湿なイ
ジメにもあつ……。

付き合える訳がない、結論はいつもこうだ。

大丈夫だ。

もう近寄ってくるはずがない。

翌日の学校、食堂でメシを食ってる最中に武藤からの着信が鳴っ
た、月見里が不良しか使えない屋上に着いていったという内容だ。

バカと鉄は使いようつとこだ、月見里が女子に無視された時に昼は見張るように言っと言ったんだ。

武藤のバカは弁当派なんだが、それが顔に似合わずかわいらしい弁当なんだ、あれには笑った。

はあ、それにしてもだ、不良の溜まり場くらい友達のないオレでも知っているんだ。

そんなことすら知らないのかとあきれる。

ちっ！

屋上への扉は閉まっている、見回すも近くに誰もいない、屋上には人の居る気配はある。

武藤め、どうなってやがる。いまだに顔をなるべく合わせたくないのか、待ってるのが普通だろ。携帯をかける。

『おい、鍵が閉まってるぞ』

『すみません、そこまではわかりません』

訂正しとく、バカはバカだ、使えねえ。

化学の教室がすぐそこだ、無人の教室の鍵を壊し、中に入る。

窓際に行き、登れるかどうか上を見る。

屋上に登るにはちょっとアクロバットだけど、登れないこともない。右の握力は低いから油断はできないがいけると思う。

万一落ちても4階分の高さだ、着地さえミスらなければ足は折れても死ぬことはないはずだ。

学校の上履きなのが痛い、邪魔だから脱いでおく、いつもの衝撃吸収シューズなら不安がないのに。

天井部分の鉄柱を思い切りジャンプして掴み、外方向に移動していく……よし、届いた。

屋上のへりを掴み、ちょっと覗いてみた。段になっていて何も見えない、そこまで登ってもバレないな。

ちょっと見たら意外と人が多い、匍匐^{ほふく}前進で話が聞こえる場所まで移動した。

話だけみたいだ、そのまま隠れて話だけ聞いておくか。

すごい言われようだ、黒龍なんて言われてんのか、昔の漫画の番長くらい恥ずかしいぞ。

ヤクザのバックとか、どんだけ金がかかると思ってるんだ、アホめ。

「おちおち伊達さんとめしも食ってられねえ、オレはただのマッサ
ージ係りだよ。」

「完全にフラれるまではあきらめません」

「まじか……。」

「痛っ」

「殴られたのか？ あいつは、どこまでアホなんだ。」

「やさしくすりゃこれだ、舐めた地味子だね」

「おい！」

「声だけかけて止めておき、フェンスを登る。」

「フェンスが高いな……ここですっくりフェンス乗り越えるのって
迫力ねえぞ。」

「アホ」

「ほっぺた赤くしやがって、マジでアホだ。ビンタしたのどいつだ、
このケバイヤンキー女か。」

「……あ、アホって」

「こんなところまでくる時点でアホ、やりすぎもしないし、かなりのアホだ。」

あそこの雑魚に輪姦まわされでもしたらどうすんだ、鍵まわかかってんだぞ」

何にも考えてない顔だな。

「……」

「だいたい話は聞いてたんだけどな、暴力にならなきゃ出るつもりじゃなかったんだ」

「ええ〜？」

「さっき殴ったの誰？」

「……」

「……あたしだよ、だって」

だよな、ケバ女。

「キャ」

軽くビンタしとく、エセフェミニストと同じにするなよ、集団で困んで暴力を使う、男も女もあるか。月見里はお人好しすぎる。

7人の男達が寄ってくる。

雑魚い、1人も鍛えた男がない、さすが都立だ、足運びですぐわかる。

来た順番に、右ローキック50%。ローキックで当てる場所は膝上だ、とにかく痛い箇所がある。

「ぎゃ」

次は掌底で即頭部を軽く撃って軽い脳震盪を起させた。

「うっ」

最期も左ローキック50%だ。

「ぐわっ」

当然だが、雑魚相手には手加減が少ない、オレにしたら同罪だからだ。

怒りを抑えてるのにもう来ないのか、びびりどもめ。

「もう終わりか、つまらん奴等だな」

怒りを放ち、さらに睨みながら意識して腹を立て、故意に殺すぞと念じる、自己暗示に近い作業だ。

こうすると多分殺気が強くではずだ、女も全部叩くのはちと嫌だし、それでもびびらせとかないと次が有りうる。

ほく、掌底で頭を撃った奴がバタフライナイフを出して構えた。

鈍感過ぎて殺気が通じない奴もたまにいる、逆にびびりすぎてなるのか？

「舐めてんじや x」

ボケか、使いもしないくせにそういうもん出すな。

踏み込んで金的に前蹴り、50%くらいだ。思い切り蹴るとどうなるかは知らない、怖くて試したことがないからだ。

金的というのはむき出しの内臓だ、放熱の為に外に出てる男にとっては恐ろしい器官なんだ。

この痛さは女性には理解しにくい、内臓に直接何かされるのを想像して貰うしかないけど……すまない、自分でも想像できない。玉はやはり特別だ。

土下座の姿勢でうく、うくと唸っている。

とにかく痛いんだ、小学3年の時に組み手でまともに蹴りを貰った経験がある。

マジでまる1日くらい痛さで寝れなかった、この痛さはトラウマになるんだ。

蹴ったのはオレだが、見てるとこっちまで痛い気がしてくる。それでも刃物を出すアホにはだいたい蹴ることにしてる。

ちよんと蹴って横に転がし、側にしゃがみこんで玉を握ってみた。

「ぎゃ〜」

既にちよつと腫れてる、左右で大きさが違う。数日は痛いままかもな、次に見かけたら何日寝れなかったか聞いておこう。

落ちてあるバタフライナイフの先端を地面に擦り、曲げておく。

バカども相手を恫喝し後処理をした。いかに恐怖を与えるか、それだけだから楽なもんだ。

屋上の鍵は貰っておいた。サボりたくなったら使おうしよう。

月見里は当然みたいに残ってる……。

「月見里、懲りただろ、もうオレに近寄るなよ」

「……ありがとう」

「オレの所為だろ、礼なんか言っな、早く行けよ」

今は顔を見たくない、自分から見せた恐怖だけど、それでも見たくない。

「……う、はい」

……戻ってくるなよ。

「またも、びびってごめん」

「あれでお前もびびるのか、なるほど。……そんなこと気にするな、オレがびびるようにしただけだ」

「近寄るな、は聞かない」

訳がわからない、ちょっとましな部類の男でも逃げるぞ。

「……なあ、さっきの話、ヤクザのとこ以外はほぼ事実だぞ」

「うん」

「ああいうバカどもはな、数日はびびるけどどうせ噂になる、どうする?」

口止めなんか無駄なことがわかってたけどしただけだ。

「どづいつ意味?」

「お前がオレの女として噂になるとするだろ、もしかしたらオレを恨んでるやつに狙われるかもしれないってこと」

まっすぐに目を見てくる、なんて顔をするんだ。

……だめだ、こいつが好きだ。

「……大沢クンの女になれるなら狙われてもいい」

どこを聞いたらそういう返事になるんだよ。

「話聞いてんのか？……オレが殺しやったらどうするんだよ、イジメに合うぞ」

聞いてないのかもしれない、真っ直ぐに目だけ見てくる。

「こいつうのは見詰め合うとこのか、恥ずかしいのに目を逸らせない。」

「イジメにあってもいい」

抱きついて来た華奢な身体……もう我慢しないでいいだろうか？

「……オレは中身おっさんだぞ、面白みもないし退屈するぞ」

「しないよ」

「……何時いなくなるかもわからないんだ」

「それでもいい、好き」

抱きしめた、もう知らない。

「オレも好きだよ」

身体を離しキスした。

その感触に溺れたくなる。

今すぐ、もっと欲しい。

一瞬離すと口が開く、文句なんか聞きたくない。

舌を入れ暴れた、いまずぐ全部が欲しい、我慢というやつは身体に悪い。いままで抑えていた分、歯止めが効かない。

「キーンコーン」

チャイムなんか無視だ。

背中を叩かれた。

……お前は違うのか、拒否されると効く。

「……チャイム鳴ったよ、行こ」

温度差はこんなにあるんだな、虚しいもんだ。

……くそ、オレも冷静にならないといけない。

こいつは普通の付き合いをする気みただけで、せめて学校じゃ隠したほうがいい、噂程度ならイジメはないかも、警察も来ないだろう。

「……うん、先にいって、学校じゃ一緒にいないようにしよう。放課後、校門出てゆっくり歩いてるから」

「……秘密のお付き合いにするって意味？」

「そのほうがいいと思う」

さぼりたい、さっきまでの熱に浮かされた気分がウソみたいだ。

1人になるとほんとにこれでいいのかと自問してしまう。

今日から送って行くことになる。

普通の恋愛をしたことがない、どんな風に接したらいいんだろうか？

酒と薬入りの乱交、ほとんどセックスのみのセフレ、傷を舐めあうような付き合い、どれもまともじゃない。

好きな女と付き合ったことすらないんだ、わかるはずがない……。

靴下と上履きを忘れるとこだった、サボりは中止だな。さっさと回収して降りるか。

帰り道

桜 \ side \

「オレも好きだよ」間違いなく聞こえたあの言葉、はんすうなんと反芻して
も実感が沸かないの。

大沢クンが教室に戻ってきた、こちらを見もしない。

急に自信がなくなる。

夢でも見てた気分…。

キスマでしたのに。

ファーストキスが学校の屋上で、お弁当風味のキス。なんか微妙
……。。

そういえばガーリック入りのハンバーグ！ にんにく臭い女とか
思われなかったかな……自分の息を嗅いでみたけど。

自分でわかるか〜！

ダメだ、てんぱってる。1人ツツコミに精彩がないわ。

うっ、いきなりなんだもん。

わかってはいるの、規格外の恋愛、予定なんて立てられない。

きつと求められたら抵抗もしない、何時いなくなるかもわからない、そんな恋に下手なかけひきなんかできないよ。

私の思いはいつ届いていたの？

地味子と言われて当然の何もしてない顔、ブスではないけど美人でもない。

これだけしつこく追いかけて何を今更だけど、好かれる要素が思い当たらないの。

ただ好きでどうしようもないから追いかけていただけ、変な妄想はしたけど付き合う姿は想像さえできなかったのよ。

両思い、恋人、実感がゼロだね。

猪突猛進がよかったのだろうか？ ……それなら他にもいたと思っしゅ……しつこいことだったり？ そうなら最低。

午後の授業はほとんど記憶にない、成績くらいしか取柄とっえがないのに。

放課後がここまで待ち遠しかったのは初めてよ、いろいろ聞きたくてしょうがないの。

大沢クンより早く校門を出てしまったわ。

出てしまった以上進まなくてはならない、不自然だと怒られそう。

「何してんだ？ あんなダッシュで教室でたら変だろ」

どっちみち不自然でした……。

「じめん」

「言い忘れたけど方向も違うんだ、今日からオレが送るぞ」

そういつと、叔母さんちのある駅方向に曲がっていく。

「えっ？」

「今日明日にどうこうはないだろうけど、一応な」

「うちのが遠いんだよ」

「帰りは走る、そんなことより夜は絶対に一人で出歩くなよ」

ちょっと前までださい眼鏡かけて遅くまでストーカーしてたんだけど。

「……わかった」

しばらく無言で歩いた、聞きにくかったからだ、いざとなると怖くもあるし。

しつこいから、^{ほど}絆されたとか言われたらと思つと勇気がいる。

「……あのね、いつからだっただの？」

「何が？」

「いつから、その、好きになつてくれたの？」

「ああ、最初からだよ」

ほっ？ 幻聴？

「最初に告つたとき？」

いや、それは変よね。

「最初に見たときからだよ」

うそ？ ええ〜！

大沢クンが赤い。

なんですと〜、最初に見たとき……まさか一目惚れされてたの？

「すみません、意味がわかりませんが」

「何がだよ」

「まさか一目惚れされたの？」

「……うん、それに近いな」

マジ？ マジかよ、信じられない。

……つか、この1ヶ月半の苦労はどこに。

からかわれてたり？

そんな顔じゃないね。テレテレに見えるよ。

……そうか、大量殺人の所為か。

……なにが乙女の本能だよ、私が鈍いだけじゃん。

……有りうる、目を見てたらもっと早くわかってたのかも、くく。

……そうだよ、ドキドキし過ぎて目が見れなかったんだよね。

「あゝ、私のどこが良かったの？」

「全部」

全部って、嬉しいけど、嬉しいんだけどさ、わからないよ。

「……具体的に？」

「桜……付き合ってもしつこいところは変わらないな」

「！」

ちよく、桜って、すごいメガトンパンチきたよ。

大沢クンの口から聞くと自分の名前に聞こえないわ。

名前を呼ばれた以外は無視しよつと。

「具体的ねえ……ぱつとみ顔が好みだろ、特に笑顔。

見てたらオス猫みたいだなと思ったし、あと……エッチぽい身体もだし、やっぱり全部」

うわく、聞いたよ、聞いたよ。

ほん、と発熱した気がする、顔が好みだつて、ウソみたい、すごく嬉しい。

……でもなんか変なのもまじってるよ。

エッチぽい身体ってなに？

オス猫って何？

むむ、身体のこととは聞きにくいな……。

エッチなのが体型でわかるの？

「オス猫って何？」

「桜って猫好き？」

質問を質問で返すなよ。

「飼ったことはないけど、好きだよ」

「そか、オス猫の意味はまた今度な」

「ええ〜？」

「もう着いただろ」

いつの間にか叔母さんちはもうすぐそこだ。時間が経つのはなんて早いのだ。

「じゃあ明日な」

「うん、明日ね」

姿が見えなくなるまで見送った。

ばたばたと帰り、走るように部屋に入った。

どう考えても顔がにやけてしまうから、叔母さんに呆れられそう
で逃げたの。

鏡で顔を見てもよくわからない、笑顔がいい。わくん、ウソみた
い。

嬉しいけどわからない、せいぜい十人並み程度にしか見えないし。

好きだと言われてキスされたのよね!?

だめだ、にやける。

別れたばかりなのに会いたい、声も聞きたい。

あゝ、付き合うことになったのに携番すら聞いてないじゃない…
…アホだ。

ほんとに舞い上がってるわ。

興奮してなかなか寝れなかったけど、この日の夢はしっかりとキス
の反芻に成功しましたよ。キスのことばかり考えてたからかな。

前彼

翌日の学校、昼に涼ちゃんにこっそりお付き合いの報告をしたの。
恥ずかしいからキスの件は報告してない、もちろん大量殺人のこ
とも言えないわ。

放課後、不自然じゃないようにゆっくり教室を出る。

つもりなんだけど、なんか足が速くなる、気持ちはゆっくりなの
に。

ゆっくり歩く大沢クン、追いついた。

「お待たせしました」

「おす」

空手の押忍の挨拶なんだろうけど、オス猫のことを思い出した。
聞くことがいっぱいあるのに時間は少ない。

「ねね、昨日の続き、オス猫って何？」

「ん〜、今度な」

「昨日も今度って言ったよ」

「そうだったけ」

「……」

「……」

言う気がないみたいね。

「ねね、大沢くん携帯貸して、登録していいよね？」

「そうだな、頼むよ」

なるほど、イメージ通りだ。渡されたのは、防水で色は黒の携帯。
ストラップも付けてないのね。

うふふ、ぽちっとな、完了つと。

「桜、GPSのソフト入れてるか？ 万一の為だけど」

「入れてない」

「嫌じゃないなら入れて登録しといて」

「それっていつでも場所わかるようにだよね？」

「うん」

「私からもわかるの？」

「そりゃ一回許可すればいいだけだからできるけど、する意味ないぞ、拉致られるほど弱くない」

…やはり気になる年上美人、聞いたら怒るだろうか？

「……あるよ、浮気とかさ」

「……桜も登録するならいいよ」

「大沢クン、年上美人とデートしてた？」

「なにそれ？」

「屋上行ったとき、ゆずちゃんから見せられたの、前の晩、年上美人と会ってたんでしょ」

「……あの人は前の女、偶然駅で会ったから話したんだ」

「……」

年上美人が前彼……そうだよね、経験ないわけがないわ。

「桜？」

「うん？」

「着いたぞ」

「携帯、返し忘れてた、GPSソフトも全部したよ」

「ありがとう」

「えと、どんな、人なの」

「以前はヤンキーぽいケバイ女だった、それなりに落ち着いてたよ」

「……私と全然タイプが違うね」

「……恋愛感情はなかったから」

「はあ？」

「……好きでもないのに付き合ったりしたんだ？」

「なんかいらつく。」

「……利用してた、犯人探しに必要なだったんだ」

「犯人探し……利用……殺人が関わるのね、でも利用ってやだな。」

「……」

「……」

「あの、利用は酷いでしょ」

「そうだな、わかってる」

「……」

「帰るよ、またな」

哀しそうな顔をさせてしまった。

「えと、ごめん」

「いや、事実だから」

帰っていく大沢クンにかかる言葉が出てこないの。

やってしまった、なぜあんな風に言ってしまったのだろう。

利用してたと苦い顔で言っただのに、それでも無性に言いたくなつたの。

ベッドに寝転がりながら考える。

……。

……。

わかったことは、私の醜さだけだわ。

考えるまでもなくわかったのは嫉妬。

過去に嫉妬して。

大沢くんなら何人女がいても不思議じゃないのに、バカもいいところ。

でも気づいたからって止まるものでもない。

それから、利用が不安だった。

大沢くんが他人を利用することも嫌な気持ちになったし。

私に利用価値なんかあるわけなのに、自分がされたような気持ちになっちゃった。

……違う、利用されたっていい、用が無くなって……捨てられることが怖いんだわ。

やっと付き合えたのに、楽しくない、醜い気持ちばかり。

後悔ではだめだ、会って謝る。

携帯に掛けても予想通り不在なの。

ちやうど走ってる時間だもんね、そう思い玄関の外で待つことにしたわ。

11時10分。ジョギング速度から急加速。

大沢クンのランニングはダッシュとジョギングの交互だ、それに気づいてちよつと真似したことがあるけど、ウルトラハードだったわ。

「何してんだ、こんな時間にあぶね〜ぞ」

猛スピードから急ブレーキの大沢クンの開口一番。

「こんばんわ、あぶなくないよ、変な人来たらすぐ玄関入るもん」

「……それで、どうした？」

「うん、話足りないし、会いたくなつたの」

「歩きながらでもいいか？ もう汗だくなんだ」

ほんとだ、頭まで汗で濡れている、それがまたいろっばいこと。

年上キラー、なんとなく頭に浮かぶ。

「うん」

歩きだした大沢クン、大量殺人予定の男と並び、しばらくは無言で夜道を歩いた。

「さっきはごめん」

「いや、あれはずっと後悔してたんだ」

「もっと悪いよ。あれは私の八つ当たりみたいなもので、嫉妬とかいろいろなの、ごめんなさい」

「だから、謝るなって、それよりあんまり近寄るなよ」

「なんでよ?」

「汗臭いから」

そういうこと気にするのね。

「……ねえ、大量って何人?」

「8人」

「……」

思ってたより多い、8人も殺したら未成年でも罪重いだろっな……。いなくなる、そう言ってたもんな、どうするんでしょう。

「着いたけどどうする? 中入るか?」

「へ?」

いつのまにか大沢クンのマンション前だ、中入るかって、ぼん、と顔が赤くなつた気がする。

「期待させて悪いけど、エッチなことにはならないと思つぞ」

「ちよ、期待つて……」

いや、……まあ、その、ゼロじゃなかったけどさ。

怖さ97%、期待3%くらいだよ、多分……。

つか何も準備してないし……今日は無理だよ。

「どうする？ オレは冷えるからとりあえず入るけど、ここで待ってるか？ 着替えたら送るよ」

そんな会話のうちにもう部屋の前に着いちゃったし。

萌えドラ

「エロいことしないんだよね？」

「したいけど難しいんだ、うるさい奴らがいるから」

「え、人がいるの？」

「いや、猫だよ」

ええ〜。

「うそ、見た〜い」

すっごく意外、猫がいるんだ、だから猫好きが聞かれたのね。

「……まあ会えばわかるよ、ちょっと覚悟いるぞ」

猫に会うのに覚悟？

聞こうと思っても大沢くんは部屋に入っていく。

生まれて始めて入る好きな男の部屋。

なんてゆっくり感激に浸る余裕はなかったわ。

「にゃ〜、にゃお〜ん」

わっ、でかい。2匹もいる。

私の足に、ぐるぐるこつ〜ん。

ぐるぐる言いながらすりすりして、こつ〜ん、はほとんど頭突きなんです、しかも2匹が同時にしてくるの。

茶色のトラ猫と、白黒のブチ猫、懐こくてちょ〜かわいい。

ジーンズで良かった、なんか時間と共に激しくなるネコアタック。

猫ってこんなに人懐こい生き物だったのね。つか、しゃがんで触ろうとしたら、私に登るのかよ、あっというまに背中に登られたわ。

「イタタッ」

Tシャツにサマーセーターだと痛いので、爪が痛いよ。

「プッチ、おいで、桜立ったほうがいい、リクまで乗るぞ、もう爪伸びてるか」

立ち上がったなら、背中の中にいた茶トラを取り上げてくれて、そのまま胸に抱いている。

う、猫になりたい。この茶のトラ縞がプッチね。

「こいつらは2匹ともオスで特に甘えんぼなんだ、めしやるから待

っててくれ、食べば少しは落ち着くから」

2匹ともオス、つうことはあれだ、私はこの子達に似てるということですかい？ このごろごろごつごつくんズに。

は！ ころころごつごつくん、そのものって意味か？

うん、心当たりありまくりんぐ。告った頃なんて大沢クンしか見えてなかったし。

猫ちゃん達は乾いたごはんの音にすごい速度で反応して、準備中の大沢クンの足にころころごつごつくん。

プツチにリクか、すごい甘え方だし。

イメージが全然違う、大沢クンの意外な一面というか、これが素なのかもしれない。

エコバツクよりギャップ萌えですよ。

猫王子って感じ、見てると萌える。

これが黒龍と呼ばれる男の正体よ！？

写真取りたい、怒るかな？

萌えよドラゴン。略して萌えドラ。心の叫びでなぜ略すのかわ分でも不明ね。

さつきからテンションが普通じゃないでし。

萌えドラ、ちょっと似合うかもしれない。

今度から心の中では萌えドラと呼んでやろうかな？。

猫好きなイケメンか、鬼みたいに強くて、弱いものにはとことんやさしいのよね。

情報量がすごくて私のメモリーはパンク寸前だよ、消化する時間が欲しくなってきたわ。

猫ちゃん達はドライフードをカリカリと食べていて、萌えドラ様は猫用の水を入れ替えてる。

ここがキッチンで奥に部屋がある、キッチンは6畳くらい、テーブルは小さいけど2人なら食べられそう。

ほんとに自炊してる、意外にキッチン用品が揃ってるわ。

お風呂はあの半透明の扉かな、あ、てことはトイレが別だ。

トイレはこの細いドアぽい、洗濯機に乾燥機まである、猫のトイレも、多分男の1人暮らしにしては綺麗なほうだと思う。

「月見里、軽くシャワー浴びてくるから部屋のほうで猫の相手しててくれる？」

「はい」

う、シャワーですか……。

「行ってくる……から部屋入ってて」

「……」

「……早くいけよ、そこで見てたいのか？」

ジャージの下を穿いたままの萌えドラ、上は既に裸だ！

「うわ、はい」

……ちよつと見ちゃった、想像以上のスーパー細マッチョ。

大きな木製の引き戸を開けて未知のゾーンへ。もたもたしていると、後ろから押されて閉められた。

ああ、そうか、脱衣所まであるわけないよね。今頃わかった……。

「すぐ出るから大人しくしてて」

何、その子供に言うみたいな台詞。

緊張して固まっちゃったんだよ。頭が動かないだけなのよ。

わゝ、でかいベッド！

8畳くらいの部屋にはでかいベッドとPCデスクしかないの。

猫は既に2匹ともベッドの上だよ。

萌えドラのベッド、来いと言わんばかりのニャンコース。

うっ、緊張する、いや、元々しっぱなしなんだけどさ。

写真はないのかな？ 楽しみにしてたのに本棚すらないよ。

そうだ、ベッドの下チエックだ、これは初めて彼氏の部屋にきた彼女のすることでしょう？

……そもそもベッド下にスペースがない。

なんとなくがっくし。

ベッドの端に座ると、とたんにうにゃうにゃと寄ってくるニャンコース。

ほんとかわいいにゃん。

触り心地がいいし、すぐ気持ちよみそっにする。

ちよちよ……2匹は手に余るよ。両手で別々に触らないといけなの？

これが萌えドラ様のいつも寝てるベッド。

身体が大きいからこの大きさなのかな？

普通に考えるとそうなんだけど、やる気に溢れているようにも見えるし。

何人の女が来たのあるのでしょうか？

また胸がチクチクとする。

倒れるように寝そべってみた。

萌えドラの匂い、枕に顔を埋めてみる。

クンクン！

うわっ、くらくらする。濃密な萌えドラの匂いがしますよ。

……ええ、いいですよ、エッチで。どうせエッチな身体と言われますし。

いけませんか、処女ですが好きな男の匂いにかなり興奮しちゃいます。

わ〜ん……だって興奮しちゃうんだもん。

……これはですね、多分、萌えドラがエロモン過多なんだと思うの。

この部屋、このベッド、特にこの枕。エロモン臭がぶんぶんするのよ。

でもほんとはパニック、なんですかこの急展開は。

1時間前はお風呂でぐじぐじ悩んでいたのがウソのような気がします。

まさか萌えドラの部屋でこうして枕の匂いを嗅いでいるなど予想もしてませんでしたよ。

ふっ、まじで迫られたらどうすればいいのでしょうか。

昨日からのお付き合い、まだデートすらしていない、そもそも何の準備もしてないし。

ん？ ニャンコースがモミモミしてくる？

私のジーンズをマッサージのようにモミモミ。

よくわからないけど2匹とも嬉しそうにしてる、くすぐりたい。これはマッサージの芸？

ガラ！

ウソ、男のシャワーってこんなに早いの？

有りえない、しかも上半身は裸にバスタオル架けてるだけじゃないのよ。

うおー、しかも私は萌えドラ匂い枕を胸に抱きしめたまま、なんてことだ……。

これじゃまたエッチとか言われちゃうよ。

「……何してんの？」

「……見なかったことに」

枕を元に戻してと。

「猫2匹にモミモミされながらよくそういつ気になれるな」

「……うるさい」

枕を投げつけました。

平然と枕をキャッチして返される……私の物じゃないのですけど。

「真っ赤になってそう言つとオレまで興奮するぞ、誘ってるっ…」

「誘ってません」

「どっしりもって言うなら猫追い出すけど…」

「……追い出さなくていいです、上になにか着てください、お願いします」

萌えドラはPCの電源を入れて、小さい音で音楽をかけた、英語のHIPHOPだ。

「まだ暑いんだ」

そっち見れないじゃんか。顔だけでドキドキしていっぱいになるのに……。

いや、さっきからちよこちよこ見えてましたよ。

ええ、いろっばいスーパー細マッチョ振りでした、しかも水も滴るなんとやらですし。

それが隣に座りましたよ、どうすればいいのでしょうか？

絶対わざとだろ。

萌えドラなら有りうる、さっきの口振りは意地悪でさっ気を感じましたよ。このまま押し倒されたらどうしよう。

「桜、送るよ」

……被害妄想でした。

「……」

いや、聞かなくてはいけない。

「8人のこと聞きたい」

「帰りながらでいいだろ？」

「ちゃんと聞きたいから」

「そうだな……じゃあ最初から話すよ」

「うん、お願い」

「オレは親の記憶はないんだ、チビのときに2人とも事故で死んでるから」

「……」

そういう予想はしてたけど。

「ちやうちやう、記憶にないから、悲しいとかそういうのもないんだ」

「……うん」

「それで父方の爺さん婆さんと姉ちゃんの4人で暮らしてたんだけど……3年前に姉ちゃんが殺されたんだ」

「……」

「殺ったのは、元暴走族の8人、最期には輪姦だけが目的になって走りすらしてなかったから、輪姦族ってとこ」

「……」

……やっぱり悲惨な話なのね。

「姉ちゃんの場合は軽い打撲と頭部の挫傷だけ、輪姦は未遂、相手の髪の毛も皮膚もなんにもでなかった。」

つまりこれからって時に逃げようとして、殴られて頭を打ったんだと思う。

……検死の結果は即死じゃなかった、すぐ通報があれば助かったらしい。

こいつらを探す為になんでもしたんだ、族のこと調べるには族だと思って、こき使って調べた。暴走族をつぶしたのは邪魔だったからだ。

香織も……夕方話した女もこいつらの被害者なんだ……男性恐怖症だったのに無理に聞き出した、酷いことしたよ」

「……そうなんだ」

まともな言葉がなにも浮かばない、何を言っても陳腐になりそう

で言えない。

「オレな、ガキの頃はイジメられっこだったんだ、友達がいなかったよ。友達がいなかったよ。」

「親はいない、服は姉ちゃんのお下がりで、見た目もまるきり女の子だったらしいし、名前までそれっばいだよ、もうイジメ要素満点だよな。」

「……うん。」

「オレが殺るしかないんだ、ごめんな。」

「……謝らないで。」

「……なんでこんな名前付けるんだかな、会えるものなら文句言いたいよ、姉ちゃんは秋生まれの秋穂だぜ、安易だよ。」

「綺麗な名前だよ、似合ってる。」

「綺麗とか言うな、似合ってる。」

「ナツキって呼んでいい?。」

「イヤだよ。」

「ええ〜! ずるいよ。」

「……桜、ほんとに変な女だな」

「ひどっ、何それ」

「こづいっ話聞いてイヤにならないもんか？」

「ならない、想像もしてたし、止められそうもないって思ったただけだよ」

お泊り

「……ナツキは嫌だから、ナツだけにして」

「……うん……ナツ、ナツが大好き」

「……桜、それは反則だろ」

「なんで？」

キスされた、私とナツの間に挟まれたプッチの抗議付きのキス。

キスは昨日のお昼よりさらに激しくて、どんどん激しくなっていて、一瞬目を開けたらリクと逃げ出したプッチにはっちり見られてたわ。

激しい舌に攻められまくり、だめ、気持ち良くてとろんとしちゃう、キスってこんななのね。

何時の間にか肌に直に感じるナツの手、背中を撫でる手にぞくぞくとする。

あれ？ 足まで触られてるよ。

こら、リク、飼い主と同調するな。

もしかやこれは芸なの？

くすぐりたい、無視できません。

ちよ、待てこら、嘘つき。エロくならないって言ったのに。

どこを触ってるの、寝る前だったんだから着古したゆるめのスポーツブラだよ。

恥ずかしいのよ。手が前にきた、ホックなんかない、探すな！

いつのまにか耳にキスされている、それがまた気持ちよくて流されそう。

はふ、じゃなくて、だめでしょ、これじゃニャンコースともエッチしてるみたい。

そういうブラじゃないって気付いたな、手が入ってきた……。

「……ナツ、ストップストップ」

「……まじ?」

「まじです、猫ちゃんがじ〜と見てたり一緒になって触ってくるよ。じ〜と見てるプツチなんてお座りして真剣に観察してるみたいだよ。」

「……ごめん、忘れてた」

「……エッチ」

「そうだけど、今は桜が誘ったんだぞ、ベッドの上で好きとか、普通そうなるよ」

「……あゝそういうものなのね、ごめん」

「ダメ、できれば止めたくない」

うっ……。

好きな男に見詰められて拒否できる女はどのくらい居るのかな？

キスの所為もある、でも問題はこの色気たっぷりの目なのよ。

でも、でも、準備が……。

あう……ダメだ、拒否できない。

「……ナツ……コンドームある？」

これだけは譲れない、久美子さんから厳しく言われている。

「うん」

即答だ、いつも用意してあるの？

それはいやだな……。

「常備してるの?」

「……昨日買ったんだよ」

ちよつと赤くなつたナツ、かわいい、どつちが反則なのよ。

「エッチ」

予想外にエッチなのね。クールぶりに騙されてたわ。

「エッチで悪いか? いやならしないよ」

赤い顔でいうナツはほんとにかわいく見える。

ここまでテレ屋さんだとは、すぐ赤くなるのね。

「ナツ、かなりのテレ屋さんだね」

「……ガキの頃からかわれすぎたんだよ」

「かわいいよ」

「……桜、かわいいはやめてくれ」

拗ねるように横を向いて猫を触りはじめたナツ。

かわいいは言っちゃダメみたい、更に赤くなつたナツの頬に触れ

た。

「ごめん、悪くない……初めてだからやさしくしてね」

「……うん、努力する」

そういうと、ナツは嬉しそうにニャンコースをキッチンに追い出している。

そんな姿までかわいく見えてきたけど、それは「痛いことが待っているわけだ」。

電気を消した、明かりはPCモニターのわずかな光だけになる。

「泊まりのメールしとくね」

t o ・久美子さん。

件名・お泊りします。

『なりゆきでお泊りとなりました、ちゃんと避妊するから心配しないでね、朝帰りします』

「メールだけで大丈夫なのか？」

「うん、ナツ、あっちむいてて」

「うん？」

見せられるような下着じゃないのよ、下なんてデカパンなんだからね…………。

「こっち見ないでね…………自分で脱ぐから」

「うん」

ナツの背を見て「ごそごそと脱ぎ、ベッドに潜りこんだ、やる気に溢れた大きなベッド。

「ナツ、この部屋に来た女は何人いるの？」

こんなときにもやはり気になる。

「妬いてるのか？」

私の髪を触るナツ。

「ちよっとね…………正直に教えて」

「女…………桜で二人目だ」

胸がざわざわする。

「…………どんな女？」

「この合鍵持ってて、62歳の婆ちゃんだ」

あいかぎ！ …… 62歳のお婆ちゃんて。

この男は〜。

じ〜と人の顔見て嬉しそうにしてやがる。

「……ひどっ、いじわる」

くそ〜。

「正直に言ったただけだぞ」

「緊張してドキドキも止まらないのに、酷いよ」

「ごめん、かわいかったからついな」

軽くキスされた。そっか、この部屋では初めてなのね。

「ね、エッチな身体ってどついう意味？ あとオス猫も気になる」

「オレが抱きたくなる身体だよ、もう限界だから黙ってくれ」

またも激しいキス。

なんだ、私がエッチだって言ってるのかと思ってたよ。

抱きたくなる……胸はBなんだけど、なぜでしょう。

長くて激しいキス、これだけでもとろんとしてきちゃう。

私、変じゃないだろうか？

抱きしめられあちこちキスされる。キスが耳にくる、聞こえる息遣いでナツの興奮がわかる、嬉しい。

やさしい触りかた、なんだかうまい気がする。

うう、経験値高そう……。

しつこく気になる。

全部終われば、こんなチクチクもなくなったりするのかな？

ナツの手が熱い。

自分で触るのと全然違う、自分の手より気持ちいいってなぜ？

好きな人だからこうなの？

背中をなぞる指が気持ちいい、どうしよう、気持ち良すぎる。

こんな触り方をしたらくすぐったいだけだと思っのに、どこを触られても気持ちがいい、お腹や脇腹、腰まで指が這う。

「桜、綺麗だ」

嬉しい殺し文句を言いながら、胸に触れる手。良かった、胸は心

配だったの。

巨乳好きだったらこうは言わないよね？

赤ちゃんみたいだと思ったのは最初だけ、そんな余裕はすぐになくなってくる。

じょじょに下腹部がづづくように熱を帯びる。

我慢してもほんとに声まで出ちゃいそう、もうかなり濡れてる気がする、恥ずかしすぎるよ。

一番敏感なところを触られると電気が走り抜ける、信じられない、なぜこんなに感じちゃうの？

「桜、我慢するなよ」

……バレバレ。いやです、バレバレでも我慢する。

「……イヤダ」

耳から聞こえた声は自分の声じゃないみたい、かすれてうわずっているような声しか出てこない。

声は我慢できても身体が動いてしまう。

みんなの話とまったく違う、感じてる振りをしてあげてるとか言うのに。

エッチな身体って、そういう意味もあったのかも……。

もうダメ、身体に力が入らない。

「桜」

「ナツ……」

……。

……。

ヒーリング

なんていうか。

とにかく痛かった。

想像以上でした。

痛い、と声に出たあと、今日はここまでにするねなんて言われたの。

嫌だと言ってナツを離さなかった、何度も抜くと言うナツ。

初めての痛みをめぐってケンカになりかけるカップルは他にも居るでしょうか？

拒否してようやく最期までしたの、この男冷静すぎる、乙女の夢を……。

「泣くほど痛いくせに、強情だよな」

横に寝転がり、あきれた口調で言いながら髪を触ってる。

「痛みが取れるか試していい？」

そう言われて、隣に寝転がったナツの左手がまた私の下腹部へ伸ばされる。

「ダメ、痛いから」

触られる前からビクツと反応する、痛くて触られなくなかったの。

「わかってる、じっとしてて、そういうんじゃないから」

一番敏感なところのちょっと上に置かれた手。

動かすわけでもなく置いてあるだけの手はすごく熱くて変な感じ、ナツ、熱があるんじゃない？

聞きたくなかったけど真剣な顔に何も言えなくて、でも意味もわからず隣同士のまま寝転がっているだけ。

何でしょう？ 手を置いてるだけで何も起こるわけがないのに。

意味がわかったのは15分くらい後。

「こんなもんだな、もう痛くないと思うよ」

「は？」

「こつこつ痛みも取れるんだな、試してみるもんだ」

独り言みたいにつぶやくナツ、ちょっとだけ動いたけど。

あれ？ ほんとに全く痛くない。

ええ〜！ なにこれ？

「何をしたの？」

「痛みを取っただけ、オレの左手そういうの得意なんだ、右手はいまいち不器用なんだけど」

……いや、これは得意とか器用とかいう問題じゃないですよ。

「どじいじいど？」

「……オレの目には痛みは黒く見えるんだ、そこに触れば痛みは取れる。」

呼吸法をいろいろやってたら何時の間にかそうだった、気功みたいなものだろ」

「……」

気功ってあの離れたところから手をかざすあれだよな？

インチキだと思ってましたけど。

「これ、バイトにもなるんだ、道場のおっさん達、古傷多いし。」

「気味悪がる人もいるけど、桜も気味悪いか？」

「そんなことないけど、びっくりしたよ」

やさしく抱きしめられた。

「そっぴやこれ見てホモ扱いしてたな」

「ああ、しましたね……なるなる、これをおじさん達にしてたのね……。」

「ごめん……えと、便利だね」

「自分の怪我にはできないし、あんまり便利じゃないよ」

「そうなんだ」

「何を言えばいいのかわからない、呼吸でこんなことできるようになるもの？」

「どこまでびっくり人間なの。」

「ブラックオーラといい、この男には常識が通じないよ。」

「……もうなんでもいい、この温もりはウソじゃない。」

生まれて初めて好きな男と一緒に眠る、これはすごく心地いい。

抱き枕としてはごっごっしてるし、かわいくて温かくて重いニヤンコースも居るし。

間抜けな寝顔晒さないようにとか心配もあるけど、とにかく嬉しいの。

しっかり抱きしめられて夢心地。

最初は寝れそうにないなって思ったけど、暗がりですツの寝顔見てたらほんわかとしてきていつの間にか眠ってたわ。

く、携帯の目覚ましに起される。

だるい……。

身体が重い、腕を伸ばして時計を止めた。

ああ、ナツの匂いだ、枕に埋めていた頭すら重い、けだるくて起きたくないわ。

……ナツ、寝てても綺麗な顔ね。

複雑で言いようのない感情が沸きあがる、かわいいけど、ちょっと憎たらしいし、見てるだけで恥ずかしい気がする。

ニヤンコース、プッチが2人の間で布団の中にいる、あったかい

というより熱いくらい。リクは布団の上だな、重いよ。

触れてもナツは起きないの、低血圧？

ちょっと憎らしい昨夜の態度、余裕しゃくしゃくで悔しかったな。

寝不足の所為もあるかもだけど、このたるさは何でしょう。

時計は6時半を過ぎてる、やばい、起きたくないけど起きなきゃ。

着替えてコンタクト入れて、バタバタ準備してからナツを揺すって起す。声だけだと起きないんだもん。

「ナツ、ナツ」

「……うん？」

「帰るね、ナツも起きて、時間やばくなるよ」

「……うん、おはよう、送ってく」

不意に軽いキスされる、おはようのキスとか……嬉しいけどさ、照れちゃいますよ。

「……ナツが間に合わなくなるよ」

「大丈夫、近いからバイクでいいや」

バイク持ってたの？　つか、免許あるの？

「免許持ってるの？」

「ないよ、バイクだって多分盗難車だ」

ないのか、しかも多分盗難車ってなに？

「……１人で帰る」

「心配すんな、もう一年以上乗ってるぞ」

「いやです、学校でね」

「……真面目だな」

「じゃあね」

呼吸

ナツ〜side〜

今までと違う学校からの帰り道、照れ臭いことをしつこく聞かれて参った。

次の日も同じだ、浮気の心配をされ、聞かれたくない香織のことまで話すことになった。

ウソが嫌いなオレは聞かれれば言いたくないことも答える。

香織のことも正直に話し、かなり機嫌を損ねた。

しょうがない、利用したのは事実だ。

そうかと思えば夜に待っていて謝られたり、振り回されっぱなしだ。

部屋に入るかと聞くと、エロいことしないかと念を押され、入ると無防備に人を誘惑する。

送ろうと思っても話が尽きない。一緒にいるだけで嬉しいけど拷問みたいな時間。

我慢してるオレにベッドの上で好きだと言う。

そこで限界がきた、うるさい猫が2匹もいる部屋でそういう雰囲気になるとは思っていなかったのに、あっさりなったオレは重症だ。

初めてばいなと思ってて、そのうちまともなホテルでとか考えてたんだけど。

我慢というのは身体に悪い、なんだかんだと焦らす桜にとつとつ黙れとまで言ってしまった。

夢中だったのが冷静になれたのは、声とあまりに痛そうな顔を見たからだ。

やばいと思い、抜くねというと怒る、普通は安心するところだと思っただ。

強情で結局最期までしてしまった。痛い顔は苦手だ、逆に興奮する面もあるけど苦手比率が圧倒的に高い。

いきにくいから余計痛かったと思う。

泣くほど痛いのに強情にも限度があるだろ。

それはともかく、健康な桜に左手の説明をする機会は多くない。

桜の横に寝転がり、下腹部に手を持っていこうとしただけで文句を言われる、そんなに痛いのに我慢するなよ。

目を瞑り桜の下腹部に置いた左手に意識を集中する。

こんな姿勢でするのは初めてだ、うまくできるだろうか？

精神をへソの下、仙道でいう丹田を意識して複式呼吸をゆっくりと大きくする。

空手にも呼吸を整え身体を戦い向きにする息吹という呼吸法があるけど、これは全く違う。

鼻だけで大きくゆっくりとする呼吸法だ。

左手が熱を持ち、桜に伝わるのがわかる。

このとき、熱だけではない何かが出ているのはわかるけど、その何かはオレにもわからない。

測定する機器はあるかな？

10分も立った頃、見てみるとほとんど取れてる、あと5分くらいやっておこう。

よし、黒いもやも完璧に消えた、オレの特技、気功もどきの癒し技だ。

もどきというのは気功と違い触れずにはできないからだ。

この技は自分でもよくわからない。

多分だけど、血尿が出る度に疲れを取ろうと呼吸法の研究をしてきたからだと思う。

普通は血尿というとなんかの病気だと思うだろ、出るときかなり痛いし、最初に出たのはまだ小学生だったから変な病気かと焦ったな。

健康な人に血尿が出る場合は筋肉の疲労が限界を超えた時だ、筋肉痛を超えた状態。

そうになると身体の回復を待たなくては運動をしてはならない。

そんなとき呼吸法を研究したんだ。

結果から言えば少し治癒力が向上した、それから呼吸に真面目に取り組むようになったんだ。

寝るときは正腹式が向いている、息を吸うときに腹を膨らますやり方だ、寝る前は必ずしてる。

次に逆腹式、息を吸うときに腹をへこませる方、こっちは立っている時に向いている。何時でもできるから慣れると無意識にできる。

一般には腹式呼吸により横隔膜を鍛えると、肺活量が増え血流量も上がり健康になる。

癒し技に気付いたきっかけは中3になったばかりの時だ。

道場の先輩に頼まれてマッサージをしてたら、黒く見える箇所があり触れると痛みが取れると言われたんだ。

すぐに古傷の痛みが多い伊達さんが寄ってきて、試しにやると慢性的な痛みが取れたと言われた。

面白くて、癒しに向いてる呼吸法を研究してみたりもした。

すぐにバイトになった、道場生にはいろいろいるから金額は相手まかせだけど月に15万以上になった。

中3からは落ち着きだしたのはこの技のお陰だ、人のいい先輩に頼み部屋を借りることもできた。

それまではアホの溜まり場や女の部屋に転がり込むしかなかったから、風呂無しでも自分の部屋があるのは大きかった。

それに暴力しか能がなかったオレに人に喜んで貰えることがあったことが嬉しかった。

そうはいつでも支部の道場生だけだ、見ただけで痛い場所までわ

かると気味が悪いと言われることもあったからだ。

気功のことはTVで見ただけだから詳しく知らないけど、能力的には劣っていると思う。

オレの場合触らないとできないからだ。

桜が気味悪がらなくてほっとしたけど、ベッドに入って待ってたら、寝るだけの方が緊張してきた。

最近はめつたにないけど、事件直後は夢を見て暴れたことが頻繁にあったからだ。

一度は寝惚けたまま暴れて足の指にヒビが入った痛みで起きたことまであった。

桜を抱き締めるだけで嬉しくて、寝れる気がしない、ずっとこんなふうにしたかったんだ。

……それなのにほとんど記憶がない、すぐに寝てしまったみたいだ。

「……ナツ」

さっきから聞こえてはいるんだ、頭が半分寝惚けてるようで起きれない。

「ナツ、起きて」

「帰るね、ナツも起きて、時間やばくなるよ」

帰るの言葉ではつきりと目覚めた。

「……うん、おはよう、送ってく」

何時でも真面目な女だ、できればサボらせて一緒にごろごろして
いたい。

提案したら怒るだろうな。

……キスだけで我慢しておくか。

それにしても久々によく眠れた、桜は睡眠導入剤みたいだ。
なぜだろう、匂いかな？

桜はほのかに甘い匂いがして抱いてるだけで気持ちがいい。やば
い、朝からエロい気分になりそうだ。

「……ナツが間に合わなくなるよ」

「大丈夫、近いからバイクでいいや」

「免許持ってるの？」

「あるわけないだろ、バイクだって多分盗難車だよ」

欲しいけどまだ15歳だぞ、バイクだってオレが盗んだ訳じゃないけど、暴走族が使ってたものだからな。

1人で帰ると言う桜を見送って準備を始める。

まずは猫の御飯からだ、じゃないとうるさくて何もできないんだぜ。

鍵と黒ちゃん

桜 side

「ただいま」

叔母さんちに帰り挨拶をしたけど、叔父さんの顔を見た時は気ま
ずかったよ。

「……ああ、おかえり」

沢中清輝^{せいぎ}さん、40歳、穏やかでいい人なんだけど久美子叔母さ
んが居ないときは過保護気味になるわ。プチお父さんみたいな感じ
かな。

常識的というか普通なの、これで久美子さんと仲のいい夫婦なの
がよくわからないの。

大急ぎで準備をしていたら、部屋に叔母さんが入ってきたの。

「おかえり、うまくいったみたいね」

「うん」

髪を梳かしながらピースサインをしておく。

今時とかつつこまないでね、時間もなし、顔を見られると気恥

ずかしいからついしっちゃったの。

「あんだ痛くないの？」

久美子叔母さんはきょとんとしてる。

そうか、普通はしばらく痛いらしいもんね、バタバタ走り回る私が不思議なんだろうな。

「うん、大丈夫よ」

「……バレエでマクが破れてたのかしら？」

久美子さん、具体的な想像ありがとう、マクは健在でしたわ。

そこは説明してる時間がない、既にギリギリだわ。

「急ぐからごめん、行って来ま〜す」

私が着いたときにはナツはもう教室にいた。

挨拶すらできないのに、顔も合わさないうって何よ。

いつもと何も変わらない朝……。

教室での距離感、相変わらずキラキラして見えるナツ。

朝まで一緒にいたのに。

女になったといつても何も変わらない。

世界が違って見えたり……するわけないよね、マク一枚でさ。

これじゃ痛みがあった方が良かったかもしれないわ。

付き合いがたったの3日目だからしょうがないのかな、しかも秘密だし。

現実感が薄い、ここ数日の展開に頭が付いていってないわ。

……8人もそう。

お姉さんの復讐。

一番親しい人、久美子叔母さんがなにかで殺されたら、どれだけ悲しいだろうか？

お父さんもお母さんもない状態で中一の頃、ほぼ天涯孤独、どういう感じなのかな。

小学や中学には保護施設から通っている生徒もいたけど、仲良くなつた子はいなかったし。

一度だけシカトされた子と仲良くしたくらいだけど、突然転校し

ていったな。

あの子は親に虐待されてたと後で聞いたけど。

その施設にしても問題のある家庭の子供がほとんどだったから、天涯孤独の知り合いがないの。

始めから天涯孤独なのと、途中からなるのとはまた違うだろうし、結局何もわからないんだよね。

輪姦グループ。

される立場になる想像にぞつとする。

1人にレイプされるだけでも恐ろしいのに、8人……怖すぎる。

そういう行為をする精神構造も怖い、同じ人間と思えないわ。

動物以下。

つまりそうなのだろう、するほうは人間扱いではないんだ。

女は人形扱い？ 相手に心があると思っていない？

相手を虐めることが楽しい？ 乱暴にしたいだけ？

……やめよう、異常な男達の心なんてわからないよ、気持ち悪いだけだ。

ナツのことだけでいい、そんな人間と思えない8人を殺すナツ、どうなってしまうだろう。

人生の先を全く考えてない、だからあんなに無茶なんだよね。

大好きな人と初エッチしたばかりなのに、こんな暗いこと考えるなんて不毛だわ。

ニャンコース、可愛かったな。……ナツも。

ナツに送って貰い叔母さんちに着いた、久しぶりにバレエ教室の手伝いをした後、質問攻めにあう。

もちろん殺人のことは話せない。久美子さんは鋭いから難しい、小さい頃のイジメで人間不信だと説明しておくしかないし。

涼ちゃんに話をしておいてよかった、いい予行練習になってるわ。

癒しの特技の話になると唾然としてた、叔母さんを驚かせるなんて滅多にないよ。

部屋に入りノートPCの電源を入れた、新聞の過去記事のサイトに行って調べるの。

およそ3年前の新聞、わりとすぐ見つかったわ。

近所で起きた事件なのに全く記憶にないわ。

私が中1の秋くらい、記憶にないはずだ。イジメもあって自分のことで精一杯だった頃だもの。

美人女子高生殺人、小さな写真もあった。小さくて汚い写真でもわかる、ほんとに美人だわ。

わかりにくいけど、目元がナツと似ているかもしれない。

詳しいことは記事だけだとなにもわからない、逮捕の続報もない。

翌日はしっかり準備をしてナツの部屋に泊まりにきたわ。

ナツに呼ばれたの、道場が休みの日は来てくれると嬉しいと言われちゃった。

ベッドの上でリクと遊んでいたの。

ほんとに人懐こい、猫はもっと自由というか奔放な生き物だと思っっていたわ。

「桜」

振り向いたら鍵を渡されたの。

これは部屋のスペアキーだ！

「ありがとう」

うふふ、ようやく彼女って実感が少しする、嬉しいわ。

「使うことあんまないだろうけど渡しとくな」

ナツはそういうとリクを抱いて隣で横になる。

「……ところでね、なんで私がオス猫なの？」

「こいつら見ても聞くのか？ 性格がちょっと似てるだろ」

ぐっ、くやしいけど、ちょっとはね……。

つか、どこを指して言ってるのでしょうか？ それの問題よ。

「普通は犬みたいって言うのかな、オレ猫しか知らないから」

くう、犬ね……。

結論だけ言うと、女度を上げるしかないわ。

性格のこと言われたのはわかるけど嬉しくないし、実際やばいのよ。

そうなの、ナツは家事ができるのに、私は叔母さん任せで何もできないの。

さっきの夕飯もナツに作って貰ってオムライスを食べたけど、普

通においしかったし。

作るところ見てただけど、余計なことを言っただけで恥をかいたわ。

オムライスのライスはケチャップ味だと思ってたらほぼ塩と胡椒でケチャップは色付けみたいなもの、なんて言われたし。

その時やばいと思ったのよね。

朝、余裕を持って起きた、ナツは今日も寝ている。

起きないように抜け出して、ささっと身支度する。

朝だけでもと思い、キッチンに行く。

うわー、ニャンコースがうるさーい。

量がよくわからないけど、見た目このくらいだったかな。

すごい勢いで食べるのよね。

そういえば2匹ともちよいデブなんだ、そこもかわいいけどこれでいいのかな？

トーストと目玉焼きを用意してナツを起したわ。

今日もおはようのキスをされちゃった。

ナツが起きたらまたごはんをクレクレしてるよ、お〜いニャンコ
ーズw

寝ぼけ顔のナツにニャンコーズは御飯終わりと報告をすると、プ
ツチにジロツと睨まれた気がしたわ。

帰ろうとしたら、なんちゃって新婚さん気分をぶち壊す代物が出
てきたの。

恐ろしいものを渡されましたよ。

スタンガン！

その発展型でマイオトロンという物、なんか黒光りしてますよ。

スタンガンだと実際は気絶はしないので護身武器にならないけど、
これは身体が麻痺をして自由がなくなる、そう説明されました、怖
い……。

1人になるときは必ず持つていてと言われる、使い方を説明され、
オレで試せ、なんて平気で言うの。

バチバチつと電気がすごい、痛そう……。

使ったこともないといざというとき使えないぞなんて言われても。

そんな怖いことできるか！

ちゃんを使うからと約束して、それだけは断固拒否したわ。

昨日までナツとお付き合いしてる実感が湧かなかったのに、合鍵
とこの黒ちゃん、実感湧くまくりよ。

闇の壁

付き合い始めて2週間、1人ですごす時間、いつしよにすごす時間、付き合い前と変わらず、ナツのことばかり考えてる。

ほんとに成績が落ちそうだわ。

中間もあまり良くなかったけど、期末はもっと落ちるかも。

付き合いは順調なのよ。

重いと思われたくなくて最初は遠慮もあつたけど、ナツのほづが一緒に居たがるから遠慮もなくなったし。

2人で過ごしていると甘いだけで嬉しいの。

今では週に3日泊まってる。半同棲みたいな生活ね。

細かい問題はいろいろあるけどすごく楽しいわ。

恋せよ乙女主義な叔母さんは私の変わりようにあきれながらも反対はしない。家事も教えてもらっているわ。

中身でいうとナツはほんとに若者ぽさが無い、少し変わった育ち方をしているから無理もないのかな。

ナツの口振りで祖父の教育がかなり厳しい感じがしたわ。

ゲームもしない、TVもほとんど見ないし、漫画もあまり読まない。

カラオケは行ったこともないと言っし。

趣味といえるようなのはバイクとパソコンの自作くらい、そのあたりは雑誌がいくつもある。

謝るようなことでもないのに、おっさんでごめんなと言っの。

おっさんとか話さないからなあ、とこぼしていたわ。

小さい頃からおじさんしか友達がいなかったみたい。

先週の日曜日に初デートもした。四鷹駅近くの公園を散歩してホテルのプールで泳いできたの。

高校生のデートばくないでしょ、ナツにも苦手なものがあったのよね。

人ごみがダメで都心や人気スポットに行きたくないと言っのよ。

それにお金はフリカンでいいと思うのだけど、ナツは全部出すタイプで受け取りもしないわ。

付き合う前は頭は悪いのかと思ってたけど、そうではない。

ナツは部屋で勉強をすることがないの。

授業は聞いているだけで中間テストは赤点はなかったそうで、勉強すればかなりいいと思う、といっても嫌いな古文や現国はやばかったらしいわ。

チームワークがいるスポーツは無駄だと思ってるみたいでやる気がゼロ、ルールを覚える気がないの。

よつするに頭は興味あることにだけ使うという我がままっぷりね、だから猫がどうとか変なことばかり知ってるのよ。

それと空手、聞いたら理論的で難しいの。

格闘技は根性論みたいなもの出来てると思っていたけど、バカでは強くない、賢いだけでもダメとか難しいことを言うわ。

6月の末、梅雨の最中だ。

初めての恋に夢中だったけど、まずいこともわかっている、まずまずナツに溺れていく私と冷静にナツを見ている私がいる。

またも変なことに気付いた、ナツは痛い表現をしない、ケンカして強く抓っても顔色一つ変わらないし声もださないの。

武道家はそういうものだよと言う、痛みも長年我慢していると顔に出なくなるみたい。

普段は呼吸すらわからないの、何時ならわかるのかって？

「想像に……」。

そういえば最近知らない男子に告白されることが増えたの。

自慢じゃなくて、マク一枚で変わることもあるのかな、とふっと思ったの。

ナツと付き合う前は1人に告白されただけだったけど、最近は何人にされたわ。自分では変化はないと思うのに。

涼ちゃんにも色気が出てきたとか言われるしね、でもナツの隣で釣り合いが取れるとは間違っても思えないわ。

嬉しいこともあったわ、2年の男子にお昼に呼びだされて、断ってくるから先に食べてと告げたときのナツの表情、かわいいの。

自分じゃ気付いてないかもだけど、妬いてたように見えたわ。

夜のランニングは雨の日以外は必ず行くけど、帰って来たときの雰囲気はイライラしてる。

ナツのランニングは犯人の見張りを兼ねているの。

ランニングが見張り兼用だと知ったのは10日前、イライラを誤魔化すようにすぐシャワーに行くから聞いたのよ。

ランニングには必ず持って行く拳の形の凶器。意味することはもうソレしかない。

ナツは毎日その気で出かけているんだと思うと私は逆を願う、帰ってくるとナツはイライラしてて私はほっとする。

泊まらない日も必ず帰る頃にメールをする癖がついた、気になつて寝れないから。

お姉さんの復讐、それにはナツは頭を使えない。

彼等のことだと怒りばかりでそれどころじゃないの。

ナツが冷静に考えることができない部分。

最近をよく考えるの。

ナツの気持ちは痛いほどわかる。

それでも復讐はやめて欲しい。

ずるい考えかもしれない、初めて聞いた時は無理もないと思った

んだから。

ナツには言えない、言えば終わりになるかもしれない。

やめさせる方法なんていくら考えても浮かばない。

ナツがいなくなったら、そう考えるだけで怖い。

何年掛かれば癒せるだろう、ナツくらい好きになれて信用できる男に会うことはないと思う。

最初は見せなかった、哀しそうな表情をたまに見るようになった。

ナツは愛情に飢えていたのだろう、私だって、ううん、誰だって少しはそうだけど考えてみたら比べようがない。

親の記憶がない、お婆さんやお姉さんがどうだったのかわからないけど、母親とは違うと思うの。

ナツは自分の身の回りのことは何でも独りで出来る、小さい頃からそういう教育だったのだと思う、それすら痛々しく感じる。

同級生の男の子が子供に見えてくる、でもナツはちゃんと子供してた時期があったのかと思うと可哀そうに思える。

最初はここまで期待していなかったのに、どんどん欲張りになっていく。

ただの初恋にたくない、思い出になるなんて嫌、できるならナツとずっといたい。

私は枷になれないだろうか？

私の為に生きようと思わせるなんて無理だろうか？

どうすれば信用してもらえるだろうか？

どうすれば愛されるだろうか？

10日くらい前からナツにナイショで料理の勉強をはじめたの。

お弁当作り、ナツの枷を一つ作ろうと思う。

公認のカップルになる、いなくなった時の心配なんていらないわ。

ナツが嫌がることはわかってる、それがわずかでも枷になって欲しいの。

ナツのやさしさでは公認となると少し事件を起し難しくなると思う。

枷を少しずつ増やしていきたい、オス猫が好きなナツ、でも私だつて必要ならメス猫になるよ。

「ナツ、外で食べよう」

昼休みになると同時に、大きなお弁当と小さなお弁当の2つを持って不意打ちしたわ。

予想通り、突然のことに言葉が見つからないナツ。

「行く」

その手を取り廊下に進んでいく。

クラス中の視線を浴び、ざわざわというか、わくともきやくともつかない女子の声まで聞えてくる。

ナツなら当然こうなる、ただでさえクラス内での色恋沙汰はおもしろいイベントだ。

ナツだと1日で学校中の女子の噂になってもおかしくない。

ナツとの付き合いは涼ちゃん以外には誰にも喋っていない。涼ちゃんには今日だけごめんねと謝っておいたの。

「どこで食べようか？ こっそり屋上に行く？ 外がいい？ 食堂でもいいね」

勢いで階段まで連れて来たけれど、ナツは当然むすつとしてる。

「……………」

「いろいろ考えたの」

「……」

「ほら、約束したけど考えてみたら私のことだけでしょ」

「……そうだけど」

「とにかくごめん、あれはなし、だって無理なんだもん」

「……なにが無理なんだよ？」

「ナツと話せないのがイヤ、1人のところ見てるだけなのもイヤ、女の子がナツを見るときの妄想入ってるまなざしがイヤ、我慢の限界がきちゃったの」

「……はあ」

あきらめがついたみたい。既成事実が大事よね、一度見られたらいまさらだもん。

「ナツはやおいってわかる？」

「一応」

「じゃあ、やおい漫画で受けにされてる自分を想像してみて、受けわかるかな？」

「いや……まあわかりたくないが、それしかないか」

「そゆこと、バッチリされてるんだよ」

「……まじか」

「マジマジ、同人とかに書いてるみたい、ナツが攻められているとこが、売り物になるんだよ」

「……なるほど、そりゃ悲しいな」

「妄想されるのはしょうがないけどね、あのこはナツがどれだけ強いかわからないしさ」

「屋上いくか」

「うん」

「このくらい言っておけば信用したでしょう。」

「いや、ウソではないの、やおいのこととはほんとよ。」

でも妄想は当たり前というか、誰でもする、それを言い訳に使っただけね。

屋上はちょっと暑いけど、日陰は丁度いい、風があるからいい感じ。

小さな日陰で並んでお弁当を食べる、んん、嬉しい、こつこつ

の憧れてたんだよね。

「これで公認になったし、多少の不便はあきらめてね」

考えてるみたい。

「……いつでも話掛けてくるの？ それ普通に対応してると、オレは無口キャラ維持しにくいぞ、やめてくれ」

「じゃあお昼と、一緒に帰るときだけでいい」

「……うん」

「明日から涼ちゃんも一緒にいい？」

「……もう好きにして」

「ありがとう、ねね、おいしい？」

「うん、うまいよ」

うくん、ほんとだろうか？ 浮かない顔で言われてもな、って当たり前か。

放課後、いままでは門外から一緒に帰っていたのが今日は教室からだ。嬉しい。

ナツは無言だったけど、私は少しひやかされながら挨拶だけする。これはちょっと気分がいい、イケメンと付き合う特権よね。

内心の気苦労は誰にも想像つかないでしょうけど、今だけでもいい気分浸っていたい。

オス猫とナツは言うけれど、私は元々計算高い、ナツが信用できるから素直になれるだけ。

ナツはウソが嫌い、正直でいたいと思ってるみたい。

お爺さんの教育というか口癖だったみたいで、ウソを付かないの信用して安心して溺れてしまう。浮気しても隠さない気さえする。

信用はできる、でも信用はされていない。

身体をいくら重ねても、いくら同じ時間を過ごしても何か壁を感じる。

育ち方が違うから当たり前なのかもしれない。

でも感じるのはナツの間。

闇の壁。どう聞けばいいのか、聞いていいのかもわからない。

狂気

ナツく sideく

小学生のときに偶然メス猫が演技を知ったんだ。

当時9歳だったかな、わずか1歳未満のメス猫はオレなんかよりはるかにずるがしこい生き物だった。

メスって怖いなという目で回りの女の子を観察すると、似たような行動をするというのがわかってきた。

オレはどんどん女の子まで苦手になっていった。

オス猫みたいだと言うと桜は怒るけど、事実だからどうしようもない。

仕草や顔にそういう素直さが表れてるように見えたんだ。

ストーカーしてましたなんて普通は自分から言わないで隠すだろ。

時には口喧嘩くらいはするけど、予想に反してオレ達は続いている。

桜に対しては後ろめたい感情が多い、自分からは言えないことがまだいくつもある。

バレたら謝って終わりにしようと思う。自分から言うべきだとわかっていても言えない。

まだ11時だというのに、桜はもう寝息をたててる。

ようやくセックスに慣れてきて、遠慮なく攻めた所為だろう。

寝顔を眺めていると、ただかわいいなと思うんだ。

でも、攻めているときのオレは凶暴な気分になる、切な^{せつ}そうな表情を見ると壊したくなる。

凶暴さを性欲に変えて桜で発散しているだけかもしれない。

桜と付き合うようになってから、嫌な奴にまで甘くなった。

このままでいいんだろうか？

別れたほうがいいと思う、情けないことにそれは想像でもつらい。

1人じゃ寂しいから都合良く利用してるだけなんじゃないのか、
そうも思う。

オレの好きはどの程度なんだろう、恋愛なんてしたことがないかわからないんだ。

する予定などなかったのに。

桜がいると甘くなる。

いなくなったらどうなる？

どうすればいいんだろうか……。

セックスの最中だけはオレのものみたいな気になれる。

終われば何もなかったように消えてしまう。

どこからこんな明るさが出るのだろう、好きな笑顔を見るのが最近はずらひ。

何を思い違いしていたんだろう、オレが明るくなれる訳じゃないのじ。

違う世界で生きていると何時も思い知らされる。

同じものを見ても、思うこと感じることに差がありすぎる。

11時半、そっとベッドを抜けだしランニングに出かけた。

ランニングコースは8箇所、例の輪姦族の家を見張るように周っている。

今日もなにも変化はない、こんな時間だし、ほとんどの奴が家にいた。

ポケットの中のメリケンサックを触る、正直に言って試してみないといけない。

8人揃う時、やはりまだ運だろうか。

4〜5人は確実にいける、残り3〜4人はバラバラに逃げるかもしれない、そうになると1〜2人は残る。

脳内シミュレーションでは運が味方をしないと成功率は70%程度だ。

出口が一箇所しかない屋内、酒を飲んできるとか、そういう状況が欲しい。

投げる刃物ではバラバラに逃げる複数は止めにくい。

確実に殺すにはハンドガンがいる、そうになると練習場所、大量の銃弾、入手方法、あまりに非現実的だ。

あいつらが生きてるだけでイライラする。

ランニングの帰り道、橋の下でコンクリートの巨大な壁を殴る、右ストレート、全力に近い。

殴った直後の脳を直撃するようなすさまじい痛み。

耐え切れずにそのままコンクリートの地面に寝転がる。

脳の痺れが取れるまで寝ていよう。

ここが姉の殺されていた位置だ。

3年前は汚かった、暴走族お決まりのアホなラクガキ、放置車に放置バイク、ゴミだらけで……。

こんな場所に動けない身体で放置されて……意識はあつたらうか？

脳裏に浮かぶ姉の姿は小さい頃のままだ、最近は高校生だった姉が思い浮かばない。

もう3年近いのにまだできないんだ、情けない……。

……帰るか。

痛みはズキズキする程度に治まった、今は握力20？以下だろう、ほぼ親指と小指の分だけだ。

この痛みがオレなりの正気を保つコツだ。

怒りに対抗する為にはどうしても何かいる。

頭を冷やすための痛み……違う……なぜかと問われても答えなん

かない。

限界を超える稽古もそうだ。

……答えはただそうしたくなる、それだけ。

空手家の拳は元々いつも怪我してるようなもんだ。程々に硬いものを殴り続け少しづつ頑丈にしていく作業だ。

もちろんこれは違う、わかっけていてもやりたくなる、やってしま
う、右拳が正常なのはこの3年ほとんどない。

ヒビの箇所は3箇所、時にはオレは正常かと疑うこともある。

正常なはずだ、右拳が壊れていても日常に問題はない。

最近は強くなりすぎてる、道場でもこれでいいくらいだ。

奴らの相手をするのはメリケンサックだ、思い切り撃ち抜ける。

問題はない、足を折ったりしない限り正常だ。

早くチャンスが欲しい。

カンナビス

桜 side

先に教室を出たナツの後を歩き涼ちゃんと一緒に屋上に向う。

嫌がる涼ちゃんを説き伏せた、ナツは人前でイチャイチャするよ
うなキャラじゃないし。

今まで涼ちゃんと2人で食べていたのにナツと食べるからと1人
にしたくない。

今日も天気はいい、日陰で3人並んで食べ始めた。

「ほんとにお邪魔じゃないん？」

「別に」

意外にも私より早く答えたのはナツだ。

「ね」

「へへ、ほんと喋るんだね」

珍獣扱い？

「……ここでだけな」

「なんでここでだけ？」

私を挟んで行きかう会話、妙な感じ。

「女はうるさいのが多いだろ」

「ほお、イケメンは言うことが違うね」

「……そんなんじゃないよ、ほら、お前等と一緒にいたあれ、ああいうのが苦手なんだ」

ゆずちゃんはあれですか。

「ああ、あれね、そりゃわかる、あの子が似たものグループ行ってほっとしたよ」

涼ちゃんまであれ扱い……そっか私が悪いのね。

考えてみると近くで他の人と普通に会話するナツは初めて見るわ。

「ここで桜助けたんだろ、何で桜のピンチがわかったのさ？」

「……武藤のバカに見張らせといたんだ」

……うへへ……、蛇男が、感謝するところなんだろうけどキモ。

「桜、愛されてるねえ」

「……」

「ちよ、涼ちゃん」

私、赤くなってるかな？ 2人に挟まれてるからどちらからも丸見えじゃん。

「あたしも誰かに助けられたいな」

「藤川だと助けるほうが似合うぞ」

「ぬお、大沢けっこう言うなあ、ちと傷ついたぞ」

「うそつけ」

なんかこの2人、話が合うんじゃない？

……ちよこつと妬けるけど、3人もいいな。

嫌な空気になったらどうしようって心配して損したわ。

お昼は晴れや曇りの日は屋上で過ごし、雨の日は学食で過ごすことが当たり前になってきた日々。

ある日のこと、お弁当を食べていたらナツが箸を落したの。

同時に伸びた手、ナツの右手に一瞬乗った私の左手。

「っ」

小さいけど痛そうな声。

そこまで私が重いとか……48?弱あるけどさ……。

痛そうな声?

強く抓っても声も出さないナツの痛そうな声、そうだ、初めて聞いたわ。

「……手、見せて」

右手を差し出された、じっくり観察する、空手家らしいごつい拳。

あちこち触る、ナツの表情が変わる箇所、ちょっと強く触る、ピクピクと表情が動くの。

こんな顔みたこともない。指の付け根、3箇所もピクピクする場所があるわ。

「左手もちょうだい」

大人しく出される、右手とはちよつと違う、左手は正常だわ。

「ナツがそんな顔するって、相当痛いんだよね?」

「……まあな」

「これ折れてるの？……鍛えてるからこんな拳なんだと思ってた、そうじゃないのね」

「……」

……これは異常だ。

「思い切り握って」

自分の左腕を出して言った。

「……右は女くらいの力しか出ないよ」

「拳使うとこなんて見たことないし、最初からずっとこの状態だったんだね、いつからなの？」

「ちょっと壁相手に暴れただけだよ……ときどき暴れなくなるんだ」

壁……。

「正直に言っつて、いつからなの」

「……3年ずっとだよ、ストレス解消ってとこ」

「……そうなんだ」

なんてこと……こんな痛そうなのが平気な顔で3年もできるものなの？

それはどれほどの心の痛みなの？

全然わかってなかった、いつのまにか涙が溢れてくる。

ナツの苦しみ、私はバカだ、浮かれていた、ちょっとづつとかそんな場合じゃない、どうすればいいの？

わからない、助けたいのに……わけがわからなくなる。

子供みたいに泣き出していた、ナツのバカ、信用してよ、こんなに愛してるのに、信用もされない、愛してるとも言ってくれない。

ナツがおろおろしてる、いい気味だ、バカ。

「バカ！」

思い切り睨んでやった。

「ごめん……」

「ナツのこと、わかったつもりでも、いつも甘かったとおもっちゃう」

涼ちゃんが呆然と見ていた、ごめんね。はたからみたら痴話ゲンカだね。

今週の木曜金曜は期末テストがある、集中しないといけないのに……午後の授業はまたも頭に入らなかった。

今日からの期末テストの週はナツの部屋には行かないと私から宣言していたの。

帰りは一緒だけど、言葉が見つからない、ナツも何も言わない。

自虐的行為、言動のあちこちに時々感じてはいたわ。

怪我をして血が出てても放置してたり、なにより筋肉痛が酷すぎる、鍛えてるといふより自分を虐めてるみたいなトレーニング。

私の前と独りでいるときは違うと思うし、独りの時を想像するところが怖かった。

この前の夜泊まった時、寝てる私の髪や頬を触られていた、半分開くらい目は覚めて夢うつつという気分でされるがままになっていたの。

やさしく触れる手、最期にそっとキスされた、それから後ろを向いて考え込んで、溜息をついて部屋を出て行った。

途中からためき寝入りのままずっと見てた、好かれてる自信が少し湧いたけど、それ以上に苦しみを感じて何も言えなかったの。

自分自身にも不安がある、もう3ヶ月、ナツのことばかりで勉強をあまりしていないから。

初日のテストは順調だった、少し不安だったけど難しい問題はなかった。

その夜、安堵感とともに唐突に自覚した、ナツの右手から逃げてたことを自覚したの。

3年間、自らの拳の骨を折り続ける行為。

小説で読んだけど、リストカット症候群に近いのかもしれない。

自傷行為。

あれはナツなりの自傷行為なんだろう。

風呂上りにネットで自傷行為について調べると、精神病の一種のような位置づけだ。

ナツの場合はどうなのだろう、人格障害とかそーいう感じはないと思うけど。

お姉さんの事件から始まる自傷行為、復讐ができないことのいら

だち、現実逃避の手段に近いのだろうか。

犯人がわからなかった期間、わかってからもだから……8人もいたからなのか。

期末試験2日目を控えた夜、わかっけていても自覚した今はじっとしてられない。

夜の12時、チャリを飛ばしてナツのマンションに着く。

何をしてるだろうかと思いつつ、インターホンを鳴らした。

返事がない、まだランニング中かな？

合鍵で部屋に入ると、この時間にしては大きな音で音楽が鳴ってる。

「ナツ？」

ニャンコースがごろごろとつ〜んとお出迎えしてくれる。

暗い部屋に行くとベッドの上で寝転がってるナツがいた。

PCモニターには音楽のソフトしか映っていない。

寝てはいないのね。

こんな暗い表情のナツは初めてみた。

「何してるの？」

「音楽聴いてる」

ゆっくりと返事が返ってくる、無表情というか、何だろう？

違和感がある、いつものナツじゃない、これは何？

部屋の匂いも違う、なんの匂いだろう？

電気を点けて、ナツの隣にいつて顔を見た。

目が違う、ちょっと充血してるの。

「ナツ、泣いてたの？」

「違うよ」

やはり変だ、泣いてたのなんて聞いたのに、違うならこんなあなたんとした返事はない。

「……ク、何かクスリしてるの？」

「大麻だよ」

悪びれもなく答えてくる。大麻……。

無言でゆっくり抱きつかれて押し倒された。

「いつからやってるの？」

「いつから、1年くらい」

1年！

私のお腹に顔を埋めてそっと抱きしめてくる。

どれだけ苦しいの？

涙が溢れてくる、何度も考えた、想像が難しかっただけ。

大麻、自傷行為、大量殺人。

私の手にはあまる、どうしたらいいの？

ナツの闇の深さ。

見てるのがつらい。

いつの間にかナツも泣いていた、声は殺して静かに泣いている。
大麻で普通じゃないからだろうけど、泣いてる処は初めてみる。
抱きしめた、ナツの手にも力が入る。

愛しさというのだろうか、好きな相手に同情が混じるような気持ち、愛情、憐憫、わからない。

ただそついう感情が溢れて来るの。

見てることも苦しいけど、自分から離れるなんてできない。

「ナツ」

「…ん？」

「まだ隠してることある？」

「ないよ。……独りじゃ寝れないくらい」

「ナツ、愛してるからね」

ギュッと抱きしめる。私は恋に酔ってるだけかもしれない、でも自然と溢れてくるこの感情は他に言いようがないの。

「桜」

「ちゃんと泣いたほうがいいよ」

「うん」

大麻の所為なのだろうか、妙に素直に肯く。

強いナツ、心まで強いと思っけてごめんね。

心まで強いはずがない、見せないようにしてただけだよ。

当たり前だよ、ナツになったつもりを想像しただけで泣けたもの。

「……私ね、小学の5年から卒業くらいまでね、かなり太ってたの」

少し落ち着いてきたナツの右手を触りながら話した。

ナツには言いたくなかった小さな秘密、口では言えても写真はお断りだけ。

「うん」

「ストレス太りっ……ほとんど過食症かな、お母さんがアルコール依存症で入院してて、ちよつと変になってたのね」

「うん」

「叔母さんのお陰で直ったの」

「　　そっか」

「だから少しはわかるし、何も言わない、でも側にいるから」

「　　うん」

顔は隠してるけど時おり抱きしめる手に力が入ったり震えるように動いたりする。

背中を擦ったりしながら、ナツを抱きしめてそのまま眠ることにした。

私の心は決まった。

やさしくて激しくてかわいいこの男とどこまででも行く、行き先が地獄でもいい。

久美子さん、ごめんね。

「ナツ、おはよう」

「……おはよう」

いつものように朝を迎え、いつものように叔母さんちに帰ったわ。

期末試験も終わり、いつもより早い時間にナツと帰る、余計なこ

とは言わないと決めていたの。

夕方に部屋に行くねと告げて叔母さん家に入った。

まだどうしたらいいかわからない、でもこれは自分へのリベンジでもあるの。

子供の時は逆をしていたけど今ならアルコール依存症の対処法はわかる。

やさしかったお母さんが壊れたのは半分は私の所為でもあるの。

独りにしない。怒らせない。空腹にさせない。

ほんのちよつと調べたらわかること、そんなことができなかった。

お父さんは家政婦さんを雇った、だから時間だけはあったのに、お母さんから逃げることしかできなかった。

同じ過ちだけはしない。

部屋で今後のことを考える。

ナツに安心感を上げたい。

とりあえずできること、大麻を徹底的に調べる。

ネットの情報は信用ならないという意見があるけど、私はマスコミのほうが信用ならない、マスコミの報道は右へ倣えで方向性があるでしょ。

ネットには方向性がない、スポンサーがないし国の意向に左右されない。

掲示板は問題外だし、一つのサイトの意見では信用ならないのは当たり前よね。

当然いろんな意見がありウソも多い、まず商業的なサイトは無視するわ。

次に公営もダメ、現行法律を優先した意見しかない、利権がからむから捏造も多いしね。

中3のときに課題で政治腐敗を調べたけど、ネットがないと大変だったもの。

複数のサイトにいき信用できそうな意見を取り入れていけばいいと思う。

大麻もそうみたい、私のイメージと全然違う。マスメディアの報道や公営サイトでは覚醒剤に近いイメージだ。

結論から言うと大麻はお酒以下の害ね。アルコール依存症と比べ

れば健康面での被害はないに等しいもの。

害が低いから日本以外の先進国では個人使用では懲役刑にならない、日本だけが例外で異常に重い。

アジアには日本より厳しい国もある、シンガポールが厳しいので有名だけど中身は独裁国家だからね。

シンガポールは選挙以外はクリーンで腐敗も少ない、お隣の独裁国とは比べようもないけど、個人の意見が法律になるから参考にならないの。

大麻は身体的な害はほとんどない、タールに発癌性があるけどタバコと同じくらい、でも同時に癌予防の効果もあつて実害がどの程度あるかは不明ね。

むしろ医療大麻として薬になる、タールを取らない摂取法なら癌を含め250種の病気に有効とある。でも研究の歴史は浅いわ。

苦痛を抑え食欲を上げ吐き気をとる、それが同時にできて万人に副作用が少ない薬はない、そんな意見もあつたわ。

治療法がない難病でも人間らしく楽に生きる方法があるのでどうしようもないわ。

他には覚醒剤やアルコール依存症の治療にも有効みたいよ。

問題は悪いことね、精神病になる可能性があるの。

その意味で大麻と似てるのがやはりお酒ね。

大麻はマイナス感情の時に吸うと精神病になりやすいという意見がある。

アルコールはマイナス感情の時に飲むと、よりアルコール依存症になりやすいという意見がある。

アルコール依存症は内臓やその他いろいろ悪いけど、さらに精神病を多く併発するの。

共通するのは、うつ病、パニック障害、統合失調症なんかで、精神的に逃げるものが欲しい時にきっかけになるのかもしれない。

ナツの場合も大麻をした時は暗かった、バッドトリップといわれる状態、可能性がある。

……全部わかってやってそうな気がする。

ナツなら有りうる、身体が使い物にならない物はしなそうだし。

覚醒剤に近いイメージを持ってたから少しは安心したけど、罪が重いのは変わらないし、精神病になって欲しくない。

問題はただやめるといつてもやめにくい点ね。

大麻は習慣性が低い、たばこや覚醒剤と違いすぐやめられるらし

い、それを一年もやっているのは心の問題なのだろうけど。

ナツは自傷行為といい、精神的にきつ過ぎる。

不眠、イライラ、うつ病までいなくてもかなり参ってる。

これで無気力ばくなってきたらうつ病でしょうね、要注意だわ。

ナツもお母さんも食欲に逃げた私も程度の差だけかもしれない。

……末期は見るだけでもつらかったお母さんのアルコール依存症、結果的にお母さんとはもしかすると一生会えない。

お母さんが退院したときに会ったのが最期になった、私を見ると後ずさりして泣き出したの、暴力を振るった記憶が蘇えるらしい。

お母さんにとってそれは耐え難い記憶みたいで、思い出すとまたお酒に逃げたくなる。

アルコール依存症はある意味生きている限り続く、治療してもお酒は一生飲めない、飲む〓ほぼ再発してしまうの。

わずかでも飲みたくなる状態はよくない、だからお父さんや私とは一緒に暮らさないほうがいい。

2回目の退院のとき、お父さんやお母さんの祖母はそう医師に説明された。

そうして離婚が成立し、お母さんは実家に帰って行った、当時は意味もわからずショックだったわ。

過食症になってた私は、様子を見に来た久美子叔母さんに引き取られ一緒に暮らすようになったの。

ハーブティーや健康茶、バレエでゆっくりダイエットさせられて

しばらくは一緒の部屋で寝てくれたわ、見張りの意味もあつたろうけど。

久美子叔母さんには逆らいたくない。そういう意味でもナツの闇の部分は絶対知られたくないわ。

ナツの部屋に持っていくものを準備して、もうちょっとで部屋を出ますとメールを送った。

「久美子さん、夏休みはほとんど泊まるね」

「あんた、ハマリすぎよ」

「大丈夫、それは自覚あるから」

「失恋することも大事だからいいけどね、でもまずは紹介しなさいよ」

失恋はしたくないよ。

「うん、もうちょっと待ってね」

「ふうん、会いたくないって?」

「ううん、話してないの、親兄弟が居ない人だから言いにくくてさ、夏休み中に話すからね」

「しょうがないわね」

「いつてきます」

玄関を出たところで電話を入れようとしたら叔母さん家から50?
先でナツが立っていた。

いつもの黒いジャージ姿のナツと並んで歩き始める。

「いつからいたの?」

「ちょっと前」

「ちょっとってどのくらい?」

「……1時間くらい」

「はあ?」

「呼んでくれればよかったのに」

「何で怒らないんだ?」

「大麻のこと？」

「うん、法に触れるもん嫌いだよ」

「昨日の話は覚えてるの？」

「……うん」

「記憶はちゃんとあるのね、何も言わないって言ったじゃん」

「聞いたけど、夢かと思った……じゃあアレも現実か……」

アレ？ アレ。

「泣いたこと？」

ナツが頭を抱えた、ププ、苦悶している模様です。

「……忘れてくれ」

「ナツはいいかつこしいだね、あんなの忘れられないよ」

「……」

「みつともないとか思ってるの？」

「そりゃ思っちゃうよ」

「嬉しかったよ」

「……」

「入る」

マンションに着いたのにナツが動かないから先導して部屋に入り、ニャンコーズの面倒を見てたの。

「……全部バレたら絶対終ると思ってたんだ」

「昨日ね、覚悟決まったの」

「……」

「ナツはどうしたいの？」

「オレは……」

「私はいろいろ考えたよ、ナツにはまだ言えないこともいろいろね」

「まだ言えないって」

「いろいろはいろいろだよ」

「……それ？ ……オレの台詞？」

「ふふ、とりあえず香り点けてもいい？」

「……うん」

ナツに説明しながら相談し、部屋の出窓にアロマポットを置くことに決めたとわ。

アロマポットに水をセットしてラベンダーとスペアミントとカモミールのエッセンシャルオイルを入れてスイッチをポンと。

3つともやや万能なタイプだけどイライラ解消、うつ病、不眠なんにも効く、アロマだと効果はわずかだけどね。

今はこれだけしかないの。

あとは注文したハーブティーが数日で届く、セントジョンスワートとカモミールのティーはイライラ、不眠、うつによく効くらしいの。

セントジョンスワートは中度までのうつ病の薬として使われるのだけど他の薬品の効果を消すこともあるから注意がいる。

「病院の薬は10年以上飲んでないよ、病院は嫌いなんだ」

「どれだけ嫌いなよ。」

「右手のそれ、指はちゃんと動くの?」

「握力がないだけだよ」

ナツの右手を触りながら痛い箇所をキスしていく。

「別れようと思わないのか？」

「思わないよ、ナツは別れたいの？」

「いや」

「ならいいじゃない」

「……ありがとう」

キスされた、やさしいキス。

「今日は道場休むよ、一緒にいたい」

「うん」

元気になってきたナツ。

もうセックスの時は振り回されっぱなし、気持ちよくてこちらからはほとんど何もできないの。

始めの頃は嫌だった体位もいつの間にかさせられてたり、声も抑えられなかったりしてるしね。

セックスというのは男女によって違うのだからけど、ナツとはもうコレでいいと思うようになってきたわ。

心地いい瞬間、その後のゆっくりとした心地いい時間、このまま時間が止まって欲しい。

でも言わなくてはいけない時がくる、言つとどうなるのか不安もある。

怒って別れることになるかもしれないし、それ以上の最悪も有り得るわ。タイミングがすごく大事ね。

翌日の土曜日はほとんど一緒に過ごした、隣町にショッピングに出掛けて、ナツは恥ずかしそうにしながらも初めて手を繋いで歩いたわ。

家具屋では私に選ばせてクローゼットを買い、PCデスクも買っていたの。

まだ何も言っていないのに、夏休み毎日泊まる予定がバレているのでしょうか？

外食して、レンタルショップ、ここまで離れないのは初めてのこと。

部屋で映画を見てる間も考えていた、ナツとの距離の縮める方法、見終わる頃には決心がついていたわ。

「ねね、さっきのクローゼットって私のだよね」

「うん、桜用にかわいいPCも作るよ」

「……ありがと、夏休みはずっといてもいいの？」

「……なるべくいて欲しいから買ったんだ」

イケメンのテレ顔はかわいすぎる、ついキスしちゃったわ。

「ナツ、大麻のことどのくらいわかってるの？」

「……身体に害はないよ」

俯きがちに答えてくる。

「責めてるんじゃないよ、聞いただけ」

「うん」

「今からしよ、2人でやってみようよ、私もしてみたいの」

「はあ？ ダメだよ」

「なんで？」

「なんでって……」

「私だってやってみたいよ、いけない？」

「そうじゃないけど……」

「じゃあ準備して、隠してるんでしょ」

渋るナツを説得して15分後には吸いはじめていた。

パイプから吸う煙はおいしいとはとても言えないもので、肺に入る煙の濃度に咽ながらも我慢して肺に留める。

手に入る情報にはなかったリアルな使用感、でも大丈夫だと思う、2人でなら明るくなるはずなの。

投稿動画ではみんな笑っていた、友人同士もカップルも楽しそうだった、それが全てだと思ってるわけじゃないけど。

でも医療大麻としての部分、そしてナツが自分でやめようと思ってくれるように、もう一点、共犯者になるためにも一度はしたほうがいいと決めたの。

大麻は悪い気分でやると精神病になるけど、いい気分であれば精神にいい点、うつ病の治療薬にもなるのよ。

冷静でいられたのは効きはじめるまでだったわ。

私は大麻の麻薬としての部分を失念していたことを思い知らされる。

「桜、大丈夫か？」

「ダメみたい」

どんと増していくナツの色気、きらきらしないですよ。

じよじよに大きく激しく聞こえる音楽は魅惑的で耐えられない。

激しくなっていく私の劣情、ナツの目をみたら限界になる。

「桜」

気付けば貪るようにナツにキスしていて、キスしたら更に激しく燃え上がる私が出た。

「大好き」

「オレも好きだ」

服を脱ぐのももどかしい、それがナツも同じなのが嬉しい。

嬉しいだけで2人とも笑いが零れる。ちょっとしたことで笑いが出る、これがあの映像と同じなのだとわかる。

思考は正常だし、理性がないわけじゃないの、ナツ以外ならこうはならないと思う。

でも今この手がふれるのはナツ、私達を止めるものは何もない。

こんな時にちゃんとゴムを付けようとするナツがすごいと思っ、

それすらもどかしいとも思う。

「ナツ、安全日だからそのままきて」

「……うん」

全てが敏感で形も位置もはっきりとわかる、でも速さはわからない、時間の感覚が正常じゃないの。

永遠にも感じる時間、抗いようのない快感に声は抑えようがなく、呼吸すら苦しくなり、最期には声も出なくなる。

意識がはじけるように飛び飛びになり、やがて深くどこまでも深く落ちていく。

いい匂いがしてくる、これはカレーの匂いだ。

私の眠りを覚めたのはキスではなくて王子様の手作りカレーの匂い。

色気もなにもあったものじゃない、だってお腹がぐうぐうと鳴るのよ。

がばつと起きて、ナツの大きなTシャツだけ着てキッチンに行く。

「おはよう」

起きたからそう挨拶したけど、今は夜中みたい。

「おはよ、カレーでいいならすぐだぞ?」

水を渡されながら聞かれる。

「うんうん」

わっ、水がおいしい。 のおいしい水がほんとおいしいわ。

時間は深夜の2時、てことは終わってわずかに寝て空腹で目が覚めたということね。

一分でカレーが出てくる、これがまたおいしい、こういう味だったのね。

複雑な味が全部わかるというか、説明はしにくいな、舌がすごく敏感なのよ。

大麻に食欲増進の効果があることは読んでいたけれど、実感するとすごいわ。

「わるい、先に寝るよ」

「ええ〜!」

抗議も虚しくさっさとベッドに入るナツ、酷いわ。

食べ終わるとその気持ちはわかった。

食欲を満たすと再び眠気に襲われるの、あれで我慢していたのだ

るっ。

でも私はこのまま寝るわけにはいかない、さっきは寝ちゃったけど。

睡魔と戦いながら髪を濡らさないようにしてシャワーを済ませる。

寝てるナツを抱きしめて、眠りをむさぼるように意識が落ちていく。

共犯者

翌朝、目覚めは快調としか言いようがない、昨日の激しさの余韻
すらないのにはびっくりする、不思議だけど身体が軽いのよ。

ベッドに飲み物を持ってきて、ナツの寝顔を眺める。

昨夜の記憶が蘇る、大麻の効果とはいえ驚いた。

散々鳴かされた、呼吸が続かなくなる程声が出て……セックスで
意識がなくなるなんて考えたこともなかったわ。

キスしたらいつもは寝起きが悪い癖にパツと起きるのね。

「おはよ
」

「おはよう、猫の御飯は終わってるからね」

「ありがとう」

キッチンに向うナツを見送り考え続ける。

一番距離感が縮まった気がする今が勝負かもしれない。

大麻の性に対する効果は予想外だったけど、ナツの感触は悪くない。

独りでしてたのと全然違って明るくて……ナツ、かなりエッチだったな、はつきりいって何回したのかもわからない。

それに昨日初めて声を聞いたの、ナツは普通のセックスでは声が出ないのよ。

声が止められない自分にテレながらも笑っていたし、かわいいのよね。

正直に言えば私だって大麻はいいと思う。

二人ですること、気分がいいときが前提だけど、あれだけ気持ちよくて害もないなら法律がおかしいと思うの。

でも大麻は止めなくてはいけない。法律が間違っていようが関係ない。

こんなことで捕まるなんて嫌だもの、ナツがやめられそうならやめる、その為に一緒にしたのだから。

ナツがシャワーから出て戻ってきた、飲み物を聞き、アイスコーヒーを淹れてきた。

「ありがとう」

ナツが自然と笑う、ずっとこの笑顔が欲しかった、おじさん達と自然に笑うナツを見て恋を自覚したのよね。

何気ないことで笑うナツをずっと求めていたの。

大丈夫、全部うまくいく、自信が湧いてくる。

「ナツ、話があるの」

「うん」

「これで共犯者だね」

「……そうだな」

「大麻は私に預からせて欲しいの、ナツがしたくなったら2人でしよう」

「……」

「いや？」

「桜、昨日みたいの始めてだったろ」

「うん」

「オレもだけど、ああいうのはもうなくても平気か？」

「やめるの？」

「うん、桜まで巻き込んだな……」

「ほんとにやめられるの？」

「これで全部、トイレにでも流してくれ」

小さなビニール袋を渡された、お茶の葉でいえば100?くらいの量だ。

「よかった、なんか拍子抜けしちゃう」

「昨日の桜見てたらやばいなって」

「はい？」

「死ぬほど気持ちいいんだろ、なんかやばそうだった」

……なんか思惑と違うんだけど、いいことなんだろうけどさ。

「ナツだってあんあん言ってたじゃんか！」

死ぬほどね、つか今死ぬほど恥ずかしいわよ。……死ぬって言ったような気もするし。

「あんあんてなんだ！ あ、くらいだろ」

「言ってたもん」

「……まあそれは半分冗談だ、桜が捕まるなんてのは嫌なんだ」

半分ですかい。

「こないだ吸つてたのも、久しぶりにしたんだよ、とことん落ち込みたいてって気持ちわかるか？」

「……わかんない」

「オレな、好きな女と付き合うのは初めてだし、何もわからなかった、好きで困るつつつか……」

またなに気なくかわいいこと言うわね。

「ナツはさ、将来のこと考えたこともないよね、でも私はそこまで考えるのよ、ナツと結婚したいとか、いつか子供が欲しいとかね」

「……桜」

「ナツが私に好きっていう何倍もナツが好きだよ、ナツが浮気したらって想像するとお母さんの気持ちが少しわかっちゃったし」

「……浮気なんかしないよ、でも将来は……」

嬉しい、でも言わなくてはいけない。

「浮気しないならあるかもよ……だって今のままじゃ復讐は無理だと思っ」

「……………なんで？」

「ナツは頭を使う気がないから」

「……………」

「何度か見かけても4人までなんでしょ、2年も見張ってて4人までならずっとそうだよ」

「……………」

「多分その4人は同じ4人じゃないの？」

「……………そう、だな」

「だよね、じゃあその4人が残り4人のうちの誰かと会ったの見たことある？」

「……………ない」

これでナツの思考は正常になっていくかもしれない、ここからが大事。

「うん、多分8人は分裂してるよね」

「……………オレ、バカだな」

「しょうがないよ、考えようもしないんだもん」

「……あきらめるって言いたいのか？」

「言わないよ、ほんというと思ってたけど、今は応援してるの」

「なんで？」

「ナツが壊れそうだから、復讐できないとずっと苦しむでしょ、でもナツが思ってるのとは違うの」

「なにが違うんだ？」

「ナツは復讐できたら後はどうでもいいんでしょ、私は生きてて欲しいし捕まらないで欲しいの」

「……」

「私はナツが思ってるような女じゃないの、ナツを失いたくないから何でも考えるよ、何でこんなこというかわかる？」

「……いや」

「今のままじゃそのうち自棄やほになるからよ、自棄になるか心が壊れるかどっちかよ」

だめだ、冷静に言えない。

「……」

「自棄になってもう何人でもいいからってやっちゃっつ。」

「……」

「……何か言っつよ」

「オレが恐くないか？」

オレは自分で自分が怖いよ、怒るとなにもかもわからなくなるんだ、自分すらコントロールできないガキなんだぞ」

「恐くないよ、ナツはやさしくて、正直で細かい嘘すら下手なの。」

ナツの全部が好き、だから、だからどうしても一緒に生きていたいの」

「人殺しなんて気持ち悪くないか？」

「……戦争にいつて帰ってきた主人に気持ち悪いつていう奥さんいないと思っつよ」

「……」

「あのね」

「……ちよつと待て、考えるから、時間をくれ」

「……ナツこそ嫌いにならない？」

「何で？ ならないよ」

「私、こんなことばかり考えるのよ」

「すごいなと思うよ、桜頭いいよな」

「いいわけじゃないの、考えてると止まらなくなるの、ナツのことばかり考えてて、病気みたいよ」

「ありがとう」

「……輪姦される気持ちは想像できなかったよ」

「するなよ」

「でも、される気持ちで武器があったらどうするかはわかったの」

「どうするんだ？」

「もし銃を持ってたら迷いなく撃てるわ、だからナツを応援できる、ただ捕まって欲しくないだけなの」

「そっか」

「計画的に完全犯罪まで考えて欲しいの、努力してもダメだったらあきらめがつくわ、その時は一緒に死んでもいい」

「……桜……ありがとう、でも巻き込む気はないよ」

「考える気になった？」

「…うん」

「よかった」

日曜日はそのまま出かけずに2人でごろごろしてた、ナツも夕方トレーニングに出かけただけだ。

その夜、予定より1日はやく生理がきた、痛みが強く出てくると無言で後ろから抱きつかれて左手でお腹を触られちゃったわ。

この左手は慣れない、場所の所為もあるけど。

「いつからわかってたの？」

下腹部に置かれた熱い左手、やっぱり不思議な感じ。

「昼からちよつと見えてたよ、生理でなるんだな、やりすぎたのかと思ってた」

やりすぎ！ そうね、覚えてないけど。

でも生理の痛みも見えるのね……始まる前から痛みはあるけど、そこまでわかれるのは微妙な気分だわ。

痛み止めは5分で終わった、どれくらい持つのかはわからないって。

ナツの半分は優しさでできています、残り半分は激しさでできています。

「ありがとう」

「こっちの台詞だよ、好きになっただのが桜でよかった」

かわいいこと言うんだから。

共犯者（後書き）

大麻はストーリーの構成上で一番適していたため使いましたが推奨しているわけではありません。罪が重く、害が少ない為ちようどよかったのです。

ジェットコースター

翌朝、帰る時に今日は学校を休むと言われたの、理由は後のお楽しみと教えてくれなかったわ。

久しぶりに涼ちゃんと2人でお昼を過ごしていっぱい追究されちゃった、言えないことが多すぎて困りまくりよ。

6時限目にナツのメールがきて、帰りは迎えに行くけどチャリで普通に帰ってくれ、とだけよ。

re なにそれ？

re バイクで付いて行く。

なるなる……それ会話もできないじゃん。

「帰り道、かなり距離を置いて銀色のバイクが付いてくる。盗難車という黒いバイクとは違う。」

体型はたしかにナツだ。

黒いジャケットにブルージーンズ、黒いヘルメットも部屋で見たのだし。

睨んでたら小さく手を振ってる、早く話しをしようとチャリの速度を上げたわ。

「なにこのバイク？」

叔母さん家の近くでようやく止まったナツに話しかける。

「先輩から借りてきた」

ナツはヘルメットの窓を開けて、カードみたいな物を渡してくる。

！ バイクの免許だ……むむ、今日が誕生日なのね、そういえば前に聞いた時にはぐらかされたままだったわ。

「着替えてどこか行かないか？」

校則は違反だけど、いまさらよね。

「16歳おめでとう、どこいくの？」

「ありがとう、田舎方向ならどこでもいいよ」

「海！」

「ああ、海はきついかもな、着いたら日が暮れるだろ、湖でもいくか？」

なるほどね。

「うん、着替えてくるね」

私もジーンズに着替え、恐る恐るバイクに跨ったわ。

「ゆっくりね」

「わかってるよ」

いろいろ注意事項を言われて、出発した。

バイクには初めて乗るけどいいね、こうして密着できるところもいいわ。

ヘルメットの中はちょっと熱い。私のは赤い色で新品の匂いがする。

これだって安い物じゃないよね、プレゼントどっしよっかな……
喜びそうなモノが思い当たらないわ。

意外にも安全運転で1時間ちょっと走りあきるの市のコンビニで
ちよつと休憩して出発。

「ジェットコースター好きだよな？」

「うん、好きだよ」

「よし、怖いときは怒鳴ってくれ」

恐ろしいことを言われたような。

バイクは走り出した。

ここからが田舎道の本番らしくて、安全運転は遥か彼方へと置き去りにされたようです。

ちよ、これ何？でてるのよ。

景色が速い、流れる景色が速すぎる。

わーカーブカーブ、こら、速度落せ。

ちよちよ、ほとんど倒れてますよ、地面が触れそうなくらいバイクは傾いているのよ。

カーブではしがみつくだけで動くなと言われたけど、怖い、怖いよ。

死ぬ！ 死んじゃう、もう死んだ。

カーブが終ると気を緩める間もなく。

何この加速、しがみついても落とされそう、ひえー。

ぎゃ〜、次のカーブが。

だんだん速くなってるような……ギブ、もうギブ。

わ〜と怒鳴ってからようやくやく速度がおちていく。

意地を張りすぎたわ……。

まあさっきまでと比べれば安全運転と言えるかな？

ジェットコースターの1000倍怖かったよ、第一コースターは命掛かってないでしょ、このスピードバカめ。

怒鳴らなかつたらどうなっていたのでしょうか。

山道を抜けて奥多摩湖が見えてきた、景観のいい橋の上で休憩する。

「おもしろかったろ」

「めっちゃ怖かったよ」

「遊園地がわりにサービスしたのに」

「あっそう」

「蕎麦でも食いにいくか？」

「うん」

ナツのお奨めの蕎麦屋さんはおいしかった、おいしいと評判の釜飯もあるけど何時でも並んでるから食べたことがないそうだ。

帰り道は違うルートで途中で山に向かいロープウェイで高い山の展望台に行った。

夕暮れの山の上は人がほとんどいなくて、堂々とされるキスも嬉しかったけど。

「考えてるから」

ほそつと言われた台詞のほうが好きだったわ。

ジェットコースター（後書き）

ご意見、感想、誤字、脱字 なんでもいいのでお願いします。

生きるために（前書き）

前半がほぼ終わりです、携帯小説のサイトにUPした際に後半はカットした部分が多いので、ここからは加筆、修正しながらのUPになります。

感想等お願いします。

生きるために

ナツ〜side〜

桜に騙まし討ちをされた、公認になっても一緒にすごしたいらしい。

相談されても反対しただろうからしょうがないけど、不安になる。

こっそり武藤を呼び出し、以前一緒に来た2人を呼び出してバイトを頼んだ、1日30分間、月10時間程度だ。

月1万でかじったクンがしてくれることになった。

内容は帰り道、桜に尾行があるかどうか探すことだ。

ちなみに武藤は割りと金持ちのぼんぼなんだ。せこいバイトなんかしない。

かじったクンは石倉とかいうらしいがどうでもいい、実際1日もすると忘れてしまった。携帯の登録も、かじった、だしな。

武藤にしても、なんか強そうな響きでいいなと思わなければ忘れていたと思う。

尾行があると思ってるわけじゃない。

オレは無茶だと思われがちだが慎重なタイプなんだ、なるべく石橋を叩いて渡ることになっている。

マジに尾行があつたのには驚いた、3年のヤンキー姉ちゃんを呼びつけて、かじったクンに送って貰った写メ見せて知ってるか聞いた。答えはノーだ。

写メを回させ休み時間に前回いた不良を全員屋上に呼び出した。

不良の世界に馴染みがない人は1年に呼ばれて上級生がくるのかなんて思うだろう。不良は力が全てだといつてもいい、つまり金まはは暴力だ。

知り合いにも回させて聞いた結果、つぶした暴走族の弟だとわかった。

いつも言ってるけど、桜に1人にならないよう念を押し、バレないうちにこっさり片付けた。

卑怯な奴等にはなんでもあり、それがオレのやり方だ、オレがイライラしてた所為もあるが、悲惨だったし詳細はやめておく。

まあ最期にはオレをやくざ予備軍だと匂わせておいた、アホは勝手に解釈し噂を広めてくれるだろう。

情報をくれた女とかじったクンに2万づつ払い、念のため尾行探しはずっと続けることにした。

そういえば屋上での金的クンだが、倍くらいに腫れて2日間寝れませんでしたと言っていた。

男にはなんでこんなに痛い急所があるのか、困ったもんだ。

桜に右手がバレた、泣き出すとは思もしなかった、参った。

自業自得だとわかってても落ち込んでしまう。

どう考えてもう無理なのに、試験週間だ、裁判の判決待ちの期間みたいでいやな時間だ。

大麻を取り出し久しぶりに吸ってみた、普通は楽しむ為にやるものだろ、オレの場合はそうじゃない。

もっと落ち込みたくなる、別に頭がおかしくなるとかそういう効果はない。

効いてきた。

ず〜んと気分がさらに沈んでいく。

身体まで冷えるような気分だ。

オレにやることがなければ。

今すぐ自殺したくなるかもな。

奴等は殺す。

最近はもう5、6人でもいいかなと思ってる。

どの時点で警察が8人の繋がりに気付くか。

8人のうち残った奴がいつ気付くか。

8人殺せるかはそういう運まかせだ。

そうなると逃げることもできない。

捕まるのは絶対に嫌だ。

刑務所の話も読んだ。

少刑でもさほど変わらない。

どっちもお断りだ。

警察にバレた時点で死ぬしかない。

それでいいぞ。

自殺は罪とかほざくバカども。

信じてもない宗教観に毒されやがって。

その神は言う。

復讐するは我にあり。

ふざけるな、自分でやるよ。

死も同じだ。

人間には誇りがある。

あるから人間だろう、なければ動物と変わらない。

その誇りを保てなくなるなら死ぬ、当然の権利だ。

自分の命は自分のもんだ。

死ぬ時くらい自分で決めるさ。

悲しむ人に悪い、それは当然だな。

謝るしかないだろう。

婆ちゃん、ごめんな、電話はするから猫は頼むよ、金も少しは置いとくから見つけてくれな。

桜。

ありがとうな、最期に楽しかった。

お前といると困ったことに迷うんだ。

生きていたい、少し思ってしまった。

桜。

さよならだ。

次に4人を見たら始める。

寝むい。

桜、夢にまで出てくるな。

泣いてない。

大麻で赤いだけだよ。

やさしくするな。

今だとほんとに泣きそうなんだ。

「ナツ、愛してるからね」

やめてくれ。

消えるよ。

「小学生 太ってた 過食症」

「お母さん アルコール依存症」

「叔母さん 何も言わない 側にいる」

変なこというな、もう消えてくれ。

リアルだ。

幻覚は見ないはずなのに。

やばいのか。

……いないはずの桜に起される朝。

……どこまでだよ。

……どこから夢だったんだ。

聞いた事実、オレは昨日桜にすがって泣いたらしい。

全部が現実だった、穴があったら入りたいというやつだ。

桜は変人だ、美人だし頭もいい、それがなぜオレなんか固執す

るんだ？

イライラをなんとかしないとダメねって、アロマの説明聞いてる場合じゃないだろ。

なんか全く逆らえない。

一緒に居ると恥ずかしくて。

姉ちゃん、やめたりしないよ、姉ちゃんは嫌だろうけど、殺すことは変わらないんだ。

でも好きなんだ、好きでどうしようもない。

大麻まで一緒にやると言われても逆らえない、止めなきゃと思うのに押し切られてしまう。

桜のことだ、考えがあるとは思うけど。

はい、と笑顔でパイプを渡される、吸い込み、また渡す、結局逆らえない。

これはあれだ、惚れた弱みというだろう、そこまで惚れた相手に更にほんとに弱みまで握られてるような、そんな気分だぜ。

夢だと思って子供みたいに泣いてしまったあれ、16年の短い人生だが最大の醜態だ。

いいさ、開き直るしかない。

これだけ惚れてたらどうせ逆らえないんだ、復讐以外は全て言うとおりにするよ。

効いてきた、桜がキラキラと光って見える。

やべえ、すごえいろっぽい。これでお預けって言われたら前言撤回したくなるぞ。

そのくらいやばい、なるほど、好きな相手とやるところなるのか。

キスされた、それだけで蕩けそつだ。

元々オレの快感は普通より弱いと思うんだ、逝く時ですら声もでない。

だから言ばせるしかすることがなかったのに。

こつという体験は初めてだ、溶け合うようなセックス。

お互いに苦しい程気持ちがいい、時々休憩みたいに笑い合う、入ったままでだぜ。

なぜかそうなるんだ、嫌なことが全て忘れられる幸せなセックス。

最期には自分と桜の境界が曖昧に思えてきた。

わかってきた、桜の言いたいこと。

快樂だけ追うなら二人で捕まるまで付き合おう、でも好きなら大麻をやめて、そういう意味だろ。

こういうセックスがあるとわかっただけでいい、ありがとう。

お釈迦様の掌の上みたいなおれ、悔しいからちょっとからかって、桜に大麻を渡した。ちと惜しい気もするけどな。

でもこんなことで悔しいなんて甘かった、桜からのどつきりはこんなもので終らなかったんだ。

頭を使えよ、サル。

言われたことを略せばそんなとこだ。卑下してる訳じゃない、桜からみたらオレの頭はサル並だ。

桜の求める完全犯罪、オレにそんなことができるだろうか、1人が相手なら難しいことじゃない、8人、どうすりゃいいんだ。

でも、楽にはなったんだ。これは一種の勝負だ、オレにそんな能力があるかどうかの。

問題を先延ばしにしたつもりはない。

不可能なら何人でもいいから殺す、それに変わりはない。

それにしても、16歳になってしまった、3ヶ月前は16歳まで生きてると思っただけなのに。

いいさ、今は素直に楽しもう。

下調べも練習もしてたんだ、欲しかったバイクの免許。

自動車試験場でバイクの中型免許を一発試験で取り、バイクマニアの先輩からバイクを借りてきた。

もし生きてたら買う予定でお金も貯めてたのに使い道が他にできなくなったからな。

迷ったけどネイキッドタイプ、2人でも楽な姿勢で乗れるバイクだ。

レーザータイプは前傾姿勢だから長時間の二人乗りはきつい、少し遊ばせて貰っただけで十分だ。

2人乗りしてのツーリング、奥多摩は夜中に1人で走りにきていたけど、タンデムも楽しいと思った。

桜を送り届け、真面目に考えてみることにした。

完全犯罪、推理小説はほとんど読んだことがないけどこの場合の

意味はまったく違う。

犯罪自体がないことにするんだ。

殺人というのは死体があるから殺人事件となる、死体が出なければ事件にならない。

失踪届けが出るだけに終る殺人事件は相当数ある。

新宿で浮浪者をしていようがコンクリートで固められ海の底に沈んでいようが失踪だ。

明らかな事件性がなければいい、目撃されずに連れ出し、死体が出なければいいんだ。

オレの場合にもメリットがある、桜に指摘されたように8人は分裂しているだろう、失踪なら報道もない。

繋がりが無い人間にはバレない。4人と残り4人、別々にできるから勝算は大きい。

格闘技経験のない4人程度拉致するのは簡単だろう。

問題は死体のほうだ、安全に処分するにはどうしてもお金がかかる。

さらに運ぶ方法、最低でも車の免許は欲しい。

運転免許偽造は厳しい、身分証明がわりなら偽造もありだが、警察に対してなら無免より悪い。

これだけでも丸2年待たなくてはいけない。

金銭的にも2年は最低ラインかもな。

2年か、自分1人でやるには他に道はない。

といって他人を雇うとか頼むのは有りえない。

本当を言えば、実際は8人のうち誰がやったのか拷問はしたい。

絶対にあいつらが犯人だという保証すらないんだ。

たしかなのはあそこを溜まり場にして輪姦してたことだけだ。

姉ちゃんの事件に関しては100%ではない。

まあ99%だ、輪姦族なんて間違っただけ殺してもかまわないけど、1人は拷問して確かめたいとこだ。

やはり近所がない家か防音の設備がいる。

他に足りない物……情報だ、奴等の詳細な情報がある。

今までのようにいい加減なやり方ではダメだ。

とりあえず、ここまでを思いついたこと、過去に見てきた8人のことをPCにどんどんとメモしていく。

人間関係も整理しやすい。

計画を表にしてしく。

最初はバイトもしなくてはいけない。

財テクもいる、株式やFX、勉強しないとだ。

婆ちゃんを説得するのが先か。

借りれる名義は婆ちゃんしかないし、爺さんにはバレないようにしないと。

爺さんはもういる時間だから婆ちゃんは明日でいい。

これじゃ夏休みは遊ぶ暇ないぞ。

それも怒るかな？

とりあえず、頼りになる先輩数人に電話をしてバイトは見つかった。

微妙な気もするが、金になるものはこれしかなかった。

マッサージのバイトもほとんど金曜日集中してるから道場は金曜だけにするか。

忙しくなる。

数日前はいつ死んでもいいと思っていたのにな。

共犯者か……すごい女だ。

足掻いてみる、生きる為に。

番外 KYなプツチとリク

ナツく cat & a mp ; girl

女というのはメス猫に似ている、女はよく猫に例えられるけど、それが事実だと知ったのは小学生の高学年くらいだ。

早熟だなと思われるだろう、言い訳しておくところと違つ。

オレ達の育ての親は父方の祖父母で、婆ちゃんはよく公園で猫にエサをやったりする猫おばさんなんだ。

小学に上がった頃からときどき婆ちゃんの野良猫保護を手伝わされていたんだけど、その所為でオレは猫には詳しい。

猫おばさん達の活動は、野良猫を捕獲し、理解のある獣医に協力してもらい、安く避妊や去勢手術をするんだ。

成猫は元の場所に放し、子猫なら健康管理ができれば里親を探す、こんなところだ。

昔は野良猫が多かったらしいけど、難病の蔓延により外猫には危険が多く、長生きしにくいので減っている。

猫エイズ、猫白血病や伝染性腹膜炎などだ。

避妊や去勢については賛否両論だけど、しないとケンカやセックスで病気に罹りやすい、産ませても面倒を見る人を探すだけで大変だった。

猫の糞尿問題で近所から苦情がくることもあって、それはオレが小学2年の頃から手伝わされていた。

猫はトイレの場所を固定するので問題になる、だから場所を変えさせる為に匂いで対策するんだ。

苦情がくる家の周りの塀の上に穴を開けたペットボトルを置いていく作業で、中の液は木搾液や酢を薄めたものでかなり臭い。

そうして猫のトイレ場所を変えていく、そうしないと保健所に通報されて猫が殺されてしまうんだ。

保健所での死は二酸化炭素注入による窒息死だ、苦しいなんても

のじゃないのは誰でもわかるだろう。

メス猫の話に戻るけど、高度な演技をすることがある。

元々メス猫が素直ではないことは知っていた、猫が寝てるときに甘えた声で廻りをうるつくのは布団に入れるという意味だ。

オスは布団を持ち上げるとすぐ入って来るのに、メスは面倒な反応をするタイプが多い。

すぐに入らないくらいはかわいいもので、こちらから捕まえて布団に入れるまでうるさく鳴くメスもいる。

そんな風にメス猫というのは愛されたりで、愛情確認をしないと気が済まないタイプが多いんだ。

頭がいいのだからこっちが眠い、寒いとか考慮して欲しい。

一番印象に残ったのはトイレから見ていてわかったイジメ偽造だった。

一時期お腹が弱かった頃があった。

その時も腹を壊して長時間トイレにいたんだけど、退屈で隙間を開けてたら見えた光景。

いつもと違いキマメとプッチが仲良くじゃれて遊んでる姿で一瞬自分の目をうたがった。

サバトラのメス猫のキマメは茶トラのオス猫プッチにいじめられてるから、助けてくれとばかりに逃げてきて甘えてくるが多かったんだ。

キマリは生後2ヶ月くらいのときに兄弟4匹と同時に保護したけど、みんな伝染性の腸炎で衰弱してて近所の獣医にもう無理だ言われたんだ。

そこで婆ちゃんや姉ちゃんと話して当時漫画で読んだ薄い砂糖塩水を飲ませることにしたんだ、交代で飲ませること4日目、1匹はダメだったけど3匹は助かった。

ただ他の2匹と違って、キマリは栄養失調で顔がブサイクになり家に残ることになった。目が半分開かなかったんだ。

いつもだと誰もいない時間だからトイレも隙間を開けてたのだけ
ど、猫のほうも無人だと思っっていたわけだ。

オレが大きく扉を開けて顔を見せたら、こちらを見ながらキマメ
は固まった。

プッチとじゃれてる最中でパシパシ殴られたりしながら数秒固ま
ってしまったキマメの顔は一生忘れられないかもしれない。

猫にそんなに豊かな表情があるのかと問われると困るけど、オレ
にはしまったと書いてあるように見えた。

事実その日からキマメはイジメ偽造はやめた。

顔がブサイクという事が関係あるのかわからないのはわからない、自
覚があるかわからないからだ。

まあ今のオレはメス猫達に嫌われている、姉の死後からずっとそ
うだ。

KYって言葉が流行ってたけど、オレにはちょっといい言葉でも

ある。

猫はほとんどが空気を読むんだ、まあ流行した意味とはちょっと違うけど。でも空気を読まない猫もいる。

家出から戻った時も、歓迎してくれたのはKY猫のプッチとリクだけだった。

オレに抱かれてるプッチとさくらに甘えてるリク、こいつらに救われた部分もあったんだ。

「オスに似てるっていうけどさ、メスは違うの？」

「日本のは違うのが多いよ、洋猫はそうでもないけど」

「ナツって猫博士？」

からかうように言われる。

「猫に興味あるのか？」

「うん、聞きたい」

さくらにどう話せばいいのか微妙だ。

オレの失言だけど、オス猫みたいと言われたことを根に持っているんだ。

「女とメス猫ってほんとに似てるんだ」

「なにそれ？」

「女は女優ってなんかで読んだけど、メス猫も生まれつき女優なんだよ」

「ナツでもそんなこと言うのね」

「メス猫は高度な演技するんだぞ、実際に見ないとあれはわかんない」

「どんな演技？」

「オスに虐められてるって、追いかけてられて助けを求める演技、そうやって甘えにくるの、怖かったよーみたいな態度で」

「なんで演技だってわかるの？」

「偶然見たからだよ、実際はメスの方が強かった。自分でケンカ仕掛けて、追われる状況作ってたんだ。」

「こいつオレより頭いい、こえーって思って、しかもそれが生後1年弱のメスなんだぜ」

「ふうん」

「メス猫の演技は小学生の女の子に匹敵するよ、女の子見てたらほ

んと同じようなことするんだ」

「……ふ〜ん、ナツは小さい頃からモテてたの？」

「ちゃう。いじられてたって感じ、男が1人で女の子の集団と遊んでたんだ、自然にそうなるよ。」

姉ちゃんがない時に、口で毘に嵌められてさ、お医者さんごっこで患者役させられたんだ、それを最期に遊ぶのもやめた」

「あっそう」

「さくらと比べるとオレの方がメスに近いよな」

「
x
」

ありゃ、またいい間違えたか。怒るなよ、ほめてるんだから。

卑怯な男はメスっばいだろ。オレには武藤なんかメスの蛇にしか見えない。

「誤解だつて」

オレは男も女も両方の性格を持つてると思うんだ。

「
x
」

道場でオカマさんに懐かれて困ったことあるけど、男と女の身体

の性別はただの偶然だよな。

人によって比率が違うだけだ。さくらがオス9メス1だとしてオレはオス7メス3くらいかな。

でもメスの部分がないと卑怯なやつが読みにくいからなくても困るんだよ。

「違っつて」

とにかく、オスっぽいってのはオレには最大級のほめ言葉なんだ。

イタイ。

痛いって、おもいきり抓られてる、我慢はできるけど痛くない訳じゃないんだぞ。

番外 KYなブツチとリク（後書き）

ナツの偏った考え方を表現してみたつもりです。

アンバランス

桜 side

迷ったけど、ナツのプレゼントはシンプルな金属のキーホルダーにした。

実用性一辺倒、だってアクセサリすら身に付けない。

観察してても何か欲しいものがあると思えなかったわ。

「ナツ、この予定表はなに？」

今までカレンダーなんて使いもしなかったのに、予定がびっしり書かれたカレンダーを貼り出したの。

「ん？」

「何コレ？」

「見ての通りだけど」

「びっしりじゃない」

ほとんど日曜日しか空いてないじゃない。

「うん、かなり忙しくなるんだ」

「何でこんな急にバイトとか……」

「計画ができたからだよ」

「もつできたの？」

「おおまかにね、しばらく資金作りだ」

「資金作り？ ……すごいね」

「PCに計画のメモ開いたままだから見といて、2時間くらい出かけてくる」

「どじいくの？」

「婆ちゃん」とい

そう言つと、ヘルメットを持って出て行った。

ナツのお婆さんか、猫ボランティアさん、やさしい人なんですよ
うね。

PCデスクに移動して読んでみる。

ファイル名、安全第一だって、ギャグ？

必要経費、最低500万、目標一千万。

はあ、何コレ？

現在、資金87万……ナツってお金持ちね、私のお小遣いなんて5千円よ。

支出、家賃、光熱費、食費、最低11万〜14万。ふむふむ。

収入、生活費14万、マッサージ15万。夏休みのバイト最低目標20万。

収入で生活費14万てなんだろう？ しかもマッサージって15万以上になるの！

株とFX、未定。投資ね……そんなことするんだ。

18歳と同時に免許取得、1BOXタイプ購入予定。……これで運ぶのね。

資金の都合により山中に一軒家購入って……マジですか。

だから500万以上なのね、家ってそんな金額で買えるの？

……高校生の考えることじゃないよ。

8人の人物相関図、付き合いのあるグループで分かれてる、家族、仕事や性格の傾向まである。

家族……そこも考えたことはあるわ。

家族にはナツがやり終わったら同情はするでしょうね。

100%の悪人はいない、家族にはやさしい犯罪者もいる、だから許すべきとか、言う人もいるよね。

被害者はどうなるの、苦しむ被害者や被害者の遺族の気持ちが先よね。

許す、被害者や被害者の遺族が言うなら立派だと思っけど。

ナツの苦しみは私の想像なんかでは追いつかなかったわ。

私だって久美子さんが殺されたらどれだけ悲しくて怒るかわからない。

ナツだと無理なの、殺される場面が想像できなくて。

それに私は性犯罪の加害者が近所に住んでるだけで嫌、真面目に想像した結論がそうだったの。

恨みの連鎖はキリがないという意見もあるけど、それも含めて人間という種だと思う。

人は感情の動物なんだし、被害者や遺族が感情的にずっと苦しむなら法律が緩いのよ。

つくづく愛するって綺麗事じゃない、私だって自分が納得する為に理屈をつけているだけ。

本音はナツが無事ならそれでいいだけだもん。

それにしてもこの計画、ナツが真面目に考えるとこうなるのね。

ここまで本格的だとは思ってもいなかったわ。

発想が高校生のものじゃない。

でもさ、これじゃ夏休みなのに全然遊べそうにないわ。このくらいが高校生ってものよ。

「ただいま」

「おかえり」

ニャンコースに邪魔されながら夕飯を作っていたらナツが帰ってきた。

「お婆さん、元気だった？」

「ん？ 婆ちゃんは病気したの見たことないぞ。投資の協力頼んできたんだ、口座作らないとできないから」

「ほんとに株式投資とかするんだね、大丈夫なの？」

「それだけで食ってる先輩もいるんだ。ブログとかはいくつか読ん

「だけど、まずは勉強だな」

「ふ〜ん。……ねね、生活費の14万てなに？」

「親の遺産だよ、高校入った時に弁護士と相談して14万に決めたの、月々振りこまれるんだ」

へ〜なるほど。

「弁護士ねえ、ドラマで見るくらいよ、そついつのも高校生ばくない理由なのかな。」

「ナツって大人だよね」

「……子供にしか見えてないと思ってたぞ」

「なんで？」

「……いやいい、調べ物してくる」

大人っぽい自覚もないのね。

「考え方はかなり変わっているし、子供なところもあってアンバランスではあるけど。」

「う〜ん、おじさんが友達だもんね。」

「もうちょっとで御飯できるよ」

「ありがとう」

もうPCCに座ってる。

忙しい、でも嬉しいわ。

の。最低でも2年延びた、それだけでも十分説得した価値はあったも

様替わり

翌日は叔母さん家に帰って、次の日に届いたお茶を持って行くと部屋が様替わりしていたの。

私用のクローゼットも届いてて、赤いかわいいPCまで揃っていたわ。

ナツのPCの4分の1くらいの小さい四角形なの。

私のデスクは今までナツが使っていたもので、ナツのはこないだ買ったのと違う大きなデスクになっていた。

ちょっと驚いたのはそこにPCモニターが6台も繋がっていたの。横に3台でそれが縦に2段で6台よ。

PCモニターもこれだけぎっしり並んできるとなんかすごいわ。

「これどうしたの？」

「おもしろいだろ、見てて」

そういうとPCをいじって、6画面いっぱいには動画が映ったの。

映像が大きい。PCってこんなことできるのね。

……でもすごい無駄使い、節約するんじゃないの？

「おもしろいけど、節約しなくていいの？」

「必要なんだ」

笑いながらそう言うと、またPCをいじりだし、順番に画面が変わっていく。

ほとんどがグラフだけの画面だけど、一つは文字だらけで、一つは数字がごちゃごちゃした画面だ。

……よくわからないけどとにかく本格的だわ。

まるでオフィスとかみたい。

「もう始めたの？」

「今日申し込みしたばかりだよ。これはFXのデモトレードソフト、これから練習はじめるとこ」

なるほどね。

それから20分もするともうデモトレードを始めちゃったわ。

セントジョーズワートとカモミールのティーを淹れてきたけど、もう必要ない気がする、もったいない。

寝る前にだけは飲ませよう、これで1人でも安眠できるでしょ。

「お茶、飲んでね」

「……」

「ナツ！ お茶飲んで」

「……ああ、ありがとう」

……むう、集中力すごいよね。話しかけても聞こえてないとは。

私はかわいいPCを触ってみることにした、ナツのPCは大きくて性能がいい。

ナツのPCを触った後だと私のノートPCの遅さにイライラするもの。

これはどうなのでしょう、小さくてかわいいからしょぼそうなんて思ってたなら、ナツのより速いかも？

「このPCすごいね、ちっこのに」

「……」

また聞こえてない……。

「ナツ！」

「ん？」

「このPCすごいね」

「ああ、最新のパーツだから」

最新のパーツ……高そうね。

「ありがとう」

「……」

もう聞こえてない……これじゃ1人にしたら御飯も忘れそうだわ。

ナツの計画メモ、細部の足りない部分を補填しようと考えながら
いろいろ検索してみる。

完全に抜けてたのは情報集めね、ピッキングや盗聴器の資料を集
めていく。

急いである必要はないから部屋の盗聴ができれば十分だと思うの。

ピッキングというのは鍵を開けるテクニクね。

TVで見ただけだけど、普通のアパートやマンションの鍵は開け
てくださいと言わんばかりらしいわ。

そういえば……この部屋は対策してないじゃない、やっとなき
や。

いろんなサイトみたけど、盗聴器ってやばいわね。

コンセントに指す3股のタップとか、多分市販品を改造したそっくりの盗聴器なんて物があるの。

盗聴器の発見器が欲しくなるわ。

「ナツ、ちょっと見てくれる」

もうね、イスごと引っ張って呼んだわ。

「……ピッキングか、覚えることだらけだな」

「大変だね、手伝えることない？」

「十分だよ、ありがとう」

ちょっとつまらないけど、仕事してる男なんてこんなものだよね。お父さんと叔父さんしか知らないけどさ。

翌日学校で期末の結果が返ってきた、学年3番、中間よりは上がっててほっとしたわ。

帰ってから見たけど、ナツはいよいよ赤点ギリギリの古文がやばい。

「今度から古文教えようか？」

「テストに出そうなところだけ、予想してくれない？」

「……しょうがないなあ、昔はちゃんと勉強してたの？」

「高校に入るときだけだな、1人暮らしも掛かってたし、2ヶ月はかなり真面目にしたよ」

「ああ、集中するとすごくそんな感じする、なるなる。そういうタイプなら勉強はまだいいか」

「いずれやらされる予定みたいだぞ」

「やらないの？」

「桜が大学行くのは賛成だけど、オレは興味ないよ。高校だってどうでもいいんだぜ」

「ええ〜！ 大学行くこつよ」

「将来とかちゃんと考えても行く気ない、勉強は必要なら自分でやるわ」

「私が暇もてあまして合コンとか行ってもいいの？」

「いつてらっしやい、どうせ桜はうんざりすると思っつよ」

「ひどい、男がいつぱい寄ってきて、少しは気持ちが動きそうとか思わない？」

「大学生くらいじゃコドモにしか見えないだろ、道場生も大学生何

人かいるけどガキだぜ」

「ひどいわ、ラブラブキャンパスライフの予定もあるし、学際のベストカップルコンテストで優勝して貰う温泉旅行で、お風呂上りに浴衣で誘惑しつつナツがその気になったら抵抗して、ええじゃないかごっこで盛り上がる予定もあるのよ」

「絶対イヤだ、なんだその細かい設定は」

「一度されてみたいのよね、ほら、帯をくるくるされて、あ〜〜れ〜〜ってね」

「……………」

「……………なにか言っつてよ、ここで会話が切れるとバカみたいじゃん」

「桜の豊かな妄想ごと愛してるよ」

「ちょ、予想外の切り替えしに赤くなっちゃったじゃないの。お笑いみててちょっととされてみたいって浮かんただけなのに。」

実戦シュミレーション

ナツ〜side〜

夏休み直前、最近はデモトレード、ピッキングの練習、やや握力に重点を置いたトレーニングと忙しい。

ピッキングに関していうと、材料集めが面倒だけど少しできるようになってきた。

別に悪事を働こうとは思わないけど、慣れるとおもしろい。

まるで自分の部屋に自然に入るような時間内にできたりすると、ちよつと嬉しくなる。

オレの場合は相手が男で自宅といつても片親だったりする。ピッキングの対策などしていないだろうから楽なもんだ。

道場は金曜日だけにしたから空手はほとんど自主トレだ。

橋の下、姉の事件の対岸までいき日課を始める。

一心不乱に技を繰り返す、傍目にはそう見えるだろうけど頭ではいろんなシュミレーションをしているんだ。

小学生の頃に感じたんだが、格闘家は馬鹿みたいなイメージがある、まあバカも多いけど。

でも頭を使わねばただ筋肉が増えるだけで強くはならないんだ。

実戦だと頭先行ではこれまたダメなんだが、稽古ではとにかく頭を使っただ。

まず技を覚える、技の意味を考える、それから身体の使い方を考える。

もしなにも考えないと、技の使い始めから力が入る、相手に当たる瞬間以外は力は要らない、無駄な力が入ると遅くなるからだ。

次に身体の連動だ、どんなに筋肉が増えても連動させないと意味がない。

例えば、拳でまっすぐに突くという基本の技。

空手の突きもボクシングのストレートも、インパクトする瞬間に足も腰も連動して回転する。

脇をしめ背中の筋肉を意識する、常に考えて練習しなければ実戦でうまく使えない。

人間は関節が多い、全身を正しく連動させるのはかなり難しいんだ。

初心者でもこれだけ考えることがある。

最初は技を大きく練習し、上達してくると、小さく、威力は落とさないようにしていく。

呼吸を隠す、目線、表情、各筋肉の動きも意識して事前に出さないようにする。

そうして撃つ前にわからないようにし、ノーモーションで最短距離で撃つ。

当たる瞬間の定義も上達するとどんどん変わっていく、バカだと筋肉だけ増えていきたいして強くない。

次に型稽古だ。

空手には流派に関係なく伝統的な型がある。

型は普通は昇段試験くらいしか使わない、一対一の試合では意味がないといってもいい。

だから普通はしない、ところが型を真面目にやると気づく、型とは武道そのもので一対多が基本になっている。

中一のとときに足にギブスをはめたことがある。1カ月以上それしかやれることがないから型をしてて気付いたんだ。

考えながら型をすると一対多が自然に身についていくようにできている。

先人は偉大だ、オレ自身はまだ型の意味を全部理解できてないと思う。

型のしめに独自の型もどきをする、実戦を想定し相手を想像してあらゆるシュミレーションを重ねるんだ。

特にルールを無視した戦いの場合、その人なりの格闘術を編み出していかねばならない。

師がいてもそつだ、どんな格闘技をしていようが得手不得手は千差万別だ。

得手を伸ばす、不得手を克服する、その度合いにより戦い方もまた変る。

つまりルールから自由になるほど、自分が主に、師は副になっていく。

この実戦シュミレーションで使った頭はそのまま実戦で生きるんだ。

実戦では考えずに反射的に動くようにする、もちろん脳で考えてはいるけど言葉で考えるような思考では遅くてダメという感じた。

実践シミュレーションで、どつきたらどつするということを決めておく。

すると脳はそのとおりの反射をしてくれるものなんだ。

最期はランニングだ、日に10?ほどだが、ランニングはダッシュ&クールダウンを繰り返す、ジグザクにも、横や後ろにも走る。

足がとにかく太くなるが、安定感が増え速度が増すのでオレにはこれでいい。

ただし見た目にバランスの悪い身体になる、オレの場合は下半身筋肉デブってとこだ。見た目に拘る人間は武道には向いていない。

オレの足を見てキモイと言う女もいる、キモイとまで言われるのはむかつくんで学校のプールでは泳ぐのをやめた。正直に言うところの頃は恥ずかしいと思ったこともあった。

鍛えることに関して決めていることがある、マシンやダンベルは使わない。オレが使う道具は棒術の棒と素振り用の木刀くらいのものだ。

多くのスポーツもそうだろうが、硬く柔軟性のない筋肉は邪魔になる、ウェイトトレーニングなんてしたこともない。

2年前までしていた腕立てや腹筋なども今はしていない、そんな時間があれば柔軟をしている。

理由は上半身の筋肉より正確さと速度が欲しいからだ、人間など急所を攻撃していいなら力はあまり要らない。

柔軟は正確さの為だ、本で読んだだけだが筋肉をより正確に動かすのは神経の量によるそうだ。

柔軟を繰り返すと神経が太くなるらしい、ただオレは実感はないのでほんとかどうかはわからない。

まあ身体が柔らかいと技に余裕があるし怪我もしにくいからいいんだ。

それに拳の速度は鍛えてもある程度以上は変わらないんだ、むしろ筋肉で遅くなることもある。

これはオレ個人の武道家としての考え方だ、何かのプロとして生きるならルールや競技、得意技にあわせ必要な筋肉は違う。

例えば今は総合格闘技が一番受けるだろ、その総合を見てるとパンチ一つとってもほとんどの選手が拳を回転させない。

回転させると撃ち終わった瞬間、そのまま立ち関節を受けることがあるからだと思う。

だから押すようなパンチになる。もちろん立ち技系の選手なら序盤でいきなり掴まれるほど遅いパンチは撃たない。

でも疲れてくると掴まる、それで最初から押すように撃つわけだ。

常にそういう撃ち方をしなければ疲れたとき無意識にでてしまうものなんだ。

ルールにより戦い方、鍛え方が違うという意味がわかるだろう。

速度重視は8人を同時に殺す必要がなくなっただけでも、そのままたオレの好みになっているだけだ。

速度が上がれば威力も上がる、性分というか、速度負けするのが嫌いなんだ。

小学4年生の時に大会で速度負けしたことがある、それ以来速度を重視し始めた。

中2からはさらに速度重視となり筋トレをやめたんだ。

でも最近はちょっと違う、棒術の棒や重い木刀を振って背筋や握力を鍛えてる、右手の握力なんてまだ50?もないんだ。

部屋に帰るなり倒れこんだ、今日はやりすぎた。

プッチがざらざらした舌で首を舐めてくる。こいつはなぜか汗が好きだ。

む、上から桜が睨んでいる、不機嫌ぽい。

「運動長いよ、やりすぎじゃない?」

「そういう気分するときもあるぞ」

桜お陰でイライラはかなり減ってる、稽古もオーバーワークになるほどきついものはしていないつもりだ。

でもたまには限界ギリギリまでやりたくなるんだよ。

夜のバイト

桜 side

ふふ、ナツが御飯を食べていてウマイウマイと連発するの。

ようやくそのレベルになったのねと満足してきた、ここまで喜んでるなら正直に言ってもいいかな。

「ナツがちゃんと自炊してるから一生懸命頑張ったんだよ」

「ちゃんとしてないけど。ほとんどカレーだけだよ、一番楽なんだ」

「そうなんだ」

「うん、簡単なのしかできないぞ、婆ちゃんがな、和食しか作らんからやるしかなかったんだ、和食だけだと飽きるんだよ」

「なるなる、カレーはどうやるの？ けっこうおいしいよ」

気になってたんだよね、意外においしいんだもん。

「たまねぎを10個くらい煮るだろ、よく煮てたまねぎが溶けたら市販のルーを2種類入れて溶かして、そこにレトルトカレーを5袋入れてる、それだけ」

「は？」

レトルトを入れる……このときの気分は説明しようがない、いや、したくない。

私の顔がよほど間抜けだったのか、ナツは笑いだした。

笑うナツが悪魔のように見える。

私はそんなものをおいしいと思っていたのか……両手でナツの首を絞めていたわ。

しかもこの男、首を絞めても笑っている。

夏休みに入ったわ。

ナツはいよいよ忙しい。

空手の型をしながら、朝の9時から株取引のデモトレード、3時に株が終ると夕方までFXのデモトレードをしてるの。

16歳では投資は無理だから祖母の名義で口座を作って、その書類も実家に届いたみたい。

夕方からはバイトにでかける。

ナツが始めたバイトは表向き年を二十歳と偽はたちっての夜のバイトだ。

店長以外は16歳と知らないらしい。

夜7時から深夜の1時、月曜から金曜を除く土曜まで、事情がわかるから反対もできない。

でも、でもね、オシャレなイケメンなの……お客はほとんど女だって、酷すぎるでしょ。

まずね、店の指示とかで頭がオレンジになったの、眉毛まで薄く抜いて同じくオレンジなのよ。

初めて見たときはかなり違和感もあったけど、見慣れると似合うのよ……黒龍の呼び名はきつと泣いてるわ。

16歳で稼げるバイトは他になかったんだ、とかいっちゃってさ。

昨日なんてバイトから帰ってきて何ていったと思う？

オレってもてるんだなあ、よ、今頃わかったのかよ、バカ。

指名制でね、始めて1週間でトップになったとか言ってくれちゃって……。

まるでホストじゃん。

金額はわずかなものなんだ、客にも一応聞いただけらしいよ、とあやしい言い訳もするし。

むかむかしてきたら、でも大人の女って臭いんだよ、って言うの。

香水が臭いらしい。

あなたは犬ですか、ってイヤミを言うと、前世はそうかももしれんな、とか真面目な顔で言うな。

けん制で作り話なのかと疑ったけど、ほんとに臭いらしいの。

大人になっても香水をつけるときは軽くにしてくれと、できればつけないでくれとまで真剣に言うの。

そこはちょっと笑えただけだね。

土曜日の夜、涼ちゃんを連れてナツのバイトしてるバーに行く、今日で3回目、もうお小遣いもなくなりそうよ。ナツのお陰で使わないから貯まってるのに。

最初は様子見というか偵察にきただけなのだけど、ちょっと気に入ってしまったわ。

このお店楽しいの。

「ナツちゃん、3番テーブルお願いね」

「はい」

ププ、お店のマスターで須藤さん、40歳過ぎのオカマさんなの

だ。

普通にしていれば、30代のいい男って感じ、でもオカマ口調なのよ。

「ときおりみせる経営者の顔？」

きりつとした顔とのギャップが楽しい人で、下手なお笑い番組よりおもしろいわ。

「ナツちゃんと呼ばれるナツの顔もおもしろい、最初は毎回嫌そうな顔してたのよ。」

最近はこちらと慣れたみたいだけど、内心はかなり嫌でしょうね。

それにね、お酒って想像していたよりおいしいの。

楽しくちよつと飲むならアルコール依存症なんてならないし、いいよね。

「ナツちゃん、1番お願いね」

「はい」

指名されたテーブルには自分で運ぶの、カウンターにいたことが基本らしいけど、ナツは忙しいのだ、チツ。テーブルでニコニコ話してんじゃねーよ。

今日のナツのお奨め、意外にも焼酎のお湯割り、空になった。ほんとにおいしいのよね。

「ナツちゃん、オカワリ〜」

えへへ、きたきた、16歳のくせにバーテンダーのかっこうが似合いですぎるわ。

「はい、飲みすぎだよ、はよ帰れ、それ強いんだぞ」

はよカエレってなに。

「藤川、連れて帰ってくれ、頼む。こいつ酔ってるぞ」

こいつって誰じゃ。

「ん〜、私もおもしろいんだけど」

「わからん、どこがおもしろいんだ？」

「似合わないとかいろいろ？」

「……はあ」

「あのね、教室とのギャップとかいろいろだよ、だからおもしろいはウチらだけ、安心して働きなさい」

「うんうん」

「だいたいウチら、本物見るの初めてなんだよ、それだけでもおも

しろいの、それにナツちゃん、なんだもん笑えるわん」

「んだんだ、マスター最高」

「ナツちゃん、早くカウンター入って頂戴」

「はい」

「いつてらっしゅい」

「ナツちゃん、がんばれ」

今度はバーテンだ、シェイカーを振ってる。

何をしててもさまになる。16歳って嘘みたい。

ああ、カウンターでいちゃいちゃすんな。

ほんとに浮気してないでしょうね？

二日酔い

翌日の朝、起きて時計を見るともう11時だ、うう？

頭痛い……ベッドの横にふとんが敷いてあって涼ちゃんが寝てる。

そもそもなぜ叔母さん家で寝てるの？

ていうか、昨日の記憶がないよ……どうやって帰ってきたの
でしょう？

タクシーかな。あとで払わないと。

トイレから戻ると涼ちゃんも起きた。

「おは〜」

涼ちゃんは朝から元気だ……。

こっちは頭痛い、声がさらに頭に響いて痛いよ。

これが二日酔いというものなのね、最低だわ。

「おはよ〜」

2人でリビングへ、涼ちゃんはそのままトイレにいったわ。

「おはよ」

テーブルにいた久美子叔母さんがなんかニタニタしてるよ。

「おはよ、頭痛いでし」

「アハハハ、がкинちよのくせに飲みすぎよ」

イタ、イタイよ。手で笑いを止めようとするのだけど余計笑われる……。

「声が頭に響の……痛い」

頭痛薬を飲んだ……。ナツの左手がぼちい。

「おはようございます」

涼ちゃんが戻ってきたわ。

「おはよう、ねえ涼子ちゃん、このこ、多分なにも覚えてないよ……覚えてないけどさ。」

「ああ、そうでしょうね、ブロンブロンでしたよ」

なんだっていうの？

「ナツ、おやすみのキスして〜」

叔母さんが妙な口調でいう、なによそれ？

「いつもあんなこと言ってるんですかね？ 1人身のあたしにや目の毒です」

はあ？

「大沢クン、かわいいわね、やさ男みたいなのに、きりつとするとかつこいいし、話半分って聞いてたから驚いちゃったわよ」

ええ〜！？

「……どういこと？」

「昨日、ナツちゃん、桜をお姫様抱っこしてベッドまで運んだんだよ、桜にせがまれてお休みのキスしてたよん」

「はあ？」

「あのこ、オレも本気です、なんて言ったわよ、若いっていいわね」

……なにそれ。

しかもお姫様だっこって！

わあ〜ん、人生初のお姫様抱っこ。記憶にない……。

お姫様だっこなんて、最初で最期も有りうるよ。

部屋で頭痛が取れるまで休んでいた。

はあ、やつちやったのね。

「キスしてたつてのだけ冗談だよ」

「他はほんとなのね……お姫様だっ」

「うんうん、桜をベッドに降ろして、おやすみのキスして〜で、ナツちゃんうちの前だから真っ赤になったの、かわいいところあるね、ひひひっ」

「私はいいけどさ、ナツをからかうと怖いかもよ」

「てかさ、力あるよね、階段もだよ」

「ナツのこと、言えないことばかりでごめんね、私のことは何でも言えるけどね」

「うん、それはもういいよ……桜、実は頼みがあるんだ」

涼ちゃんが真面目な顔してる、めずらしい。

「なにになに？」

「ナツちゃんに面倒なこと頼めないかな？」

「どんなこと？」

「あんちゃんがさ、いじめうけてるんだ」

永原のあんちゃん、涼ちゃんの幼馴染で2年の男子、やさしすぎる人。

いまのどこ友達以上、恋人未満、聞いているのはこれくらい。

「多分、大丈夫だと思うよ、中学の頃はそれでバイトしてたって聞いたもん」

「いや、問題があるんだ、そいつの親がヤクザらしいんだよ」

「……なるほど、それは聞いてみないとわからないね、どんないじめなの？」

ナツにヤクザがでてくるような揉め事はもっていきたくないけど、平気かもしれないんだよね。

仲のいい道場の先輩にヤクザもいて、マッサージの一番いい顧客でもあるんだって。

ヤクザがバツクにいるとか言われてたのはその所為で、たまにご飯を奢ってもらう程度だよと言っていたわ。

「いじめっていつか、恐喝、もう1年以上お金取られてるんだ、聞いたのは最近だけだよ。」

警察とか学校に言うのも怖くていやだって」

「それはひどいね、ヤクザか……最悪はうちらが見張ってて警察呼ぶとかすればいいかな、今日は休みで部屋にいるから、一緒にいつてみよ」

お風呂に入ってアルコールを抜くことにした。

お姫さまだっこ……女の子のロマンよ。

重かったかな……浮かぶのは現実的なことだ。

「ほんとごめん、お恥ずかしい」

会うなり謝ったけど、ナツは気にしてる様子はないみたい、後で叔母さんとうつうい会話があったか聞いてみよつと。

「べろんべろんだったもんね」

涼ちゃんもついいよ。

「うつう……もう飲まない、二十歳まで」はたち

「おい、そりゃ普通だろ」

もういいってば、涼ちゃん、まじで反省してるんだから。

「ところで、藤川までどうしたんだ？」

ニャンコースは初めて会う人が好きだから、ナツはご飯で気をそらしてるところよ。

「うん……頼んでいいのか微妙なんだけど、私の幼馴染のことでお願いがあるんだ」

「うんうん、お願い」

「暴力だよな？」

「そうなんだけど、頼める？」

「いいよ、それ以外は役立たずだけどな」

「ありがとう」

「藤川は友達だともってるし、気にすんな」

「ありがとう……でもそいつ親がヤクザらしいんだ」

「へ、組長の息子とかなの？」

「いや、そうじゃないと思う」

「ヒラのヤクザか、それならどうでもいいが、相手が組や手下持ちなら、桜はしばらくここに来ちゃダメだぞ」

はい？

「ちよつとく、なにそれ」

「当たり前だろ、いまどきのヤクザはなんでもありだ、金が全てだから卑怯もくそもないぞ、桜まで守れんよ」

「……自分1人なら組でもいいのか？ あんたは」

そだそだ、言ってやれ、涼ちゃん、てか、ほんとにヤクザでも平気そう……その可能性も考えてはいたけど。

「当然だろ、その程度には鍛えてあるよ、一応防弾防刃のボディarmorも持ってるぞ」

なんですって？

「ええ〜？ どこに？」

「クローゼットに普通に置いてるよ、桜も見たことあるだろ」

「どれよー！」

「ナツちゃんはオタクなの？」

部屋に入ると6面モニターを見て涼ちゃんに聞かれる。

「ナツちゃんでもオタクでもね〜よー！」

「あとで教えるよ」

ナツが部屋に備え付けのクローゼットから、見たことのある黒いベストとカラフルなバックパックを出して説明をはじめた。

意外に軽い、ベストは防弾防刃でバックは盾にもなるとか、本物？

「ナツ……聞いてないよ」

「備えあればというだろ、中3のとき買ったんだ、ヤクザと戦いになることもあるかなって」

ジョーク…… ナツじゃなければ絶対ジョークなんだけど。

「……ナツ……からかってるんだよね？」

「なんでだよ、オレはこうみえて慎重なタイプなの、何時必要になるかわからないんだぞ。」

平和ボケした日本人とは違う、つか話すすまない、ここまではいらんのだろ？」

ふっ、マジだよ。

「さくらっ、同情する、あんちゃんは少しだけ見習って欲しいけどもね」

「……知ってはいたのよ、たしかにこういう男だったわ」

よく考えてみたら、ナツらしい……。

「それで、どついつ話なんだ？」

「……うん」

涼ちゃんの説明がはじまった。

話も打ち合わせも終わり、1人でいくと聞かないナツ。

「ええ、付いていくよ、ヤクザが武器出したらどつするのよ？」

「ガキに武器なんか出すわけないだろ、ヤクザってのはシャブ中でもないきや割りの合わないことはしないんだぜ」

「付いていく」

「絶対ダメだ！」

めずらしくナツが怒鳴る、負けないもん。

「絶対いく」

「……それじゃガキの心配する過保護なママだ、そんなに心配なら遠くから双眼鏡で見ればいいだろ、ついて来るならやらないぞ」

「またもクローゼットから、双眼鏡を出してくる、こんなもの何に使うのでしょう？」

似合わないもの持っているな、このクローゼットは一度じっくり調べてみる必要がある、とんでもないものが出てくるかもしれないわ。

「わかった、これでいいよ。涼ちゃん、オペラグラスでもいい？」

「うちに双眼鏡あるよ、チャリでとってくるわ、桜は先に場所決めといてね。ナツちゃん、よろしくお願いします」

「ナツちゃんはやめろ……桜、最低200メートルは離れてくれよ」

溜息をついてナツが出て行く、場所は橋の下で打ち合わせ済みだ。

悪役モドキ

多摩川沿いの公園にある木陰、橋の下まで200? 弱の場所ね。

涼ちゃんも着いて2人で暑い中待っていた。橋の下は涼しそうでいいな。

行って隠れてたら……怒るでしょうね、やめとこ。

涼ちゃんは永原さんに携帯をかけ、音声をそのまま聞こえるように通話中のままにした、倍率30倍の双眼鏡でよく見える。準備は万端よ。

きた、ナツと永原さん。

それから土橋という柔道部主将。聞いてはいたけど縦も横もできかい。

お相撲さんみたいだよ、大丈夫なの？

携帯の動画撮影を使って、永原さんが脅されるところを録画したはずなの。

それを使ってここまで連れてくる、そこまでは打ち合わせていた。来たということは成功したのだからうけど。

『おう、携帯寄越せ』

土橋が脅すように怒鳴り。

『××××』

ナツがボソボソ反論してる、携帯からの音声では大きな声しか聞こえない。

『てめえ、殺すぞ』

土橋がナツに詰め寄る！

『うぎゃ〜』

捕まると見えた瞬間、ナツに蹴られて、土橋の大きな身体が座り込むのを見てほっとする、足を蹴ったように見えたわ。

『ブーブーうるせえ、黙ってる。誰も来てね〜じゃね〜か。』

ブタには人望はないんですってか、ブタのサンポに付き合っただけでつくり歩いてこれかよ。

5人くらい来てんじゃね〜かと期待してたんだよ』

悪役に成りきるとか言ってたけど……ほんと口悪いな。

最近はダークヒーローなの忘れかけていたわ。ナツは他の部員も

くると思っていたみたい。

「ほんとだ、ナツちゃんてすげ〜、軽く蹴ったようにしか見えないの」

涼ちゃんにやにやしてる、好きな男が1年も恐喝されてたんだもんね。

『永原さん、困ったな、誰かくると思っっ?』

『……え、えと、どうでしょう?』

『こいつ、まじで人望無しすか?』

『はい、すみません、わかりません』

「はは、あんちゃんもびびってるわ」

『そっすか、もうちょい待ちましょう、来なきゃあきらめて親呼びましょう』

少し待っているとほんともう1人来た。小太りな人、多分柔道部部員で土橋の子分さん。

『ツ、ツチさん、永原、どうなってるんだよ』

土橋はツチさんと呼ばれているのね。小太りさんはナツに目をつけた。

『おめえか、なんだ、お』

『うるせえ、ブーブー喚わめくな』

『ぐわう、うがっ』

コブタさんはナツに両足を蹴られてへたりこむように座ったわ。暴力なのにコメディに見えるのはなぜでしょう？

「ワハハ」

「アハハ」

涼ちゃん楽しそう。

ナツの近くに座ったままの2人。

双眼鏡と携帯からの音声だからかな、涼ちゃんとだからもあるな、ナツは悪役に成りきってるけど、コメディにしか見えないのよね。

『あうっ』

ナツが土橋の腕を掴み、立たせてまた蹴ったの。

『泣くなブタ、他にも来るのか？ 待ちくたびれたぞ、退屈なんだよ』

土橋は泣いてるのね、コメディじゃなくなってきたわ。

『きましえん』

『まじかよ、使えねえブタだな。』

永原さん、金額計算終った？』

『……はい、35万です』

『ブタ、35万返せ』

『……ありません』

『借用書かけ、ブタ書き方わかるか？ 永原さん、わかりますか？』

『 恐喝してっっていれとけよ 違う 』

ところどころしか聞き取れないけど、ナツが指示しながら土橋に借用書を書かせているみたい。

『親父呼びだせ、ブタ、出たら代わるぞ、一応返す気があるかどう
か聞くからな』

またナツがしぶる土橋を蹴って、電話をかけた土橋から携帯を受
け取る。

『 X X X X 』

携帯で土橋の父親と喋っているけど聞き取れない、会話は1分くらいで終わったわ。

『ブタ、おめえの親父、仕事なんだ？ やくざじゃねーだろ』

ナツの怒鳴り声、土橋の返事は聞こえない。

『だろうな、やくざらしくねえ、本物のヤクザはガキにああいう口はきかねーだろ、誰にでもイキがるヤクザモドキだ』

ヤクザモドキ……本物ではない？

誰も動こうとしないから父親もくるみたいだけど。

「涼ちゃん、聞こえた？」

「うん、ヤクザモドキとか言ってるね」

しばらくして黒いベンツで現れたのは、いかにもヤクザな服装の太った中年親父と30代くらいの男だ。

2人ともヤクザに見えるけど、これがヤクザモドキ？ 堂々と4人のところまで降りていったわ。

『こら、大沢ってのはどいつだ』

『オレだよ』

『島さん、頼みます』

『はいよ』

速い！

30代の男がナツに突っ込んでいく。

あら？ よく見えない。

殴られたように見えたけど？ その後でナツがまた足を蹴ったと思う。

『ぎゃ〜』

痛そうな声、30男は崩れるように座った、そういえば今日は足しか蹴ってないわ。

う〜ん、足だと見えにくいよ。ナツはサービス精神無さすぎね、遠くから見てるって言ったくせに。

『おっさん、フェイントもなしてなんだ？ 大昔にボクシングやってたくらいで調子に乗るなよ、弱すぎのアホすぎだぞ』

元ボクサー？ それであのくらいなんだ、次にナツはヤクザモドキ親父を蹴ったの。モドキ親父はおたおたしてほとんど動きも少ない。

『ぎゃ〜』

また元ボクサーのところいき、立たせて蹴った、やはり全部足の膝のあたりよ。

『ぐわっ』

元ボクサーの悲鳴が一番大きい、意外と痛がり？

『×××』

ナツが元ボクサーと会話してるけど小声だ。

次はまたヤクザモドキ、腕を掴み立たせて足を蹴ったの。

『うがっ』

『チンケな奴連れてくん、弱すぎておもしろくねーだろ』

これで4人とも両足を蹴られたことになる。

……これはたしかに悪役だわ。

相手が何人いても関係ない、ナツと永原さん以外はみんな座ってる。

ナツに足を蹴られるとしばらく立てなくなるの。

モドキ親子は揃って泣いているぽい、コブタさんはもうそれほど痛くないみたいで体育座りで見学しているわ。

『土建屋の親父がヤクザの真似してるから、こついうバカ息子が出るんだよ、自分の親父がヤクザだと言って後輩を恐喝するブタがな、全部おめえのせいだろうが』

ナツの怒鳴り声だけ聞こえ、土橋親子を順番に立たせてまた蹴つてるの。

……嫌いなタイプなんでしょうね。

『土建屋、35万返せ』

モドキ親父が財布を差し出しているけど、ナツは受け取らない。

『自分でお金出して、私が土建屋なのにヤクザのマネをしているから、息子が恐喝するようなバカになりました。永原さん、ごめんなさい、35万お返しします。こつ言え』

もう全部ナツの言いなりに進んでいく、ヤクザモドキはお金を永原さんに渡したわ。

『ブタ親子、ちゃんと反省しろ、それからベンツな、ドア一枚貰ったとく、息子が永山さん殴った感謝料分だ、わかったか？』

ベンツのドアを一枚貰う？

モドキ親父は意味もわからず肯いていると思う。

ナツはベンツのところまでいき。

ベンツを蹴った！

重量がかなりあるはずのベンツ、交通事故にでもあったかのように大きく揺れて少し動いた。

ドカッという音が200メートル先と携帯からと、時間差で聞こえる。

「……」

「ひゃ〜」

人力での交通事故並の衝撃、とんでもない脚力だ、足太いもんね。

ナツの太腿は私のウェストより遥かに太いのよ。

なるほど、たしかにドア一枚だわ……ベンツの助手席ドアは大きく凹んでるの。

あそこまでやるのね。

ナツと永原さんは帰っていく、残された4人は誰も動かない。

手加減されたことに気づいたり、ただ驚いていたりいろいろなのかな？

ちょっと見てたけど、まだ誰も立たない。

「ククク、ナツちゃん人間じゃないよ」

「フフ、ベンツって蹴ってあんなに動くのね」

「ハハハ」

「アハハ」

後から笑いがこみ上げてきて、2人で笑ってしまふの。

最期までコメディだった、警察を呼ぶ心構えも何の意味もない。

ナツは弱いというだろうけど、元ボクサーも土橋も一般的には強いと思うの。

しかも足しか蹴らなかった、あれは多分ナツの遊び。

帰り道でもときどき思い出し笑いが出てくる、でもちょっと不安にもなったわ。

ベンツの修理代、大丈夫なのでしょうか？

あきれて見てたから今頃気になってきたのよ。

慰謝料、うーん、どっちが高いのでしょうか？

一応ドアホンを鳴らしてから部屋に入る。

「ただいま」

「ナツちゃん、笑えたよ、無茶苦茶。」

「あんちゃん良かったね、通話ありがと、おもしろかったよ」

「こんなバカいないよね、普通ベントツは蹴らないわ」

「通話？」

「ぼそつと呟く。もうナツちゃんについてはあきらめたばいけど、ぶすつとしている。音声を聞いてたことは言ってなかったから？」

「どこまで聞こえてたのかしらんけど、ヤクザモドキつう生物イキモノな、よくいるんだぞ。」

「実をいうとヤクザが相手だと言われて本物だったことがないんだ、ボディアーマーは2つで10万以上したんだぜ」

「10万、ひいまじバカだ」

「も、最高にバカだね」

「なんかまた笑えてきた、涼ちゃんも永原さんも笑ってるわ。」

「これは緊張が解けたから笑いになるのかもしれない。」

「ナツは無然としてる、意味がわからないだろうけど。私達3人は緊張してて、ナツだけ平常心だったのでしょう。」

それから永原さんの驕りで4人で御飯を食べたわ。私は何もしてないのに焼肉ご馳走様でした。

夜、聞こえなかったところをいろいろ聞いたりして思ったの。

ナツは悪い相手には嘘もうまい、悪役に成りきるとなんでもありみたい。

例えば借用書、書き方なんか知るわけないじゃんというの。

土橋の字で、恐喝をしました、ということを書かせただけで、それを永原さんに保管させるのだった。

これはその気になれば私にもうまい嘘がつけるってことよ、要注意ね。

元ボクサーにはヤクザかどうか聞いただけで、ヤクザじゃないんだって。

叔母さんとなにを話したのか聞くと、たいしたことは話していないけど避妊をかなり念押しされたって、久美子さんらしいわ。

悪役モドキ（後書き）

一応昔の型のベンツとして、凹み具合は勝手な想像です。

心理戦

ナツゝsideゝ

株式は買いと売りがある。

買いなら上がれば儲かり、売りだと下がれば儲かる。

でも売りは口座を作っただけではできない、売りのできる口座の種類が信用口座といって、ほんとに信用がないとダメというか、文字通りなんだ。

つまりオレの場合は婆ちゃんだが、過去の実績も多額の資金もないからまずは普通の口座から始め、買いしかできない。

これは結構でかいハンデだ、株式は複数の銘柄に投資してリスクを分散するのが普通だ。

でも過去のデータを見れば景気が悪くなると相場全体が売り一色になり大きく下げる。

景気が良くてもじわじわと上がる程度なのに悪くなる時は凄まじい。

分散していても意味がない。

そこらへんを踏まえ、デイトレーダーでいくことにした。

知ってる人も多いだろう、当日に売買を済ませ、翌日にリスクを持ち越さないやり方だ。

24インチのPCモニターを5台追加購入し並べ、デモトレードを数日やってみた。

デモトレードだけでも頭で考えるだけと違いいろいろわかった。

銘柄にはそれぞれ癖があり、単純にグラフだけでは勝負できないんだ。

好みのものを12銘柄絞った、もちろん日々入れ替えたりする。

人によっては銘柄を50も100も常時チェックしたりいろいろだ、だがむかなかったので現状は12銘柄だ。

他人の情報はいらぬ、ツイッターや掲示板や怪しげな情報サイトは無視だ、ニュースとグラフと直感だけで勝負をする。

単純には勝率は50%だ、パチンコや競馬とは違う、ギャンブルでは当たり前の胴元はいないからだ。

買った値で売れば、損は手数料だけのシンプルな世界だ。

さて、朝9時が近い、勝負開始だ。

開始から、1時間。

グラフと買い板でいけると判断した、クリック、スカツたか……
買いを出したが買えなかった。

トレーダーが多数いるわけだから、狙うタイミングが似た様なものになるのは当然だ。

取り消し、取り消しできるものがない？ 買えてた、カン違いだった。

買いが集中したタイミングだったのでダメだと判断したのだが買えていた。

ある程度下がったら自動的に売るようにセットして、ここからは待つのみだ。

もう座らずに空手の型を真面目にやり、ときどき画面を見るだけ。

単純に言えばグラフの反転に合わせて買いを入れただけ、その反転が本物かどうか、これはわからない。熟練者なら方法はいくつも
あるだろうけどオレにはない。

でも極端に言えば運でもいい、なぜならダメだったときに即あきらめるだけ、おそらくどんな投資でもこれが一番むずかしい。

あきらめた時点で負けは決まってしまう、それが嫌な気分になるからあきらめられない。

これを嫌がると大負けすることが多い、それでもあきらめない
負けがどんどん大きくなる。

しかし、ある程度負けたら決断を下すことを決めていれば大負け
はない。

翌日もほぼ変わらず勝負できる、これがデモトレードで覚えたこ
とだ。

デモトレードはじめの頃、読んでいたにも関わらずこのミスをず
るずるとやってしまった。

だから最初から負けはいくらまでとか、パーセンテージで決め
りして自動で処分する設定をしておく。

勝ち負けの可能性は5分としても、負けは小さく、勝つときは大
きく。

確実というか、堅実というか、セコイといってもいいようなやり
方だ。

投資は心理戦みたいだ、勝ちたいと強く思うと負けてる時にあき
らめがつかず大きく負ける。

勝っている時は勝ちのまま終りたくなるので少し下がると売りたい
くなる。それでは小さくしか勝てない。

だから少し負けると自動売買で売るようにしておき、勝ってる時
は放置することにしたんだ。

本やブログを読みながら出した結論がそれだ、だから型や実践シミュレーションをしながらたまに画面を見る程度だ。

11時になり前場が終る、5千円程度の勝ちのまま、後場に持ち越しとなった。

怖いのはこのあとの後場の始まりまでに、ニュース等で為替や経済の指数が大きく変化することだ。

その結果日経の先物が大きく下がれば、株価もいきなり大きく下がって始まる。

為替はこの場合ほとんど円ドルのレートのことを指す、ハイテクや自動車輸出に頼る日本経済は円高に弱い。

変化はなく後場が始る。

ほぼ前場の終わりとあまり変らずの値が、午後2時近くにようやく少し上に動いた。

30分後、再び下げに転じたところで売った。

約1万5千円の勝ちだ、初めてにしては上出来だ。緊張感以外はデモトレードとなんら変わりはない。

負けるときが1? 弱の負けとして、わずかづつでも増えていけばいい。

FXのほうはちょっとデモトレードをしただけでは勝率が上がらない、これは能力も経験も足りないんだろう。

為替相場は世界中の巨大資本が複数参加する、ニュースや指標発表も1日中ある、株の個別銘柄に比べいろいろな要素があるんだ。

FXは練習中で小遣い程度の金額を売買してるが難しい。今日も最初の取引は450円の負けだ。

せこい金額だと思うだろ。でも株と違い保証金がわずかな為に何度でもできる。千単位程度でも連敗をするとすぐ数千円負けるんだ。

デモトレードではやる気がでないのもこれでいい、コンスタントに勝てるようになれば単位の桁を変えるだけだ。

ピッキング

ピッキングの練習は材料集めに時間も手間もかかる方が大変だった。

バイクで探し回り、廃屋や廃団地からをシリンダーを盗んできたんだ、同じ物では練習にならないからしょうがない。

その甲斐もありうまくはなった。

朝から株を見て11時まですることもなく過ごした、桜は隣で勉強している。

「ちょっと出てくる」

「どっくの？」

「盗聴器仕掛けてくる、帰りになんか買ってこようか？」

「見張りいるよね？」

「要らないよ、汚い格好に着替えるし、それで桜と一緒に目立つからな」

「……ふん、いつてらっしやい」

最初はオレの部屋から比較的近くの、中山元樹もとぎの部屋に盗聴器を仕掛けることに決めていた。

1人暮らしで他の元メンバー3人がときどきここに集まるからだ。

中山は仕事の時間が普通の会社員なのでわかりやすい。

ぼろいアパート前、人通りがないタイミングではじめる。

作業用のツナギに似た色の帽子、専門家が見なければ水道や電気
の作業員に見えるような格好だ。

こういう格好は人の記憶に残らないのがいいらしい。いてもいなくても誰も気に止めない、空気になれるわけだ。

一応ノックして電力計の速度が緩いのを確かめる。10秒弱かかったが安アパートの鍵はあっさり開いた。

臭いし汚い部屋だ、1DK程だがキッチンはともかく部屋の方が汚い。風呂なしの道場生の部屋でもこんなに汚くないぞ。

新聞、新聞といってもスポーツ新聞とか競馬新聞とかだ、なぜ床にあるんだ？ エロ本、エロDVD、パチンコ雑誌。どっかにまとめろ。

食いかけのパン……うかつになにか触ると今にもゴキブリとか出そうだ。

うんざりしながらコンセントのタップをみる、よし、標準的な型のやつだ。

持って来てるのは、標準的なタップの型の色違いを2個、無駄にならず良かった。

これが市販の盗聴器なんだ、電力は当然コンセントから取るので電池切れにならない。

ちょっと高いが自作まで勉強するのもバカバカしくてこれにした。タップを入れ替える、これだけで終わりだ。ほこりまでつけるのは面倒だし、そこまでせずとも気づくことはないだろう。

届く電波も短く、せいぜい数100メートルだ。存在をチェックしたり、運よく電話や友人との会話が聞けたらいい程度だ。

これで問題はない、鍵を閉め、完了。わずか5分足らずだ。

はつきり言って犯罪とかより、汚すぎて足の踏み場がないのが嫌だった。

さて帰って株式の後場だ、やらねばならないことが腐るほどある。

午後6時すぎ、バイトに行く時間だ。

バイトは電車で4駅のマスターが趣味丸出しでやっているようなバーだ。

マスター自身がしぶい2枚目で、従業員もイケメン揃いだ。

当然女性客が多いというか、8割以上女性客だ、これには桜がかなりむくれていた。

しかし他のバイトは見つからない事情を話しあきらめて貰った。もし見つかったも16歳で稼げる仕事なんてない。

面接してすぐに髪型や色、眉毛を少し細くしたりまで指定された。

明るい色がいいといわれ数色からオレンジにした、他はピンクほいのとか黄色とかだぜ。

帰って桜にオレンジ頭を見せたら飲んでたお茶を吹きやがった。

理由は色だけじゃないけど、仕事をするというのはおそろくどんな職でも大変なんだなと痛感する。

いいこともあった、お酒について楽しく学べたことだ。これは変な経験一度だったオレにはありがたい。

まず弱いと思っていたのが、そうでもないということがわかった。

マスターのセンスの良さなのか、洋酒だけじゃなく日本酒や焼酎、泡盛まで置いてあるのだがどれもおいしい。

カクテルを作るのもおもしろいんだ。

でもシヨウのように踊りながら、酒のボトルをクルクル廻したりして作るのは気が乗らない。

やりたくないから教えてもできなそうに鈍いフリで誤魔化したけど、マスターにはバレてるだろう。

普通に作る方が楽しい、ジンをベースにしたものに偏ってるが、いくつかお気に入りのカクテルもできた。

飲めることはわかったけど、外では量は飲まないことに決めた。おいしく飲めることがわかっただけでいい。

焼酎にしても日本酒にしても、2000??も飲むと酔って動きが鈍くなる。

何度かのテストでそういう結論がでた、わずかに酔う状態、オレはわずかでも弱くなる要素は要らない。

部屋で飲むのは別なんだが、外ではまったく影響のない50??しか飲めない、味見程度だけどこれが結論だ。

お客について少し言うと、20代がメインで30代がちらほら、自称40代はいない、半分以上がOLさんだ。

昔から年上には好かれるほうだけど、口下手だというとマスターに指導された。

内容は女の目をちゃんと見てから笑うこと、これだけやれと言われた。

それだけで嫌なことになった、ホールを歩けば尻を撫でられ、ときどき抱きつかれたりする。

しかも害意がないから避けにくい。オレは殺気みたいなものだと敏感なんだ、今では後ろからでも避けられる。

でもこういうのは別だ、好意を抱いてこられると反応しない、そういう客はケバイし臭いし最悪だ。

指名が増えて自給が2千円を超えたけど、正直微妙だ。

他にもわかったこと、オレはどうやら淡泊みたいだ。いや、肉体的にはそうじゃないけど精神的なことだ。

繁盛してる店だから、実を言うところちょっと好みの子もいたんだ。

ところが見た目や性格が好みでも気持ち動かない。

桜のときとケースとしては似たようなものなのに、自分でもここまでだと思っていなかった。

桜を失いたくないから我慢する、浮気についてはそう思っていたんだ。

ところが据え膳でもしたくならない。

でも桜にはそこまでだと言わない、言えない。

いつものごとく先輩達が言っただことだが、そもそも1000? 安
全な男なんてダメなんだそうだ。

たまには妬いてる顔も見たいし、今のままでいい。

店が終るのは深夜の1時半、店で着替えた後走って帰る、10キ
口足らずで高低差も少ないので自分で高低差を付けている。

頭をセットするからヘルメットを被れないし、ランニングの時間
が他に作れないから丁度いいんだ。夏休みの間は週に5日、金曜日
曜以外はバイトだ。

公認

桜は止めてもときどき店に来ていた、今日も藤川ときている。

せいぜいちよつと親しい客としての対応しかできないから、楽しくないだろうにと思つてたのだが……予想外に楽しんでいる。

「ナツちゃん、3番テーブルお願いね」

……説明せねばなるまい、実はマスターにはナツちゃんなどと呼ばれている。

最初のナツキちゃんに抗議して余計悪くなった……呼びやすかつたよつで再抗議は却下された。

マスターは多分オカマなんだ。2枚目のいい男なんだが仕事中の喋り方はこうだ。面接では普通だったのに。

よつするにこの人は趣味と実益を兼ねて顔で従業員を選んでいるのではないか？

別に実害はない、悪い人でもない、ちよつと呼ばれかたに抵抗があるだけだ。

考えて見れば当たり前だがオカマだつていろんな人がいる、この人は若い男を見ているだけもいいのかもしれない。

もちろん相手もそうならいいのだろうが、こういう店で働くような男に女好きはいても男好きはまずいないだろう。

道場生にもオカマはいたことがあるが欲望に正直でわかりやすい人だった。

でもマスターはよくわからない、最初は客受けを狙った演技なのかと疑ったくらいだ。

このマスターとオレを見てるだけでも価値があるとか桜は言う、かなり笑えるらしい。

女というか笑いの感覚というのはよくわからない。

人が仕事してる側でクスクス笑う2人、なんとも言えない気分だ。

笑いながらオカワリ、とか言われると、うるさいわと言いたくなる、桜は飲み過ぎだ、16歳のくせに調子に乗ってる。

こんなカウンター近くのテーブルに陣取りやがって、藤川は藤川で桜が酔ってるから連れて帰ってと頼んでも楽しいから嫌だと言いやがる。

もう勝手にしてくれ、新宿2丁目に飲みに行くOLがよ、16歳でそんなことすんな。

夏休み中これが続くのか、すぐ飽きるよな？

でもこの日2人は結局閉店まで店にいた、しかも桜が信じられない程酔ってる、タクシーで送っていくことにした。

「こんばんは、はじめまして」

桜の叔母さんだろう、玄関に立っている。37歳と聞いていたがとても見えないぞ。深夜だし化粧はしてないだろうに若く見える。

「はじめまして、いらっしやい。叔母の沢中久美子です」

「大沢夏樹です」

藤川に携帯で酔った桜を送る連絡を入れて貰っていた。オレの部屋に藤川まで泊めるのは抵抗があったんだ、予備の布団なんてないし。

ほとんど完全につぶれた桜を抱えるように、入っていく。

先導する沢中さん、桜の父親の妹で子供がいないことや元バレリーナで、桜にとって親以上の存在だと聞いている。

オレのことはかなり話しているとは言っていたが、どこまで話しているのかは聞いていないんだ。

桜がつぶれた状態であまり話したくはないがどうしようもない。

後ろから藤川も入ってくる、こんなに酔っかけていては藤川も自宅に帰れないのでここに泊まっていくことになっている。

「3階までお願いね」

「はい、お邪魔します」

自分の立場が何とも言えない。

そもそもオレの働いている店での飲酒だ、来るなどいつても来るとし、飲ませたわけではないしむしろ止めた、できればもう飲ませたくないくらいだ。

でもこの人から見たらオレが飲ませたことになるだろう、気が重い。

オレも酔って寝てしまいたいぞ。

先導されて桜の部屋まで連れて行く、とにかくベッドに寝かせて帰ろう。

初めて入る桜の部屋だが、ゆっくり見る余裕なんかあるはずもない。

「ううん……ナツ、お休みのキスして」

やめてくれ、お前の叔母さんと藤川がいるんだよ。

酔っ払いめ……普段そんなこと言わないくせにこんなときになよ。

「……お休み。藤川、あとよろしくな」

汗が出そうだ。

「藤川さんも眠いのかしら？ こじでいい？」

「はい、すみません、かなり酔ってます」

「そうみたいね、じゃあお布団用意するわ、大沢くんはリビングで待っててね」

「いえ、遅いですし、帰ります」

「お話があるから、待ってて欲しいのよ」

そうくるよな………どういう話だろ。

「はい」

待つこと5分、藤川はよく来るんだろう、勝手に水を飲んだりしている。

「藤川、どんな話わかる？」

「うーん、変なことじゃないよ、多分ね」

………うーん。

「おやすみ」

「おやすみ」

かなり酔っ払いに聞いたのが間違いだった、なんの参考にもならんぞ。

さらに待つこと約5分、こういうの初めてだからなんとも嫌な時間だ。

まともな家庭とかお付き合いとかを知らないオレにはどうしていかさっぱりだ。

救いは桜の話の通り沢中さんが碎けた感じの雰囲気だったくらいで、威圧的だったならとつくに逃げ出していたかもしれない。

「お待たせしてごめんなさい」

「いえ」

沢中さんはテーブルの向かいに座った。

「大沢くん緊張してる？」

「はい、かなりしてます」

「こういうときはなるべく正直にいくしかない、まずいことは別だが。大麻とか喋ってたりしないよな？」

「そうみたいね、なにか飲む？ 私は少し失礼してお酒を頂くわ」

うーん、どう対応していいやら、怒られるとかじゃなさそうだ。

「……少しお付き合いしましょうか？」

「いいわね、男の子はそうじゃないと、ブレンダーの水割りでいいかしら？」

「はい」

ジャブくらいのもりだったのだが、さすがに実質桜の親だけのことはある。こっちが16歳とかどうでもいいようだ。

「はい、乾杯」

「乾杯、いただきます」

味なんかさっぱりわからない。

「いつも聞いているから初対面の気がしないのよね、ほんとにあの子がメンクイなんて意外だわ」

「……はあ、自分では嫌いな顔なんですけど」

「そのままなにもしなくても俳優くらいなれるわよ、もったいない」

「……話が見えてこない。」

「もし顔が自慢できるくらい好きでも芸能界とか興味ないです」

「将来は何になりたいとかあるのかしら？ 強いよね？」

品定めというやつなのか？

「武道は生き方ですから見世物にする気はありません。まだ決めていませんが、整体や鍼灸に興味あるくらいです」

「ほんとに聞いてたとおりに、そういう話聞いていると男らしいのね、顔まで違って見えてくるわよ、会ったことないタイプだわ」

「あの、首治しましょうか？」

さっきから気になっていた首や肩の黒いもや。話題を変えたかったのもある。正面から話しをするとやりにくいのもある。

「……あら、ほんとに見えるのね、頼めるかしら？」

「はい」

「こついうのも話してるんだな。後ろに廻り首の下辺りに左手を当てる。」

む、谷間が見える、この人痩せてるのに巨乳だ。……この角度はまずい。

椅子を引いてきて座りながらやることにした、見てはいけないものを見たというか。

雑念が入るとできる気がしない、もしかして桜もこうなるのかなと想像してしまっただじゃないか。

首のカーブが少ない気がする。背骨はS字にカーブしてるのだが普通より少ない。

まあこの程度だと10分はかからないな、誰と会っても黒いとまずそこが気になる。

小さい頃から嫌いだった人ごみがこれでさらに苦手になった。

「あの子よろしくね、バレエも本気でやれば才能あると思うのだけど一度も本気にならなかつたわ、あなたにだけは本気みたい」

「オレも本気ですが、桜はしっかりしてて実は既に頭が上がりません」

オレの顔赤くなりっぱなしかな、赤面だけはコントロールできない。

「あらあら、羨ましいくらいね。そうだわ、大沢クンも泊まってるきなさい」

「いえ、猫がいるんで帰ります」

「そうだったわね、残念、新婚さんみたいなところ見たかったのに」

……怖いことを。

「……終わりました」

「あら、ほんとに痛みがないわ、凝りも取れて軽いしおもしろいわ、ありがとう」

ぐるぐると腕を回したりして喜ばれてるのがゆさゆさと揺れていて目のやり場に困る。叔母さんだと遺伝的にどうなんだ？ 性格は少し似てる気がする。

「いえ」

「ほんとにテレ屋さんなのね、下まで送るわ」

「ご馳走様でした」

玄関で少し話し、首のことを伝えたり、最期には避妊のことまでしっかり言われた……。

親公認になってしまった、テレくさいというかこそばゆい気分だ。

おもしろい叔母さんだ、あの人は自分に正直に生きてきたんだろ
うな。

しかしほんとになんでも話していそうだ、明日とか女3人になるとどんな会話をするんだ？

ちょっと想像して怖くなった。

公認（後書き）

一 応補足 新宿2丁目、オカマ街の代名詞みたいなものです。

スイッチ

藤川にしょぼいケンカを頼まれた。ヤクザとかアホなこと言うてる。

話の流れで桜に防弾防刃装備の説明をすることになる、別に隠してたんじゃないぞ。

中学の頃のオレはケンカの助っ人やイジメ返して食費を稼いでいたけど、その延長気分で買ったんだ。

日本で生活してて最大の仮想敵といえはヤクザだ、そいつらと戦うのに備えるのは当然だ。

映画みたいにマシンガンでも持つてるならともかく、ハンドガンと刀しか持ってないんだ。

防弾防刃装備なら武装ヤクザ10人くらい楽勝だぞ。

もし頭に当たれば死ぬかもだけど、練習するところが海外しかないんだから上手い奴なんて滅多にいるわけがない。

常に動いてりゃ当たらないはずなんだ。

わざわざ自分から揉める気はないけど、必要がきたらしようがないだろ。そこらの店で急に買えるものじゃないんだ。

待ち合わせの駅にいくと永原信也がいた、藤川の幼馴染で、藤川には、あんちゃん、と呼ばれている、同じ高校の2年だ。

藤川の説明によると柔道部に在籍していて、柔道部の主将にお小遣いを脅し取られているそうだ。

柔道部全体がそいつの子分みたいで、本人も怖いらしいが親がヤクザというのがさらに怖くて警察や学校に言うのも嫌らしい。

今日もお小遣いを渡しに行かなければならないとか。貯金もとうにつき、もう頑張っても出せないとこぼしたそうだ。

妹分の藤川的には自殺でもしちゃうんじゃないかと心配している訳だ。

そんな事情で、永原の格好だけ聞いて1人できた。

こんなときまで付いてきたがる桜に最期には怒鳴ってしまった、いくら尻に敷かれてようが言うときは言う。

気が弱いか、なんというか人の良さそうな顔だ、177?、65?くらいかな、体格は悪くないのに。

まあオレが顔のつくりでこんなことを思うのもあれだ……。この人がややタレ目だからか。

「どうも、こんにちは」

「こんにちは」

「事情は聞きましたけど、ほんとにやっていいのかな？」

「……はい、えと、もう限界なんで出来ればお願いします……あの大丈夫ですか？」

これは思い詰めているのかもしれない、もう藁にもすがるといって感じた。

まあオレも見た目でいうと藁なのかな、そっぴや頭もオレンジだしなあおさら藁か。

「だいじょぶだいじょぶ、でもオレ荒っぽいよ、まあそこは許してね」

「……」

「やるときは怖いかもだけど、余計な口は挿まずに堂々と見てて、相手がとことんびびらないとまたやるうとするからね」

「はあ……」

藁がという言葉、まともに聞けるかな？

藤川から話を聞いた後、恐喝の証拠は一応欲しいなと言うと、携帯を使えばいいと怖い2人組にそそのかされた。

オレの機種は古くてそんな機能はないから桜の携帯と交換して持ってきてる。

「まず作戦ね、相手に会う、お金ないという、脅される、証拠欲しいのでそれを携帯カメラの動画で撮ってね」

「はい」

「カメラはそいつに向けなくても大丈夫だから、それ使って逆に脅してケンカできるところに行こう。」

助っ人呼びそうならいくらでも呼ばせて、子分だけあとからつても面倒だから、これでいい？」

「……はい」

「近くで撮影できそうならオレもやるから、撮れたら合流する、それまでがんばって、携帯の準備できたら行きましょう」

「……はい」

不承不承だがなんとかやる気になったようだ。

永原は、駅からわずかなところにあるゲームセンターに入った。

「すみません、今日はお金持ってこれませんでした」

ゲーム機の前に座ったままの土橋という太った男に頭を下げなが

ら、ほとんど本気で謝っている。

多分、体重120?とかあるんじゃないだろうか。

柔道部主将3年ね、一般的にはでかくて力もありそうで怖いというんだろつな。

オレにはどうみても弱そうなデブだ、こういうのは見た目にびびってるからやられるだけで、先にがつんといけばいいだけなんだけど。

寝ても立ってもまともな速度で動けんだろつ、おっと撮影しとこ。

「てめえ、こないだ持ってこねーの見逃してやったろつ、またヤキ入れられてえのか」

簡単でいいな、これでOKと。

「すみません、次はがんばります」

「永原さん、もういいよ、大丈夫、ばっちり撮れた」

土橋の前までいく。

「なんだ、おめえ」

「えつと、猫の味方でブタの敵? かな」

「ああん、てめえ、なめてんのか!」

「いやいや、これでブタクんの恐喝現場撮影したんだ」

携帯を見せながら教える。

「あ？」

脅すような、あ、だ、理解遅いな。

「このまま警察に持っていってもいいんだけど、ブタクんはこの携帯欲しい？」

「……なんだと、寄越せ」

寄越せってお前、ほんと飲み込みが悪いな。伸びてくる手をかわし、ちよつと距離を取る。

「人のいないとこ、いかない？」

やっと立ち上がった、192?、体重130?近いかも。肉の壁、どこまでも動作の鈍そうなブタだ。

むかつくことだが、オレの顔はただのやさ男だ、ごつ男が言っても来ないかもしれないがオレなら来る筈だ。

いまは怒りは殺しとく。経験的にスイッチの切り替えはうまいものなんだ、入れるほうに比べると切るほうはちよつと下手だけど。

「学校の近くの橋の下でいいかな？」

「おう、行ってやるつじゃね〜か」

「よし、いこいこ」

しかし、ブタのサンポって大変そうだな、待つのが疲れる。

お、携帯ピコピコしてる、さて何人来るかな、ブタに人望？ なんてあるんか？

永原のあんちゃんを先頭にしてゆっくり歩いた、ゆっくりしかないからだ。

相撲取りと同じような体格の、ただし、体脂肪率は相当違うだろ。動きが悪すぎる。

これはつまらない、ただのイジメだ、いや動物虐待か。

よし、今日はローキックの日にする、それしか使わない。

「ついたね」

いつもの橋の下には誰もいない……。

「おう、ケータイ寄せ」

「いいよ、永原さんからいくら脅し取ったんだっけブタクん、それプラスこのケータイ代も頂くけど、それでいいかな？」

「永原さん、いままでいくらすか？」

「てめえ、殺すぞ」

ぬつと汚い右手がオレの胸元に伸びてくる。

つい反射的にその右手の手首を掴み、内側に捻る、肩関節をロツクした程度、触ってしまったぜ。

「うぎゃ〜」

ローキック、60？左、膝上の一番痛い場所だ、とにかく痛い。

ブタは当然そのまましゃがみこむ、携帯で音声録音だけしていたのを切った。

てめえ、殺すぞ、で十分だろ。

こんな汚いものを触ってしまった、ちょっとくらい狙いが狂ってもそのまま蹴ればよかった。

「ブーブーうるせえ、黙ってる。誰も来てね〜じゃね〜か。」

ブタには人望はないんですってか、ブタのサンポに付き合っただけでつくり歩いてこれかよ。

5人くらい来てんじゃね〜かと期待してたんだよ」

「永原さん、困ったな、誰かくると思っつ？」

「……え、えと、どうでしょう？」

そこまでびびった顔してないで堂々としててくれ。

「こいつ、まじで人望無しすか？（堂々としててね）」

もちろん後半は耳打ちだ。

「はい、すみません、わかりません」

違う……。

「そつすか、もうちょい待ちましょう、来なきゃあきらめて、親呼びましようね」

およそ5分後、1人来た。

おお、人望ならぬブタ望なんてものがあるのか、はじめて知ったぞ。

おそらく意味もろくにわからず寄ってくるのはコブタだった、172？、90？弱ってとこ。

「ツ、ツチさん、永原、どうなってるんだよ」

「……おう」

ブタめ、おお、じゃねーだろ、まだそついう強者のフリをする余裕があるんか。

こついうのを盗人猛々しいというのか。……多分、違うな。

「おめえか、なんだ、お」

コブタにおめえ、と言われた気がする、名前を呼ぶ声の響きで子分1と決めつけたぞ。

「うるせえ、ブーブー喚^{わめ}くな」

「ぐわう、うがっ」

コブタにはローキック50？左右だ。速度優先で座る前に一気に叩き込む。

ちよつと回復してきたブタの右腕関節をロックして引っ張り、少し起こして。

「あうっ」

ローキック50？右。

くそ、ローキックだけは無理があった。

まじで触りたくねえ、ブタが泣き出した、こんなの、同情心なんか1???も湧かないぞ。

お前に触らなきゃならないオレのほづが可哀相だ。

「泣くな、ブタ、他にも来るのか？ 待ちくたびれたぞ、退屈なんだよ」

「……来ましえん」

「まじかよ、ほんとにどうしようもないブタだな、使えねえ」

イライラした口調はわざとだが、もう子分はあきらめよう。

ほんとにイライラしてきた。こういうときは自分でテンションを上げて悪役に成りきるのだが、やっているとほんとに腹が立ってきて止まらなくなるんだ。

「永原さん、金額計算終った？」

「……はい、はい35万です」

「ブタ、35万返せ」

「……ありません」

「借用書だな、ブタ書き方わかるか？ 永原さん、わかりますか？」

誘導しながら、最期には血判で判子代わりにさせた。

もちろんハツタリだ、オレがそんなものの正式な書き方を知るわけがない、紙だつてただのメモだ。

どうせこんなバカはそんなことを後で調べることもしない、1〜2年も通じるハツタリで十分だろ。

自分で犯罪をしたという文書を書かせただけだ、忙しいし学年も違うから目が届かない。

植えつける恐怖は少しでも多いほうがいい、借用書などといった、金は返して貰ってもこれを返すつもりはない。

ようするに、恐喝しましたという直筆の文章だ。

「親父呼びだせ、ブタ、出たら代わるぞ、一応返す気があるかどうか聞くからな」

時間が経ってきたので、今度はローキック40？右だ。

父親が怖いのか？ アホめ、今はオレだけ怖がって泣いてる。

「どうした？」

携帯からの声は多分ブタの親父のほうだ、一呼吸して、気持ちを切り替えブタケータイで話す。

「こんにちは、土橋さんですか？」

「誰だよ」

「息子さんと同じ学校の生徒です、実は息子さんが恐喝をしてましてね。」

息子さんは遊びに使ったようなので、お父さんに代わりに35万返して頂きたいのです。」

多摩代3高校側の橋の下にいます、証拠も全部あるので来て貰えませんか？」

「……お前、なんて名だ」

「大沢といいます、来られますか？ 警察のほうがいいですか？」

「息子にかわれ」

「ピーピー泣いてますからね、お断りします、遅くなるようでしたら警察に連れていってくださいですのでどちらでもいいですよ」

「……行くよ、待ってる」

「お待ちしています」

電話を切る、ブタケータイはそのまま返さずに持っておく、さて、35万なんて急に持って来れるかな？

コブタが回復してきたがいや、見学している。痛いから走る」とは出来ないだろ。」

「ブタ、おめえの親父、仕事なんだ？ やくざじゃねーだろ」

「……土建屋です」

「だろーうな、やくざらしくねえ、本物の中年ヤクザはガキにああい
う口はきかねーだろ、誰にでもイキがるヤクザモドキだ」

しばらくして、黒いベンツで現れたのは、やくざぽい格好をした
デブな中年親父1人と30代くらいの男が1人だ。

デブ親父は息子よりわずかに低くて体重がかなり少ない、息子が
デブ過ぎるんだ。問題は30男でどうみても弱そうだぞ。

これは酷い。

「こら、大沢ってのはどいつだ」

「オレだよ」

「島さん、頼みます」

「はいよ」

30男が構える。ああ、そういうことか。

見た目はボクシングの本格派だ、身長175？、重さが70？強、

元プロボクサーだろう。

引退しても少しは撰生しろよ、いきなり正面から飛び込んでくる。

アホか、リーチ差考えろ、フェイントもないってなんだ。

右ストレート、後ろに軽く引き空を切らせる。

意外に軽快なフットワークだ、追い撃ちは左のフック、狙いはボディだ。回り込むように後ろに下がる。

お互いに目は合わせたままだ。2発の空振りでようやく少しはわかったか？

大きく踏み込んでの右ストレートがくる、わかっていない、頭が悪すぎる。

顔にくる拳をギリギリを見切り手首をキャッチする、なめられすぎにむかつてローキック80？右だ。

体重のかかっている左足の膝上だ、崩れるように座り込む。

「ぎゃ〜」

痛いだろ、おっさんが現役ならライト級くらいか？これはヘビー級の蹴りだ。

オレの体重はヘビー級まではないけど、蹴りだけなら並のヘビーより重はずだ。

「おっさん、フェイントもなしってなんだ、大昔にボクシングやってたくらいで調子に乗るなよ、弱すぎのアホすぎだぞ」

「……」

次にモドキ親父に踏み込み、ローキック左50?だ。

こっちが、こらだろうが、ずうずうしいヤクザモドキめ。

「ぎゃう」

今度はおっさんボクサーを起した、右腕をロックして引っ張り、ローキック70?左。

「ぐわっ」

「大人しく見てろ、もう動けねーよ」

ボクサーの名誉のためにいうと、体重で10?以上違う。しかもおっさんの体格的にボクサー現役当時は60?前後だ、20?以上のウエイト差。

それが何階級差かは知らないが、現役当ても問題になるわけがない。

加えて自信過剰なバカだ、オレが本気の左右ローキックを入れたら数日はまともな足が動かないはずだ。

モドキ親父を起す、ローキック50?右、離すとそのまま崩れる。

「うがつ」

「チンケな奴連れてくんな、弱すぎておもしろくねーだろ」

「……」

痛くて喋るところではないのもわかる、1人で来て、第一声が息子怒るなら蹴られんですんだだよ。

モドキブタめ、こいつが一番悪いな、無駄に年だけとればエライとでもカン違いしてるバカ中年め。

「土建屋の親父がヤクザの真似してるから、こういうバカ息子が出るんだよ。自分の親父がヤクザだと言って後輩を恐喝するブタがな、全部おめえのせいだろうが」

ブタ親父を立たせた、ローキック40？左、息子も立たせてローキック40？左だ。

弱いローキックでも重ねると数日立てないくらいになる、ブタ親子は自重もでかいから、当分動く気にもならんだろう。

嘘も全部見てたコブタが勝手に宣伝するだろうから、恥ずかしくて休み明けに学校来なくなるかもしれないな。

恐喝ブタなんて高校中退でもいい。

「土建屋、35万返せ」

親子揃ってすぐ泣きやがる。

痛みか恐怖か知らないが、震える手でサイフごと出してくる。

これを丸ごと受け取ると、たしかこっちが恐喝になるんだっかな？

まあ、知らない奴から見たら恐喝みたいなもんだが。

「自分でお金出して、私が土建屋なのにヤクザのマネなんてしているから、息子が恐喝するようなバカになりました。永原さん、ごめんさい、35万お返しします。こう言え」

「……ひゃい」

「痛いのが治まるまで待つてやるから、ちゃんと言いなさい」

中身が子供なんだから、子供扱いで十分だ。

5分待った、ちゃんとかわせて永原さんに直に35万ちゃんと渡させた、それも目の前で録画した。

説明するとこんな録画はたいした意味はない、相手への心理的なことだけだ。

オレは高校などどうでもいいからここまでやるが、心理的に保険をいくつか重ねとけばまず問題にならない。

ブタケータイを地面に落とし目の前で踏みつぶす。

ようはどこまで無茶をやり、こいつは怖いと思わせるかだ。

卑怯な奴のよくやる手口だが、経験的に同種にも有効だ、特に強くて無茶でもなんでもありだと怖いはずだ。

嘘つきの卑怯な奴でもとことん逆らう気力を奪えばいい、そうすれば後々もなにも画策する気すらなくなる。

「ブタ親子、ちゃんと反省しろ、それから、ベントツな、ドア一枚貰つとく、息子が永山さん殴った慰謝料分な、わかったか？」

「……はい」

意味はこれからわかるんだよ。

さて、ベントツのドア、どのくらい凹むかな、ちょっと助走をつけた横蹴り全力だ。

横蹴りは最も体重が乗る重い蹴りだ、ほんとは足刀だがここは足裏全体で蹴るしかできない、下手をするとオレの足が故障するからだ。

これは自分でも想像しか出来ないが、多分1?強の衝撃だ。

車全体が浮き上がり揺れる、元の位置とあまり変らなかった、思ってたより移動しないものだな、失敗。

ベンツのドアはこれでも15?くらいしか凹まない、すごいな。まあ1度やってみたかったんだ。

別にベンツのコマーシャルをするわけじゃないが、安い車のドアだと4~50?はすぐ凹むんだ。

「永原さん、帰ろう」

「は、はい」

ほんとはもっとわかりやすく動かすつもりだったのだが、タイヤの摩擦力に負けて浮いたわけか……頭悪いな、オレ、ちと恥ずかしい。

そういえば、ボロい車はタイヤもボロだったかもしれない。

雨の日に頭から人に泥水をぶっかけ逃げた車、逃げるなら信号で止まるな。

走って追いついてガラスをノックしても無視したバカ、信号が変わるとまた逃げようとしやがった。

むかついて思い切り蹴ったら車の後ろが中央のガードレールに当たってしまった。

蹴った後部ドアもかなり凹んだが、ガードレールに当たった側はどうなったかも知らない。

当然こちらが逃げるはめになったからだ。あの時は腹も減ってたからイライラしてて、あれはちょうどいい食費になるはずだったんだ。

……雨だし動いてた、ぼろタイヤ、条件が違いすぎる……桜には言えないな、あいつならやる前からあまり動かないことくらいわかるだろう。

部屋まで戻った。

KY猫が2匹で永原さんにまとわりついてているが、猫に慣れているのか気にしてないぽい。

「ありがとうございます」

ほっとしたのやら、オレが怖いやら、なんとも言えない表情だ。

「怖かったでしょ、まあ土建屋で良かった」

「……すみません、怖かったです」

「それが普通だから、謝らんでいいよ」

「あの、ローキックしか蹴らなかったのはなぜですか？」

「下がコンクリでしょ、殺すのが怖くてね、オレビビりだから」

一応、なごまそうかなと思ったんだ。

「うは、あの俺も習いたいです」

目が変わった、先輩におもつのもあれだがちゃんと男だ。オレがガキの頃もこんな目をしてたのかな。

「オレのいつてる道場くる？ こついう性格悪いのが10年も続いてるんだ、師範の性格がよくてね」

「はい、お願いします」

「うん、最初はね、ローならローだけ徹底してやるといいよ、道場ではいろいろやるけど、それ以外ではローだけやるとか」

「はい」

「まずは武器一つでいいから徹底するといい、何を選ぶかは師範と相談して」

心の持ちようだからな、一つ極めるほうが早い、使うとか使わないとかではない。

自分に自信が持てるかどうかだ、オレも最初は横蹴りだけやって

いた。

「あの、本物のヤクザだったらどうしたんですか？」

「本物だったら自分で息子殴ると思うよ、こっちにも謝るくらいはするんじゃないかな」

「マジですか」

「うん、だからそれでお終い。本物なのに息子殴らんかったら、もうダニとかゴキブリ扱ってことで、半殺しにして入院させたかな」

「うは」

「退院したらまた行くね。泣きいれるまでいく。……そっぴや道場にはヤクザもいるよ。」

見た目怖いけどいい人だから」

「……はい、オレ、頑張ります」

「うん、がんばって」

いい顔だ、やった甲斐はあったかな。

「ただいま」

桜達も帰ってきた、女2人はついて来るとうるさかったんで遠く

から見させていたんだ。

もしも本物だったときに見られなくなかったからだ。

「ナツちゃん、笑えた、無茶苦茶。あんちゃん、良かったね、通話ありがと、おもしろかった」

藤川、興奮してうるさいわ。ナツちゃん、じゃねーだろ。ちょっと感動してたのにだいなしだ。通話？

……携帯で音声も聞いていたのか？

そこまで音拾うもんか？

「こんなバカいないよね、普通ベントツは蹴らないわ」

桜までうるさいっての、最低あれくらいやんないと怖くないんだよ。

……くそ、聞くなら聞くって言っとけ。

3人とも笑ってやがる、なんだこれ。

まあいいや。腹へったな。

「さて、リッチな永原さんのおごりでメシでも行くか？」

「いくいく」

藤川、元気だな。

「はい、行きましょう」

「いいね」

藤川のリクエストで焼肉をゴチになりました。半分出そうかと思
ったけど、永原さんはずっとここにこしてたからやめたよ。素直に
奢られるほうが気分もいいだろう。

夏の終わり

夜の9時前、中山の部屋の近くの公園で素振り用の木刀を振っていた、1?ほどの重い木刀だ。

中山の携帯に電話が掛かってきた、ポケットの受信機からイヤホンだけ出して聞いているんだ。

今なにやってんだ? とか、こいこい、とか聞えてくる。

こいつの友人は高橋や斉藤、鈴木といったまともな生活をしているほうの元メンバーだ。

他にはほとんど人は来ない。

4人でつるみ酒を飲みながらマージャンをして、パチンコや競馬の話をしていることが多い。やはり他の4人とは交流がない。

部屋の近くまで移動して様子をチェックする、久しぶりに顔を見おきたかった。チェックはできるだけしておきたい。

あまり機会もない、多分3人で来るはずだ。

待つこと15分、コンビニ袋を提げたりしてる3人組が来た、中身は酒やツマミだろう、顔だけしっかり確認して公園に戻る。

こいつらの話は何度か聞いたが、ほとんどがギャンブルの話、2
0代前半の元不良つてのはこんなものかと思ってしまう。

悪事の相談もしないし、エロい話もあまりしない。

仕事の愚痴やギャンブルで負けた話が多い鈴木、自慢話しが鼻に
つく斉藤、やや無口な高橋、いつもと変わり映えない会話。

逆に虚しくなる、まだ集まったままだが帰ることにした。

聞いているとイライラしてくる。

近くにいと殺したくなる、こいつらはいつでも殺せる、この4
人だけなら今すぐにでも楽勝だ。

もちろん証拠すら残さないでだ、事件となり他の4人の耳に入ら
ないようにする方法があるなら教えて欲しい。

「ただいま」

「おかえり」

新しい発見などは特にないということだけ報告する。

「資金のほうはどうなの？」

「順調だよ、んと、勝ち分はいまのところで8万か、月末で130万
になるかな」

株式をはじめて1ヶ月ちよいで9万の勝ち、FXではマイナス8千円だ。そろそろ8月も終るし、バイト代と節約分で42万以上は追加できる。

合計130万、2年がんばればいくらになるだろうか。

山の中は物件そのものは少ないが、安いものだと300万くらいだ。

住む家ではないから条件さえあえばボロくてもなんでもいいんだ。

普通でも500万くらいである、ただもうじき新学期だからバイトは終わりだ。

盗聴器を仕掛ける2軒目は小早川真治に決めた。

中山の交遊は元メンバーのうち3人以外とはない。

残り4人のうち、条件面で小早川を選んだ。サブリーダーだったみたいだし長谷川と仲がよい。

ほんとは元リーダーの長谷川を盗聴したかったのだが、やつの家は人の出入りが激しくて難しい。

長谷川は母親も同居しているが多分仲は悪い、人の出入りは女が多いが男もいた、外人のときもある、ごつい黒人の男だ。

小早川の家はかなり汚いが3DKくらいありそうな平屋で、現在は1人暮らしをしている。

最初は他にも同居家族がいると思っていたのだが、いつチェックしてもいなかった。

出て行ったか亡くなったか入院なんてことも有りうる。

こいつの場合は仕事のほうは不定期なのだが、競馬バカで近所の競馬開催日に必ず出かけるのでわかりやすい。

日曜日、例の汚いツナギと帽子に着替え、小早川が競馬に出かけたのを見送る。

明るいところで見るとなんだか20代前半に見えない。

もともと老け顔だが服もじじくさく汚いんだ、競馬場というのはあんなに汚い格好でいくものなのか？

行ったことがないからわからないが。

まあいいや、始めよう。

鍵はボロすぎて少し苦勞してしまった、内部に錆びでもあるような、錆びはないか、磨耗まてうしているんだろう。

家の中は少し黴臭かびくさい、1人暮らしに慣れててこの状態なのかわからない。

寝てると思われる部屋にはナイフが3本、目立つ場所に飾ってある、香織からこいつにナイフで脅されたとは聞いていた。

腹は立つが何もできない。

どこも半端に使用している感じで、主に生活している部屋がわかりづらい。

居間なのか自室なのか判断がつかないが、悩んだ結果居間のほうにした。

ところがタップで標準の物が無かった。コンセントからコードで伸びるタイプを2つ使用してるだけだ。

あまり使われてないコンセントに挿すくらいしかなかった。

どこに行っても売られてる安い型なので、神経質でないかぎりこれでも不自然には思わないだろう。

あの服装やこの家の惨状を見る限り大丈夫だと思う。

鍵をかけて退散する、10分も掛かってしまったが今頃小早川は競馬場に向かう電車の中だ。

9月になり学校が始った、まあオレは初日は当然さぼりだ。

授業が無いから行く意味がない、昼過ぎにメールがきて桜を迎え

にいき、株が終わり型稽古をしながら小額でFXをする。

最近ではFXは単位を変えて以前の10倍でして、ここ1週間で2万程勝てた。少し慣れてきたが油断をするとあっという間に負けることもある。やり方も試行錯誤ばかりで安定して勝てる方法が見つからない。

グラフだけで判断して経済指標発表前はいったんやめる、現状はそういうやり方になってきた。

学校がなければ株式だけでもいいが、学校に行きながらでは株式は難しいのでFXで稼げるようにならないとダメなんだ。

ストハイ

桜 side

夏休みはナツは忙しかったけど、日帰りで海や川、温泉にも行っ
たわ。

2学期になり、変わったのはお昼に永原さんが加わったことくら
いだ。

秋には文化祭や体育祭があったけど、ナツはどっちもサボりまし
た、帰りは迎えに来るんだけどね。

FXが24時間運営なのをいいことに朝までしてることが何度か
あったの。

FXで勝てるようになってくると、ネットゲにハマる気持ちがわか
ったとかいって調子に乗ってたのよね。

もう頭も目も疲れてぼろぼろになるまでやって、ちょっと休憩と
いってベッドで横になる。

ナツはカモミールの香りに弱いので、カモミールオイルを一滴垂ら
した蒸しタオルを眼に乗せてみたら5分もしないでぐぐぐ寝ちゃ
った。

そんなにおもしろいのかと、やり方は聞いてたからFXに挑戦してみたのだけどすぐに1万円負けた、なにこれ……。

悔しがって、お小遣い2ヶ月分がと落ち込んでたら起きたナツに笑われた、怒られるかと思ってたのに大笑いされるとは。それはそれでくやしい。

密かに練習する決意をしたのは言うまでもない。

冬休み、ナツと2人きりでクリスマスを過ごした。

大晦日、困ったことに叔母さん夫婦がインフルエンザになり、看病してた私も除夜の鐘がなる頃にダウンして予定が狂った。

鼻水や咳が止まらない顔を見られなくなかったけど、どうしようもなくナツを呼んだわ。

結局、3人共ナツに看病されたの。こんなお正月初めて。

風邪とかは治せないんだ、すまんと言われたけど、喉や肺の痛みが取れるからすごくありがたかった。

叔父さんはナツと初対面だったからなんとも言えない顔をしていたの、父親代わりの叔父の威厳もなにもないからでしょうね。

ナツの用意したおかゆを食べる時の顔、その顔を笑うとセキが止まらなくて苦しかった。

2日間看病されたのにナツはインフルエンザにかからない、小さい頃必ず罹^{かか}るような病気以外はしたことがないらしい。

アスリートは筋肉酷使の所為で免役が弱いのが普通なのに変よね。お婆さんも風邪一つ引かないらしいし、どっという遺伝子なのよ。

春休みはお花見をしたり、私の誕生日パーティーをしたわ。

私は17歳になった、4月の3日生まれ、春休み中なんて悲しい誕生日でしょ、ほとんど友達にお祝いされたことがなかったのよ。

ナツや涼ちゃんにパーティーをして貰って今までで一番嬉しい誕生日だった。

同じ頃ナツは中古のオフロードバイクを買ったの。後ろはちょっと位置が高くて乗るときは怖いけどすぐに慣れたわ。

2年生になり残念ながら涼ちゃんとはクラスが離れたけど、ナツと同じなのはほっとした。ご飯は変わらず4人で食べている。

付き合って1年、また夏がきた、ナツも17歳となり、お金はわずか一年で最低目標金額の500万を超えたの。

しかも投資で既に250万以上勝っているの、勝つ人はもっと勝つらしいけどナツにはあきれるわ。

私は日を変えて何度か挑戦したけどちっとも勝てなかったからあきらめたのに……向き不向きがあるのね。

ナツはもう余裕だといって、伊豆の白浜のリゾートホテルで1週間も過ごしたの。

ホテルのプライベートビーチは綺麗で人が少ないから快適だった、ほんとに素敵だったわ。

投資の方法もいろいろやってて、以前はデイトレードのみだった株式投資は中長期もしてるの。

信用口座になり、売りができるようになると中長期でも安全にできるみたい。株式で怖いのは暴落だけで、売りだと暴落で儲かるから歓迎らしい。

資金が増えるほど楽になるらしいけど、金銭感覚が麻痺しそうで怖くなるくらいよ。

ナツはもう普通に就職はできないだろうなと思ったわ。

ナツ side

8月が終わり頃、携帯電話に知らない番号から掛かってきた。

「はーい」

「大沢か？」

「うん、誰？」

「赤城旋次だ、覚えているか」

「おお、久しぶりだな」

赤城旋次、小学生の頃に一時期目標とした男だ。こいつとは一勝一敗の五分の戦績だった。会話は大会の会場で少しだけしたことがある。

「おう、ほんとに久しぶりだ、実はオランダに修行にいこうと思っっている」

「格闘技王国か、すげえな」

「行く前に、一度お前とやりたい」

「試合には興味ないんだ」

「いいじゃねえか、俺が一本負けした相手にリベンジしてないのはお前だけなんだぜ」

そうか、こいつから見たら勝ち逃げか。今更って感じた、小学生の話しだろつに。

「キックの修行に行くんだよね？」

「そうだ」

「K1みたいなルールだろ、そっちなら受けるぜ」

「グロブの練習してんのか？」

「やっとくよ、いつやるんだ？」

わざわざオレの通っていた道場まで来るといふ意気込みはすごいもんだ、支部が違うだけとはいえ、赤城にとってはほとんど敵地みたいなものだ。

3日後の夜10時と約束をして切った。

赤城はいまでも大会上位の常連のはずだ、身体はオレより一回り大きい。

オレが速度型になったのと逆にいまの赤城はパワー型だ。

身長もだが、体重では100以上負けているだろう、これはおもしろい。

約束は夜の10時、道場の稽古時間が終る頃だ、師範に頼みこき3日グロブの練習をしてきた。この時間まで残っている連中、どの顔も楽しみにしているみたいだ。

普通にデータを比較しただけではクラスも違う、奴は無差別でオレは重量級になる、ただここの黒帯連中はオレをよく知っている。

大会に出なくなった理由も含め、オレの強さを身体でわかっている。

といっても勝つとは思えないだろう。空手の試合とは違う、グローブだとウェイトの差を克服するのは難しい。

そういえば永原さんも見学にいるな、挨拶するとニコニコしている、永原さんの話では赤城の最近の戦績は無差別級の3位だそうだ。

「よう、久しぶりだな」

約束の30分前に赤城が来た。

でかい、190?、95?、ほぼ大会時のデータ通りだ、近くで会うと身体から発散するエネルギーというか密度が違う、本人も既に臨戦態勢だ。

「急で悪かったな、稽古は続けてるんだろう?」

「ああ、問題ない」

「おう、じゃあ準備するわ」

お互いに黙々と準備をする。

「グローブも自信あるのか?」

「ないよ、でもおもしろそうだと思ってな、TVで見てるだけだが外人は速いぞ、外人だと思ってやってくれ」

「そつだな」

グローブマッチ、当然顔面へのパンチあり、ヒジはなし、つまりK1のようなルールだ。

このルールではパンチはかなり貰うはずだ、グローブで顔面ありだとストレートの間合いとローキック、ハイキックの間合いがほぼ同じだ。

グラブを軽く合わせゴング代わり、開始だ。

向き合つと圧力の強さをより感じる。

意外にセオリー通りのジャブから入ってきた。

グローブというのは捌きにくくもなる、オレにはボクシングテクニクはないし、興味もない。

ジャブやストレートを捌きながらローキックで反撃をする、受けられた足が降りた瞬間に再度ロー。

読まれていたようで、ストレートを合わせられた。

しかも効く、赤城のパンチは重く石で殴られるようだ。

展開はパンチでは赤城がかなり有利、蹴りではややオレが有利だ。

正式な試合ではない、真つ向勝負だ。

だがでかい方に堅実な戦い方をされるとつらい。仮想外人でほんとはやっているのかも。

一度ダウンしてしまった、そうしないとチャンスは作りにくいからだ、ヘビー級のくせに十分速いぞ。

しかもグローブの試合は疲れる、捌きにくさの所為も慣れない所為もあるだろうが、やはり圧力をまともに貰うのがきつい。

お互いに決め手に欠いたが、不利なオレが畏をしかけた。逆転の大技を狙わないとジリ貧だ。

少しパンチが効いたのでかなり効いたふりをしてラッシュを受け
る。

フットワークで逃げながら撃ち疲れるのを待つ。

ここを凌げばチャンスはくる。

よし、肩で息をするところにローをフェイントにしてジャブ&ストレート。

少し効いた、逃げる赤城に追い撃ちでさらにジャブ&ストレート
&ハイキックだ。

直前のジャブ&ストレートはエサだ。同じと思わせ、ストレートのグローブを赤城の顔の近くに残したままハイキック。

ほんとに決まった、赤城はそのまま倒れしばらく立てない。脳震盪だ。

利き手側での顔面へのストレートパンチとほぼ同時にハイキックを決めるコンビネーションだ。

オレだと右ストレート、右回し蹴りのハイだ。

軽いクラスではよく使われるがヘビー級ではまず見ない。

バランス、柔軟性、筋力、スピード、全部が高いレベルで要るからだ。

顔面に当たったストレートのグローブを残したままにしておき後からくるハイキックを隠す。

見えない攻撃。

どんな格闘技においてもこれが一番効く、以前TVで見て練習しておいたのだが、ここまでまともに入るとは思っていなかった。勝手に略してストハイと呼んでいる、キックや総合で打撃系の必殺技と言えるだろう。

やっておいてあれだが痛そうだ。まあこっちもボロボロだけど。

「お疲れ様」

「押忍、お疲れ様でした」

ほとんどの人が帰っていく。

赤城が回復した後、技の説明をして試しにストレート&ハイキックを受けてみた。

一瞬意識が飛び膝をついた、まだ赤城は自分のものにしていない段階、ストレートも回し蹴りも半分以下の威力だろう。

赤城にはダメージもあつた、それが来るのがわかってここまでとはすごい。

赤城ならヘビーでも自分の決め技にするかもしれない。

無差別級でのグローブマッチは怖い、オレの体重では無理だと痛感する。特に首周りの筋肉が足りない。

赤城とはいつかまたやる約束をして送り出した、18歳で単身オランダに修行にいくという気構えは尊敬できる。

といつてもグローブはもうやらないぞ、とも言っておいた、もう懲り懲りだ。専用に筋肉を付けないと無理だ。

顔が熱いし痛い、永原さんは最期まで見てくれたので一緒に帰り部屋まで送られた、それほど重症に見えるのか。

部屋に帰ったらなぜか桜がいた、今日はいないはずなのに……もう顔がかなり腫れている。

グローブだとさほど痛くないパンチでも腫れる、痛いパンチだと後からさらに腫れてくる。

桜は道場での試合だと説明しているのに、冷やしてくれながらもアンパンマンみたいな顔になってとか文句を垂れ、最期には見たかったとまで言い出す始末だ。

道場に女連れで行く奴なんかいるわけないだろ。

ストハイ（後書き）

今話で一年経過です。今後はナツ視点が多くなります。

不安

さくら side

もつじき文化祭、最近は準備に忙しいの。

でも楽しみがある、ナツが赤点を回避する為にテストのポイントを教えてるのね、その見返りとして学校イベントに参加することになっている。

去年は逃げられたから約束したのだ。

文化祭でのクラスの出し物がコスプレ喫茶で、ナツに派手なゲームキャラの衣装を着せることにしたの。

ほんとはクジで割り当てなんだけど、ナツがHRをさぼった時に嫌がってた男子に提案したら交代してくれた。

だから準備が苦じゃないわ。

文化祭当日、ナツに派手なゲームキャラの衣装を着せていく、器用なコがいたので安い材料費なのによくできている。

頭もシルバークレイのスプレーで一時的に変える、なんかおもしろ

るい。

ナツは不安そうに私を見ているわ。

ふふ、私の割り当ては知らないアニメの戦闘服なんだけど露出が多めなの。

このままナツに迫られてみたいな……妄想の世界にいきたい。

「いらっしゃいませ」

女子だけのお客もきた。

「お帰りなさいませ、お嬢様」

台詞は執事調、服装的に合うから私が勝手に決めたのだ。

格好だけは決まってるのにナツはやる気がない。

ナツの台詞なんて女子を迎えるそれ一個だけなのだ、分担制では他の男子がやるの。

「もっと真面目にやってよ、お祭りなんだから楽しそうにね」

「はいはい」

やる気のない返事だが、注意してからはあきらめたみたい、そこそこちゃんとやっているわ。

2日目も終わりが近くなった頃、がらの悪い客が10人セットで来た。

体がでかくて声もでかい、すごい筋肉むきむきな男ばかり。

「かわいいね、こっちは座らない？」

「こっちは先だよ、メイドちゃん」

「座ってお話ししよ」

酔ってる人までいる、怖がって帰るお客さんも出始めた。

どうすればいいだろうか、とりあえず1人が担任を呼びに行くことになった。

ナツと目が合った、パントマイムで、オレいこうか、と合図される。

ばってんマークを作る、いくらナツでもあんな筋肉マンが10人は無理よ。

10人ともナツより大きくて筋肉モリモリだよ、一斉に掛かって来たらどうするのよ。

ああ、メイド服の虹川さんが無理やり手を引っ張られ筋肉マンの足の上に座らされる。

「困りますね」

あちやゝ、出た、ナツの加速装置。

一瞬で移動して始めちゃった、虹川さんはすぐ解放されたわ。

どついつ技かわからないけど、ナツが両手で腕を掴みくるっど回して関節技で筋肉マンを動けなくしたの。

筋肉マンはナツの正面に膝立ちしてて、土下座してるみたいなの
ーズ。

「てめえ」

隣に座っていた2人目がナツに殴りかかる。

一瞬、卑怯よ！

そう思ったのに……これもさっぱりわからない。

1人目を離しもしないで同じような関節技で2人目も捕まえた。

土下座ポーズが2人になっただけなの。

屈強な男2人が土下座ポーズ。

とんでもない早業。

「いだだだ」

「ぎゃ」

ナツは少し2人を引きずって左手だけで2人の手を握り、右手を空けたの。

「離せこらー!」

ナツを挟むようにさらに二人が近づき、前後からほぼ同時に掛かっていく。

「ぐわ」

後ろを見なかったはずだけど後ろから掴みかかる男のお腹を蹴った。どうして正確な位置がわかるの？

捕まえられてる2人からも苦痛の音が洩れる、ナツが動くとき痛いのだ。

前から掛かろうとしていた男もナツが額を押しように蹴ったの。

後ろから掛かった男が蹴られたから、止まったところを軽く蹴ったのね。

またも2人から苦痛の音が。

ほぼ同時に前後から挟もうとした2人が別々の足で蹴られ、制される。

見ていると唾然とするしかない。

もう早業というより神業。

前にいた男がよろよろ後退していく。

後ろの男もお腹を押さえて座ったままで後退していく。

左手で2人を繋いだまま、2人を蹴って撃退するとか。

私にわかるのはナツはこの一年でさらに強くなってることだけ。

これに比べると以前はただ速くて強いという感じだったわ。

余裕がありすぎて、まるであらかじめ決められた動きでもしてるような。

「手加減できるうちに帰ったほうがいい。これ以上は入院させるよ」

ナツが言った、教室中がナツに注目して静かだから普通の声でもよく通るの、恫喝するでなくたんと話すだけ。ブラックオーラもない。

「……帰ります」

「はい、帰ります」

関節技で捕らえられている2人が言うと、ナツは2人を離した。

10人がぞろぞろと帰っていった。

思わずというか、ついナツに抱きついていてた。

かっこいいけど、心配する身にもなってよ。

10人同時に来たらどうしてたの？

頭を撫でられる。

「桜、学校だぞ」

文化祭中とはいえ、教室で抱きつくなんて……。恥ずかしい。

私が離れたのが合図になったみたいで。

クラスメイトやお客から大歓声と拍手が起こったわ。

神業みたいだったもん、無理もない。

ところが顔を見上げるとナツは不機嫌だ、ううん、どんどん険しい表情になっていくの。

「……桜、どこまでだな、これはやばい」

「え？」

「ちょっと人いないとこ行こう、話がある」

「うん、どこか痛めたりしてない？」

「してないよ、いや、場所が思いつかないな、オレは先に帰る、終つたらこれるか？」

……なんなのだろう。

「うん……わかった」

「悪いな」

服だけ着替えて先に帰ってしまった、さっぱりわからない。

以前電車であつたようなテレてるとかじゃない、なんだか不安になつてくる。

実行委員じゃなければ追いかけてい。

遠恋

2時間後、文化祭のしめのキャンプファイヤーにも参加せずに急いでナツの部屋に向かう。

部屋に入り姿を見るなり抱きしめた。

「あまり無茶しないで、あんな筋肉マン10人とか怖いよ」

「心配するな、帰れと言ったのは甘さからだ、筋肉バカ10人くらい無傷で帰せるよ」

……ええ……真面目な顔だ。

「……そこまでのの、じゃあどうしたのよ?」

「……オレがあんなクズどもにあそこまで手加減する男だったと思うか?」

「……ううん、丸くなったと思うけど」

「桜の体面、クラスメイトの前だとか……そういうのは全部自分の言い訳だって気付いてな」

「言い訳?」

「……桜、愛してる」

はい!?

「どうしたの?」

そんなつらそうな顔で言わないでよ。

「一緒にいるとオレはどんどん甘ちゃんになる、やばいことに気付いたんだ」

「……わからないよ」

「間抜け4人組を殺せる自信が無くなった、今日のバカどもの相手して自覚したよ、今のままではダメなんだ」

「……」

それがあの険しい顔だったのね。

ナツが殺す予定の8人、盗聴を始めてしばらくしてから間抜け4人組と悪4人組という呼びかたになっているの。

そういえば間抜け4人組のことを喋るとき、苦々しいところがあったわ。

ナツの計画ではまず間抜け4人組を拉致して山で尋問することになっている。

証拠がない、輪姦していたことと場所があそこだというだけで、つまり100?殺人の犯人と確信はないからだ。

その最初の4人が殺せない、そうナツは言い出したの。

「すごく甘くなってきた、前から軽く自覚はあったよ」

「……やっぱり、悪いことだったのね」

別れると言われそうで不安になってくる。

「1年とちょっと、遠距離恋愛だと思ってくれないか？」

1年……。

「まったく逢えないの？」

「桜がそれでいいならそうしたい、今は全く予定が立たないんだ」

1年もナツに会えない……そんなのイヤだ……涙が溢れてくる。

「すまん、しばらくは電話すらできない、どう考えてもそうなるんだ」

「……」

「なにもかも忘れて一緒にいたい気もする……そんなことしたら」

生後悔するのがわかってるのにな。

「多分、みじめな一生だ……オレには無理だ、1年我慢するほうがいい」

「……」

「その後は、弱虫になって、笑って桜の側にいたい。」

オレはそういう弱虫なんだ、とことん自覚した」

「……決めたんだね」

「じめん」

「学校は？ 来るんだよね？」

「無理だ、学校は今日で終わりだ、しばらく山に籠る。」

動物のようになりたい、山でシカやイノシシを殺して食うかもしれん」

「……そんな……」

本気の顔、さっきまでの楽しい日常は終わりを告げたのだと理解するまで少し時間が必要だった。

学校をやめて、山籠り……私が浮かれすぎていたの？

「この1年、居心地が良すぎた、楽しかったよ。自分の本性もよく

わかった　自分で思ったより弱い人間だった」

「知ってるよ、よくわかってる、ナツはやさしすぎるよね」

「……悪いな、山に籠って納得できるまでは会えない」

「……うん、わかったよ、心配だけど待ってる、山なんて大丈夫なの？」

「最強で月の輪熊だ、出会っても普通に勝てると思うよ」

マジな顔してクマに勝てるとか言っな。

「あのね……シリアスにしといて笑わせようとしないでよ」

「まじだよ、月の輪熊なんて中学のときのシュミレーションで10回は勝ってる。」

今だと普通に蹴るだけで逃げて行きそうな気がする」

「……」

そんなものなのでしょうか？

「でもヒグマにはいまだに勝てるイメージが全く持てないんだ。

いつかヒグマに勝ちたい、それが小学生の時から夢だったんだ

」

「くくく……心配するのがバカらしくなるわ」

……ナツは生きてる時代が違うみたい。

戦国時代とか幕末とかに生まれてくるべきだったのかもしれないわ。

こんな世の中は似合わない、笑っちゃうけど、クマも真面目に考えているのね。

私だつてとつくに手伝う覚悟はできてるけど、私が殺すわけじゃない。

この根がやさしい男が人を殺すというのは大変なことなのね。

当分会えなくなる。

想像するだけで胸が苦しい。

この日、私は初めてナツを抱いた、そうしないと不安で自分から求めたわ。

翌朝バイクで送ってもらった別れ際、連絡は当分しないことをまた謝られた、いまは残忍さが要るんだ、そう言われた。

当分会えない、連絡もない。まだ実感はないけど想像するだけで涙が出てくる。

ナツがない毎日。

顔も見れず声さえ聞けない。

それは自制心がくじけそうになる日々だった。

学校帰り、毎日部屋に寄りたくなる、姿だけでも見たい。

毎日一緒に帰ってくれる涼ちゃんと永原さん、理由を聞いたら永原さんはナツに頼まれていると言ってた。

聞いたからといって拒否もダメだと言われた。

一緒じゃなければ何度足がナツの部屋にむかっていただろう。

平日、週に一度くらいしか部屋に帰らないと言っていたから、ほとんどいないだろうけど……。

今の私を支えているのは、私といると甘くなる、その言葉だけだ。

欲張りになった、ナツに相手にもされなかった日々、ただ見ていただけの1カ月半、どうやって生活していたの？

ナツと出会うまで何をして生きていたのだろう。バレエも勉強も熱心にしてたわけじゃない。

以前と同じようにしても時間がゆっくりとしか進まない。

1カ月が過ぎた。

土曜日、ナツのいない部屋に入ってしまった、生活感はほとんどない。

ナツのPC本体だけがいろんな光で輝きながら動いている。PCだけ派手好き。

当然ニャンコーズもない、お婆さんのところだ。

ごめんなさい、我慢できなかった。

なにも触ることはできない、バレてしまう。

ベッドの上に充電もされていない携帯だけがある、私の待ち受け画面にだけあるナツの笑顔、ただ泣くだけだった。

学校帰り、涼ちゃんの家遊びにいったら、斜め前に住んでる永原さんも着替えてから来たわ。

最近の永原さんはまるでナツの弟子とか信者みたいな態度なの。ナツの話をするときは目が輝いてる。

オレには対等な友達は無理だ、ナツがそう言っていた。子供の頃から親友が欲しかったけど、強いと無理みたいだと説明してた。

永原さんから夏休みの道場での出来事をきかされたわ。

ナツをライバル視してる流派のエースクラスの赤城という人がナツを呼び出して試合をしたらしい。

そういえば顔を丸く腫らして帰ってきたことがあった、グローブでスパリングをしたただけだと言っていたけど。

だから負けたんでしょと、そういうと否定された。

グローブをつけてキックボクシングの練習試合みたいなことをやったそうなの。

グローブというのは素手と違い顔が腫れるらしい。

赤城さんは18歳なのに高校卒業の条件を満たせばオランダにキックボクシングの修行に行くそうだ。

流派の期待のホープみたい。

赤城さんは流派の大会で無差別級の3位、準決勝で判定負けをした、赤城さんに勝った人が決勝でも判定勝ちで優勝した。

ナツは赤城さんに一本勝ちだから流派で一番強いかもしれないと言われる。

いくらなんでも17歳でそれはないと思うけど、永原さんは大真面目だ。

目を輝かせて力説されたけど、そんなことどうでもいいの。

ナツとは全く違う、同じ流派の若手なのに陽の当たる場所を指す赤城さん。

山に籠り人を殺す心を求めるナツ。

逢いたい、名前を聞くだけで切なくなる。

動物園の猛獣

ナツ side

文化祭、アホらしくてうんざりとしてきた、桜が楽しそうだから我慢してるがづらい。

それにしてもアホが10人も来た時はどうしようかと思った。

ゴリラのような男が女子をひっぱり膝の上に乗せた、昼間から酒も入り酔っているみたいだ。

「困りますね」

こいつは特に体格がいいほうだ、195?、105?はあるかな。

いつぞやのブタと違い筋肉の塊りみたいなアホだ。

メイド服のクラスメイトの手を握ったでかくて汚い右腕を内側に捻^{ねじ}り女子の手を離れたところで、掌を両手で捻^{ねじ}る。

手、肩の両方の関節をロックして、下方向にコントロール、膝立ちの姿勢にさせる、掌の痛みと軽い力でこうなる。

指だけとかは別だが、正面からできる関節技なんてこれしか知ら

ない。

理屈がわからないかたは、実際に自分の右手の掌を左手でどんどん身体の内側に捻るとわかるだろう。

まず肩関節がロックされ、掌の捻りが限界に来ると激痛が走る、限界まで捻られた掌は、更に軽く捻られるとその力方向に身体が全く抵抗出来ない。

下方向に誘導するとこの図になる、完成すると左手一本で維持できる。

技を掛けた状態で軽く片手に力を入れれば、声も出す気になれないほど痛い、まあ、痛い、とかは言えるが恥ずかしいから普通言わないだろう。

潔い奴こやけならさっさと謝る、オレが逆の立場でもこの体勢までいくと何も出来ない。

受け手に片方の手が余っても、ほんのわずかに捻られればコントロールされてしまう為、実質抵抗は不可能だ。

「てめえ」

アホの隣に座っていた、2人目のアホ、こいつはかなり酒が入ってる、顔が少し赤い。

190?、95?くらい、このアホも力だけはあるそうだ。残りも全部そうだが。

殴り掛かってきた、大振りの右のテレフォンパンチ、振りかぶった腕に既に力が入った、ほんとに力だけの素人だ。

これでは猫以下だ、猫でも力が入っていない。猫手パンチはかなり速いんだ。

テレフォンとはあらかじめ知らせることの意味で、拳の場合は大きく振りかぶることだ。

全身に力が入った拳は遅い、オレの顔に来た拳を少し避け、伸びきるところで右手で拳を捉え同じく内側に捻る。

こっちはちょっと高度だ、最初のアホには技を掛けるときは両手でソフトにしたけど、片方しか手があまってないので片手でやる。

拳を掴み強く捻る、一瞬だけ離し自分の手だけ回転を戻し、また掴み捻る。

これは速度や握力が要る分高度なだけだが、当然加減はしにくい、最初のやつと違いかなり痛かっただろう。

両手ではソフトに出来る技も片手では無理だ、関節の専門家なら途中で離さずソフトにできるかもだがオレには無理だ。

「いだだだ」

我慢してもこのくらいの声は出る。

「ぎゃ」

当然左手に捕まえている最初のアホにも多少の動きは伝わるので痛い。

2人目のアホが悪い、酒の所為というより、想像力というものがないのだろう、アホすぎる。

アホ2人膝立ちの姿勢で固まる、一步後ろに下がり、等距離になるようにアホ2人を引きずる、汚い掌二つを重ねて左手にまとめて右手を開けておく。

2人目のアホのとき、一瞬殴るかどうか迷ってやはり関節を選択していた、ほぼ無意識にそうしたんだ。

帰れと言おうとした瞬間。

「離せこら!」

先に言われてしまった。わざとらしく大きな声を出し正面から3人目のアホが寄ってくる。

オレはそこまで親切じゃないぞ、こいつらは関節で動けない2人が可哀相だと思わないのか? お前等が帰るといえば離すのに。

「ぐわ」

後ろから来た4人目のアホを後ろ蹴りで腹を蹴った。かなり手加減はしている。

オレの脳には後ろからくる相手も像のように見えている。害意がある相手は位置も大きさも姿勢もほぼわかる。

五感で感じて脳にぼやけた映像が創れるようになっていたが、なぜと言われても説明は難しい。

わずかに見えるようになったのが1年くらい前で最近精度もどんどん上がっている。つまり経験だ、3人や4人組手を数をこなすしかない。

六感とか思わないで欲しい、人は経験でこれくらいできるようになる。

おそらく目が悪い人には同じことができる人は多いはずだ。

さっきから目線を合わせている3人目が不思議そうな顔で足を止める、そこを横蹴りで軽く額を押してやる。

3人目のアホががよろよろ後退していく。

4人目もお腹を押さえて座ったままで後退している。

ようやく帰れといえた、これだけ見せれば脅す必要もない。

奴等が帰ると桜が抱きついてくる、ここが学校だと忘れてるんで驚いた。冷静な桜らしくない。

しばらくしてから、わ〜とかの大歓声になる。

……うんざりする。中学の頃と違いすぎる反応だ。

普段口も利かないクラスメイト、凄惨せいさんな暴力はダメでも、見た目にこつこつというスマートなのはいいわけか。

打撃専門のオレが凄惨にしなかったのは多分無意識に桜の体面を考えただけだ。

桜が嬉しそうに抱きついてきたとき、一瞬こつこつのも悪くない、なんて思ってしまった。

あと1年で8人も人殺しをする男が、こんな青春こっこしてどうするんだよ。

そんな自嘲をした瞬間、ぞつときた。

オレは、いまでも人が殺せるのか？

そこに思い至り、一瞬視界が真っ暗になった。

……まずい、殺せるだろうか。……足元の感覚が消失していく。

……帰りたい、こんな人が多い場所うんざりだ。

桜に話そうとしたけど、考えて見れば文化祭中など無人の場所はない。

帰ることだけ告げ、着替えて帰る。

お祭り騒ぎの喧騒^{けんそう}、嫌いだし似合わない。

でもこの雰囲気以前ほど浮いていない気がする。

オレらしくない、こんなのはオレじゃない。

まさか、自分でもあそこまで大人しくできるとは……まるで動物園の猛獣だ。

これでは……できない。

殺せない、殺す、殺せるだろう、殺せるか、くそ。

前からやばいと思ってはいた、わかってはいたんだ……。

どうする？

どうすれば取り戻せるんだ、桜と別れるなんてのは嫌だ。

でも。

いや、距離だけでも置かなくてはダメだ。

今は、残忍さが要るんだ。

猫手ばんち

ぐちゃぐちゃな思考のまま、部屋に着いた。

よく考える、冷静になれ。クズを殺す、当然のことだ、なぜこんなに不安になるんだ、できないわけがないだろ。

奴等を見れば問題ない、怒りはすぐに湧くはずだ。

……そうだ、あいつらだ、間抜け4人組だ。

あいつらは悪事の相談もなにもしない、だから間抜け4人なんて呼んでいるんだ。

こんなに甘くなったオレが、姉ちゃんに関わりがなかったとしたら間抜け4人を殺せるか？

拷問してもし間違っても殺すしかないんだ。香織の話にも間抜け4人はほとんど出なかった、誰か聞いていないが早漏がいたくらいだ。

いまだに悪い4人組はまだいい、あいつらならいつでも殺意が湧く、間抜けに見えるから湧かないなんてダメだろ。

そうだ、やはりそこをどうにかしなくてはいけない。

さつきと同じだ、中学の時の野獣のような心を取り戻すしかない。
残忍さを当然のように。

桜と出会う前のオレに。

せいぜいたまにしか逢えない。

逢いたいとどれだけ思っても、そうしなくては無理だ。

桜は納得するだろうか？

月1回で限度くらいかもしれない、月1回で桜は納得するだろうか？

学校はもうだめだ、行くとたまにしか逢わないことの意味がない。

やはりこれしかない。

しばらく山に籠る。

この甘い心をどうにかしなくてはダメだ。

空手に限らず、武道家にはよくあることだ。

オレもそういう時期なのかもしれん、武道とは違うが、そもそも殺しをしたことがないのがダメなんだ。

シカでもイノシシでもクマでもいい、家畜じゃない生き物を殺す、

それしかない。

桜が来た、入ってくるなり抱きつかれた。

こいつはオレが心配で止めたのか……いつのまにか桜だとなんでもわかってるような気になっていた。

……そうだよな、格闘技は女では理解しにくい。

結論を話していく。

泣かれたりしたけど、最期には笑ってくれた。

あまり泣かせずに済んでよかった。

でもクマの話はほんとだ、笑わそうとかじゃない。

姉ちゃんのこと以前のオレはいつかヒグマに勝てるようになりたい、それが夢だった。

アホだという人もいるだろう、でも人間は技がある、自分の倍以上の重量の猛獣に知恵で対抗もできるんだ。

動物の攻撃は基本的にテレフォンだ、人間はそれを技量で克服し、小さな動きでも連動させ大きな力を出せる。

元々草食獣以下の人間が身体を鍛え技を磨き、フェイントや様々な工夫で対抗することができる。

ヒグマの雄、大きいものだと500?ある、単純にオレの6倍くらいだ、体重というよりまだ全部足りない。

今だと無理だ、しかし防弾バツク、あれ一個あれば今でもヒグマには勝てるかもしれない。

いや、無理か、でも少なくとも大怪我まではしないだろう、つまりもうちよつとなんだ。

まあ、あのバツグ1個分の防御力をもうちよつと言うのはあれか。

熊の爪はかなり連打が効く、猫の爪、猫手パンチの巨大なやつだ。

猫をからかって遊ぶとすぐ想像できる、小学生の頃、猫でよく考えてた。

指でからかい猫手パンチを空振りさせると本気になってふつてくるんだ。

本気の猫手パンチを受けながら、これの100倍とか想像してぞつとしたものだ、ヒグマはあの体格で恐ろしく速い。

でかいヒグマなら一撃でもまともに当たれば命がもっていかれる、1?以上の攻撃だ、それが連打で来る。

だが……。

こんなときでもつい考えてしまう、桜を抱きしめたまま何をしてるんだ。

バレたら首を絞められそうだが、すまん、武道バカというのはこういうもんなんだ。

必要なモノが多い。

まずナイフがいくつつかいる、とうてき投擲用がいくつつか、サバイバル用もいる。

オレには、ボウガンや弓では狩りとは言えない、自身の肉体で狩らねば意味がない。

とはいえ、接近してナイフじゃ原始人でも無理だ。

せめてナイフを投げようと思ったわけだ、狩りの効率ではない、難しいとかも関係ない。

不可能でもいい、山に入り獣になり獣と向き合う、今のオレにはそれが必要だ。

格上の獣として格下の獣をハンティングする、平然と当たり前のように命を絶つ行為。

新宿のナイフ専門店まで買いに行く、そもそも未成年が狩猟ということはこの国では無理だ。

全部違法だ、ナイフも人前で出すことすらできない、人が来ないところで行く。

山道すらはずれる場所、携帯なんか通じるわけもない場所だ。

投擲斧とうてきまきというのがあった、投げる刃物としてはかなり重い、650?、高度だろうがこれならシカくらいは倒せるかもしれない。

5本購入した、次にサバイバルナイフだ、ところがでかいナイフは買えない、18歳未満がどうか書いてあった。

めんどくさい店だ、というか法律とか条令の類か、ネットオークションで買うか、個人売買ならいいだろ。

新宿まで来たついでだ、水筒、オイルライターや蚊帳かや、防寒シートも買っておく、秋とはいえ、深い山の奥までいけば都会とは別物だろう。

夜はかなり冷えるはずだ、面倒なのでほとんど冬服のような装備でいくか。

登山とはかなり違う、迷彩を中心に選ぶ、緑系統だ。

ファッションとしてありふれているのもいい、ブーツだけは迷った結果ごつい軍用ブーツだ。

理由はオレにとっては実質もつとも怖いのはママシなのではないかと思っただのだ。

ママシに足を噛まれたら毒で死ぬなと気づいたんだ。

普通はまっさきにマムシを考えるだろう、アホ、という意見はもつともだ。

オレは動物と戦うとか狩るという方から考えてしまつアホな野蛮人なんだ。

この装備だと昼は暑いだろうが、汗が出るだけだ。

カロリーメイトもいくつか箱買いしておく、こんなところだ。

午後2時すぎ、株は3銘柄を中期で売り自動売買で損きりの設定をしておく。最悪でも負けはたいしたことはない。

荷造りを済ませていく。

山籠り、久しぶりの高揚感だ。

ほんとのオレは部屋でPCをいじって金を稼ぐとか似合わない人種のはずだ。

自然に向かうことを考えるとワクワクとしてくる、こつでなくては。

山籠り(前書き)

番外編、R18です ギャンバンフレーバー完結しました。

<http://novel18.syosetu.com/n47>

131 / 読み返して見ると18は大ききかなと、R15くらいでしようか。

山籠り

オフロードバイクで奥多摩から北上し、埼玉方面に入る。景色は山また山、川の水もどんどん綺麗になってくる。

交通量が減り、いい感じになってきた。

北西方面に向かう、河の上流に向かいダムを越えさらに奥を目指して走らせる。

秩父が近い、この辺りからは記憶にない、ネットの地図上ではまともに車が走れる道があるのかもわからなかった。

ゆっくり走る、ときどき登山道がある、今日のところは試した。

直感でさびれた1本にバイクで入っていく、ゆっくりとだ、人がいる可能性もある、車では入れない道だ。

オフロードバイクでもきついような道をしばらく進む、さっきから人1人いない、ちょっと高いところに出た。

あたりを見渡す、あそこならいいかもしれない。

道とも言えない道すらはずれて人が来ることなど滅多にないような場所が見つかった。

バイクから降り、地形を頭に入れながら歩く。

あたりを徹底的に調べる、バイクの位置を見失うことさえ怖い。

ここからは慎重にいく。足を折り歩けなくなる、これだけで死ぬ可能性もゼロじゃない。

暗くなるまでもう少し、暗闇では動けない。自然をなめる気はない、どれほど鍛えていようがなんの意味もないはずだ。

ハイキングコースから200?しかはずれていなくとも、ここに人が来るなど滅多にない、まあ見られても困ることだらけだ。

野営の準備を始める、水の確保、寝る場所の確保、火を起こす場所、やることはいくらでもある。

あえて、テントはなしだ、まともに寝る必要もない。

最初は山に慣れる、所詮オレは都会っ子だ、まずは慣れることだ。

少し登り山肌を探索し湧き水が出る場所を見つけた、2本の水筒の中身のミネラルウォーターを捨て入れ替えた。

飲んでみるとうまい、飲んだ分を補充して降りる、ちょっと下ると沢がある。

ならここより下はダメだ。雨が降った場合も考え、張り出した大

きな岩の近くで寝ることにする。

少し場所を整え、火を起こす準備をする。

木を大量に集めて焚き火の用意だ、手頃な岩を運び、火事にならないようにする。

近い町からは30?以上離れている、夜はほぼ真っ暗になる。せいぜい月と星明りのみだ。

切り込みを入れた数本にオイルライターで火をつける、大量の白煙とともに焚き火となる、煙は思った以上だ。

太い木の枝も更にどんどん集めてくる、こんなところだろう、少し離れて焚き火をながめる、かなり暗くなってきた。

できるだけ地形を記憶しながら、トレーニングの開始だ。どこにいてもやることはそう変りはしない。

腹が減ればカロリーメイトと水で満たす、火から少し離れれば動くこともできない。

何時間も延々と型稽古を繰り返す。

稽古も5時間以上が経過する、無心のようにできるときもあれば、雑念が浮かぶときもある。

シュミレーションしながらの稽古のときは、それだけに集中でき

ないことのほうが多い、雑念だらけだ。

まだたった数日程度1人になっただけ、それなのに人恋しい気持ちには既に狂おしいほどある。

逢いたい。話したい。抱きしめたい。抱きたい。寂しい。

まずはこの気持ちをどうにかしなくてはいけない。

街にいては逢わないだけで近くにいることがわかっている。

それもあるからこんな場所にいるんだ。

桜どころか、誰もいない。

聞えるのは山の音、虫、鳥、草木のざわめき、沢から聞える水音。そして獣がうごめく音。

静かどころじゃない、都会からバイクで数時間のこんな山でさえこれほどいろいろいな生き物がいる。

稽古をやめる。火が消えそうだがもういい、汗を拭き、シャツを着替え防寒シートの上に横になる。

ときどき虫避けスプレーなどものともしない藪蚊と格闘しながら星空を見る。

10月の星空、吸い込まれそうでもあり、降って来るようにも感

じる。都会が遠いわけでもないから光害はそれなりにある。

空自体が明るい、それでもかなり綺麗だ、しばらく眺めていると眠気を感じる。

心地いい疲れだ。うん、寝れそうだ。小さな蚊帳^{かざ}を顔に被る。

思い浮かぶのは桜のことばかりだ、我ながらよくここまで溺^{おぼ}れているもんだ。

桜に抱きつき泣いてしまったこと、未だに思い出すだけで恥ずかしい。

明日は本格的に場所探しだ。

寒さに震え目覚めた。

ヒートアイランド現象など、こんな山まで影響はない、10月の始め、秋だろうと寒いものは寒い。

まだ薄暗い山の中、さてようやく始る。起きて準備だ。

まずは腹ごしらえ、カロリーメイトだけだ、5分で終る。

ここより都合のいい場所を探す為にバイクをゆっくり走らせる。

さらに北上して探すこと4時間。

ここで死んでも死体が骨になるかもな。

申し分ない場所が見つかった、広い場所ではないけどハイキングコースからのはずれ具合、普通は登る気にならない地形もいい。

昨日同様あたりを調べ、寝る場所、焚き火場所、水の確保をして、バイクで買い物だ。

近くの村で金物と玄米を買ってきて、すぐに飯盒で炊いて食べた。

はつきりいつて玄米はまずい。だが野菜もないからしょうがない。白米だけでは身体を壊すだろう、慣れるしかない。

既に夕刻、明るいうちに投擲斧の練習だ。

創意工夫しながら大木に延々と投げる。

姿勢、角度、手首の使い方、時間は腐るほどある。これはかなり難しいけど、シカ、クマで想定すると腹部なら狙えるかもしれない。

どれほどの強度で撃てるようになるかどうかだな、コントロールを気にしなければ、腹部に当たればすぐ殺せそうだ。

逃げるかもだが、これが腹に深く刺さっているのは速度も遅いはずだ。

そこにナイフで止めを刺す、いや拳がいい、拳でやるべきだ、そうしなくてはならない。

精度を上げていく作業、10メートルで全力に近い力でほぼ腹が狙えるくらいにしなくてはだめだ。

しばらく日中はこれの練習だけでいい、夜は空手の稽古だ。

自分の小ささを実感する日々。

自然にいとまず自惚れがなくなる。

多分誰だつて自分が特別でいたいと思うだろう、オレも思ってた。いや、縊っていた。

天才と言われ努力し続けた、人付き合いがまともにできないから時間があつただけだ。抛りどころが空手にしかなかったからだ。

でも自然だとむしろ逆だ。自惚れも妙な考えも消える。

それにコンプレックスや矮小な悩みくらいはすぐになくなる。

人間なんて山ではシカやイノシシと変わらない。

形が違っただけだ、自然の前では生き物はただ生きているだけ。

癒す技、あれの所為で変に悩まされた。

癒しと殺し、最近まで矛盾してると思ってた。

別々に考えればいいだけだ。

風邪一つ治せるわけでもない、ただ痛みを取るだけの技術だ。

社会の中ではなぜ人間が特別みたいな考えが当たり前なんだろうか？

心無い人間なんて虫と変わらない。許す、もしもそういう心が出たら困るなと思っていた。

ともかく、本で読んだ内容とかで心配してたがそれも杞憂だった、許す必要は全くない。

許せばまたいつかやるかもしれない、やらなくてもクズはクズだ。

三つ子の魂というあれだ、他人に迷惑を掛けてなんとも思わない人間は一生変わらない。

育ちがどうか愛情がどうか、人の心が大きく変わるなどほとんど作り物の世界でだけだ。

改心なんて奇跡のようなもの。特に輪姦はまともな心ではできない、改心などありえない、された側は一生心に傷を持つ、生きていと迷惑なだけだ。

オレが生まれる前だが女子高生コンクリ殺人だとか有名な事件が

あつた。

主犯格の1人は出てきたらまたやったそうさ。さらに出てきてまた街にいるんだ。

事実を知ってる近隣の女性にしてみたらホラー映画の100倍怖いだろう。

法律はあほな男が決める、だから男に甘いだけだ。

オレだってそうさ、綺麗事は一生無理だ。1カ月のほとんどを山で過ごしても何も変わらない。

オレも奴等もただの獣だ、違いは誇りがあるかどうかだけだ。

美しい角

山籠りに慣れてきた頃の月曜日の深夜、多少慣れても部屋に帰ってくるややはり疲れを実感する、携帯を充電して留守録を聞いた。

めずらしく婆ちゃんからの電話があった、それも数件、何かあったのか。

オレにとつては桜を除くとただ1人の身内だ、もう1人いるが爺さんは苦手だ。

「婆ちゃん、なにかあった？」

「……ナツクン、やっと連絡来たわね、実はね、お爺ちゃんが倒れたのよ、いまは入院しているからね」

こんな時間なので寝ていた婆ちゃんを起したんだな。爺さんが病気が、鬼のなんとかかってやつか。

明日にでも見舞いに来て欲しいと言われ、3時過ぎに行くと約束してきつた。

すぐ寝る予定が崩れた……風呂を溜め、髭を剃り頭をバリカンで適当に短くしていく。あまり汚い姿は見せられない。

婆ちゃんと共に病院にタクシーで行った。

これがあの怖かった爺さんか。

病室に入り一目見て驚いた、ガリガリだった、脳卒中で倒れて入院5日目らしいが。

正月から会ってなかったが、いつこんなに痩せたんだ。

「……夏樹、元気そうだな」

喋り方も発音も変だし声も弱い、実際にはかなりゆっくりと喋ってとぎれとぎれだ。似合わない、記憶の中の爺さんとまったく違う。

「うん、元気だよ、爺ちゃんは痩せたね」

「うむ、夏樹……まだあきらめてないのか？」

姉を殺した奴らを見つけたことは当然内緒にしてた。探すために引越しまでしたと思わせていたんだ。

普通ならそれでも大反対だろうが、家出中より高校に行きながら探す方がましだと思っていたはずだ。

「あきらめはついたよ」

「少し落ち着きが出て来たようだな」

「あまりケンカとかする年でもないよ」

黒いもやは見えない、これはオレには治せない。オレの所為もあるだろうに……。

病気というのはここまで変わるものなんだな、いろいろ話して帰ることにした。

帰り際、婆ちゃんに見舞い金50万ほど押し付けてきた、しばらくは入院するそうだが、いろいろ必要なはずだ。

12月の始め、山にもすっかり慣れた。

マムシ対策は寒くなったので終わりにしてスニーカーになってる。マムシは冬眠してるはずだ。

いくら防寒シートを増やしても厚い寝袋でも寒さ対策は限界に近い。テントでは熟睡しそうで怖い。

そろそろやらなくてはと思い、場所をあちこち移動して何かいなか探すことにした。

最近では山歩きもかなりしているので、シカには日に何度も遭遇していた。いたらイノシシがいい。

シカは個体数が多すぎるがイノシシはあまりいない。

この辺りのシカは観光地で見るとような小型ではない。

最初はオジカの大きさに驚いた。

あたたかい地域のシカと違い、オスが大きく馬に近い大きさがある。

観光地の犬サイズとまったく違うのだ。

多分、気が弱い人間が近くでこのオジカを見るとビビるはずだ。

角が大きくて立派な凶器だ。角の先はオレの頭よりかなり高い位置にある。

これまでの山籠りで運動能力や心の在り様など成果はいろいろ出ているが、どうしても殺すことに慣れるべきだ。

何度考えても結論は変わらなかった。

1時間も探すとシカの群れが見つかる。中規模くらいだ。

風下から、木々の間を気配を殺しゆっくりと群れに近づいていく。

音を立てない移動、山ではかなり難しい。

全く立てないのは不可能だ、大事なものは連続で大きな音を立てないこと。不自然でなければいいのだ。

木陰を縫うように移動して10?の距離にまで接近が成功した。

「こつこつ山での移動についても自分なりにかなり練習もしたが、拍子抜けするくらいあっさりだ。」

音が少しくらいしても逃げていかない。

ゆっくり静かに呼吸を整える、心を落ち着けるためだ。

「こつこつときは空手の呼吸法、息吹がいいのだが今はできない。

気負いはない、殺気の消し方も完璧のはずだ。」

「投擲斧を取り出し、投げる体勢のままゆっくり身体を起こす。

群れの一番でかいオスに狙いを定める。

呼吸を止め、投げる。」

「表現できない呻き、牛や馬が暴れるような声に近い。」

「やや後ろのほうだが斧はオジカの腹に飲み込まれる、そのまま走り飛び出す、群れは一齐にバラバラに飛び散っていく。」

「右拳にメリケンサックを装着、苦しそうなゆっくりとした動きの、大きなオス。」

「近くで見るとほんとに大きい、苦悶が浮かぶ悲しそうな目。」

角が大きく美しい。

スローモーションに見えるが、普通には狂ったように暴れて見えるのかもしれない。

極度に集中していると妙にスローに見えるときがある。

そういう瞬間なのだろう、殺す、思い切り撃ちぬく、頭蓋骨を砕く、その意志をこめて右正拳逆突き。

やはりそうだ、自分の拳まで遅く感じる。

腰、足首の小さく速い回転、拳も同時に回転、脇をしめ背の筋肉も全て瞬間的な運動だ。

殺した感覚が手に残る、頭蓋骨が割れ砕ける、脳にまで到達し柔らかい肉がつぶれる感触、オジカはゆっくりと倒れていく。

倒れるときに角がオレに当たる、避ける気にもならない。

倒れたオジカ、まだ四肢が動いている……早くやらねば……止めに拳を打ちおろす。

……できた……できるじゃないか。

罪もない別の生物を殺意を持って殺す。

すまない……いや、ダメだ。

思ってもいけない。

残虐な行為。

自然においては強者の権利だ。

普通は食うために殺す狩り、でもオレにとっては食うより大事な
ことなんだ。

こいつらには、今は天敵がない。

たかが2ヶ月強の訓練で野生の草食獣相手にここまでできるわけ
がない、天敵がない草食獣は半分家畜のような生き物だ。警戒心
がほとんどない。

腹を探り投擲斧を抜き取る。血にまみれたオレの手と斧。

オジカを引きずる、重い、ゆうに150?はあるだろう。

森の奥深くに引つ張っていき、あの美しかった姿をこうしてゴミ
のように捨てる、これでいい。

こんな大きな死体、道具もなしに埋めるなど無理だ。

できてもやるべきじゃない、オレが埋めるなど、欺瞞きまへんもいとこ
ろだ。

獣が獣を自分の都合で殺しただけ、なんの恨みもない自分と質量
の変らない生き物を殺せる。

そつだ、恨みのある生き物くらい、すまんなどと思つこともなく
殺せる。

これでいい。

美しい角（後書き）

他の地域のシカはしりませんが、秩父のシカは近くで見ると感動するくらい大きいです。構成上殺害が必要でしたが真似をしないでください。

転機

桜 side

日曜日の昼、ご飯の後しばらくリビングでぼーとしてると叔母さんに怒られた。

なんか漫画とかでさ、奥さんが日曜日にごろごろしてる亭主をうざいっていう場面を思い出した。

本物の亭主である叔父さんは日曜なのに学会で出張中だ。

最初の頃は暇になった私をからかっていたのに。

ふられたの？ とか言うから、山に修行にいつてるだけだと説明したら、山ね〜とおもしろがっていた癖に今はあきれてる。

それにしても何にも手につかない……。一応勉強はしてるのだけぞ。

まるで躁鬱病みたい、浮き沈みが激しくて自分でも嫌になるの。

もう忘れられてるんじゃないとか、浮気してるだけじゃないのとか、そろそろ連絡くるでしょとか、もしかして全部終わらないと連絡ないかもとか……。特に悪い方に考え出すと止まらなくなる。

叔母さんがイヤミたらしくほんとに掃除機をかけた……。。

部屋に戻り一応勉強しながら携帯を眺める、鳴らないかな。

くく携帯がなる！

ナツからの着信音、2ヶ月以上なかった連絡。開いてぼちっと、ここまで0.2秒。

「ナツ！」

「桜、元気そうだな？」

「うん、今からいけばいい？」

「まだ寝起きで髭も剃ってないんだ」

「今すぐいく！」

ゆっくりなんてできるわけがない。大急ぎで準備をする。

表に出てタクシーを拾い、かけつけて鍵を開ける。

バスタオルを架けた裸のナツ、姿を見ただけで泣きそうになる。

「おかえり、ナツ」

「桜」

キスをして抱きしめあう。

うわっ！

キスしたまま、ふわっと抱き上げられる、目を明けるとお姫様抱っこだ。

とつとつされた、記憶になかった抱っこ。

「すまん、死ぬほど抱きたい、いいか？」

「うん」

私もだよ。

キッチンからベッドに運ばれ服を脱がされる。

ふふっ、脱がし方も乱暴、服も下着もぼいぼい投げられていくの。

こんな余裕のないナツは初めて、それすらも嬉しい。

遮光カーテンだけだと少し光が入ってきて恥ずかしいけど、すぐにどうでもよくなる。

「とりあえず終わったよ、週末は山通い続けるから逢えないけどもう大丈夫だ、すまなかった」

「……よかった……久しぶりってすごいね」

「乱暴じゃなかった？」

「クールじゃないのって嬉しいよ、ナツ、ほんとにちょっと変わったね。すっごくかっこいいかも」

こんなに動物的に求められたことが嬉しかった、まるで妄想の中のナツみたいだった。

早いナツも初めてだったの、最初は入れて10秒もかからなかった。

小さいけど声まで聞こえて驚いた。2回目もナツにしては早かった、3回目ようやく普通になったわ、飢えすぎよ。

ナツが言うには人間と会わない、会話もしない、そういう生活はものすごく精神的にきてたんだって。

人に会うのはたまに買い物する時だけで、そのときも不要な会話はしないで顔もあまり見ないようにしていたらしい。

この2ヶ月ちょっと、精神的にも肉体的にも徹底的に自分を追い込んでいたというんだけど、どMよね。浮気してないぼくて安心したからいいんだけど。

ナツの変化、具体的には顔も体も精悍になった。

元々痩せてたけど、さらに痩せたことだけじゃなくてほんとに雰

困気が変わってて、野性味が溢れてる。

心はまだわからない。

ただ、ナツは昨日ほんとにシカを殺してきたらしい、どうしても殺す必要があったからだ、そう言ったわ。

動物が好きなナツがそこまでするには激しい葛藤があったと思う。

心だけ平和な世の中じゃない場所にいつてしまったのかもしれない。

翌朝6時半時、目覚めたけどもう今日はずっとナツといたいなと思ってるところ。

昨日し過ぎてだるいのもあるけど。

「今日、学校さぼれないか？」

「どうしたの？」

以心伝心？

「じいちゃんが入院してるんだけど、婚約者として会ってくれないか？ いやならいいけど」

婚約者！

いい響き、いやならいいけどってなによ？ 喜ばせるなら喜ばすだけにしてよ、耳ひっぱつと」。

そこは会ってくれでいいのよ。

「いてて」

あら、ナツでも耳は痛いのね。

「そついう言い方しないの、嫌なわけないじゃん」

「そつかもだけど、ちょっと微妙な気分というか。」

今は弱ってるけど、ちょい前まで恐ろしい爺さんだったんだ。元気になったらそれはそれで面倒だなと聞きながら思い浮んできてさ。

まあいいや、婆ちゃんに都合聞いてみる」

ナツの実家、祖父母の家までタクシーでいく。

路線が違っけど距離的にはかなり近い。ちょっと緊張してきた。

タクシーを降りるとすぐに表に出てるお婆さんをナツに紹介された。

64歳のナツのお婆さん、すごく元気な人だ。

「はじめまして、月見里桜です」

「はじめまして、大沢節子です、よろしくね桜さん、お会いできて嬉しいわ」

「じゃあ、いこうか」

「ダメよナツくん、少しお話したいわ、いいでしょ、桜さん？」

「はい」

やさしそうなお婆さんだ、古い日本家屋の家に招かれいろいろお話をした。

ナツが育った家、やはり感慨に浸る間はなかった。

玄関を開けるとプチにリク、それから1匹知らない猫がきて激しくごろごろとつゝんと懐かしい歓迎をしてくれたの、3匹はすごい。

離れて見てるコが2匹と隠れているコも他に4匹いるって言われた。猫屋敷だ。

ナツは部屋に写真を全然置いてない、お婆さんはアルバムで昔の写真を見せてくれた。

「ご両親との写真もある、赤ん坊のナツ、ちっちゃいナツがお姉さんと写ってる写真、ぶ、ほんとに姉妹みたい。」

これはイジメられるわ。小さい頃ってかわいいと虐めたくなるよね、ごめん、ナツ、これは無理もない。

現実のナツは猫を抱いてぶすつとしてるけど、おばあさんには逆らわないみたい。

大きくなってくるナツ。

うわ、小学4年で小学生の全国大会3位、小学5年で優勝してる。

表彰台の中央でなぜかぶすつとしてるナツ、オール一本勝ちとか書いてあるのに。

……中学以降の写真はほとんどない。

多分、お姉さんが亡くなる少し前の写真、お姉さんの写真は見つけても何も聞けないけど、これで15歳か16歳かとあきれくらいのすごい美人。

なんていうか、クールビューティーという感じ、目元や鼻がナツに似ている。

しばらく話をしてまたタクシーで病院までいった。

脳卒中で倒れたというナツのお爺さん。何も食べれないらしいからお花だけ持ってきた。

はつきりと婚約者と紹介された、ジーンとくる、感激しちゃう。

お爺さんとはあまり長くは喋れなかったけど、ナツがいうように怖い人には見えない。

ナツのこだわり、男らしいとかウソつかないとか、かなりおじいさんから影響受けているのかも、やっぱりそう感じる。

ナツが歳を取ったら、頑固爺になるのかもね。

ナツが突然引越しをした、といっても叔母さん家から徒歩3分、前より近くになった。

駅から1分くらいの分譲マンションの賃貸だ、2LDKでリビングが15畳、最上階の7階で15畳ほどのルーフバルコニーがあるの。

ナツはこのルーフバルコニーがひと目で気に入ったみたい、自然に慣れると狭いところが嫌いになるんだって。

部屋はすごくいい、なぜか日当たりがいいほうの8畳は私の部屋だと言われる。

ナツは廊下側の6畳に荷物を置いただけで、ほとんどリビングを使うみたい。

大きなベッドがリビングにあるという変な部屋……いやいや、恥ずかしい部屋だ。

抗議して私の部屋といわれた方にベッドを運んだ。玄関からちよつときたらベッドが見えるなんてラブホテルみたいでしょ、ナツはときどき、いや、かなり常識がない。

お風呂は追い炊きもある綺麗で広いユニットバスで、ハーブバスができる。

キッチンもカウンター式で使いやすい。

17歳で1人暮らしというだけでめずらしいのに、こんな部屋を借りるのはすごく贅沢よね。

しかも計画に必要な目標金額の1千万を超えて余ってきたからというの。とんでもない17歳だ。

涼ちゃんに引越しのことを言うと、永原さんを連れて遊びに来た。

久美子叔母さんに話すと子供みたいにはしゃいで行きたいといわれ連れてきたの。

「いよいよ新婚さんみたいね」

「はあ」

「見ていたいから桜といっしょに遊びに来てもいいかしら？」

「……どうぞ」

叔母さんはナツをからかうのが楽しくてしょうがないみたい。

朝は送ってくれて帰るとちゃんとナツがいる、2ヶ月以上の空白を埋めるように甘えまくった。

でも残念ながら、新婚みたいと言われた生活は短かった、たったの3日。

ナツは8人の元リーダー、長谷川正宗が消えたといい、寝る時間以外はほとんど部屋にいない日々が始まった。

シノギ

ナツ〜side〜

「お前も来いよ、いまがチャンスだ、頑張れば出世できるぜ。商売はじめたばつかだからな、後からじゃ意味がねえ」

「大丈夫なんすか？」

「大丈夫だよ、うまくいくつて。オレが抜け目ね〜のわかってんだろ」

小早川と、元リーダーの長谷川正宗との会話だ。

山籠りの後、長谷川がいなくなっていたのに焦って小早川に張り付いていて良かったが、内容は良くない。

ようやく飲み込めてきた、いつのまにヤクザなんかになってんだ、あの野郎。

長谷川は元リーダーだけあって一番悪い奴だったのだが、よりによってヤクザだ。

「いいすよ、どうせ仕事は減ってたんす。いつからですか？」

「来れるなら早いほうがいいぜ、明日から来れるか？」

「いいっすよ、てことは明日から兄貴ですかい？ よろしく頼みます」

「おう、期待してるぜ」

……これじゃ他の2人も危ないな。だいたい悪4人組は仕事も何をしてるのかよくわからないのだ。

長谷川は仕事は全くしていなかったし、他の3人はフリーターや夜の仕事だった。それも職場が安定しない。

まさか、間抜け4人組までもってこともあるんだろうか、いや会社員や自営業の手伝いをやめてヤクザはないだろ。

盗聴を続けるもそういうことまでは話が出なかった、待ち合わせ場所だけしつかり聞いてまだ幸いだった。

それにしてもここまできてこれかよ、残り8ヶ月、大人しくしとけよ。くそ。

翌日尾行した結果、事務所の場所だけはわかった。中央沿線沿いのいよいよ新宿の近く、大久保だ。

一般的にヤクザの組事務所というのは無人になることが少ない。

少人数のところは別だが、この組がどうかはわからない。事務所になにかまずいものがあるかどうか、それ次第なのかも？

こんなことになる前に殺しておくべきだったか。いや、別にヤクザになるうがいつでも殺せる、間違っではない。

ちょっと面倒になっただけだ。

近辺を見回し思案する、今後はこの事務所を見張る必要がある、あまりいい場所はないがやってやるさ。

遠くからになるがしょうがない。

いつも見張りに来れるわけではない、株もあるし土日は山に一泊程度はしていたがしばらくは見張り最優先だ。

こいつらがヤクザになんかならなければ、ここまで見張りに時間を使う必要もなかったんだ。

少し前ならたまに長谷川の家に4人が集まったことはあった。

計画の立て直しだ、まずは動向を把握しなければならぬ。

ほとんど桜の為に引越したのに、部屋は寝に帰るだけという生活が続く。猫も戻そうと思っていたのに中止だ。

桜ともあまりゆっくり過ごせない、予想外に大忙しだ。

学校は放置したままだ、別に退学届けを出したわけではない。年度末あたりで自主退学というところだ。

時々こっそりと様子を見には行ってる、桜はオレが朝送り、帰りは永原さんと藤川と3人で下校してる。

かじったクンの見張りバイトは値上げして、万一の時は警察を呼んでから助けるように言ってる。継続している。

道場は金曜日だけはいくようにしているが、それすらもサボらざるを得ないときもある。

爺さんには春からカイロプラクティックの専門学校にいくと話してあるが、行く暇があるかどうかわからない。

予想通りというか、困ったことに悪4人組はとうとうみんなヤクザだ。

ヤクザの下っ端というのは結構忙しい、長谷川以外の3人は雑務をしているはずだ。事務所に居る時間が長いのだ。

事務所の掃除や寝ずの当番みたいなものもあり、自分の商売、シノギをしなくてはならない。

当番などオレにはどうでもいいが、誰かが出て行くと尾行してる。

どんなシノギをしているとかチェックしたり、女と会うだけとかのつまらん用事だと他の3人の動向も気になるから戻ってまた見張りだ。

探偵でも雇いたいと思う、かなり悩んだ。

しかし無理だ、オレは基本的に身内以外は信用しない、あらゆる意味でだ。

そもそもヤクザの素行調査など受けるのかも知らない。

受けたとしてその4人が後に行方不明になったと気づいたとしたら、どうするかもわからない。

警察に行くならまだかわいいが、逆にオレを調査して脅しにでも来られてはたまらない、可能性は低いがそんなところだ。

だいたいわかってきた、まずシノギは薬がほとんどだ、シャブだかコカインの粉系。

もちろん直接ではない、小売人を作り自分達が捕まることがないようにしている。

自分で言っていたように長谷川は抜け目がないようだ。

高校生でもわかるくらいの常識だが、当たり前のことすらできないヤクザも多いと聞く。

他にも何かしているが、それはもっと危ない雰囲気だ、こっちはまだわからない。

このときは1人じゃなく4人で動くのでわかりにくい、4人だと

尾行も難しい、かなり遠くからになってしまっただ。

ただ、相手を見ると暴力の臭いがする相手が多い、ヤクザばいときもある。

ハンドガンかもしれない、ハンドガンだとしたら厄介だ、4人もハンドガンを持っていたとしてオレの勝率はどれくらいになるだろうか？

まあどうみても練習をしていないから、近くなら99？くらいか。4人同時なら少し下がる、2人までならいけるだろうが4人だとケースにもよるな。

それにしても薬の元売りが、ますます殺してもなんとも思う必要は無くなった。

ヤクザというのは表向きシャブがご法度ということになっている。

もちろん建前だ、警察に対しての言い訳、シャブの売買で逮捕者が出たときにトカゲのしっぽ切りをする為だけの建前だ。

オレも大麻をしただけに結構調べた、大麻以外はほんとにかなり危険だ。

有名なシャブ。メタンフェタミン、ヒロポン、スピード、スピードの頭文字でエス、この名称が全てシャブだ、他にも一杯ある。

古いが有名な民間コピーの、覚醒剤やめますか？ それとも人間

やめますか？ との言葉通りだ。

シャブはきついらしい、女性がこれに騙されやすのは食欲低下の効果が強いからだ。しかも女性のほうが嵌りやすい、効きやすく中毒になりやすいのだ。

通常のダイエットでも筋肉や骨密度が落ちる女性は多いらしいが、それより悪質な症状が出る。ちょっとしたことで骨折するほど弱るんだ。

精神作用もきつくて常習性が高い、本人の意思でやめるのは難しい。

幻覚が強く、内容も楽しいものじゃない、通常のセックスで使うというのもダメだ。

カップルでは使えない、男は勃起しないからだ、知れば知るほどいやな薬だ。

少なくとも、シャブやコカインをやるくらいなら大麻をやるほうがいい。

捕まると罪は重いが身体は健康だ、別に大麻を吸えと薦めているわけではない。身体が健康ならなんともなるが、身体を壊すとどうしようもないという意味だ。

生きているといろいろある、あるだろうけどシャブやコカインはやめておいたほうがいい。

ログハウス

12月の後半になり、平日は見張り、土日は不動産を探し回るようになっていた。

まだ悪4人組に対しては何も糸口はないが焦ってもしょうがない。

改造もあるからそろそろ家を買わなくてはならない。

奥多摩にはなかなか山の中のはずれた一軒家がなく、15軒ほど見た後にあきらめた。

次に飯能市から秩父方面に10〜30?くらい行ったあたりの山の中に絞った。

東京方面から見て秩父を過ぎれば雪国に近くなるからそちらは考えにくい。距離的に遠くなりすぎると寒すぎるからだ。

もう5軒見ているがなかなか丁度いい物件がない、条件的に珍しいからしょうがない。

不動産屋のチラシだけの情報ではいいかなと思うと、観光客が多そうな場所だったり、人家の集落から50?程度の距離だったりする。

ネットの地図だと、過疎地では家が数軒あるのか一軒なのかわからない。

そもそも不動産の広告では住所が末番までない、良さそうだったら現地に行くしかないんだ。

いまからいく物件は期待があるが、このあたりは地図すらわかりにくいので住所で推測しにくい。

む、通り過ぎたようだ、車のあまり通らない山の中腹あたりの公道なのだが、脇道があるはずなのに見つからない。

脇道が私道でその私道が60?もある、その先の物件だから期待している。

そういう物件だとハイキングの人たちですら来ない、この辺りは過疎地だが都会からのハイキング客が多いんだ。

これかな？

舗装ではなく剥き出しの土の道路、草もかなり生い茂っている。

なるほど、舗装じゃない道、当然予想するべきだったのにつつかりだ。

他にはないだろう。私道を30?も行くと柵がある、ぼろい木の柵だ。2?幅の私道の左はガードレールもないむき出しで急な崖だ、大きな車だとスリルがありそうだ。

バイクを降りて歩く、公道から見るとくりと小山を回りこむような位置に、ぽつんとログハウスがあった、小さな別荘として建てられたようだ。

汚くぼろいが元々はオシャレな作りだったんだろう、土地は私道を含めず120? 《へいべい》、ぼろい建物は40? 弱だ。

ログハウスの強度を確かめるために柱だの壁だのを軽く蹴ってみた、大丈夫そうだ。シロアリも対策してたようだ。

あたりの人家や地形を確かめる、バイクに戻り30分ほど散策した、ようやくいい物件が見つかった。

一番近い民家まで300? 以上もあるのがいい。電気は当然来ているし、水道は井戸水を電気ですり上げるタイプでガスはプロパンガスだ。

他には浄化槽までついている、下水の浄化装置だ。

これは知識がないのでどうい構造かわからないが、ようするに下水道の代わりと言われた、都会じゃないので下水道がない。

そのまま下水を川に流すと川が汚れるから浄化槽でろ過して川に流すシステムだ。

価格は380万、相場などあつてないような山の中だが一応値切るべきなんだろうな。全く交渉もしないほうが不自然みたいなのだ。

ガラス越しに中を見ようとしたけどガラスが汚れていてあまり見

えない。

不動産屋に戻ることにする。自分でピッキングしてもいいが、図面をみても問題はないし、どうせ一度くらい同行するかなにかで来ないと不自然だ。

勝手に中を見ましたとは言えない、380万とはいえ中も見ないで買うのもちよつと変だろう。

今度は車に乗せてもらい一緒にくる、中は思っていたよりいい。

15畳くらいのワンルームなんだが、もっと汚いのを想像していた。

いいじゃないか、遊びでも使えるくらいだ。

ユニットのバストイレもちゃんと使える、水流は弱いがキッチンの水回りもちゃんと使えるようだ。

そのまま不動産屋に戻り、350万で売主に交渉して貰うことにした。後日連絡ということで不動産屋を後にする。

バイクでまた現地まで戻った、交渉失敗でも380万で買うのは決めた。

資金は1200万を超えているが一応交渉しただけだ、ここを買うと山籠りの拠点としても楽になる。

真冬になると外でテントもなしで寝るのは無理がある、都会より10度は低いんだ。

あまり厚着するようでは意味がない。

着膨れて動き難いようなら普通にトレーニングするほうがましだ。ここは標高も400?くらいはあるから10度以上だろう。

バイクで近辺を走り回る、近隣の地理の把握だ。

このあたりは、山また山という感じで人口が少ない、山の中腹や峰を縫うように公道があり、舗装の状態も良くない。

たまに観光地みたいな場所もあり、ときどきは少数の集落もある。

ほとんどの場所は携帯も圏外だ。

ログハウスからみて北に10?いくと小さな温泉街があった。

直線では行けないが南に5?ほどで太い幹線道路だ、ほんとに寂しいところだ。

4日後、350万で購入した、正式な書類は後だ。ここからが大変だ。

とはいえ、一度くらい桜とここで遊んでみるかなと思いついた。週末はもうクリスマスなんだ。

まずは1〜2泊くらいはできるように手入れをする。桜が来るかどうか分からないがどうせやることだ。

ストーブや灯油も用意した、桜はいきなり12度も気温が下がるなど想像もできないはずだ。

経験上、この近場でそうだというのは口だけで言っておいてもピンとこない、オレも実際に経験して初めてわかった。

例えばスキー場だと雪国に行くという心構えができるが、ちょっと近くの山へ行くというくらいでは都会っ子にはわかりにくい。それにスキー場なんてのは夜は暖かいところで寝るものだろう。

2日掛けて掃除や手入れをして、電化製品を買いに行く。

一番近くのホームセンターでさえ20?くらいあるので大変だ、しかもバイクだから全部配達して貰うしかない。

指輪

桜 side

ちょっと変わったクリスマスを過ごすかと聞かれる。ナツがログハウズを買ったから一緒に遊びに行くかと訊くのだ。

行くというと、めちゃ寒いぞとか、何も無い場所なんだぞ、というの、誘っておいて脅すってなんだかな。

どうもナツは素直に喜ばせることができないのよね、悪い癖だわ。

しっかり防寒の準備をして、土曜の午前中にバイクで出発した。

バイクに乗ること2時間、途中で埼玉県飯能市にある温泉に寄ったの。

スーパー銭湯みたいな大きな施設で温泉も本物だ。

お風呂も休憩所も綺麗な施設で人も少なくてくつろげた、腹ごしらえと休憩をして出発した。

すぐに山や川ばかりの景色になってきた、都心から3時間くらいなのに、すごく景色がいいの。奥多摩方面より車が少ないのもいいわ。

街道沿いに綺麗な観光施設もあり、寄り道しながらようやくログ

ハウスに着いた。

住所は埼玉県なんとか郡だ、はじめて聞く地名で、さざっと聞いただけでは覚えられなかった。

でも道順は覚えた、太い街道から3箇所しか曲がるところがなかったの。

「わ、おもしろい」

かわいいログハウス、ほんとに回りは山だけ、家がまったくない。

「別荘だったみたいだ、多分夏場の川遊びの拠点とかだろう、普通は冬に来るとこじゃないから」

「なるなる、ほんとだ、すっごく寒いね」

バイクから降りて手袋をはずしたら寒さが身に凍みるの。

スキーができるほど降らない、半端に寒いところみたい、でも川は綺麗だったものね。

2人でログハウスの中に入る、大きなワンルームだ。小さなキッチンがある他は、バストイレ一緒のユニットバスと電気製品一揃い。

これなんだろうと思っていたら、ナツがストーブを点けた、灯油のストーブ、初めてみた。

そのストーブでお湯を沸かし、コーヒーを淹れてくれた。

「休憩しててくれ、買い物いつてくる」

「いつてらっしゃい」

1時間ちよつとでいっばい買い物して帰ってきた、ほとんどが食
材みたい。

「元気なら山登るか？」

「うんうん」

「元気いっばいだな、疲れたかと思った」

「バレエはかなりハードなんだよ、だいたいタフじゃないとナツと
付き合うなんてできないよ」

「へ〜、そういうもんか？」

「ナツは妄想とかあんまりしなそうだけど、体力的にちよ〜エツチ
だからね」

「……バレエに返事したんだけど」

「……」

そっちこそエツチじゃん、とナツの顔に書いてある。

心は元からだけど、身体までエッチにしたのはあんたじゃんか、
抓っとく。

ハイキングコースを歩く、コースは高い杉の木が多く暗めだった。
ちよつと不気味な感じ。

「変なこと聞くけど、ナツは幽霊とか怖くないの？」

「桜はいると思うのか？」

「いないとは思うけどちよつとは怖いよ、ナツみたいに1人で山な
んて絶対無理だし、こういう暗いとこどころか、真っ暗になるんで
しょ、よく平気だなんて思うわ」

「なるほど、そういうの、山で考えたことあるよ。」

幽霊は99？いないだろうな、子供の頃以外は全然そういう存在
を感じた事がない。

子供の頃ってのは自分自身弱いじゃんか、もう、ただの暗闇です
ら怖い、つまりそのときはオレの中にいたんだよ。

怖いと思うからいる、霊能力者なんてのは99？サギだよな、で
も残り1？の本物の人にとっては本人の心の中に幽霊はいるんだよ。

幾つになってもその人にとってはほんとにいるんだ、思い込みの
激しい人にとってはそうじゃないかな」

「なるなる」

「人間てそういうものだろ、まあ幽霊がほんとにいたとしてもだ、怖いのは生きた人間のほうだよ」

「最近のナツ、ほんとに達観してるわ」

「達観は大げさだ、多分誰でも1人で自然にいと怖いものはないよ」

ふう、その前にね、イノシシやクマが出そうな真つ暗な山に1人
でいるなんて普通は無理なのよ。

ハイキングコースは明るいところにでた、もう少しで山頂みたい
だ。

山頂は無人だ、大きな岩があり登ってみた。

うわー、すごい、東京がちっちゃく見える、360 は無理だけ
ど、200 くらい見渡せる、ここ高いんだな。

「桜、クリスマスプレゼント」

うわ、かわいい指輪だ。……どうみてもダイヤ、小さなピンクの
ダイヤも横についててナツが選んだと思えないセンス。

「婚約指輪だよな?」

「受け取ってくれるか?」

「うん」

いつのまに計ったのかサイズもぴったり。抱きついた。

「全部終わったら挨拶とかするからそれまで秘密な」

「……うん」

値段は怖いから聞かないことにした、すごく嬉しい。

夜になると冷え込んでくる。でも寒いログハウスで2人くっついてるのがすごくいい。近所の音が全くなってほんとに静かだ。

ケーキを食べてから、私もプレゼントを渡した。指輪に比べるとしょぼすぎて嫌だったけど。

それからは毛布にくるまってくっついていてるだけ。寒すぎてエッチな気分にはならない。ストーブが点いても寒い。

「なんかすごいね、静かで世界に2人だけみたい、こういう世界にいつも1人であるんだね」

ひさしぶりにロマンチックな気分。

「そうだな、人目がないのっていいよ、慣れると気楽だし、自然に溶け込む感覚がいい」

「うう、なんか男っぽい」

「男も女もないよ、1人なんだから。空も山もでかくて、ただ1人って感じなんだ。」

でも、自然てのは回りは煩いんだよ、秋はすごく煩さかった、慣れると孤独感はまったくない。

そういうとき、幽霊なんてこの世にはいないなと感じたりするよ、いろいろ考えもすつきりする。

コンプレックスくらいならすぐ消える、最近は名前も顔もどうでも良くなったよ」

「いやいや、顔はどうでも良くないわ」

これではそのうち髭とか生やすかもしれない、絶対似合わない。

「……」

「はじめてナツを見たときね、ドキッとして、でもすぐにこの男はきつと女たらしで危険だわってやめようとして、でも気になって。」

結局一目惚れなんだよね、顔は大事でしょ」

「へいへい」

あれ、顔色が全く変わらない。前は顔のことほめるとすぐ赤くなってたのに。

「テレ屋なところも減ったね」

「少し免疫付いたかも。おかげさまで」

「前だったら、今の言葉でテレテレしてかわいかったのにな」

「テレテレがないと、ちょっとつまらない。

ぎゅっと抱きしめた。

「桜、思ったより冷えこみそうだ。ちと寒いけど、10分くらい
のところに温泉宿あるんだ、そこに泊まらないか？」

「うん、行ってみたい」

「浴衣で、ええじゃないかごっこできるか試してみるか？」

「やるやる〜」

前に軽く言ったの覚えてたのね。冗談だろうけど、ほんとに試し
てみようかな。

マジック

年末年始はほとんどナツの部屋で過ごした。

ナツも見張りを休み、祭日だから投資も当然休み。

大晦日に総合格闘技のTVを見ていたときに聞いてみた。

「そういえば、叔母さんとも話したんだけど、ナツってテレ屋だからプロにならないの？」

「ルールがどうかいってたけど、ほんとにはなぜなの？」

「……ルールだよ」

「そっちがほんとだったんだ、ルールが多いとイヤなの？」

「こづいつの桜に話してわかるとも思えないけど、聞きたいのか？」

「うん、聞きたい」

「まずな、ルールというか、特定の競技に参加すると武道家として弱くなるんだ」

「え？」

いきなりわからない。

「武道つてのはなんでもありだ、殺し合い、相手が複数、武器もある、急所が卑怯とかじゃない、そういうの全部含めてなんでもありだ、これが前提な」

「ふむふむ」

「競技に参加すると勝ちたくなるだろ、武道には必要ない筋肉も欲しくなる、ルールにも慣れてしまっ、だから武道家としては弱くなるんだ」

「ふうん」

「強いやつは打たれ強いのが多い、圧力の問題もある、オレだってこういうのに出るなら専用の筋肉がいるから上半身筋肉モリモリになる、全部が遅くなる。パンチの撃ち方、蹴りも変わる」

「モリモリはいやだね」

「そこかよ。……だいたいヒジすら禁止じゃあ話にならない。打撃系の選手がタックルされてヒジがダメじゃヒザのみだろ。」

「ほんとは組み付きに来るとヒジヒザ両方で挟むように迎え撃つんだ、しかもヒジのが有効度が高い」

「うーん、よくわからないな」

「てか、さっぱりわからない。」

「だろうな、例えばオレがこのリングでこのルールで彼等と試合をしても負けるんだ、でも本気のケンカなら勝てる、本気のケンカ、つまり殺し合い。」

「目も鼻も金玉も攻撃する、後ろから殴りもする、そういうなんでもあり、それなら勝てる」

「ええ、酷くない？」

「ないよ。オレはな、ルールのあるリング上じゃなくて、どこでも勝てる自分でいたいんだよ。」

「自分から彼等に殺し合いを挑むとかじゃないぞ、あくまでそうなたら勝てるというだけ、だから武道ってのは生き方なんだ」

「こわ、さっぱりわからない」

「プロの選手と戦うということを本気で言っている、それも殺し合いとか……武道が生き方、殺し合いが生き方、わからないよ。」

「……だろうな、桜はオレが手加減してるとこしか見たことないからな、つまり覚悟の問題なんだ。」

「いつでもそういう覚悟がないといざというときに動けない」

「もういいわ、久しぶりにナツがわからなくなってきた……」

「わからない、やさしいのと、そういうのは別なの？ 武道家同士」

だと殺し合いというのはありなんだろうか？

やっぱり格闘技だとナツの言うことは理解できないわ。

「こればかりはいくら桜が頭良くてもな、理解できないと思うよ、オレはバカだからな、だからヒグマとか考えるんだよ」

格闘バカになりきらないと理解できないってことか、うーん。しばらく考えてみたけど、理解はできなかった、難しいよ。

約束通りの時間に涼ちゃんも永原さんが遊びに来た。

4人で小さな神社に初詣に行ってきた。大きなところはナツが無理なの。

帰ってから4人でカニパーティーをした、ナツがネットでカニを買ってただけだけど食べきれない、カニの食べ放題なんて初めてよ。

永原さんは空手が楽しくなってきたみたいで、正月そうそうベランダでナツが教えていた。寒いのによくやるわ。

「おちるってどういう感じなんです？」

「柔道で絞められたことないの？」

ようやく指導が終って4人でカニの残りを食べてたけど、まだこ

んな会話だ。

「いやあ、誰も真面目にやらない柔道部でしたからね」

「なるほど、じゃあおとしたげるよ、一回くらいは経験しとくとい
い、じっとしてて」

「いやや、痛いのはちょっと」

ププ、永原さんあわてる。

「全然痛くないから」

なんていうか、マジックみたいだったわ。

ナツが人差し指で永原さんの喉の脇を10秒ちょっと触っていると、
それだけで永原さんはカクンと寝てしまったの。

私と涼ちゃんはぽろと見てた、私達があわてる前に、ナツは永原
さんの背中に回って押すと起きたわ。

「…………え？」

「目の前が暗くなってふっと意識なくなるでしょ」

「…………はい」

「寝技で首絞めておちるのはこれね、頸動脈を止めると脳に血がい

かなくなつて脳が酸欠になるんだ」

「痛くも苦しくもないですね」

「うん、喉のほづじやないとそういうもんだよ、呼吸できない絞めは苦しいけどね」

「わたしも、ナツちゃんしてして」

涼ちゃん、してしてはエロいよ。

「まじかよ」

涼ちゃんは好奇心が強い、ここね、とかいってナツが永原さんに教えている、永原さんが指で止めて涼ちゃんもおちてしまったわ。

そこをナツが起こす、正月からなにをやっているんだ。とか思いつつ、私も参加した。

眠くもないのに寝ちゃうというか、変な感じだった。

これはよい子真似しちゃダメよ、というあれね。

ナツは嫌がつてやらなかったから、起すのは少しコツがいるのかも。

少し寝た後、昼過ぎから2人でナツの祖父母のところ年始の挨拶に行き、夜は叔母さん家に連れて帰ったの。

ナツは叔父さんには苦手意識があるの。お父さん代わりだからそ
うみたい。

叔父さんは叔父さんで初対面でインフルエンザの看病をして貰っ
たから強く出れないのによ。

2人して叔母さんに日本酒を飲まされた。4人でちょっとした宴
会なんだけどそれでもナツはくつろいでいない。

武道家としてのナツとこつという普通の男みたいなナツ、武道家の
ナツはどうしてもわからないわ。

改造

ナツ side

桜の冬休みも終わった、オレは金曜日の夕方ログハウスに着き、改造を始める。

材料はホームセンターの配達だ、コンクリ、砂利、砂、防音材、スコップや日曜大工用品、かなりの量だった。

まずは小屋の防音対策だ、ひたすら防音材を貼る作業を天井まで含め徹底的にやった、見た目や部屋の広さ等、どうでもいいからできることだ。防音材でもこれだけやると防寒対策にもなった。

天井が大変でこれだけで日曜日まで掛かってしまった、大工仕事の経験がなかったから最初は大変だった。

まあ機会があるかわからないが次はもう少しましになるだろう。

緻密ちみつなことの好きな人向け、物作りに情熱を感じる人向けの作業だ。オレには向いていない。

翌週の金曜日、今日から大事な作業に移る、一言でいえば大きな墓場だ。小屋の裏手に大きな穴を掘る、ショベルカーでもあれば、1時間程度の作業だ。

8畳の大きさと深さ2？近い、墓というより地下室に近い。

大きな音を立てたくない、誰にも知られたくない、だから全て人力の原始的な作業。オレのような体力バカ以外、進んでやる気にはならないだろう。

スコップやつるはしでの地味で果てしない作業は気が遠くなる。慣れない穴掘り、使ったことのない筋肉も使う。初日から筋肉痛になり、手に血マメができた。

日曜の夜に部屋に帰り、長い眠りの後株をやりFXの自動売買を設定して見張りに出かける。

特にヤクザ4人組のほうだ。ヤクザなんてまともな職じゃないから何時何いつなにがあるか全くわからない。

夜までヤクザ事務所に張り込み、深夜に長谷川のマンションまでバイクで付けていく。

こういうクズにも当然女はいる。この日は女の仕事終わりに長谷川が迎えにいき、車での帰宅だった。

車は国産の高級セダンだが型はあまり新しいものではない、夜の仕事帰りなので当たり前だがケバイ女だった。

おそらく女名義で借りている中野区のマンション、分譲マンションで鍵は専用タイプだ、ピッキングなんか役に立たない。

ヤクザの女というものはいろいろだろうが、やはり水商売が多い

ようだ。他の3人のうち、田中にも水商売の女がいる。

長谷川の女は何時からかはわからないが、田中や市川の女はヤクザになってからだ。

クスリに関係があるのかもしれない、市川はモテるようなタイプではない。こいつの女は風俗だ。

金回りは悪くなさそうだが、当然兄貴格の長谷川程ではない。

小早川だけはクスリでも女を釣れないのだろう、相変わらず汚いからだ。

あれではチンピラヤクザではなく、しょぼくれた中年ヤクザだ。でも目を見るとやはり異常な感じがする。この目も女にもてない要因だろうな。

特に新しい変化はないようだ、もう深夜2時だ、帰るとしよう。

翌日はほぼ平常通りにした。

夜にはいつもの見張り兼ランニングで、3軒周った後に中山の動向を探りついでに木刀の素振りをしていた。

中山は部屋にはいるが、特に収穫もなく終る、間抜け4人組のほうも何もなさそうだ。

3月になった、残りは約5ヶ月だ。カイロプラクティックの学校はやめだ、相変わらずヤクザ4人組に対しては予定が立たない。

ログハウスの墓はゆっくり造ってる、コンクリートの乾き具合の都合もあるが急いで造る意味もないからだ。

平日は一緒に過ごせないことが多いからか、土日のログハウス行きに桜がついてくる、でも田舎というのは綺麗なだけじゃない。

春になると生命に溢れてる。かわいいところでは野生のうさぎやイタチやシカもいる。

都会と違い蛾が大きい、朝起きるとカメムシが窓にいっぱいいたり、ムカデもいる、蛇も多い。

そういうのを見る度に桜は大騒ぎをするんだ、ゴキブリすらあまり見ないで育ったらしい。反応がいちいち新鮮でかわいいというか。

オレなんて小さい頃に猫にゴキブリやヤモリをプレゼントされたことがある、古い家だからどこからでも入り込むんだ。それをいちいちオレのところを持ってくる。

好意だから怒るに怒れない。好意はいいすぎか、ようするに交換でうまいものをくれという意味なんだ。

オス猫は食欲が旺盛なんだが、マグネシウムで腎臓がやられるんだ。マグネシウム抜きのオヤツなんて知らなかったし、ご飯しかやれないから余計いやしくなる。

起きてるときはまだいいが、寝てると目の前に死体や半殺し状態で置いていく。夜の犯人は誰かわからないが、多分KYニヤンコのどちらかだ。

想像して欲しい、起きたらピントが合わないほどの至近距離に黒や茶色の死体があるんだ。

起きてから叫んだことが何度かある。これなんだろうって触ってから気付くからさ。ひゃあとか情けない悲鳴だったろうな。

それに比べれば遠くに生きてる姿が見えるだけ、かわいいもんだ。

現状でできる準備はほぼ終わっている、あとは免許と車、それとヤクザ4人組の拉致方法だ。

少なくともこの2年弱、ヤクザ4人組と間抜け4人組は連絡を取っていないはずだ。これはグループを解散するときにケンカみたいなことがあったのだろう。

確証はないが、オレが調べた限り2年以上一緒に暴走行為や輪姦をしていた奴等だ。完全に分かれている理由はそれが一番有力だと思う。

姉を殺したときにあったトラブル、間違つて殺した為に起きたトラブル、もしくはその直前に仲間割れをしたとかだ。いろいろ想像はできるが、今そんな想像をしても無意味だ。

それにしても、最初は間抜け4人組から拉致して当時ながあつ

たのか尋問予定だったけど、どうすればいいのか。

そうする予定だった理由は、間抜け4人組には家族同居が3人もいるからだ。1人暮らしの中山の部屋に集まることが多いから、そこでやれば一番安全に思えたんだ。

しかし今ではヤクザ4人組も3人が女と住んでいる、ヤクザ4人組が集まるのは事務所か取引現場くらいだ。

事務所を襲う、これも少し考えたが成否の可能性が全く読めない。無関係のヤクザを巻き込むのも問題だ。

しかもこのヤクザ事務所は外人が多い、日本に以前からあるヤクザの系列ではないんだ。

おそらく伊達に聞けばこいつらをヤクザ、極道とは言わないだろう。日系じゃない系列のヤクザもあるけど、こいつらはおそらく新興だ。

はつきりいってヤクザより危険だ。

韓国人だと思われるあぶなかしい雰囲気の方が数人いる、まあハンドガンは普通携帯してないと思うが、こいつらは日本の平和なヤクザと匂いが違う。

張り込み

ヤクザ4人組、3ヶ月以上の張り込みでもいい方法が見つからない。どうしようもないので1人づつに絞ることにした、まずは長谷川を徹底的にマークしている。

行動範囲はかなり狭い。事務所、女、よく会う女は同棲してる女と別に2人いる。ラブホテルで会う所為で確証はないが売人兼用なのだろうか。

他には横浜基地の近くで米兵と会っていたくらいだ、これは多分ハンドガンやコカインの売買だろう。横流しと密輸だと思う。

つまりこれが長谷川のコネでシノギになっている。それにしてもこいつはなぜヤクザになったんだ？

このコネだけあれば組に入るとか関係ないように思える、組に入れば上納金もいるだろうし、メリットはなんだ？ 出世して力でも欲しいのだろうか？

さっぱりわからない、元々ヤクザについて詳しいわけでもない。長谷川は日系ではないのかもな。

まあ日本人の遺伝子を解析するとほとんど中国人や韓国人の系統らしいから要は教育の違いだ。特に軍役が義務だと怖い、銃器の扱いに慣れているからだ。

コカインについてはハリウッド映画でよく見るだろう。欧米ではシャブより一般的な薬物で、持続時間が短いのが特徴だ。

中毒になり効果が切れると皮膚の下に蟻が這うような幻覚を見るという、シャブより更にやめにくく、シャブ同様悪質な薬だ。

週末はログハウスで過ごし、墓もようやく完成した。偽装も終わり知らないとまずここに地下室があるとはわからない。

今回も桜が同行だ。意外にこんな田舎も好きみたいで、毎回のように大騒ぎをしながらも慣れてきたみたいだ。

公道沿いに現れるシカはまったく警戒心がない、そのシカを近くで見て楽しそうにしていたり、野うさぎに一瞬で逃げられ残念そうにしている。

長谷川をやめて2番目に古い小早川をマークすること2週間。

この間にした意味のわからない行動は、新宿歌舞伎町の繁華街を抜け大久保に近い韓国雑貨屋に寄ること2度だ。

なにを買うわけでもない、キムチでも買うならそういう食い物の趣味だと思っただろう。

店主と会話して出てくるだけだった、これかもしれない。

小早川を止めて韓国雑貨の店主をマークする。

盗聴器では店内に入らねばならないので、道路の反対側から超指向性マイクで盗聴することにした。

角度さえ合えば特定の方向からの音だけを大きく拾うことができるので便利だ。

店主までの距離、約12メートル、2車線道路をはさむ、少し斜めの位置からだ。レジから見ると斜め後方になるので気づかれないと思う。

このマイクはそれなりに大きさがあるので、どこかに設置するわけにもいかない。位置は決まった、移動して客がくるのを待つのみだ。

無駄骨かもしれない。しかし他に手が無い。最悪は間抜け4人のあと、長谷川だけになるかもしれない。

5人、姉を殺した奴さえその中にいればそれでもいい。

残りは2ヶ月、免許を取る時間が2週間として、実質1ヶ月半の見張り期間だ。その後ならいつでもできる、心に余裕を持ってできるようにする。

張り込み9日目、ようやく確証がもてた。この韓国雑貨店は長谷川とつながりがあった、ハンドガンの売買の仲介をしていたんだ。

多分これまでにアメリカ軍仕様のハンドガンを求める客が2人来ていた。1人目は車が邪魔で確証が得られなかったのだが、2人目のときははっきりと聞いた。

「チュウさんの紹介だ、使えば一回で処分もする、足はつかない」

「xxxx」

ときどき聞えない部分はどうしても出てくる。

「物はたしかなんだろうな？」

「ベレッタ92だからね、大丈夫よ」

「よし、わかった」

客はヤクザっぽい男だった。

「携帯の番号をこれに書いてくれ、1時間以内に折り返し電話させるよ、紹介料の5万はさきだ」

興奮した、ようやく糸口を掴んだ。これならオレも客になれる、ハンドガン1丁70万、紹介料5万だ。多分、チュウさんだ、チュウではなくチュウかもと思うのだがチュウと聞いた。

ハンドガンは全然わからないが、アメリカ軍採用の信頼性の高いものを求める客が買いに来るんだ。

ネットで調べると、なるほどなという感じだった、軍や警察で使

うハンドガンは暴発や事故に対する安全度、信頼性の高いものが採用されるそうだ。

ベレッタ92、オレには意外だったのだがイタリア製だ、たしかに語感的にイタリア語だが、なぜかアメリカ製だと思い違いをしていた。

長い年月で改良を重ね、信頼度はかなり高い。中国製のハンドガンなどは安いが、使う側が安全面で怖いそうだ、有名な中国製トカレフのことだ。

さらに2週間この店に張り付いた、客の中には若い普通の日本人もいた。最期にもう1組、ヤクザ2人というケースもあった。キムの紹介だと聞こえた。

道路の反対側からの盗聴という、精神的にも肉体的にもきつい張り込みだった。

小早川も数度店に来ていた、短い会話でお金を渡すのはわかった、韓国雑貨の店主は仲介料を両方から貰うわけだ。

長谷川がヤクザになったのはハンドガンを捌くさばルートの為かもしれない。とにかく収穫はでかい、これでようやく計画も目処がたった。

店を出たヤクザ2人組を尾行してみる。

すぐ近くの歌舞伎町の裏道、徒歩のままホテル街のほうにあるマ

ンションに入っっていった。おそらく今日か明日にも取引をすうと思

う。
部屋まではいかず、マンションの出入り口だけ見張る、こいつらはどうでもいい。一応、長谷川との取引なのか確実に見届けておきたい。それだけだ。

まだ午後の7時、今日ならまだいいが明日だとしんどい、そもそもバイクで張り込みを1人でやるのは無理がある。相手が事務所や店ならまだいいが、こういう一発勝負のケースは難しい。

どうしてもときどきははずして張り込みに戻る。まあそこで失敗したかなという場合は運が味方しなかったということであきらめるしかない。

午後11時過ぎ、半分あきらめかけたところでようやく2人が出てくる、2人はマンションの地下から車で出てきたんだ。

疲れていたので見逃すところだった、国産の普通のセダンだ、今は黒ベンツに乗るヤクザは少ないのかもな。

車は中野方面に向かう、ついた場所は東中野の小さな公園、長谷川達の事務所も近い場所だ。

遠くにバイクを止め、近づくと、こんな小さな公園でやるのか、そういう場所はいつも違う、公園が多いがいつも違うのは面倒だ。

ひと気のない公園が好きだな、まあ最近監視カメラの普及が進

んでる、店はおるか商店街などにもカメラが溢れている。

人ごみに紛れて何かをするよりこのほうがいいのかもしれない。
車内……密室だと相手が嫌がるだろうな。

長谷川達4人がいた、毎回取引相手も違うわけだし、用心もかなりしているようだ。

ハンドガンは4人とも持っているだろうか？ もしこの場面で取引ごと襲撃するとしたら相手は6人、1人のケースで5人となる。

そもそも近づくだけで当然警戒される、そうなれば発砲する余裕は4人ともある。

オレが取引相手ならば最初から距離が近いので、1秒強もあれば無力化できる。

ハンドガンの素人とはいえ抜かせないほうがいい、やはり韓国雑貨の店主に顔がバレても取引相手になるほうがいい。

お金を数えている、こういうのは信用というかアバウトにやるものだと思っていたが長谷川はきっちり確認するタイプのようだ。

10分弱で長谷川達とヤクザの取引が終る、お金を数えるときが最大のチャンスだ、そうなるとハンドガンは2丁買うか。

クロロホルム

桜 side

ナツの帰りがほとんど深夜、泊まっても平日は同じベッドに寝るだけの日々だ。聞いたら週末は付いていっても邪魔じゃないと言われログハウスで過ごすことが多くなった。

春になりログハウスの周りは生き物がたくさんいる、気持ち悪い虫も生き物もいっぱい、そこは言いたくない。

でも野生のうさぎはかわいい。動きが速くて見かけてもすぐ逃げちゃうけどね。

あと真っ黒なイノシシがダムのところで走ってるのを見ちゃった。

人がけっこういる場所でね、人もイノシシもお互いに怖がってるみたいに見えたわ。ナツは遠くだから悔しそうにしてた、近くだと捕まえる気がまんまんだっただは……ほんとにアホだ。

猪突猛進は例えだっただけ読んでことあるけど、その時はほんとに直進して繁みに逃げ込んだの。

ナツは春からカイロプラクティックの学校にいくと言っていたのに中止にした。悪4人組がヤクザになってから忙しい。

考えてみると世間的にはナツはプーなのよね、17歳なのに学校もいかないし仕事もしない。張り込みで忙しいし投資で月に1000万以上稼いでいるからそんな気がしないのだけど。

お爺さんから電話で怒られていた、投資がバレてそんなのは仕事じゃないと言われてる。

ナツのパソコンにある計画のメモを読んでみる、最近は変化はない、あと2ヶ月でナツも18歳になる。

最近のナツはちょっとピリピリしてる、ヤクザとなった4人が気になるみたい。だんだん時間が迫る毎日、怖いと思う、全てのことから守りたい。

8人を殺すこと、ヤクザだと映画で見るとような銃器を持っていたりするだろうか。

新米ヤクザだしめつたにあることじゃないと思う。ナツは信じられない程強い、私の理解の及ぶような強さではない、それでも不安になる。

成功してもそうだ、ナツが言うには8人全員は失踪届けはでない、まともに家族がいるのは3人だ。不仲で別居してるのも2人、残りの3人は疎遠でよくわからないらしい。

3人の家族がまとめて失踪届けを出した場合、どの程度警察が調べられるだろうか。

ナツはまず調べることはないし、たまたま敏腕な刑事が調べでもしない限り大丈夫だと言う。

警察は最初から大きな事件じゃない限り捜査などしないと、でも敏腕な人ならナツのことはすぐにわかるだろう。

あの8人が唯一殺したであろう女性の身内であり、10?程度とはいえ事件の2年半後8人の地元の高校に進学をして引越しをした。

理由もなく高校をやめ、山中に小屋まで持つ18歳、そこまで調べれば誰でもわかる。

ナツは目撃者しだいだという、証拠がゼロならどれだけ疑わしくても捜査令状一つとれない。だからログハウスを調べることすらできないと、そう言うの。

なら私のやることは目撃者がでる可能性を少しでも抑えることだ、そして最悪はすぐ海外に逃がすこと。

6月になった、最近のナツはとにかく忙しい、いつ顔をみても憔悴している。

「ただいま」

「お帰り、ナツ日に日に疲れてるね」

「うん？ オレ顔色悪いか？」

「うん、それもあるしいろいろ」

「まあ張り込みがきついのはしょうがないんだ」

「私、手伝いたい。もうそろそろでしょ」

もういい、いまさら家を別に買うなどしない。

「アホか、絶対ダメ。これはオレ自身のことだ、だいたい桜がやることはないよ、心配するな」

抱きしめられる、今日は決心した、こんなことで誤魔化されない。

「ありがとな、あと3ヶ月もすればなにもかも終わってるから待っててくれ」

「あのね、これはナツだけの問題じゃないんだよ、ナツが失敗したら生きてたくないもん」

「……それは、万が一がないとは言わないけど、そのときは許してくれ、人生いろいろあるだろ、そこまでの約束は誰にもできない、死ぬとか言うなよ」

「それとこれは違うでしょ、ナツがどこか覚悟してるような雰囲気わかるよ。」

ナツは元々嘘が下手なんだから、少しくらいうまくなったって私を騙すなんてできないんだからね」

「一応ヤクザが相手だぞ、万が一はあるよ」

「だいたい覚醒剤だけの相手にこんなに忙しいわけないわ」

「問題は4人が揃う機会が少ないことなんだ。それを探ってるだけ、たいした危険はない、心配するなって」

「あのね、私はもう18なんだから、すぐ免許とって運転手だけやる、危険じゃないならいいでしょ」

「だめだ」

「そつちこそだめだ、運転手すら断るっていうのは危険だってことじゃん、ほんとのこと言って」

「運転手するってことはバレたら共犯なんだぞ、それがいやなの」

「もともと共犯だもん、覚悟はとっくにあるの、早く言いなさい」

「……言うことなんてなにもないよ、風呂行ってくる」

やっぱりなにか隠し事がある、少し前から感じていた、ナツが隠すことなど危険なことしかない。

長いお風呂だった、かなり困ってる、それほど私に言いたくないこと。

「長かったね、悩んでいい手浮かんだ？」

「見せたくないこともあるんだよ、お前、殺しの現場見たいのか？」

「わかった、それは見ない。他には何かある？」

「……ないよ、でも連れて行かない」

「勝手についていくもん、あのね、こっそり行ったりして携帯に連絡付かないときは、ログハウスに勝手に行くからね。」

「そこでずっと待ってる、もう合鍵も作ってあるよ、そうされたくないなら、ちゃんと話してね」

「……桜」

「なに？」

「……一つ教えてくれ、いつから手伝うとか考えてたんだ？」

「最初からだよ、言ったら対策するでしょ」

「……そっか、降伏する」

「全部話し聞かせてね」

「……」

ナツの重い口からでてきたこと。

ヤクザ4人組はアメリカ軍人からのハンドガンの横流し品やコカインの密売品をさばくのが商売だという。

ヤクザ4人組が同時に行動するチャンス、それはハンドガンの取引だけで、それが最大のチャンスだけど、4人全員がハンドガンを持っている可能性もある。

ハンドガンの取引を仲介する人物もマーク済みでナツ自身が直接ハンドガンを買ひ、取引中に襲うという。

4人全員捕まえるにはそれしかないという、話を聞いて正直くらくらした、ムカついておもいきり抓ったわ。

素手でハンドガンを持っている4人を倒す、なんてことを考えるのか。

取引してる現場を襲うとなると遠くから近づかなくてはならない。

それだと発砲する余裕ができるので、取引相手になり不意をついて倒し、発砲する時間すら与えない。

そういうことらしい。

住居がわかってるんだから夜にクロロホルムでも使って眠らせてはどうだというと、漫画の読みすぎだと言われる。

そんな便利な薬で入手可能なものはまずないと言うの。

クロロホルムをつけた脱脂綿で口をふさぎ気絶させる。それはただの創作だそうだ。

もしそんな便利な薬だったら誰も麻酔事故で死んだりしないだろうという、言われてみればその通りだ。

クロロホルムはこっそり部屋に気体でいれても、まず頭痛とかで不信に思われ、暴れたりなにをするか予想もつかない。しかもそれだと同棲している女性の問題もあり難しい、健康面でやばいらしい。

気体の麻酔薬でも大量に手に入るなら可能性もあるけど、当然入手は難しい。さらにピッキング不可能な部屋に2人も住んでいるぞうだ。

ナツもそういうことはとっくに考えていた。

止めたくなってくる。

弱気になってくる。

悪4人がヤクザになったと聞いたときから何度か考えたことはある。

私が命をかけて止めれば止められるかもしれない……。

……でも、わかりきっている。

止められたとしても、その後のナツは抜け殻みたいなものだ。

後悔することがわかりきっている人生、ナツ自身も言っていた、

似合わない。

私も覚悟するしかない、結論はそのままだと変わらない。

ナツのやりたいようにさせ、何かあったら全力でフォローする。

ナツが失敗したら私はどうするだろう、後を追うのは簡単だ。

叔母さんは悲しませたくない、でも私だって抜け殻みたいな人生になる。

こんなに男に溺れ夢中になることはない、信用することもないと思う。

ナツになにかあったら、それはそのとき考えよう、今は全力でフォローだけする。

「まだ気持ちの上ではいやなんだよね、なんでそんなにいやなの？」

「……拉致 殺人 死体遺棄の共犯者にしたくない、見られたくない、見せたくない、もう全部だな」

「それ、まだ罪の意識みたいのあるんじゃないの？」

「オレにはないよ」

「ほんと？」

「最近は、生き物が生き物を殺す、自然だと思っただ。」

同種だからといって恨みがある相手を殺さないのがむしろ不自然なくらいだ。

生き物は生き物を食う、当たり前のことだし、それでいいんだ、食うために殺す恨みがあれば殺す、オレにはそれが自然なんだ」

「ふうん」

「人間の倫理観はおかしいと感じる、人間だけが特別みたいな傲慢さがあるから全部がおかしい。」

人間なんて特別でもなんでもない、人間だからといって中身が動物以下なあいつらを殺すことを考えてもなんとも思わない。

でも桜はそうじゃないだろう、それも含めて巻き込みたくないんだ」

「ナツは自然の中でそういう結論になったんだろうけど、私はナツ程やさしくないのよ、輪姦するような男は死んで当然だと思っし、殺されればいいとも思っし。」

輪姦する男って女を虫けらみたいに思ってるでしょ、そうじゃないとできないだろうし、だから女から見ても同じ、形が人間なだけじゃない。

私はゴキブリを殺して心を痛める程やさしくないの、手伝っつていっても運転だけだし、痛めようがないわ。

私はナツが心配なだけ、ナツがあんな奴らのことで心を痛めるのすらイヤ、私の知らないところでナツが死んだりするのがイヤなの

「……」

「ナツのやさしいところが好きだよ、あいつらはどうでもいいの。」

ナツが心配だから側にいたいだけ、なにかあったら、そのときは側にいなきゃダメなの」

「わかったよ、でも運転だけだぞ、絶対に勝手なことしないって約束してくれ」

「うん、約束する」

抱きしめられる、約束なんて守るわけないじゃん、覚悟決めた女をなめるなよ。

免許

ナツく sideく

また見張りに数日を使う、中山達4人に変化がないことを確認し、ヤクザ4人組を重点において見張る。

長谷川正宗、元リーダー、ずるがしこいタイプだ、女も住まいも変っていた。

小早川真治、いやな目の競馬バカ、相変わらず女はいない。

田中浩二、こいつも女は変っていた、モテる顔で軽薄な感じの特徵のない男だ。

市川茂晴、こいつは4人のなかでは一番体格がいい、190?、95?くらいある、数字だけならオレ以上だ。

怒れば8人中一番強いだろうが頭は悪い、多分、昔から長谷川にいいように使われて来たんだろう。

このクズ4人がいなければ輪姦グループなどなく、姉が死ぬこともなかった。

やはり憎いな、怒りもすぐに湧きあがる、少しは変化を期待していた。

いまさら殺すとか殺さないというのは、殺すことは中1で漠然と思い中2で決意した、そのまま変わらない。

その間変ったのは桜に対する気持ちくらいだ。

期待していた変化というのは、憎しみや怒り、こっぴつものもが少しでも消え、平常心で殺せるようにならないか、そういうことだ。

そのほうが安全に殺せる、冷静に、冷徹に感情もなく殺す、それができればミスもなく危険は減る。

それを期待したのだが無理だった。山籠りで多少は大人になった気がしたけど、まだまだガキのようだ、一生ガキかもな。

桜 \ side \

自動車学校に免許を取りに行くと言つと止められた。

ナツの誕生日に合わせ、合宿免許で同時に取りつと提案されたの。

最初疑ぐつたけど、それでは疲れたときに交代もできないと言われる。

高校が夏休みに入る前に少し休めば、7月末には2人も取れている計算になる。

北海道や沖縄などの遠くもいいなと言つていたけど、自動車学校のスケジュールはぎっしりだから意味がない。

相談した結果、新潟の合宿免許に決めて、ツインルームのホテルの部屋を頼み、私はAT専用^{オートマ}、ナツは普通の免許で申し込んだの。

普段私の部屋に置いている小型のパソコンも宅急便で事前に送っていたの。

決め手になったのはホテルに温泉があったからだ、温泉プールもあるの。

自動車学校については特に言うことはないわ、カリキュラムを消化していくだけ。早朝ホテルに迎えが来て夕方送られるだけの毎日。

授業は簡単、でもAT免許にしておいて良かった、最初は運転は難しかった。

いやらしい教官もいたけど、ナツがブラックオーラ付きで睨むだけで終る。睨むだけであそこまで怖がらせるとは……ナツだともし運転が下手でも睨むだけで合格が貰えるかもしれない。

PCで映画くらいは見るけどあまり持ってきた意味はなかった。ナツは暇なときはほとんどプールで泳いでいる、たまには休憩してよと思ってるのにほとんど出てこない。

私が休憩しててナンパされてると慌てて出てきた。ふふ、最近はCカップになったの、妬かれると嬉しいのよね。

でもね、私の隣にナツがいるのを見たらその男は2度と寄ってこ

ないけど、女はしつこく色目を使う……。

7月末、自動車学校が予定通り終わった。

2人で東京に戻り、府中の試験場で免許を交付された。

ナツは車を買に行くといっってバイクで出かけていく。

少し疑うと、車というのはお金だけで買えるものじゃないと説明された、手続きに数日かかるみたい。

他にもいろいろやることもあると言っている。

ナツの side

オレの顔と携帯番号が韓国雑貨の主人にバレることは決まっている、八王子に家賃1万のぼろい部屋を借りて住民票を写した。使うわけじゃないから何でもいいんだ。そのまま駐車場も借りる、保証人は不動産賃貸専用の保証人を頼みお金で済ませた。

住民票は現在の部屋には一度も移動はしてない、以前の部屋のまににして郵便局だけ手続きしただけだ。

その住所で携帯も新規で買う、はっきりいって携帯会社は情報な

ど筒抜けだ、なにもかもバレバレになる。

誰にでもすぐ情報は漏れる、個人情報がかこれだけ売買されている世の中だ、危ない要素は少しでも無くすほうがいい。

次に車を買に行った。

中古の1BOXカーで色は白にする、ありふれていて一番目立たないからだ。

よく、バイクなどをまるまる運んだりロックバンドあたりが移動に使うようなトランスポーターというタイプの車だ。

あまり濃すぎるのも不自然なので、合法の範囲の濃さでスモークのフィルムを運転席以外の窓全部に張って貰うことにした、納車までは5日かかる。

そこから5日間、ほぼいつも通りにすごした、株をやり、稽古をして走り、夜はヤクザ4人組と間抜け4人組とを交互に見張る。

車の納車日だ、部屋の近所に実際に置いておく駐車を借りた。

桜 side

ナツといっしょに八王子の中古車屋にいった車を受け取る、車は大きな白のワンボックス、箱型で荷物が大量に積みそう。

そのまま2人で運転の練習に行く、まずは車に慣れること、とナツは言う。そんなことしなくてもナツはうまい、すすいと運転しててさつき乗り始めたとは思えない。

人気のない田舎の駐車場で交代した、教習所の車とは違う、一回り以上大きいから運転しにくい。

最初は少し壁にぶついたりした、ナツは気にもしない、どうせ終ったら廃棄する予定だからどうでもいいみたい。

車に慣れてくると車両感覚を養う為に狭い路地なんかメインになる。

3日かけてしっかりと練習した、4日目にはナツはバイクで他の用事にかけた、ナンバーを盗み、拉致に使うときは盗んだナンバープレートを使うらしい。

どこから盗むのか聞くと、大きな公園の駐車場にたまにナンバープレート付きの車が捨ててあるという。

その場合、持ち主はもう廃車手続きをする気もない、自殺とか失踪をする前に捨てていくのだと思うと説明された。

人身事故さえしなければいい、ぶつけても気にしないでしっかりと練習してくれと言われ、その後数日は練習を続けた。

免許（後書き）

誤字、脱字等ありましたら報告お願いします。

実行

ナツ side

いよいよ実行することになった、待ちに待ったこの5年間、計画をきちんと立ててからでも2年以上だ。

長かった、気が遠くなるほど時間が経った気がする、計画前はほんとに気が狂うかと思ったこともある。

姉が殺された後、はじめて墓参りに行った、霊など信じてはいない、情けなくて今まで来れなかっただけだ。

霊がいたら親も姉もやめろというだろう、オレが殺したいから殺すだけ、自己満足、それだけだ。

頭ではわかっている、殺したいほど奴等を恨んでるのはほとんどオレだけだ。つまりオレが消えても奴等が消えても同じことなんだ。……いまさらどうでもいいことだな。

最初は危険のない間抜け4人組からだ、これにはどう考えても桜は邪魔なのだが、行くと言って聞かない。

そこを時間的にきついと言い聞かせ、それでも聞かないので、自宅待機と言い聞かせた。

これは中山の部屋に4人が集まるのをひたすら待つだけだからだ。

夜間のみだが、盗聴を続け何日でも待つことにする。

ほとんどは中山のアパートの近所の公園で待つ、ここに桜だと目立ちすぎるんだ。

とって車内で数日待つなんてつらいだけだ、近所の人の記憶に残りにくいようにオレはジャージだ。

しかも以前からよくここで運動している。

とにかく4人揃わねば意味がない、強引な手も考えたが待つほうがいい。

昼はヤクザ4人組と韓国雑貨の監視だ、これはただ変化がないか、それを探るだけだ。

間抜け4人が片付いたら、4人の失踪を知って警戒をしないようになるべく時間を空けずにやりたい。

いくら交遊がないとはいえ、家族にも全くないとは言い切れない。行方不明になれば連絡を取ろうとするかもしれない。

ヤクザになり4人とも住所は変わってるので可能性は低いと思う

が、それでもゼロではない。家族の誰かが携帯番号くらい知っててもおかしくはないからだ。

中山の張り込みから6日目、夜の9時だ、ようやく4人が集合することになった。

中山の携帯に電話がきて、今からいくぜ、と聞えたのだ、会話の内容からも3人である、いよいよだ。

桜 side

ナツの張り込み開始から6日目、夜の9時、ようやく携帯が鳴る。

「待たせたな、これから集まってくる、車のほうに待機してくれ」
「うん」

内容はこれだけ。

車のスペアキーを持ち、秋用の上着も持っていく、真夏でも山中の夜は寒い。

あとスタンガン、夜はこれを持っていないとナツは怒る、それと準備してたバツク。

タクシーで移動して公園のところに停めてある車に乗り込む。

公園から中山のアパートは100?以上ある、今頃ナツは中山の部屋を見張っているはずだ。

エンジンを掛けて移動する、中山のアパートが見える位置、ここまで移動して待機と決まっていた。

エンジンを切る、ナツの姿が一瞬見えた、こちらを確認しただけみたい。

ナツが中山の部屋を盗聴していて会話の内容から間抜け4人組と言い出したのだけど。

間抜け4人組の高橋光一、斉藤健治、鈴木英輝。

この3人は家族同居のため、4人揃って拉致する機会は1人暮らしの中山の部屋で酒盛りをするときがベストだと、2年前から決まっていた。

週1くらいのペースで集まり、主にギャンブル中心のくだらない会話ばかりと聞いている。

悪い相談でもするならナツも甘くなつたと苦しまなくて済んでいた。

ナツ side

3人がこちらに来る。

コンビニ二袋を持っているのを確認した、こいつらの集まりはだいたいこうだ、酒やツマミを持ってきて酒盛りと麻雀になる。以前は朝までしてたこともあったが、最近は12時前後で終ることが多い。

進歩のない奴等、ここからは流動的だ。泊まるケースもあれば帰ることもある、帰りは歩きだ、3人共に家は近い。

泊まるなら寝たところを襲う、帰るならそこを襲う、おそらく今日も帰るだろう。見ていた限りでは、帰る率のほうがかなり高かった。

中山の部屋は一度入って間取りを見ている、1DKしかない、しかも汚かった、あまり男4人で泊まりたいものじゃない。

桜が車を運転して見えるところに移動してきた、来るならそこまで決めておいた。

オレはアパートの敷地内にじっと身を潜める。アパートの他に住人には見られないようにだけ注意する。

12時過ぎ、3人が出てきた。

「じゃあ明日な」

「おう、おやすみ」

「寝過ぎすなよ」

「じゃな」

短い会話で3人が帰り始める。

中山もすぐドアを閉めた、そつと3人を追う。

酒入りの3人からすれば音もなく近寄るといった感じだ、人通りはない、行く。

高橋光一の肩を掴み、わずかに振り向かせて鳩尾を突く。

ほぼ遠慮はない、脇を閉めた、右の正拳逆突きだ。

空手では一般的な正拳突きではあるが、使用する場面は見たことがない人のほうが多いだろう。一般人に人気のあるリングではまず使われない。

だがボディを突くには有効だ。ボクシングのストレートはボディには向いていない、フックでは遅い。

オレの正拳逆突きは普通より距離を短くしていて威力も全く落ちない。当てる直前まで力は一切入れない。

当たる瞬間のみ、拳に力をいれ、捻りを解放するように一気に回転させる。腰も足も瞬間的に小さく速く運動して回転する。

見た目に地味だが、はつきり言って死ぬほど痛いだろう、自分でもこんな突きは貰いたくない。

一瞬、く、の字の形になった後、小さな呼気のみで崩れ落ちてい

く。

高橋が崩れる前に斉藤健治の鳩尾を突く、斉藤の表情はまだこれから驚く予定の間抜け顔だ。

斉藤が崩れる前に、鈴木英輝に向かう、こいつだけ少し距離を置いて歩いていった。

関係ない、酔っ払いに反応などできるような速度ではない。

酔った人間は思考速度も反射神経も遅い、声を出すことすらできない。

同じく鈴木鳩尾を突き崩れ落ちる、3人倒したが2秒掛かっっていない。

桜に合図をしようと思ったが、もう車は動き出していた。

後部のドアを開ける、完全に気絶している3人を次々に車内に投げ入れる。

嘔吐物など無視して口に粘着性の高いガムテープを耳もカバーした後頭部までぐるっと2〜3周張る。

さらに腕と足に手錠を掛けていく、右手と左足、左手と右足という具合にだ、これで気絶から醒めてもほとんど動けない。

「このまま待っていてくれ」

「りょうかい」

車のドアを閉める。

なんとも気の抜ける返事だ。

アパートの中山の部屋のドアホンを押す、3人が部屋を出てからまだ1〜2分程度だ。

「なんだ、忘れもんか？」

中山は無防備にドアを開け放った。

開けなければ、間違えて訪ねたふりでもして寝るのを待つ予定だったが、開けるだろうとも思っていた。

オレの顔を見上げる間抜け顔の中山の鳩尾を突く。

4人ともにほぼ80?くらいの正拳逆突きだ、80?の意味は飛ばさないように止めるだけだ。

下からくる拳は本人にはほとんど見えていない。

正拳逆突き、オレにとってはこれが一番速く安全で確実だ。大きな音も立たない、狙いも1?と狂わない。

気絶した中山を担いで車に乗りこむ、他の3人と同じように顔にガムテープを3周させて手錠を2個嵌める。

グローブをはめ、中山の部屋に入り、盗聴器のタップを抜き、電気やエアコンを消しておく。

鍵を閉めて車に戻る、後部ドアから中に入りドアを閉める、ミスはないな、5秒ほど考える。

桜 side

「桜、行こう、平常心で運転できるか？」

「大丈夫、まかせて」

平常心、平常心、自分に言い聞かせ車を走らせる。

ただドライブしているだけ、大丈夫。

流れに乗り飛ばさない。

目立たない。

ルートもあらかじめ決めていた、飯能市まで高速やバイパスを乗り継いでいくだけ。

「相変わらずっていうか、まるで漫画みたいね、ほんとに人間かしら？」

ナツは後ろで手錠やガムテープの具合をたしかめて、携帯の電池まではずして。GPS対策みたいね。

最期に毛布を被せている。

「そういえば、オレ、ほんとに人間か自信ないぞ。最近山にいると自分が人間じゃない気がするよ。」

降りるとき、同じ形だ、オレも一応人間だなって思っんだ」

山にいたってそんなハンサムな動物はいないわよ。

「あっそ……ナツにはわからないだろうけど、なんか強すぎるって見てて不思議なんだよ、人間でそんなに簡単に気絶するもんなんだね」

「いや、腹殴って気絶は初めてやったぞ」

ぶ、まじかよ……。

「ええ、どういつ予定だったの？」

「人間相手に初めてほぼ思い切り急所やったからな。」

痛くて声も出せない、動けないと思ってただけ、起きたら死ぬほど痛がるぜ」

「は、どう鍛えたらこうなるの？」

「ヒグマに勝とうと思うとなるんだよ」

「そういつとは子供でかわいいなと思うんだけどね、でもいつかほんとに戦いそうで怖いわ」

「いつかはやるよ、今はまだ勝てる自信ないけど」

「……ふう〜」

ヒグマねえ、そんなのに勝てたらほんとに人間じゃないよ。

実行（後書き）

前話あたりから視点がころころ変わってますね。読みにくかったらすいません。あと悪役の名前については8人もいるので悩んだ末に普通にしたのですが、同じ方、似てる方いらっしやったらすいません、8人変な名前だと書いてて違和感が強かったもので。

撲殺（前書き）

残酷な描写があります、苦手な方は読まないでください。

撲殺

ナツ〜side〜

何事もなく無事ログハウスに着いた、途中からは運転を代わっている。

山の道路は細い箇所が多い、オレのほうが安全だと思ったからだ、一部だが幅ギリギリのところもある。

「桜、小屋で待っていてくれ、ここからは1人でやる、ありがとな」

「うん……わかった」

桜がログハウスにはいったのを確認し、深呼吸して気持ちを切り替える。冷静に、冷徹にやる。

4人を地下室のほうに運び地下室の入り口前に置いていく、元々はログハウスで尋問する予定だったのがこっちになっただけのことだ。

はっきり言って物扱いだ、オレにはこいつらを人間扱いする気はない、人間扱いをしていたら無関係の場合に殺しにくくなる。輪姦だけだとわかってても殺すしかないんだ。

4人とも多少は動いているが無視だ、どうせ手錠でまともに動けない。

中山元樹から始めることにする。中山だけ地下室に運び、懐中電灯を点け、ガムテープだけはずした、嘔吐物などで呼吸が苦しかったようだ。

咳き込んだり、小さくどこだとか呟いている、体力もかなり消耗しているな。

地下室の近くに置いてある3人に毛布を持ってきて頭から掛ける。しばらくしてようやく喋れそうになってきた。

「中山元樹、25才、元輪姦グループのメンバーだとわかってる。」

「ここは人なんか滅多にこない山の中だ、声はいくらだしてもかまわん、聞くことに正直に答えろ。」

「……誰だ？」

「お前はここで死ぬ、これは決まってる、あとは死に方だけだ、正直に喋れば楽に殺してやる、わかったか？」

「……」

「お前達はなぜ解散した？ 答えろ」

「……ひっひっ」

泣き出しやがった。

「他に3人いるんだ、喋らないならお前はここで飢え死にさせる、いま決めろ、10秒待ってやる、なぜ解散したか答える」

実際には15秒は待った。あきらめかけたら喋りだした。

「…………長谷川が殺したからだ」

長谷川。

「なぜ長谷川は殺したんだ？」

「逃げようとしたからだよ、な、助けてくれ、オレは酷いことなんかしていない」

さっきまで99？だった、100？の後に1??の遠慮もない、まずは右手の人差し指を折った。

「ぎゅ〜」

「聞かれたことだけ喋れ、遅いと次々折るぞ、お前は輪姦しもしないとも言うつもりか？」

殺した女は誰が攫ったんだ？」

「…………斉藤だよ」

斉藤…………個人名が出てきたことが意外だった。誰と聞いても出な

いと思っていたのに。

あのナンパ男がか。

「斉藤がどうしてそうなった？」

「斉藤が惚れて振られたんだよ」

……理由があつたのか、ただ攫われただけだと思つていた……しかもそんな理由で。

「斉藤が1人で攫つたわけじゃないだろ、他は誰だ？」

「……」

この4人で攫つたのか、また指を一本折つた。

「うああ」

「つまりお前ら4人でやったのか？ また折るぞ」

「……えっえっ、そっだよ」

泣くと余計腹が立つ。

「お前らは、長谷川達と全く連絡をとっていないな、なぜだ？ 殺し以外に理由があるだろう」

「……斉藤が一番に……する予定だったんだ。」

それを長谷川達は女を見つけられずに帰ってきたくせに、女を気に入ってオレからだって」

「それからどうした？」

「うつ、うつ、……みんなで揉^もめて、その隙に逃げ出そうとして……それを長谷川が殴^うって、コンクリで頭打^うってあっさり死んじやつたんだよ……なあ、助けてくれよ……」

長谷川……。

「……お前は女がやめてくれと言^いったらやめたことがあるか？ つまらんこと言^いうな。」

「生きたいならここに放置してやるよ、運よくオレが捕^とま^ってここに警察が来れば生きてるかもしれんぞ」

「……なんでオレ達だけ？」

「お前は知らんかもしれんが奴ら4人はいま新米ヤクザだ。ハンドガンを捌^はいてるんだよ。」

「後回^ごしだがお前らのあとに殺^{ころ}す、だが斉藤は別だ、ここで飢^うえ死^しにさせる、お前はどうしたい？ 決^きめる」

「……助けてくれ」

「オレは大沢夏樹というんだ。お前等のうち、誰か1人でも通報し

ていたら姉も生きていたんだ、意味がわかるか？ あっさり死んだとウソまで言ったな」

「……嘘じゃない、死んだと……」

「まあ勝手にしろ、オレにはどうでもいい、あとでまた聞いてやるよ、ゆっくり考えろ」

「まっえ」

待つわけないだろ、ガムテープを再び巻きつけ表に運び、鈴木英輝と交代だ。

しかし、鈴木にしても高橋にしてもほぼ同じことを言った。

斉藤が言い出し、こいつら4人で姉を攫ったんだ、中山の嘘は姉の死のことだけだ、2人はまだ動いていたと言った。

尤も中山自身はそう思っていたかもしれない、動転してる人間など認識力は酷いものだ。

斉藤に交代した。乱暴にガムテープを外していく、ゆっくり待つ気はない。

「斉藤健治、オレは大沢夏樹、お前が惚れた大沢秋穂の弟だ、なにが言っことはあるか？」

「……あ」

「ここで飢えて死ぬ」

口に太い木の棒を突っ込んだ、なにか言いかけたが無視だ。こいつは自営業を手伝っていて家族と仲はいいはずだ、思い残すことはいろいろあるだろう。

口先だけの謝罪だの反省が聞きたいわけではない、弟だと告げただけだ。

これでどうがんばっても自殺すらできない、ガムテープを巻きつけ、親指以外の指を8本折った。地下室の隅の持つていき座らせる。これから起こる惨劇を見せる為だ。

3人のところに戻り、全員墓の中に入れてからガムテープをはずしていく。

1人づつにどうするか聞いた、決められなかったのは中山だけだ。3人も泣いたり喚いたり神経を逆撫でしてくる。

しばらくすると残り2人は殺してくれと言った、殺す前にやはり姉とオレの名前を告げた。

メリケンサックを嵌め、目を瞑り震えている鈴木の頭に拳を打ち下ろした。骨が砕け柔らかい肉が潰れる感触。

あ、とか、う、すらない、身体は痙攣けいれんしているが、本人はもう痛みなどないだろう。

高橋はちらっとこちらを見たり逸らしたりだ、同じように撃ち下

ろす。

最後にもう一度中山に訊いた、泣くだけだ、放置しようとしたら泣きながらも殺してくれと言い出したのでその通りにした。

斉藤を3人の死体の上に放り投げた。

外に出てコンクリートの入り口を落とす、コンクリートの蓋には以前から全部土を被せてある。

入り口を木材で作った箱のような物で隠した。これで遠目には地下室があるとわからない。

シカ程の感慨すらない、残ったのは気色悪さと怒りだけだ。

惚れて振られたから、そんな理由。

しばらくそこに立っていた。

止めようとしても、姉が殺された場面がリアルに想像されて涙が止まらなかったからだ。こればかりは被害者の遺族にしか気持ちはわからないだろう。

1人で憶測で想像するのは違う、犯人から聞くと、どんどんとリアルな映像となるんだ。止めたくても止まらない映像。

どれくらい経つたろうか……桜が心配しているだろう。気を静めてからログハウスに入った。

手だけ洗う、血がかなりついていて、メリケンサックも洗う、桜が様子を窺うかがっているのがわかる。

話をした、話したくはないが隠すようなことでもないし下手に隠してもバレる、話してるとまたも映像が止まらない。

なにも言わずに抱きしめてくれた、抱かれる資格すらないが振りほどくこともできない。

空が明るくなってきた、片付けをしてくるので休んでくれと告げて外に出た。

コンクリートを捏ねていく、斉藤ほどの程度恐怖を味わっているだろうか？

地下室にコンクリートを運び、斉藤にも拳を撃ち下ろした、飢え死にさせる気はない。そこまですればこのクズ共と変わらない。

4人の死体をくつつけて並べる、人間4人、たかが1、5畳程度オスのシカ1匹分くらいの大きさだ。

木枠で囲み、こいつらの所持品や使った毛布、全てを一緒にコンクリートで埋めていく、何度もコンクリートを捏ねて埋め尽くしていく。

車のほうはたいして汚れていなかった、少し水で流して終わりだ。

毛布を数枚また買うだけだ、思考が緩慢になっているのを自覚する……疲れた。

ログハウスに戻り桜に聞いた。

「完全に朝になったな、終ったけど帰りたいか？」

「どっちでもいいよ」

ここで休憩でもいいのか、近くに死体があるというのにいい度胸だ、幽霊怖いってのは別なのか。

「じゃなくて、どっかで昼まで寝て今日は遊ぶか？」

「行く、こないだのとこ？」

「気に入ったならあそこでいいよ、こんな時間に入れるかわからないけど」

「そうだね、行くだけいってみよ」

桜がいると救われる、こういうの見越して明るくしてたのかな？

こいつにはほんとに敵わない、少なくとも、1人だとどうしても暗くなっていただろう。

それから次の準備などとして過ごしたけど、部屋でもまともに寝ることができなかった。寝てもすぐに目が醒める。

想像していたより嫌なものだった、殺した時は怒りが先行していたしなんだかあやふやで記憶が鮮明にない。

それが時間とともに実感が増してくる。いまだに手に感触が残っているような気さえする。

桜はうんざりするほど側から離れなかった、ときどき抱きしめたくなる。

最期になるかもしれない、何度も抱きしめたくなる、この血塗れの手で。

息吹

桜 side

自分の手で殺す、ナツのその台詞は文字通りで殴り殺すという意味。強情だと思う、最初は意味を取り違いで、わかってから何度言ってもそこは変わらなかった、おそらく妙なポリシーとかそういうの。でもその結果がこれだ。

あまり眠れていないはずだ、1時間くらいでがばつと起きたり、寝てても苦しそうだ。お姉さんのこと、自分の手でしたこと。

少し様子を見たほうがいいのかと考えたりしたけど1日で限度だった、次まで猶予がなくて無理だ。

これでも最悪よりはまし。あの4人が関わっていない可能性もあったし、それどころか半分はあの4人の所為だった、多分だけそうじゃなければナツは殺せなかったかもしれない。

その場合は4人を監禁だけしてヤクザ4人を終わらせて海外に逃げる提案をする予定だった。

明日の決行だ、どうせ眠れないナツの右手を握る、一瞬ビクつと反応してくる。丸1日私にふれなかった右手、その手にキスをする。

「……桜」

「ナツ、愛してる」

憔悴してても色っぽい顔だ。ナツの右手に左手を絡ませて身体に覆いかぶさり、キスをしていく。ナツがその気になるまであちこちにキスをしていく。

右手を私の服の中に入れ、私は下腹部に手を伸ばしナツ自身をさわる。

思ってた以上に今日は頑固だったけど、ようやくその気になった。あとは身を委ねるだけ、いつものことだけどナツは身体の状態が悪いと逆に激しい、こうなると私は嵐に翻弄される小船のようなものだ。

永遠にも感じる嵐が過ぎ去ると、睡眠薬を3錠ほど口移して飲ませた、薬が嫌いでも抵抗は許さなかった。私も1錠飲みそのままナツを抱きしめる。眠りに掛かる頃、愛していると聴こえてくる。

ナツ side

4人を殺した2日後の夕方の7時、オレは新宿に来ていた。

まずは、韓国雑貨の主人だ、50歳くらいの特徴のない、日本人と見分けのつかない中年、こんな親父がヤクザとつながりがあるなどいまだにピンとこない、レジカウンターに行く。

「キムの紹介できた、2丁欲しい」

慣れているな、反応が普通だ。

「150万だよ、私に紹介料で10万、取引で140万」

「ものはなんだ？」

「ベレッタ92、いいものだよ」

ニカッと笑ってくる。

「わかった」

10万渡した、問題はなにもないようだ。

「これに携帯番号書いてくれ、1時間以内に連絡が来る」

メモに携帯番号を書く、もちろん新規で作った方だ。

「待つとく」

「あいよ」

店を出て駅に向かう、一応尾行がないか神経を張り巡らせる。

30分後知らない番号から電話が来た、長谷川だろう、強く平常心を意識してから取る。

「お初だな、2丁いるそうだが金はキャッシュだぞ、140万持つてるか？」

「大丈夫だ、持ってる」

「よし、場所は東中野だ。夜の12時だ、いいか？」

「わかった」

「心配するな、人のいね〜とこでやるよ、そっちは何人だ？」

「1人だ」

「よし、詳しくは11時に連絡する」

「わかった、待ってる」

向こうが切った、さすがに緊張する、ここでドジるときつい。桜に電話して待ち合わせる。

さくら side

ナツから電話がきた、夜10時に中野駅で待ち合わせだ、まだ2時間近くある、落ち着け、ゆっくり準備だ、まず服を着替え、携帯、秋服、ノートPC、メイク道具、血液の準備、バッグ、忘れ物はない。

ナツと合流して人気の少ない高架下で車を止めた。

車内で準備だ、ナツは新品のボディアーマーの上に濃い柄物のシ

ヤツを着て、麻の薄茶のスーツに着替えた。ボディーマーは使わなくても寿命が3年程度、素材の問題ですぐ劣化するそうだ。

ナツの顔を茶色くメイクしていく、理由はお姉さんの写真を見たからだ、目元が似ている、万一の用心ね。

長谷川達4人の誰かが殺した顔を覚えている可能性もある、目元が印象的な2人だ、日焼けのつもりだから首まで塗っていく。

チャラく見せようとナツは金髪だ、そこに茶色メイク、どうみても極上のナンパ男が出来上がる。

ナツ side

メイクというのはやはり気持ちが悪い、いつもしなくてはならない女性には同情してしまう。

「そんなに気持ち悪い？」

「うん」

「変なの」

そういう桜はほとんどすっぴんだ。すぐ近くまで顔を寄せてメイクの具合を確認している。その真剣な表情がおかしくて、つい軽くキスをした。大丈夫だ、まだ精神的に余裕がある。きよとんとする桜、そのままもう一度キスをする。

「桜、万一の話だが、電話がなくても12時30分までは絶対に来るなよ。」

電話がなければ頭に弾を貰ってる、その後じゃ何をしてもどうせ助からない、それ以外でオレがやばいこともないはずだ」

「……うん、わかったよ」

「大丈夫だ、抜かせる暇も与えない」

午後11時になり、長谷川から電話が来た。

「待たせたな、場所は落合の××公園だ、わかるか？」

わかるわけねーだろ。

「いや」

「だろうな、小さい公園なんだ。夏は人のいない場所が少ないんでな、住所は北新宿××××だ。そっちは車か？」

「タクシーでいくよ」

「そうか、まだ1時間もある、楽勝だろうぜ」

「わかった」

「待ってるぜ、変なこと考えるなよ」

「用心深いな、まあいいや、調べていくよ」

相手に準備させない為なのか、日本じゃ禁止なんだからオトリ捜査の対策とも言えない、はっきりいって半端な用心だ、電話は切れた。

「桜、落合の××公園で、北新宿××××だつてさ」

「はい」

桜はもう携帯からのインターネットで調べている。

「学校が前にあつて家は少ないね」

「なるほど、小さい公園らしい、そのほうが楽だな、運ぶときに遠いほうがいやだしな」

ノートPCの画面を見た、携帯にはナビソフトもあるが、これのほうが分かりやすいから頼んでおいた、いつも場所が違うからこのほうが都合がいい。

東中野のちよつと北東、500?くらいだ。

一旦公園を確認する、外灯は2つありそこそこ明るいが大きな樹も結構ある、近くにはマンションもあるが肉眼での視認は微妙な距離だ。これなら目撃者が出てくる可能性は低い。100?以上ある場所で止めさせる。

「桜はここで待機してくれ、頼む」

「……じゃ遠すぎるよ、なんにも見えない」

「ハンドガン持ってるんだ、これくらいでいい」

「うん」

「従う約束だぞ、桜が近くにいると思うとそのほうが怖い、余計な心配せずにやりたいんだ」

「……むう、しょうがない」

「じゃあいつてくる、ちょっと身体の準備もあるしな」

4人が距離を置いていたときの用心に投擲斧も1本持ってきている、いままでのケースでは4人も固まっていた、使うことなどないだろうが念の為だ。

投擲斧は安全カバーをつけたまま腰に入れる、これにかけてはオレより上手い奴などほとんどいないだろう、そもそも本気で使う人間が世界に何人いることやらだが。

また軽くキスをして笑顔を見せてから車をでた。

車から離れ人目のない場所で汗が出ない程度に身体を温めておく、ハンドガンが相手だ、最高速度が出せるように準備がいる。

最期に何度か息吹で筋肉の緊張度を整える。息吹という呼吸はほどよい緊張を残してリラククスさせる効果があるんだ。

やはりメイクなんて邪魔だな、この暑いのに難しい作業だ、ウオ
ーターなんちゃらとか言ってたがあまり汗が多いとダメだろう。

残り5分、そろそろいく。

ハンドガン

当然だが公園が見えてくると緊張する、初めてのハンドガンとの戦いだ、最期にもしたい。弱いふりだ、平常心、殺気も一切出さな

公園に入るところでもう4人が見えた、今日も固まっているな、ほっとしたぜ。

「よっ」

長谷川だ。初めて近くで見ても悪役顔の目付きだ。

「どうも」

お互いを確認する為のただの挨拶だ、公園内は他に誰もいない。全員初めて近くで見たが怖いと感じる男はいない。

「早速だが、金を見せて貰おう」

「わかった」

ゆっくりとスーツの胸を開いてから封筒毎取り出す。

こいつは変に用心深いからそうした、まずはなるべく油断させることだ。

「確認するかい？」

「ああ」

封筒毎渡す、長谷川が受け取り小早川に渡す。

わざと100万毎の帯などついていない、バラで140枚の古紙幣だ。

小早川はテキトーに二つに分け、分けたものを田中に渡す。

市川は銀色のアタッシュケースを持っている、多分2丁のベレッタ92が入っている。

2人が数え始めた、4人はバラけもしない、4人いる意味がないだろう。

「あんた仕事はなんだ？」

長谷川が話し掛けてきた、このバカでも世間話をするところがあるのか。

「いまは無職だ、金には困ってないしな」

「ほ、いい身分だ」

「物を見せてくれ」

「見せてやれ」

市川も近づいてくる。

変に用心深くともこのあたりは格闘的に素人丸出しだ、4人とも素手で強い人間と会ったことがないのだろう、助かるぜ、よし、いく。

予備動作なしで長谷川の鳩尾を突く。さんぽに行く程の気構えもなかったはずだ、ゆっくり近づいきなりきたというところだろう。

またもスローモーションだ、自分の身体も長谷川の動きもゆっくりだ。

完全に油断してハンドガンの取引中とは思えない間抜けな表情、右の正拳逆突き。

長谷川はまったく反応できていない、できるわけが無い、突きが当たる瞬間の全身連動、スローモーションだけに完璧な動きだ。

長谷川の表情が当たるまで何も変わらず、かすかに苦悶の表情に見えるまでがよくわかる。声すら出せない。

ほぼ一瞬の後、まだほとんど理解さえできていない市川の鳩尾を左の正拳逆突き、自分も遅いのがもどかしい。市川の小さい呻きは聴こえた。

いま速いのはオレの思考速度だけだ、今頃、長谷川が崩れ落ちていくのがわかる、今回も深く撃ち抜いていない、速度重視で80?くらいだ。

まだ驚いているだけで札束すらほとんど手から離していない小早川の鳩尾を、右の正拳逆突き。ナイフかハンドガンかわからないが片手は服の中に入ったことだけわかる。

「う」

小早川の驚愕きょうごくの表情までよく見える、長谷川が倒れ、市川が崩れていく、アタツシユケースも落ちた。

「て・め・え！」

怒鳴るな、あほう、金魚が呼吸困難にでもあってるような口の動きに見える。小早川が倒れていく。ハンドガン、札と共におちる。

右手で腰からハンドガンを取り出した田中、しかし遅い、これが銃器の扱いに慣れていない者の差だろう、よほど練習してなければすぐに抜けるものじゃない、田中の鳩尾を左拳で正拳逆突き。

「あっ」

紙幣がゆつくりとばらけて、ハンドガンと同じく落ちていく。

急激に速度が元に戻っていく、小早川も田中も急速に崩れていき倒れた。

完璧だ。4人とも倒れ万札が少し動いているだけだ。

時間の感覚はスローモーションだったからわかりにくい、4人全部でも1強秒くらいだろう。

全身が歡喜に震える。

その瞬間、殺氣！

右、咄嗟に正面に跳ぶ。

ぐはっ！

その前に銃弾が腹に当たる。

ボディアーマー越しでもすごい衝撃だ。

跳びながら確認、右7メートルくらい先に見えた顔はヤクザの事務所に入りしていた外国人組員だった。

銃声は小さい。せいぜい爆竹くらいだ、サイレンサー《しょうおんき》ってやつだろう。

こいつは中国人か韓国人あたりだと思っていたが、平和な日本人とは違う雰囲気のもの。

長谷川と関係などないはずだ、外で一緒のところなど見たこともない。

いい腕だ、やはり元軍人かなにかか？ 地面に着くと同時に斜めに走る。

！

銃声とともに衝撃波みたいなものを感じる、銃弾が頭の右近くを掠めたようだ。

ぞつとする、腰から投擲斧を抜きカバーをはずす、またも銃弾。

ぐ！

またも腹に着弾する。

覚悟しててもすごい衝撃だ、さらに銃弾が放たれる、多分腹の近くを通った、ジグザグに外人に向かう。

投擲斧を投げる。同時に発砲。

がっ！

さらに銃弾が左胸に当たる、一瞬バランスが崩れる、肩に近い場所。心臓を狙われたのか、身体ごと持っていかれそうになる。

なんて奴だ。

冗談みたいだ、漫画のプロの殺し屋かよ。

投擲斧はそいつの腹にめり込む。

「がっ」

声かわずかに聞こえた、腹を中心にくの字になりそうな外人の頭部に左の上段回し蹴り。

まともな回し蹴りじゃない、腹にも腰にも力が入らない、いや、入ってるつもりだが感覚が鈍い。なんだこれは。

地面に倒すだけでいい、そんな蹴り。

ヒット！

さらに倒れていく頭部を追い、鼻に渾身こんしんの右ストレート。

死ね！

技もなにもない、残った力の限り右腕に体重を乗せて身体毎地面に押し付ける。

鼻の潰れる感触、めり込む拳。

殺した……鼻も立派な急所だ。ビクビクと痙攣けいれんをしている。

くそ！ こんな腕の持ち主がなんで長谷川の下なんかにいるんだ。

立ち上がりかけたオレの身体も力が抜けていく。

膝立ちで堪こたえるつもりが両手を地面に着いてしまった。

至近距離の銃弾とはここまでの衝撃なのか……すさまじい。

ボディーマーがもう少し効くと思っていた。

こんなとんでもない伏兵がいるとは、長谷川を舐めていたな。

……………いや、違う、違うだろう、こんな腕の奴がガードなら、1秒見てるだけなんてない。

……………これは長谷川が組内で疎^{うと}まれていたのか、外人も長谷川を見張っていた？

もしくは尾行中に、140万やいくつかのハンドガンが目的になった可能性もある。

捌けば全部で500万前後か、韓国雑貨のジジイの線も有りうる、2丁が裏目に出たのか？

それにしても、こんな奴が近くに潜んでいたのに気づかないとは……………そのほうが情けない。何が冷静にだ。

そこまでのすご腕だったのか、長谷川達に集中しすぎたオレのドジか……………わからん。

起きろ、ぐずぐずして人に見られるわけにはいかない。

立ち上がると同時にさらに痛みがくる。

どんどん痛くなってくる、アバラでも折れたか？

アドレナリンの効果が切れたのだろう、思わず触ると激痛が走る。

シャツの下のボディーマーに触ると指がベタベタしている。

……オレの血、どうりで痛いはずだ。

……なるほど、貫徹弾かんてつってのかな、ハンドガンのことを調べたとき
きにちよつとだけ読んだ。

痛いのも当たり前か、トカレフとかの特殊な銃弾で、ボディアー
マーすら貫通する弾丸らしい。

肩に近い1発はまだいいが、腹の2発……これは厳しくなった。

まいった……。

……考えるまでもない、医者に行けば最悪だ、桜まで逮捕される。
車の指紋、ログハウスでの目撃者と指紋、オレだけ医者にいても
絶対バレる。治療後、逃げられる可能性は低い、桜を巻き込むだけ
なんだ。

……桜、ごめん、騙すぞ。

代償

メリケンサックを嵌める。

長谷川正宗、後悔させるのはあきらめてやる、気絶したまま、運がよかったな。

長谷川の頭に拳を打ち下ろす。ぐ、頭蓋の潰れる感触が腹に響く、一発撃つだけでここまで痛いとは、くそ、お前に痛みがなくなオレだけ痛いというのも変な話だ。

小早川真治、香織の痛みだ、受け取れ。

市川茂晴、田中浩二、順に打ち下としていく。

公園の入口に5人とも引き摺って行く、桜が着いたら絶対に声も出せない。

……… 終わった。

シャツが濃い柄物でよかった、自分の声を出し1回テストしてみる。

桜の携帯を鳴らす。

「終わったく、来てくれ」

明るい声で喋る。

「うん！ りょうかい〜」

手に付いている血を軽く洗い気持ちを切り替える。投擲斧のカバ
ーを回収する、忘れるところだった。

すっかりしろ、まだしばらくは持つはずだ、あとはオレの気力し
だいだ。

桜の運転してる1BOXカーが止まる。

あたりに人影はない、ドアを開けに行く。

長谷川から乗せていく、市川、小早川、田中、外人はほぼ腹に埋
まり込んでいる斧ごと乗せた。歯を喰いしぼり声が漏れないように
する。

ハンドガンはどこだ、近くに落ちているのは2丁だけだ、アタッ
シケース、外人のハンドガン、よし、回収。

お金は無視だ、古紙幣だし大丈夫だ、そのまま後ろに乗り込む、
死体5つと楽しくないドライブだ。

「桜、出してくれ」

「はい、はい」

痛い、まともな動きに見せるだけで凄まじい痛みだった。腹に力

が入れられないから深呼吸すらしにくい。呼吸でバレないようにしないと。

ジンジンとくる強い傷みを我慢しているとだんだん弱くなり、まただんだんと強くなる。

「5人もいたんだ、相手は銃を持ってたの？ 花火みたいな音が聞えたけど、あれが銃声？」

「最期の1人が5発撃つてきやがった、素人の腕じゃ当たらない、あとの4人は出す前だったよ」

「うわ、信じられない」

痛い、この痛みは周期的に強弱が変わる、ここまでの傷だとそういうものなんだな。

だめだ、じつと我慢はきつい。強い痛みのおきに呼吸が荒くなる、他に意識を向けたほうがましだ。くそ。

「勝算は99%以上だったんだぜ」

「どんな計算なのよ」

「ナツスカウターは優秀なんだぞ、相手の強さを測り間違えたことはない」

「なにそれ？」

「桜でも知らないことがあるんだな」

「変なの」

長谷川や市川の身体を調べる、携帯、サイフ、長谷川だけハンドガンなしが。

ほんとにずるいやつだ、もしもの時自分だけ罪を逃れようとしてる、死体に毛布を掛けていく、長谷川の顔だけ一瞬記憶に残る。

集めた携帯の電池をはずし、ハンドガンをまとめる。

姉ちゃん、やっと終わった。

あとは4時間でいい、こいつらを墓に入れたいんだ……霊なんて信じてないオレが願うだけ無駄かな。

いいさ、オレしただいだ。

ボディアーマーで抑えたはずの3発の銃弾、これはどの程度のダメージなんだ？

桜が前にいる状態では脱いで確かめることもできない、脱ぐだけでも声が出そうだ。

失敗だ、デッドオアアライブなんて考えが間違いだった。止血するものだけでも持っておくべきだったな。

どのくらいたっただろうか、そろそろ、まともな声で演技できる

リミットも近そうだ。

「……調べたら長谷川だけハンドガンを持ってなかった、いやなやつだぜ。」

長谷川は苦しめたかったけど、ハンドガン相手じゃ余裕はなかったよ」

開いたままのアタッシユケースを桜が見えるところに置いた。ハンドガン6丁、オモチャと違いかなり重い、いまのオレには重労働だった。

でもこれで少し誤魔化しがきく、いくら桜でも平常心でいれないはずだ。

「それがハンドガン、全部で6つあるよ」

「うへ」

「桜、ちょっと休憩していいか？」

オレがあまり寝てないのも知っている、騙されてくれ。

「いいよ、大丈夫？」

「ああ、ほっとしたら眠くなった、死体とドライブで悪いな、なんか音楽かけてくれ」

「……寝てもいいよ」

「サンキュー、ちょっと、うとうとくらいはするよ」

いまどのあたりだろうか、高速ばかりでわからない。

血の匂いはどのくらいするだろうか、ちょうどいい、体温が妙だ。真夏の熱帯夜で効きの悪いエアコン、それなのに寒くなってきた、首まで毛布をかぶる。

携帯を取りだし、桜にメールを打っていく、携帯で長文メールを打つなんて初めてだ。

山に入れば桜にバレても大丈夫、病院なんて絶対にごめんだ。どうやっても桜まで捕まる。

もう痛みも弱くなってきた、余計厳しくなってきたってことかな？

血がかなり抜けてるようだ、3箇所だもんな、1箇所押さえててもどうしようもない。

痛みが減ってきた今ならいけそうだ、ゆっくりと毛布をずらし服を脱ぎ、防弾ベストをはずしていく、音楽に紛れ聴こえないはずだ。

暗い車内ではどうせ見えない、大雑把にガムテープを貼り止血していく、声が洩れないようにそっとだ。

あとどれくらいだ？

まだこんなところか、リアウィンドウに高速の案内が映る、まだ八王子の手前だ。

どうしたらいい、こいつらの死体だけでも隠したい。

桜を共犯にするなど絶対に嫌だ、オレの死体も埋めて欲しい。

あんちゃんなら事情を話せばわかってくれるだろう。意識はいつまで持つんだ、ときどき気が遠くなる。

どういえば言うことを聞くだろうか……いつもこうだ、桜相手だといふ考えなど浮かばない。

別れも言えないかもしれない……意識が遠くなる、桜、騙してごめん。

「着いたよ、ナツ」

「……」

……まだ動く、もうちょっとだけ動かないと……だめか……身体に全く力が入らない……。

「ナツ？ ナツッ」

「……」

ぼやけた桜の顔が寄ってくる、声すら出せない、耳をこっちへ……通じた。

「……しめん」

……桜……しめんな。

「ナツ！」

……。

エピソード

桜 side

……うそ。

ナツの顔をさわる、もうまったく意識がない。

車内を明るくして……毛布をはぎとる。

なんてこと！ 血だらけだ。床までこんなに。

上半身の服を脱がしていく。

ああ、胸の上のほうに1つ、お腹に2つ。ガムテープの周りに大量の血。こんなもので応急処置してたのね。

……これは銃創なのだろう。

背中に傷はない、つまり弾丸は3つとも体内だ。

脈を確かめる、弱いけどまだ心臓は動いている。

泣くな。

しっかりしろ、なんのために勉強したのよ、これは出血が酷いか

らだ。

まず、まずはちゃんと止血だ。

運転席の横に置いていたバッグからタオルを出し身体の血をふく。ガムテープを剥がす、すごい傷だ。

大きな絆創膏を銃創3箇所にはる。

ナツと私は普通のA型、袋から注射器を出し、自分の腕にゴムバンドをきつく巻き、消毒。

あせるな、腕の血管から200?抜いた。

ナツの腕を消毒する、腕の血管が太く浮き出ているから自分より簡単だ、ゴムバンドすらいらぬ。

ゆっくり……入った、血液を入れていく。

次は、よし、ナツを引きずって車内からだして、ログハウスまで引きずる。

綺麗な毛布とシーツを敷き、ナツを乗せる。

お湯を沸かし、バックを車から運ぶ。

冷やしていた私の血をバックのまま入れて温める。

上から吊るす架台がないから、間に合わせにドアの取っ手に引っ掛けてガムテープで固定する。

温度、大丈夫、人肌より少し低い程度、輸血開始、脈を確かめる。

大丈夫、次、次、あれよね。

落ち着け、麻酔は手に入らなかった、代わりに大麻を持ってきておいた、麻酔としては弱いけど、ないよりはいい。

以前運んでおいたベポライザーの準備をする、大麻を燃やさずに有効成分のみを取り出せる器具だ。

医療用にはこれがいい、先端をナツの鼻に軽く入れてテープで固定する。

準備よし、手の消毒、消毒液を大量におおきな皿にいれる。

薄いゴム手袋をはめ、さらに手袋ごと消毒する、絆創膏を一枚剥がす。

一番下の下腹部からだ、びびってる暇はないわ、やるのよ。

まずは位置を確かめる、一指し指を銃創に入れていく、きつい、細い銃弾なのか、ナツの筋肉のせいなのか。

……硬い、あった、これだ、希望がみえてきた。

泣くな、浅い位置にあるのはボディーマーと筋肉のお陰だろう。

指でしっかり位置を確認する、医療用のピンセットを消毒してから差し込んでいく、普通ならメスで拡げるのかもしれない。

5〜6？程度だとどうなのか、そこまではわからない、まずはこれができるかどうかだ。

動かない、うまく掴めても出てこない、少し回すようにやってみる、弾丸と格闘すること15分、ピンセットだけで取り出せた。

……変形してる弾丸、まさに凶器だ。

どつと汗が出てきた、この深さなら内臓は傷ついていないはず。

まずはまた絆創膏で止血、また脈を確かめる。

よし、脈はさっきより強いくらいだ、次はお腹の上のほう。

……こんどは指で届くところがない、怖い、でも斜めに進入している。

方向だけを頼りにピンセットを入れる、コツつとあたる、あつた……15分、ダメだ。

ここには大きな血管はない、メス、わずかにメスで切り込みを入れて穴を大きくする、さらに20分、ようやく取れた。

よし、肩に近い胸、ここは間違いなく筋肉だ。

最期は浅い、10分で弾丸3つ目も取れた。

多分内臓は大丈夫、筋肉が多すぎる、裸で明るいとほんとにすごい筋肉だ。

ときどきナツがビクビクしてた、意識がなくてよかった、あつたら痛いなんてものじゃない。

よし、次だ。

あ、血液が切れてる、さっきの分とあわせて1?使った、点滴に交換する。

多分ナツの失った血液は2?以上だ、ナツの体重だと約6?あるとして、3?で致死量となる、失った血液にはまだ全然足りない。

ラクトリンゲル液、他のが欲しかったけど、これしか手に入らなかった。

ラクトリンゲル液というのはカリウムや塩といったミネラルに乳酸を加えた液体。なんてことない液体だけど、無菌処理がしてある。

こういうケースだと、ブドウ糖とかもつといろいろはあったものを使うのが普通だけどもないものはない。

極端に言えばスポーツドリンクでもいいくらい、ポカリスエットなんて元々点滴用のを改良したとか読んだもの、でも雑菌が怖い、弱つてるときは抵抗力も低くなる。

次は縫合だ、絆創膏をはがして消毒する。

針と糸も消毒、もちろん医療用、糸は黒くて細いのに頑丈な糸。

こんな裁縫と一緒に、そう自分に言い聞かせて細かく縫っていく。

鶏肉で練習はしといたけどめっちゃ難しい。ピクピク反応するナツの動きに私の手も震える。

それに出血との戦いだ、水で薄めた消毒液で洗いながらなんとか縫い続ける。

……ふゝ、全部終わった。

脈をみる、よし、大丈夫。

大麻程度じゃ起きたらかなりの痛みだろう。

せめて、長く眠れるように睡眠薬でも入れておこう。

口移しで睡眠薬を飲ませる、スポーツドリンクで流し込むように飲ませた。

あ、車。

車までいき、一応車内をチェックする、ドアを閉めていなかったの。

うう、誰のものともわからない死体……

大丈夫、死体が動くわけないんだから……ホラーなんかもう一生見ない。

おちてるナツの携帯をみつけた。

折りたたみタイプが開いたままだ。

ログハウスに戻ってナツの様子を確認する。

（桜、最期に騙してごめん、この2年幸せだった、ありがとう。早く忘れて幸せになって欲しい、永原さん呼んでオレも埋めてくれ、事情を話せばわかってくれると思う、他はPCに後の事が書いてある）

未送信のままのメール。

涙がまた溢れてくる。

ナツからの初めての携帯長文メール、このバカはPCでしか長文を打たない。

最期だと思って打ったくせに、愛してるとかないのかよ。

ばかなんだから……。

早く忘れて欲しいからって、こういうときは入れるものだろ、ばか！

……ふう、ナツらしいわ。

ナツの隣にいき、2人に綿毛布を被せて寝る、心配だから、手だけ握っておく。

まだ昼前、ぼくとする、また、たった2時間で目が覚めた。

脈を確かめてまた少し睡眠薬とスポーツドリンクを飲ませる、大麻も追加して、手を握りまた寝る。

内臓はほんとに大丈夫だろうか、まるで赤ちゃんの世話でもしてるみたい、心配でちゃんと眠れない。

それにしても見事に騙された。

こんな傷でよくやる。

痛いなんてまったくわからなかった、私が緊張しすぎていたのかもしれない。ハンドガンは故意に見せて気付かせないようにしたわけね。

ナツの精神力には感心するけど、憎たらしい気持ちのほうが強い

わ。

街中で気付いていたらどうしてただろう？ 考えるまでもなく病院に行つてただろうな。

ナツは死を覚悟してでも病院は嫌だった。病院にいけば医師には事件性のある死傷に対しての報告義務がある。当然警察を呼ばれる。それは死んでも嫌だったことくらいわかっている。

自分の死も隠してくれという男。

こんな男に惚れきっている私はバカなんだろうな。医療行為も大麻もなにもかも違法だ、これこそバカツプルよね。

何度かの短い睡眠の後で、包帯を全部に巻いていく。お尻と背中に丸めた毛布を入れて、お腹を浮かせて巻いていく、重すぎてそうやるしかなかった。

もう血はあまり出てこなくなった、ときどきは浅く意識が戻る。でもはつきりはしてない、寝言もいう、桜、ごめん、というのが一度かすかに聞こえたくらい、かわいいうわ言だこと。

翌日のお昼。

ナツの目が少し開いた、かなりぼくとしていいる、はっきりいって大麻漬、睡眠薬漬け。

思っていたより痛くはないかな？

「ナツ、気がついた？」

「……」

「ナツ、聞えてる？」

「……うん」

「いま点滴と大麻が入ってるからね、痛み止めにしてるの、銃弾も抜いて縫ってあるからね、当分は痛いから、大人しくしてて」

「……桜がやったのか？」

「うん」

「……まじかよ、つつ」

動くので止める。

「大人しくして、動くと痛いよ」

「……とんでもない女だな、すげえぜ」

「当然よ、全部準備してたもん、私に抜かりはないわ」

ほんとは手とか足を撃たれたら、くらいのもりだったのよね。

「……どのくらいだった？」

「30時間くらいね」

「そんなものなんだ……さっき、桜がキラキラしてるから、てつきり天国なんてほんとにあるのかと思った」

「アハハハ」

「……笑うとこか」

「これならもうちょい寝てれば大丈夫かもね、大人しく寝てて、もう大麻は切るよ」

「うん」

「寝てて、ここにいるから」

「うん、ありがとう」

痛みはもう大丈夫でしょう、大麻は終わり。

ナツの寝顔を見ていて、また涙が出てきた、今度は嬉し涙だ、ようやく安心して深く寝てしまった。

ナツ～side～

目が覚めた。

桜は隣で寝ている、熟睡しているみたいだ……ほんとに敵わないな。

身体が重い……外は明るいのか。

傷口には大きく包帯が巻いてある。このくらいの痛みなら動けるかな。

胸にも腹全部にも巻いてあるので傷はよくわからない、ここにオシを運ぶだけでも大変だったろう。

腕から点滴の針を抜く。

外に出てみると日差しにくらくらとする、明るいし暑い。

時間の感覚はないが、正午過ぎくらいか。

車はそのままだな、死体が5つだ、ようやく終わったんだ……こんなことに5年も掛かってしまった、桜も巻き込んだ。

でも終わった、悔いても意味はない。これでいいんだ。

だんだんすっきりとしてきた、これからだ、ようやく前を向ける、桜、ありがとう。

片付けよう。

車内に入ると既にかなり臭う、まずは窓を開け換気する。エンジンを掛け車を地下室ギリギリまで動かす。

地下室の入り口を持ち上げる、重い、楽々のはずが、とにかく重い。

当たり前か、力持ち以外は開けられないように作ったんだから……
傷が痛む。

生きている痛みだ、なんとか持ち上げる。

地下室に死体を引き摺りながら運び入れ、死体を5つ並べた。

車内に残っていた危険物も置いていく、6丁のハンドガン、手錠、毛布、車からはずした盗難のナンバープレート、いろいろだ。

コンクリートを作りコンクリートで埋めていく、全然足りない。

コンクリートを6度追加する、ここまででいい、後はもうちょい直ったら壊そう、偽装を元に戻しておく。

ログハウスに戻る、鏡を見るとメイクは落としてある、身体は拭いたりしてくれてたようだ、歯磨きだけしとく。口がねばついて気持ち悪かった。

桜の隣に戻り、また寝る。

次に起きたら、ナツは寝てたけど、点滴をはずしてあった。トイ
しだろうか？

表に出て車をみると……空だ。

やはり、あいつは……ナツ自作の地下室の扉、持ち上げるタイプ
で他人が開けられないようにすごく重く作ってある。

あの身体で開けて、死体を入れたのね。

とんでもないことをする。

私が起きたら、てこを応用して車で開けようかと思っていた。

腹や胸に銃弾を受けて50時間強、バカもいいところだ……しば
らく睡眠薬漬けにしてやる。

それから丸1日。

「おはよう、暴れん坊さん、ほんとに大人しくしないね」

「まあ、あれは急いでやっとなかないとだから」

「あきれるわ、あんな重い入り口持ち上げるなんて、痛かったでし
よ」

「桜はなんでもお見通しだな、起きるぞ」

ナツはまた勝手に点滴をはずす。

「どっつ?」

「うん、直ったかな」

「直るか、バカ! どのくらい痛いか訊いたのよ」

病み上がりというか、普通は重症の相手に切れなくなってくる、55時間前には遺言をいつてたくせに。

「ちょっとしか痛くないよ、もう直った」

ほぐ、いい度胸じゃん。

「……お腹、殴っていいかしら、騙してくれたお礼しないとね」

「最期まで片付けてくる」

「ダメ」

「ダメって……」

「言うこと聞かないと、このメール涼ちゃんに送るよ」

ナツに携帯の画面を見せる、買い物に行った際未送信メールを送って私の携帯にある。自分で打った遺書を見た途端真っ赤になった。治ったかと思つた赤面はまだまだみたいね。

「……ちよっ」

「出血多量くらいで死ぬとか甘いわよ」

「……わかったよ」

翌日、もう大丈夫とほざき外に出て行く。

暴れ始めた……はあ。

ハンマーで地下室を壊し始める。

蓋を壊す、大きな破片を捨てるように中に積んでいく。

壁を壊す、入り口も壊し、掘り出したときの土砂を戻すように埋めていく。

地下室跡は全部埋めたわ。

元地下室の上に車を持ってきて停めて。マイナスインドライバーでタイヤをパンクさせ、ハンマーで車のボディを叩いていく、ガラスも割れる。

もう見てるこっちが痛い気がする、ハンマーなんてふるだけで痛いはずなのに。

先にログハウスに戻った、しばらくしてナツも戻ってきた。

「全部終わったよ」

「お疲れ様」

「ありがとう、ほとんど桜のお陰だけだな」

抱きしめられる。

「これからどうするの?」

「しばらく休養だな、2人で夏休みってのどうだ?」

「どこに?」

「まずは沖縄の海に行きたいな、桜、少くらしい学校さぼってもいいだろう?」

「いいけど」

「本島じゃなくて、リゾートの宣伝写真みたいに綺麗な島、1ヶ月くらい海で遊ぶだけってどう? 光害少ないから夜は星も綺麗だと思っぞ」

「いいね、行きたい」

「よし、行こう、1ヶ月はガキみたいに遊ぶだけだからな」

子供みたいな笑顔で言う。

「しょうがないなあ、見逃してあげるわ」

こんな顔は見たことがない、こういうのを憑き物がおちたというのかな。

ナツに罪の意識はゼロではない、でも喜びや終った安堵感のほう
が勝るからこんな顔になるのだろう、これからも思い出して苦しむ
ことがあるはずだ、それでも反対しないでよかった、悔恨を抱えて
生きるよりずっとましだと思う。

「桜、愛してる」

キスされた。

エピソード

石垣島のリゾートホテル。

海も空も、もうなにもかもすごく綺麗。

石垣島にきて6日目。

天気もよく波も荒れてなくて最高。

いまは午後4時半くらい、昼間は紫外線が強すぎるので泳げない。

太陽が高いときに泳ぐと日焼け止めくらいではあまり効果がない

の。私は白いビキニを着てホテルの前のビーチで泳いでいます、ナツがまぶしそうに見ている。

ん？ ナツはあそこにいるよ、ビーチの側の砂浜、パラソルの下で寝転がってます。

うーん、まだ包帯男だし抜糸もかなりさきです。

当然、泳ぎは禁止。

石垣島は観光の拠点みたいなもので、ここから日帰りで行きたい、でもナツがあるていど治るまでは意味がないので待っています。

一昨日も止めてるのに泳ぐからかさぶたが全部ふやけて出血しました。すぐ無理するから治りが遅くなるの、菌も怖いし嫌になる。

昨日の夜なんてとうとう私のベッドに入って抱きついてきたから銃創近くをつついてやりました、完全に血も止まっていけないのにアホです。元気になってきたけど、もう1日か2日はお預けかな。ふふ、いえいえ騙してくれたお礼ではありませんわ。

今回のことで私は医師になることを決めました、資格も取ると思っけど取れなくてもかまわない。2年前の私では有りえないけど、この危ない男を愛しているのだからしょうがない。

撃たれたときのあらましも聞きました。中国人だか韓国人だかわからないけど、射撃がうまかったので軍隊経験者だろうといえます。殺し屋かもしれないとか冗談まで言っていました。

ハンドガンやお金、全部で約500万くらいが目当てだったのか、長谷川達4人が疎まれていたのか、ナツ自身よくわからないそうです。なによりボディアーマーを突き抜ける特殊な弾丸にまいったとこぼ零してました。

毎日ニュースをチェックしていますが何の報道もありません、警察が全部発表するわけもないから油断はしてませんよ。

万一緊急指名手配なんてことになればここから台湾経由で逃げ予定です。ナツが言うには、日本は海外へ逃げると何もしない国だからお金さえあればいいらしい。

あ！ ナツが我慢できなくなって海に入ってきた、もう今日は殴ってでも止めます。

了

あとがきのようなもの

最期までお読みいただきありがとうございました。

ナツには性格のモデルがいます、情の深いヤクザです。鏡のような性格で、善には善、悪には悪、相手により全く印象の違う人でした。

桜にはモデルはいません、治療のシーンから作った性格です。度胸があり頭がよい女性が書きたかったのです。あえて外見の描写はしないようにしました。

マリファナ使用については抜きでは話になりませんが、共犯者になる、この台詞がヒロインの全てですし作中のマリファナの表記も事実です。

バッドトリップ中にナツが混乱する場面がありますが、かなり眠気がしてる状態という意味です。

同様に動物殺害も必要なものでした、筆者にも殺害の経験などありません。

復讐とは違いますが、長年弁護士をしてきた人が自分の奥さんが殺されると死刑反対派から賛成派になる、人間の想像力などそんなものです。自分の大事な人が殺されることは想像が難しいですし、失った後の日々は軽々しく想像できるものでもないでしょう。

光市母子殺人事件、いろいろと考えさせられる事件でした。全国犯罪被害者の会、応援しています。

獣の心そのまま復讐するのではなく、理知的に当たり前のように行う、復讐後に後悔しない心を持つ、そうして始めてその後普通に生きていけるようになる。

これがテーマでした。どの程度出来てるのかは自分ではわかりませんが、復讐物のラストは暗い、それに対するものが書きたかったのです。

事実の捻じ曲げ部分があります。貫徹弾については詳しくはわかりませんが、防弾ベストが対応していないと多分致命傷を負うはずで、構成上その部分はおそらく事実ではありません。

治療部分も創作です、違法行為ですし医療関係者からみたらおかしな点等多々あると思います。

最期に、いろいろと苦情が多いことも当然だと思います。お許しください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2457/>

サクラリポート

2010年10月16日00時12分発行